九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—8—

甘木市所在立野遺跡の調査 (3)

上　巻

1 9 8 6

福 岡 県 教 育 委 員 会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—8—

甘木市所在立野遺跡の調査 (3)

上　巻

巻頭図版

立野遺跡全景

序

福岡県教育委員会では日本道路公団の委託を受けて，昭和54年度より九州横断自動車道の建設工事に伴う発掘調査を行って参りました。本年度ですでに８年目を迎えておりますが，この間，関係諸機関・各位のご協力を得て小郡市・大刀洗町・甘木市・朝倉町の遺跡の発掘調査が進捗し，朝倉インターチェンジまでについては昭和60年度末までに調査を終了したところであります。

本書は，この７年の中で昭和56年から昭和58年の間に調査を実施した，第11地点・立野遺跡についての３冊目の報告書となります。この報告書が，文化財に関する社会教育的活用において一端の役割を果たし，加えて学術的側面での発展に寄与するところがあれば望外の喜びであります。

調査および報告書作成の過程で，地元の方々を始めとする関係各位の皆様のご協力が得られましたことに深甚の謝意を表します。

昭和61年６月30日

福岡県教育委員会

教育長　友野　隆

例　言

1．本書は，九州横断自動車道路線内の遺跡について日本道路公団から委託されて，福岡県教育委員会が発掘調査を実施した8冊目の報告書である。

2．本書に収録した遺跡は，昭和56年度から58年度にかけて発掘調査を行った立野(たての)遺跡C地区で，立野遺跡の3冊目の報告である。

3．遺構の実測図は調査担当者・調査補助員が主として作成した。遺物の実測・製図は各執筆者の他に，平田春美・豊福弥生・原富子・鶴田佳子・関久江・塩足里美・本田ひろみ・原田和枝・松嶋邦子・速水公己の諸氏の多大な助力を得た。

4．遺構写真は調査担当者が，遺物写真は九州歴史資料館石丸洋氏の指導の下に藤美代子氏がその大半を，一部について調査担当者が撮影した。

5．遺物整理は九州歴史資料館・岩瀬正信氏の指導の下に，九州歴史資料館と福岡県文化課甘木事務所とで行った。鉄器処理は九州歴史資料館技術主査・横田義章氏のもとで行った。

6．表に記した遺構の面積は全てプラニメーターによる測定値である。

7．写真図版・挿図の各番号に冠した数字は住居番号であり，それ以外では建物が建，土壙がD，ピットがP，遺構上面その他が他，接合土器がJの略号を冠している。

8．本書の挿図で使用する方位は全て真北である。

9．本書の執筆は木下修・児玉真一・佐々木隆彦・伊崎俊秋・日高正幸・武田光正が分担し，各文末に名を記した。

10．本書の編集は児玉・武田の助力を得て伊崎が担当した。

本 文 目 次

＜上 巻＞

Ⅰ．調査の経過 …… 1
Ⅱ．位置と環境 …… 7
Ⅲ．調査の内容 …… 9
A．概要 …… 9
B．古墳時代後期の遺構と遺物 …… 11
＜遺構・遺物の説明のまえに―＜凡例＞― …… 11
1．竪穴住居跡 …… 23

＜中 巻＞

2．掘立柱建物 ……225
3．その他 ……274
i．土壙 ……274
ii．溝 ……283
iii．土壙墓 ……283
iv．その他の遺物 ……285
4．接合資料・同一個体資料 ……289
5．土製品 ……296
6．鉄製品 ……321
7．銅製品 ……324
8．石製品 ……324
9．植物遺物 ……329

C．弥生時代の遺構と遺物 ……330
1．竪穴住居跡 ……330
2．掘立柱建物 ……348
3．その他 ……371
i．土壙 ……371
ii．弥生時代のその他の遺物 ……372
D．その他の遺構と遺物 ……375
1．土壙 ……375
2．井戸 ……383
3．縄文・旧石器時代の遺物 ……385
<補遺> ……387
Ⅳ．総括 ……389
A．古墳時代後期の竪穴住居と遺物に関する問題 ……390
1．カマド対面粘土・土壙について ……390
2．カマドのあり方について ……394
3．カマド祭祀について ……400
4．住居空間の使用法 ……406
5．須恵器について ……415
6．祭祀遺物について ……419
B．掘立柱建物について ……425
C．古墳時代後期の立野集落について ……429
D．竪穴住居の出入口小考 ……446
Ⅴ．おわりに ……456

図 版 目 次

巻頭図版　立野遺跡全景

＜下 巻＞

本文対照頁

図 版 1　立野・宮原遺跡航空写真（南西から） …… 7
図 版 2　立野・宮原遺跡周辺航空写真 …… 7
図 版 3　立野・宮原遺跡周辺航空写真 …… 7
図 版 4　立野・宮原遺跡航空写真 …… 7
　上．南から　下．東から
図 版 5　上．立野遺跡全景（西から） …… 7
　下．立野Ｃ１次調査全景（東から） …… 9
図 版 6　上．立野Ｃ２次調査全景（北西から） …… 9
　下．西半部全景（北西から） …… 9
図 版 7　21号住居跡（南東から） …… 23
　上．床面の状態　下．床下層
図 版 8　22～26号住居跡（南東から） ……26～38
　上．床面　下．床下層
図 版 9　上．中．　23号住居跡カマド対面粘土 …… 32
　下．　24号住居跡カマド …… 34
図 版 10　上．26号住居跡（南東から） …… 38
　下．同遺物出土状態 …… 38
図 版 11　27号住居跡 …… 41
　上．遺物出土状態（西から）　下．床下層（南から）
図 版 12　上．27号住居跡遺物出土状態 …… 41
　下．同カマド遺物出土状態 …… 42
図 版 13　上．28号住居跡下層（南から） …… 49
　下．同カマド遺物出土状態 …… 49
図 版 14　上．35～47号住居跡（南から） ……60～71
　下．同下層

図 版 15 上. 36・37号住居跡カマド ……62・63
下. 44号住居跡カマド …… 72
図 版 16 上. 29～50号住居跡（南から） ……52～82
下. 同下層
図 版 17 上. 45号住居跡（南から） …… 74
中. 同床下層
下. 同カマド
図 版 18 上. 50号住居跡（南から） …… 82
下. 同
図 版 19 上. 50号住居跡カマド（南から） …… 83
中. 同（北から）
下. 同カマド対面粘土（東から） …… 83
図 版 20 上. 51号住居跡（南東から） …… 88
中. 同カマド …… 89
下. 同壁面の杭痕 …… 89
図 版 21 上. 52号住居跡（南から） …… 91
下. 同カマド …… 92
図 版 22 上. 53号住居跡（南東から） …… 94
中. 同カマド …… 95
下. 53～55号住居跡（南東から） ……94～99
図 版 23 上. 56号住居跡（南から） ……101
中. 同カマド ……101
下. 同カマド対面 ……102
図 版 24 上. 57号住居跡（南から） ……104
中. 同カマド ……104
下. 57～59号住居跡（北から） ……104～106
図 版 25 60・61号住居跡（西から） ……108～117
上. 床面　下. 床下層
図 版 26 上. 60号住居跡（南ま上から） ……108
下. 同貼床除去
図 版 27 60号住居跡遺物出土状態 ……110
図 版 28 60号住居跡カマド周辺遺物出土状態 ……110
図 版 29 上. 62号住居跡（南東から） ……120

中．67号住居跡カマド ……128
下．68号住居跡カマド ……131
図 版 30 63～77号住居跡（北西から） ……122～138
上．床面　下．床下層
図 版 31 上．下． 79～83号住居跡（南東から） ……141～148
図 版 32 上．80号住居跡（東から） ……142
下．84～94号住居跡 ……150～172
図 版 33 84～91号住居跡（南から） ……150～165
上．床面　下．床下層
図 版 34 84・85号住居跡（南から） ……150～152
上．床面　下．床下層
図 版 35 86号住居跡（南から） ……156
上．床面　下．床下層
図 版 36 89号住居跡（南から） ……162
上．床面　下．床下層
図 版 37 90・91号住居跡（南から） ……164・165
上．床面　下．床下層
図 版 38 上．86号住居跡カマド ……156
中．87号住居跡カマド ……157
下．89号住居跡カマド ……162
図 版 39 88号住居跡カマド ……160
図 版 40 カマド対面土壙
上．85号住居跡 ……152
中．89号住居跡 ……162
下．91号住居跡 ……165
図 版 41 上．中．93・94号住居跡（南から） ……170～172
下．94号住居跡カマド ……172
図 版 42 95～107号住居跡 ……173～190
上．ま上南から
下．南東から
図 版 43 95～101号住居跡（南西から） ……173～181
上．床面　下．床下層
図 版 44 上．95号住居跡カマド ……173

中．98号住居跡カマド ……179
下．100号住居跡カマド ……180
図 版 45 102～107号住居跡（西から） ……183～190
上．床面　下．床下層
図 版 46 上．102～105号住居跡（南東から） ……183～187
中．102号住居跡カマド ……183
下．106号住居跡（南東から） ……188
図 版 47 106号住居跡カマド ……188
図 版 48 上．108号住居跡（東から） ……192
下．109～112号住居跡（北西から） ……193～199
図 版 49 上．111号住居跡（北西から） ……196
中．同カマド ……196
下．同東側土器群 ……197
図 版 50 上．113号住居跡（南西から） ……200
下．114～117号住居跡（北西から） ……203～207
図 版 51 上．118・119号住居跡（南東から） ……209・210
下．118号住居跡床下層 ……209
図 版 52 上．119号住居跡カマド ……210
中．120号住居跡（南から） ……211
下．同カマド
図 版 53 上．121・122号住居跡（南から） ……212～214
中．123・124号住居跡（南から） ……215
下．124号住居跡カマド ……216
図 版 54 上．125～131号住居跡（西から） ……217～224
中．125号住居跡（南東から） ……217
下．128号住居跡（南から） ……221
図 版 55 上．23～33号掘立柱建物空中写真 ……226～238
下．21～25号掘立柱建物（南東から） ……225～229
図 版 56 上．21～26号掘立柱建物（南から） ……225～230
下．22～30号掘立柱建物（南から） ……226～235
図 版 57 上．35号掘立柱建物（東から） ……240
下．36号掘立柱建物（南西から） ……240
図 版 58 上．37号掘立柱建物（北から） ……242

中．38号掘立柱建物（南から）……243
下．40号掘立柱建物（北から）……246
図版 59 上．42・43号掘立柱建物（北から）……248～250
中．44・45号掘立柱建物（東から）……252・253
下．46号掘立柱建物（南から）……254
図版 60 上．48～50号掘立柱建物（南から）……257～259
下．53号掘立柱建物（東から）……263
図版 61 上．58・75号掘立柱建物（東から）……269・362
下．60号掘立柱建物（南東から）……271
図版 62 上．1号土壙（北西から）……274
中．4・5号土壙（北から）……277・278
下．4号土壙（東から）……277
図版 63 上．5号土壙（南西から）……278
中．同遺物出土状態（北西から）……278
下．1号土壙墓（北東から）……283
図版 64 溝1土器出土状態……283
図版 65 21・22号住居跡出土土器……25，28～30
図版 66 22号住居跡出土土器……28～30
図版 67 22号住居跡出土土器……28～30
図版 68 22～26号住居跡出土土器……28～31
図版 69 26・27号住居跡出土土器……31～40
図版 70 27号住居跡出土土器……34～40
図版 71 27号住居跡出土土器……34～40
図版 72 27号住居跡出土土器……34～40
図版 73 27号住居跡出土土器……34～40
図版 74 27号住居跡出土土器……34～40
図版 75 27号住居跡出土土器……34～40
図版 76 28～39号住居跡出土土器……43～65
図版 77 37～46号住居跡出土土器……60～79
図版 78 50号住居跡出土土器……85～88
図版 79 50号住居跡出土土器……85～88
図版 80 50号住居跡出土土器……85～88
図版 81 51～59号住居跡出土土器……91～111

図 版 82 60号住居跡出土土器 ……115～119
図 版 83 60号住居跡出土土器 ……115～119
図 版 84 60号住居跡出土土器 ……115～119
図 版 85 60号住居跡出土土器 ……115～119
図 版 86 61～67号住居跡出土土器 ……121～132
図 版 87 68～74号住居跡出土土器 ……132～136
図 版 88 80～83号住居跡出土土器 ……143～148
図 版 89 84～86号住居跡出土土器 ……150～157
図 版 90 86～89号住居跡出土土器 ……157～168
図 版 91 91～95号住居跡出土土器 ……170～187
図 版 92 99～106号住居跡出土土器 ……191～200
図 版 93 108～111号住居跡出土土器 ……203～212
図 版 94 111号住居跡出土土器 ……211・212
図 版 95 114～120号住居跡出土土器 ……220～227
図 版 96 122～127号住居跡・26号掘立柱建物出土土器 ……227～239，282
図 版 97 1～4号土壙出土土器 ……284～289
図 版 98 4・5号土壙出土土器 ……289～291
図 版 99 5号土壙出土土器 ……290・291
図 版 100 溝1，土壙墓，ピット，遺構上面その他出土土器 ……292～297
図 版 101 接合土器 ……289～293
図 版 102 立野C遺跡出土手捏土器① ……296～301
図 版 103 立野C遺跡出土手捏土器② ……296～301
図 版 104 立野C遺跡出土手捏土器③ ……296～301
図 版 105 立野C遺跡出土手捏土器④ ……296～301
図 版 106 立野C遺跡出土手捏土器⑤ ……296～301
図 版 107 上．立野C遺跡出土土製模造鏡 ……301
下．同土玉 ……302
図 版 108 立野C遺跡出土土製品① ……304～320
図 版 109 立野C遺跡出土土製品② ……304～320
図 版 110 立野C遺跡出土土製品③ ……304～320
図 版 111 立野C遺跡出土土製品④ ……304～320
図 版 112 上．27号住居跡出土土製品 ……296・301・309～320
下．60号住居跡カマド内出土土製品 ……298・302・309～320

図 版 113　立野C遺跡出土鉄製品①……321～323
図 版 114　立野C遺跡出土鉄製品②　銅製品，スラッグ，植物種子……321～324・329
図 版 115　立野C遺跡出土石製品①……324～328
図 版 116　立野C遺跡出土石製品②……324～328
図 版 117　上．134号住居跡（北から）……332
中．135号住居跡（北から）……336
下．同床下層
図 版 118　135号住居跡出入口部分……337
上．北から　中．同断ち割り　下．南から
図 版 119　135号住居跡……336
上．出入口断面　中．屋内土壙　下．遺物出土状態
図 版 120　上．136号住居跡（南東から）……344
下．同（西から）
図 版 121　上．62号掘立柱建物（南から）……349
中．63号掘立柱建物（東から）……349
下．65・66号掘立柱建物（西から）……351・352
図 版 122　上．76号掘立柱建物（東から）……365
中．77号掘立柱建物（北から）……366
下．78・79号掘立柱建物（南から）……367・368
図 版 123　133・134号住居跡出土遺物……331～335
図 版 124　134・135号住居跡出土遺物……332～344
図 版 125　135号住居跡出土遺物……338～344
図 版 126　135号住居跡出土遺物……338～344
図 版 127　135・136号住居跡出土遺物……338～347
図 版 128　136号住居跡，66・68号掘立柱建物，その他出土遺物……347，369～374
図 版 129　上．8号土壙（北から）……375
中．同出土土器……375
下．（左）スクレイパー他，（右）押型文土器……385・386
図 版 130　上．10号土壙（南から）……376
中．13号土壙（北西から）……378
下．14号土壙（北から）……380
図 版 131　上．16号土壙（西から）……381
中．P－4……285

下．61号住居跡須恵器壷出土状態 ……117

挿 図 目 次

<上 巻>

頁

第1図 機関銃分解時の様子（写真） …… 2
第2図 調査中スナップ①（写真） …… 5
第3図 九州横断自動車道路線図 …… 6
第4図 周辺遺跡分布地図（1/50,000） ……折込み
第5図 大刀洗飛行場跡地と花立山（写真） …… 10
第6図 塹濠内出土磁器実測図（1/4） …… 10
第7図 竪穴住居跡模式図と各部の名称 …… 12
第8図 須恵器全器形一覧（1/10） …… 15
第9図 土師器全器形一覧①（1/10） …… 18
第10図 土師器全器形一覧②（1/10） …… 21
第11図 21号住居跡実測図（1/60） …… 23
第12図 21号住居跡カマド実測図（1/30） …… 24
第13図 21号住居跡出土土器実測図（1/4） …… 25
第14図 22号住居跡実測図（1/60） …… 26
第15図 22号住居跡カマド対面土壙実測図（1/30） …… 27
第16図 22号住居跡カマド実測図（1/30） …… 27
第17図 22号住居跡出土土器実測図①（1/4） …… 28
第18図 22号住居跡出土土器実測図②（1/4） …… 29
第19図 22号住居跡出土土器実測図③（1/6） …… 30
第20図 22号住居跡出土土器実測図④（1/6） …… 31
第21図 23号住居跡出土土器実測図（1/4） …… 31
第22図 23号住居跡実測図（1/60） …… 32
第23図 24号住居跡実測図（1/60） …… 33
第24図 24号住居跡カマド実測図（1/30） …… 34
第25図 24号住居跡出土土器実測図（1/4） …… 35
第26図 25号住居跡実測図（1/60） …… 36

第27図　調査中スナップ②（写真）…… 37
第28図　25号住居跡出土土器実測図（1/4）…… 37
第29図　26号住居跡実測図（1/60）…… 38
第30図　26号住居跡カマド実測図（1/30）…… 39
第31図　26号住居跡出土土器実測図（1/4）…… 40
第32図　27号住居跡実測図（1/60）…… 41
第33図　27号住居跡カマド実測図（1/30）…… 42
第34図　27号住居跡出土土器実測図①（1/4）…… 43
第35図　27号住居跡出土土器実測図②（1/4）…… 44
第36図　27号住居跡出土土器実測図③（1/4）…… 45
第37図　27号住居跡出土土器実測図④（1/6）…… 46
第38図　27号住居跡出土土器実測図⑤（1/6）…… 47
第39図　27号住居跡出土土器実測図⑥（1/6）…… 48
第40図　27号住居跡出土土器実測図⑦（1/6）…… 49
第41図　28号住居跡実測図（1/60）…… 50
第42図　28号住居跡カマド実測図（1/30）…… 51
第43図　28号住居跡カマド支脚実測図（1/4）…… 51
第44図　28号住居跡出土土器実測図（1/4）…… 52
第45図　29号住居跡実測図（1/60）…… 53
第46図　29号住居跡出土土器実測図（1/4）…… 53
第47図　30号住居跡実測図（1/60）…… 54
第48図　30・31号住居跡出土土器実測図（1/4）…… 55
第49図　31号住居跡実測図（1/60）…… 56
第50図　31号住居跡カマド支脚実測図（1/4）…… 57
第51図　31号住居跡カマド実測図（1/30）…… 57
第52図　32号住居跡実測図（1/60）…… 58
第53図　33・34号住居跡実測図（1/60）…… 59
第54図　32～34号住居跡出土土器実測図（1/4）…… 60
第55図　35・36号住居跡実測図（1/60）…… 61
第56図　36号住居跡カマド支脚実測図（1/4）…… 62
第57図　36号住居跡カマド実測図（1/30）…… 62
第58図　37・38号住居跡実測図（1/60）……折込み
第59図　37号住居跡カマド実測図（1/30）…… 63

第60図　36・37号住居跡出土土器実測図（1/4）…… 64
第61図　37号住居跡手捏土器出土状態（写真）…… 65
第62図　39号住居跡実測図（1/60）…… 66
第63図　40号住居跡実測図（1/60）…… 67
第64図　41号住居跡実測図（1/60）…… 68
第65図　39～41号住居跡出土土器実測図（1/4）…… 69
第66図　42号住居跡実測図（1/60）…… 70
第67図　42号住居跡カマド実測図（1/30）…… 71
第68図　43号住居跡実測図（1/60）…… 71
第69図　42～44号住居跡出土土器実測図（1/4）…… 72
第70図　44号住居跡実測図（1/60）…… 73
第71図　44号住居跡カマド実測図（1/30）…… 73
第72図　45号住居跡実測図（1/60）…… 74
第73図　45号住居跡カマド実測図（1/30）…… 75
第74図　45号住居跡カマド支脚実測図（1/4）…… 75
第75図　45号住居跡出土土器実測図（1/4）…… 76
第76図　46号住居跡カマド支脚実測図（1/4）…… 76
第77図　46号住居跡実測図（1/60）…… 77
第78図　47号住居跡実測図（1/60）…… 78
第79図　46～48号住居跡出土土器実測図（1/4）…… 79
第80図　48・49号住居跡実測図（1/60）…… 80
第81図　48号住居跡カマド実測図（1/30）…… 81
第82図　45号住居跡カマド（写真）…… 81
第83図　50号住居跡実測図（1/60）…… 82
第84図　50号住居跡カマド実測図（1/30）…… 83
第85図　50号住居跡出土土器実測図①（1/4）…… 84
第86図　50号住居跡出土土器実測図②（1/4）…… 85
第87図　50号住居跡出土土器実測図③（1/6）…… 86
第88図　50号住居跡出土土器実測図④（1/6）…… 87
第89図　51号住居跡実測図（1/60）…… 88
第90図　51号住居跡カマド実測図（1/30）…… 89
第91図　51号住居跡カマド支脚実測図（1/4）…… 89
第92図　51号住居跡出土土器実測図（1/4）…… 90

第93図　52号住居跡実測図（1/60）…… 91
第94図　52号住居跡カマド実測図（1/30）…… 92
第95図　52号住居跡出土土器実測図（1/4）…… 93
第96図　53号住居跡カマド実測図（1/30）…… 94
第97図　53号住居跡実測図（1/60）…… 95
第98図　54号住居跡カマド実測図（1/30）…… 96
第99図　54・55号住居跡実測図（1/60）…… 97
第100図　53・54号住居跡出土土器実測図（1/4）…… 98
第101図　55号住居跡出土土器実測図（1/4）……100
第102図　56号住居跡カマド支脚実測図（1/4）……101
第103図　56号住居跡カマド実測図（1/30）……101
第104図　56号住居跡・屋内施設実測図（1/60・1/30）……102
第105図　56号住居跡出土土器実測図（1/4）……103
第106図　57号住居跡実測図（1/60）……104
第107図　58号住居跡実測図（1/60）……105
第108図　59号住居跡実測図（1/60）……106
第109図　59号住居跡カマド実測図（1/30）……106
第110図　59号住居跡カマド支脚実測図（1/4）……106
第111図　57～59号住居跡出土土器実測図（1/4）……107
第112図　60号住居跡実測図（1/60）……108
第113図　60号住居跡遺物出土状況・カマド・土壙実測図（1/30）……折込み
第114図　60号住居跡出土土器位置図……111
第115図　60号住居跡出土土器実測図①（1/4）……112
第116図　60号住居跡出土土器実測図②（1/4）……113
第117図　60号住居跡出土土器実測図③（1/4）……114
第118図　60号住居跡出土土器実測図④（1/4）……115
第119図　60号住居跡出土土器実測図⑥（1/4）……116
第120図　61号住居跡実測図（1/60）……117
第121図　61号住居跡出土土器実測図（1/4）……118
第122図　62号住居跡実測図（1/60）……119
第123図　62号住居跡出土土器実測図（1/4）……120
第124図　63～78号住居跡全体図（1/100）……122
第125図　68～72号掘立柱建物配置図（1/100）……123

第126図　63・66・74号住居跡実測図（1/60）……124
第127図　64・65・72・73号住居跡実測図（1/60）……125
第128図　63～66号住居跡出土土器実測図（1/4）……126
第129図　67号住居跡カマド実測図（1/30）……127
第130図　67号住居跡実測図（1/60）……128
第131図　68号住居跡実測図（1/60）……129
第132図　67・68号住居跡出土土器実測図（1/4）……130
第133図　68号住居跡カマド実測図（1/30）……131
第134図　69号住居跡実測図（1/60）……132
第135図　70・71号住居跡実測図（1/60）……134
第136図　69～74号住居跡出土土器実測図（1/4）……135
第137図　75・76号住居跡実測図（1/60）……137
第138図　77・78号住居跡実測図（1/60）……139
第139図　75～78号住居跡出土土器実測図（1/4）……140
第140図　79号住居跡実測図（1/60）……141
第141図　79号住居跡出土土器実測図（1/4）……142
第142図　80号住居跡実測図（1/60）……142
第143図　80号住居跡出土土器実測図（1/4）……144
第144図　81号住居跡実測図（1/60）……145
第145図　81号住居跡出土土器実測図（1/4）……146
第146図　82号住居跡実測図（1/60）……147
第147図　83号住居跡実測図（1/60）……148
第148図　82・83号住居跡出土土器実測図（1/4）……149
第149図　84号住居跡実測図（1/60）……150
第150図　84号住居跡出土土器実測図（1/4）……151
第151図　85号住居跡実測図（1/60）……152
第152図　85号住居跡カマド対面土壙実測図（1/30）……153
第153図　85号住居跡カマド実測図（1/30）……153
第154図　85号住居跡出土土器実測図（1/4）……154
第155図　86号住居跡実測図（1/60）……155
第156図　86号住居跡カマド実測図（1/30）……156
第157図　86号住居跡出土土器実測図（1/4）……157
第158図　87号住居跡実測図（1/60）……158

第159図　87号住居跡カマド実測図（1/30）……159
第160図　87号住居跡カマド支脚実測図（1/4）……159
第161図　88号住居跡カマド実測図（1/30）……159
第162図　88号住居跡カマド支脚実測図（1/4）……159
第163図　88号住居跡実測図（1/60）……160
第164図　87・88号住居跡出土土器実測図（1/4）……161
第165図　89号住居跡実測図（1/60）……162
第166図　89号住居跡カマド対面土壙実測図（1/30）……163
第167図　89号住居跡カマド実測図（1/30）……163
第168図　89号住居跡出土土器実測図（1/4）……164
第169図　90号住居跡実測図（1/60）……165
第170図　90・91号住居跡出土土器実測図（1/4）……166
第171図　91号住居跡実測図（1/60）……167
第172図　91号住居跡カマド対面土壙実測図（1/30）……168
第173図　91号住居跡カマド実測図（1/30）……168
第174図　92号住居跡実測図（1/60）……169
第175図　92号住居跡出土土器実測図（1/4）……169
第176図　93号住居跡実測図（1/60）……170
第177図　93号住居跡出土土器実測図（1/4）……171
第178図　調査中スナップ③（写真）……171
第179図　94号住居跡実測図（1/60）……172
第180図　94号住居跡カマド実測図（1/30）……173
第181図　94号住居跡出土土器実測図（1/4）……174
第182図　95・96・101号住居跡実測図（1/60）……175
第183図　95号住居跡カマド実測図（1/30）……176
第184図　95号住居跡カマド支脚実測図（1/4）……176
第185図　98号住居跡カマド実測図(1/30)……176
第186図　97・98号住居跡実測図（1/60）……177
第187図　95・98号住居跡出土土器実測図（1/4）……178
第188図　99号住居跡実測図（1/60）……179
第189図　99号住居跡カマド実測図（1/30）……180
第190図　100号住居跡実測図（1/60）……181
第191図　99～101号住居跡出土土器実測図（1/4）……182

第192図　102号住居跡実測図（1/60）……183
第193図　103号住居跡実測図（1/60）……184
第194図　102～105号住居跡出土土器実測図（1/4）……185
第195図　104号住居跡実測図（1/60）……186
第196図　105号住居跡実測図（1/60）……187
第197図　106号住居跡実測図（1/60）……188
第198図　106号住居跡カマド実測図（1/30）……189
第199図　107号住居跡実測図（1/60）……190
第200図　106・107号住居跡出土土器実測図（1/4）……191
第201図　108号住居跡実測図（1/60）……192
第202図　108号住居跡カマド実測図（1/30）……193
第203図　108号住居跡出土土器実測図（1/4）……193
第204図　109号住居跡実測図（1/60）……194
第205図　110号住居跡実測図（1/60）……195
第206図　110号住居跡カマド実測図（1/30）……195
第207図　109・110号住居跡出土土器実測図（1/4）……196
第208図　111号住居跡実測図（1/60）……197
第209図　111号住居跡カマド実測図（1/30）……197
第210図　111号住居跡カマド支脚実測図（1/4）……197
第211図　111号住居跡出土土器実測図①（1/4）……198
第212図　111号住居跡出土土器実測図②（1/4）……199
第213図　112号住居跡実測図（1/60）……200
第214図　113号住居跡実測図（1/60）……201
第215図　112・113号住居跡出土土器実測図（1/4）……202
第216図　114号住居跡実測図（1/60）……203
第217図　調査中スナップ④（写真）……203
第218図　115号住居跡実測図（1/60）……204
第219図　116号住居跡実測図（1/60）……205
第220図　114～116号住居跡出土土器実測図（1/4）……206
第221図　117号住居跡実測図（1/60）……207
第222図　117号住居跡出土土器実測図（1/4）……208
第223図　118号住居跡実測図（1/60）……209
第224図　118号住居跡出土土器実測図（1/4）……210

第225図　119号住居跡実測図（1/60）……211
第226図　120号住居跡実測図（1/60）……212
第227図　119～122号住居跡出土土器実測図（1/4）……213
第228図　121・122号住居跡実測図（1/60）……214
第229図　122号住居跡カマド実測図（1/30）……215
第230図　123・124号住居跡実測図（1/60）……216
第231図　124号住居跡カマド実測図（1/30）……217
第232図　123・124号住居跡出土土器実測図（1/4）……217
第233図　125号住居跡実測図（1/60）……218
第234図　125号住居跡出土土器実測図（1/4）……219
第235図　126号住居跡実測図（1/60）……220
第236図　126号住居跡カマド支脚実測図（1/4）……221
第237図　126号住居跡カマド実測図（1/30）……221
第238図　127号住居跡実測図（1/60）……221
第239図　126・127号住居跡出土土器実測図（1/4）……222
第240図　128・129号住居跡実測図（1/60）……223
第241図　130・131号住居跡実測図（1/60）……223
第242図　128～132号住居跡出土土器実測図（1/4）……224

<中　巻>

第243図　21号掘立柱建物実測図（1/60）……225
第244図　22号掘立柱建物実測図（1/60）……226
第245図　23号掘立柱建物実測図（1/60）……227
第246図　24号掘立柱建物実測図（1/60）……228
第247図　25号掘立柱建物実測図（1/60）……229
第248図　26号掘立柱建物実測図（1/60）……231
第249図　27号掘立柱建物実測図（1/60）……232
第250図　28号掘立柱建物実測図（1/60）……234
第251図　29号掘立柱建物実測図（1/60）……235
第252図　30号掘立柱建物実測図（1/60）……235
第253図　31号掘立柱建物実測図（1/60）……236
第254図　32・33号掘立柱建物実測図（1/60）……237

第255図　34号掘立柱建物実測図（1/60）……239
第256図　調査中スナップ⑤（写真）……239
第257図　35号掘立柱建物実測図（1/60）……折込み
第258図　36号掘立柱建物実測図（1/60）……241
第259図　37号掘立柱建物実測図（1/60）……243
第260図　38号掘立柱建物実測図（1/60）……244
第261図　39号掘立柱建物実測図（1/60）……245
第262図　40号掘立柱建物実測図（1/60）……246
第263図　41号掘立柱建物実測図（1/60）……248
第264図　42号掘立柱建物実測図（1/60）……249
第265図　43号掘立柱建物実測図（1/60）……251
第266図　44号掘立柱建物実測図（1/60）……252
第267図　45号掘立柱建物実測図（1/60）……254
第268図　46号掘立柱建物実測図（1/60）……255
第269図　47号掘立柱建物実測図（1/60）……256
第270図　48号掘立柱建物実測図（1/60）……257
第271図　49号掘立柱建物実測図（1/60）……259
第272図　50号掘立柱建物実測図（1/60）……260
第273図　51・52号掘立柱建物実測図（1/60）……262
第274図　53号掘立柱建物実測図（1/60）……263
第275図　54号掘立柱建物実測図（1/60）……264
第276図　55号掘立柱建物実測図（1/60）……265
第277図　56号掘立柱建物実測図（1/60）……266
第278図　57号掘立柱建物実測図（1/60）……268
第279図　58号掘立柱建物実測図（1/60）……269
第280図　59号掘立柱建物実測図（1/60）……270
第281図　60号掘立柱建物実測図（1/60）……271
第282図　掘立柱建物出土土器実測図①（1/4）……272
第283図　掘立柱建物出土土器実測図②（1/4）……273
第284図　1号土壙出土土器実測図（1/4）……274
第285図　1・2号土壙実測図（1/60）……274
第286図　2号土壙出土土器実測図（1/4）……275
第287図　4号土壙実測図（1/60）……276

第288図　5号土壙実測図（1/60）……277
第289図　4号土壙出土土器実測図（1/4）……279
第290図　5号土壙出土土器実測図①（1/4）……280
第291図　5号土壙出土土器実測図②（1/4）……281
第292図　溝1出土土器実測図（1/4，1/8）……282
第293図　1・2号土壙墓出土土器実測図（1/3）……283
第294図　1・2号土壙墓実測図（1/30）……284
第295図　ピット出土土器実測図（1/4）……286
第296図　遺構上面出土土器実測図①（1/4）……287
第297図　遺構上面出土土器実測図②（1/4）……288
第298図　接合土器実測図①（1/4）……290
第299図　接合土器実測図②（1/4）……291
第300図　接合土器実測図③（1/4）……292
第301図　同一個体土器実測図（1/4）……295
第302図　土製品実測図①（手捏土器①）（1/2）……297
第303図　土製品実測図②（手捏土器②）（1/2）……299
第304図　土製品実測図③（手捏土器③）（1/2）……300
第305図　土製品実測図④（模造鏡）（1/2）……303
第306図　土製品実測図⑤（玉・剣・棒）（1/2）……305
第307図　土製品実測図⑥（把手・その他）（1/2）……307
第308図　土製品実測図⑦（盤状・土錘）（1/2）……308
第309図　土製品実測図⑧（不明土製品II①）（1/2）……311
第310図　土製品実測図⑨（不明土製品II②）（1/2）……312
第311図　土製品実測図⑩（不明土製品II③）（1/2）……313
第312図　土製品実測図⑪（不明土製品II④）（1/2）……314
第313図　土製品実測図⑫（不明土製品II⑤）（1/2）……315
第314図　土製品実測図⑬（不明土製品II⑥）（1/2）……316
第315図　土製品実測図⑭（不明土製品II⑦）（1/2）……317
第316図　土製品実測図⑮（不明土製品II⑧）（1/2）……318
第317図　土製品実測図⑯（不明土製品II⑨）（1/2）……319
第318図　土製品実測図⑰（不明土製品II⑩）（1/2）……320
第319図　鉄製品実測図①（1/2）……322
第320図　鉄製品実測図②（銅製品）（1/2）……323

第321図　石製品実測図①（紡錘車・その他）（1/2）……324
第322図　石製品実測図②（砥石）（1/3）……326
第323図　石製品実測図③（砥石）（1/3）……327
第324図　石製品実測図④（台石）（1/4）……328
第325図　133号住居跡実測図（1/60）……330
第326図　133号住居跡出土土器実測図（1/4）……331
第327図　134号住居跡実測図（1/60）……333
第328図　134号住居跡出土土器実測図①（1/4）……334
第329図　134号住居跡出土土器実測図②（1/6）……335
第330図　135号住居跡出入口部断面（写真）……335
第331図　135号住居跡実測図（1/60）……折込み
第332図　135号住居跡出入口部実測図（1/30）……337
第333図　135号住居跡出土土器実測図①（1/4）……339
第334図　135号住居跡出土土器実測図②（1/4）……340
第335図　135号住居跡出土土器実測図③（1/4）……341
第336図　135号住居跡出土土器実測図④（1/6）……342
第337図　135号住居跡出土土器実測図⑤（1/4）……343
第338図　135号住居跡出土土器実測図⑥（1/4）……343
第339図　135号住居跡出土土製品実測図（1/2）……344
第340図　136号住居跡実測図（1/60）……345
第341図　136号住居跡出土土器実測図①（1/4）……346
第342図　136号住居跡出土土器実測図②（1/4）……347
第343図　61号掘立柱建物実測図（1/60）……348
第344図　62号掘立柱建物実測図（1/60）……349
第345図　63号掘立柱建物実測図（1/60）……350
第346図　64号掘立柱建物実測図（1/60）……351
第347図　65号掘立柱建物実測図（1/60）……352
第348図　66号掘立柱建物実測図（1/60）……353
第349図　67号掘立柱建物実測図（1/60）……354
第350図　68号掘立柱建物実測図（1/60）……355
第351図　69号掘立柱建物実測図（1/60）……356
第352図　70号掘立柱建物実測図（1/60）……358
第353図　71号掘立柱建物実測図（1/60）……359

第354図　72号掘立柱建物実測図（1/60）……360
第355図　73号掘立柱建物実測図（1/60）……361
第356図　74号掘立柱建物実測図（1/60）……363
第357図　75号掘立柱建物実測図（1/60）……364
第358図　76号掘立柱建物実測図（1/60）……365
第359図　77号掘立柱建物実測図（1/60）……366
第360図　78号掘立柱建物実測図（1/60）……367
第361図　79号掘立柱建物実測図（1/60）……369
第362図　66号掘立柱建物出土土製品実測図（1/3）……369
第363図　掘立柱建物出土土器実測図（1/4）……370
第364図　6・7号土壙実測図（1/30）……371
第365図　6・7号土壙出土土器実測図（1/4）……372
第366図　その他の弥生時代土器実測図（1/4）……373
第367図　弥生時代出土土製品実測図（1/3）……374
第368図　8号土壙実測図（1/30）……375
第369図　8号土壙出土土器実測図（1/4）……375
第370図　9・10号土壙実測図（1/30）……377
第371図　11・12号土壙実測図（1/30）……378
第372図　13・14号土壙実測図（1/30）……379
第373図　15・16号土壙実測図（1/30）……380
第374図　17～19号土壙実測図（立野B地区）（1/30）……382
第375図　1・2号井戸実測図（1/30）……384
第376図　グリッド土層図（1/60）……385
第377図　スクレーパー・縄文土器実測図（1/2）……386
第378図　立野遺跡D地区表採土錘実測図（1/2）……387
第379図　立野遺跡A地区2号墳土器配置図……388
第380図　出入口施設の模式図（1/60）……392
第381図　カマドの種類（1/40）……394
第382図　カマドの模式図……395
第383図　カマド周辺の竪穴部外柱穴（1/120）……398
第384図　竪穴住居の平面形態上の変遷（1/120）……408
第385図　主柱間エリアの占有率……409
第386図　住居空間使用の一私案（1/80）……410

第387図　竪穴部外の柱穴（1/120）……412
第388図　53・54号住居跡にみられる杭状痕（1/30）……413
第389図　立野遺跡における住居の群と掘立柱建物……折込み
第390図　異方向を示す住居……431
第391図　出土した土器量……432
第392図　土製品出土分布……433
第393図　鉄器・スラッグ・砥石出土分布……434
第394図　接合土器と21・22・26・27号住居跡出土須恵器（1/3）……436
第395図　同一工人の作になる土器（1/4）……438
第396図　竪穴住居の出入口の分類……449

表　目　次

〈上　巻〉

第1表　60号住居跡出土土器器種一覧……110

〈中　巻〉

頁

第2表　21号掘立柱建物計測表……225
第3表　22号掘立柱建物計測表……226
第4表　23号掘立柱建物計測表……226
第5表　24号掘立柱建物計測表……227
第6表　25号掘立柱建物計測表……230
第7表　26号掘立柱建物計測表……231
第8表　27号掘立柱建物計測表……233
第9表　28号掘立柱建物計測表……234
第10表　29号掘立柱建物計測表……235
第11表　30号掘立柱建物計測表……236
第12表　31号掘立柱建物計測表……237
第13表　32号掘立柱建物計測表……238

第14表　33号掘立柱建物計測表 ……238
第15表　34号掘立柱建物計測表 ……238
第16表　35号掘立柱建物計測表 ……240
第17表　36号掘立柱建物計測表 ……242
第18表　37号掘立柱建物計測表 ……242
第19表　38号掘立柱建物計測表 ……244
第20表　39号掘立柱建物計測表 ……245
第21表　40号掘立柱建物計測表 ……247
第22表　41号掘立柱建物計測表 ……248
第23表　42号掘立柱建物計測表 ……249
第24表　43号掘立柱建物計測表 ……250
第25表　44号掘立柱建物計測表 ……252
第26表　45号掘立柱建物計測表 ……253
第27表　46号掘立柱建物計測表 ……255
第28表　47号掘立柱建物計測表 ……256
第29表　48号掘立柱建物計測表 ……258
第30表　49号掘立柱建物計測表 ……258
第31表　50号掘立柱建物計測表 ……260
第32表　51号掘立柱建物計測表 ……261
第33表　52号掘立柱建物計測表 ……261
第34表　53号掘立柱建物計測表 ……264
第35表　54号掘立柱建物計測表 ……264
第36表　55号掘立柱建物計測表 ……266
第37表　56号掘立柱建物計測表 ……267
第38表　57号掘立柱建物計測表 ……267
第39表　58号掘立柱建物計測表 ……268
第40表　59号掘立柱建物計測表 ……270
第41表　60号掘立柱建物計測表 ……271
第42表　不明土製品一覧表 ……320
第43表　61号掘立柱建物計測表 ……348
第44表　62号掘立柱建物計測表 ……349
第45表　63号掘立柱建物計測表 ……349
第46表　64号掘立柱建物計測表 ……350

第47表　65号掘立柱建物計測表 ……351
第48表　66号掘立柱建物計測表 ……353
第49表　67号掘立柱建物計測表 ……354
第50表　68号掘立柱建物計測表 ……354
第51表　69号掘立柱建物計測表 ……357
第52表　70号掘立柱建物計測表 ……357
第53表　71号掘立柱建物計測表 ……359
第54表　72号掘立柱建物計測表 ……360
第55表　73号掘立柱建物計測表 ……362
第56表　74号掘立柱建物計測表 ……362
第57表　75号掘立柱建物計測表 ……364
第58表　76号掘立柱建物計測表 ……365
第59表　77号掘立柱建物計測表 ……366
第60表　78号掘立柱建物計測表 ……368
第61表　79号掘立柱建物計測表 ……368
第62表　祭祀関連遺物出土部位 ……421
第63表　竪穴住居跡出入口一覧表……454・455

〈下　巻〉

頁

第64表　立野C地区竪穴住居跡一覧表①～④……折込み
第65表　立野B・D・E地区掘立柱建物一覧表 ……457
第66表　立野C地区掘立柱建物一覧表①～②……458～459
第67表　竪穴住居跡出土土器法量表①～㉗……460～473
第68表　掘立柱建物出土土器法量表 ……473
第69表　土壙・溝等出土土器法量表①～④……474～475
第70表　接合土器法量表 ……476
第71表　不明土製品計測一覧表①～⑤……477～481

付図　1　立野・宮原遺跡路線・遺構配置図（1/1,250）
　　2　立野遺跡遺構配置図（1/1,000）
　　3　立野B～E地区遺構配置図（1/400）
　　4　立野C地区遺構配置図（1/200）

Ⅰ．調査の経過

昭和54年度に開始した高速自動車道九州横断自動車道建設に伴う事前の発掘調査は本年度で8年目を迎えた。この間，昭和56年5月18日に着手した第11地点（立野・宮原遺跡）の調査は延々3年間に及び昭和59年4月30日を以てすべての調査を終了した。

第11地点は中央に溜池があり，小字名をとって，溜池の東側を宮原遺跡，西側を立野遺跡とした。両遺跡とも路線内を走る農道で分割された部分にアルファベットを用いて小地区に区分し，宮原A～D地区，立野A～F地区とし，宮原遺跡A地区だけ調査の便宜上2分割し，AⅠ地区，AⅡ地区とした（付図1）。この台地上には以前より，縄文時代以降の遺構・遺物がかなり知られていたが，旧陸軍大刀洗飛行場建設に伴ってかなり削平・破壊を受けたものと予測された。が，最初に調査にはいった宮原AⅠ地区では約1,700㎡程の面積であったが住居跡を中心に無数のピットが陸続と検出され，3年間にわたって検出した主な遺構の累計は，竪穴住居跡約450軒，掘立柱建物約200棟，多数の土壙，方形周溝墓16基，円墳9基，土壙墓約80基におよび，ピットの数は夥しい量にのぼり，筒形銅器・銚鑪・帯金具・円面硯・墨書土器・刻印土器・土馬・瓦等を含め，出土遺物も莫大な量となり，6～8世紀代の村落問題や，方形周溝墓等が筑後川北岸のこの地域に営まれた社会状況を考える上で貴重な資料を追加した。

昭和56年度の第11地点の調査は先述のように，まず宮原AⅠ地区から開始した。公団側からは工事用道路を確保するため，側道予定地の調査を先行して欲しいとの要望が寄せられ，宮原AⅠ地区の調査と併行して6月3日より立野遺跡の試掘調査に着手した。立野遺跡は先述のように東から西へA～F地区に分割した。試掘調査の結果，F地区には遺構は検出できず，調査対象地点から落としたが，A・D地区で埋葬遺構を，B～D地区で村落関連遺構を検出し，特にC地区での遺構の密集度は夥しいものであった。工事用道路は立野遺跡の西半部では本線の南側を通り，C地区の東半部を斜断してA・B地区では北側に切り換えられ，宮原遺跡では本線の北側を走るということであった。また，工事用道路の造成も西から行ってくる工程になっており，宮原AⅠ地区の調査終了を俟って9月1日より第11地点の西端部にあたる立野遺跡D・E地区の調査を開始した。E地区は狭い範囲に竪穴住居跡2軒と掘立柱建物等を検出し，D地区の調査と併行して実施した。D地区の側道部分は住居跡5軒が存在し，同本線部分の封土を欠失した円墳6基，土壙墓13基，土壙7基，掘立柱建物2棟も同時に調査を実施した。D・E地区の調査と併行してB・C地区の表土剝ぎを行い，公団立会のもとにポールを立てて工事用道路部分を確認し，B地区全体とC地区のセンター杭以南を調査対象地としてD地区から引き続き調査を続行した。D・E地区は遺構の密度は薄く，調査は比較的円滑に進んだが，B・C地区，とりわけC地区は遺構の密度が濃く，単独で存在する遺構は稀で，住居の切り合い関

係は複雑で調査は煩雑を極めた。が，竪穴住居跡の貼床下の構造，壁面に遺存する細い杭を打ち込んだと思われる小ピットの存在，カマド対面の粘土や土壙の存在等，個別住居跡についての割と細かな部分へ調査のメスが加えられた。しかし，調査期間の切迫等の条件が重なり，それらも十分に深めることは出来なかった。かなりきつい調査ではあったが，昭和57年２月６日にＡ地区とＣ地区の北半分を残して立野遺跡の調査を中断した。この間の立野Ｃ地区の調査が第１次調査である。

立野遺跡の工事用道路部分の調査終了後，宮原遺跡の工事用道路部分の調査を続行した。

昭和57年度は立野Ａ地区西半部の調査を除いて，宮原遺跡の主に工事用道路部分の調査に終始した。

昭和58年度は立野Ａ地区東半部と宮原遺跡の２本立てで調査に着手した。宮原遺跡の調査終了後立野Ａ地区に合流し，６月15日にＡ地区のII次調査を終了した。途中，６月５日からＣ地区の第II次調査を開始した。丁度梅雨の時期に重なり，集中豪雨の度に調査区3,000㎡全面が水没し，水中ポンプが２～３日フルに活躍する状況が現出した。構造物のできるＣ地区西端部の調査をまず終え，西から東へ向って調査を行った。この調査では住居貼床をすべて剝がして床面下まで全面調査することが出来た。住居跡が数軒以上で切り合った場合，その下に掘立柱建物や土壙等がすっぽりと隠れている場合がままあり，その意味で，II次調査は完掘することが出来，住居床面下の形状をも含めて十分に図化することが出来た。

調査の過程で，太平洋戦争終了時頃に旧陸軍大刀洗飛行場兵士が使用していた機関銃が出土した。出土したのは，28号住居跡北側に掘られた幅約３m，長さ約20m程の長方形の土壙南端

第１図　機関銃分解時の様子

からで，これは戦争終了時頃に掘られて軍関係のものを埋めたものと思われるが，機関銃以外の武器等は出土しなかった。福岡県警や甘木署から係官が現地に再三訪れ，鑑識等をした後，甘木署で保管されている。外面は錆が著しかったものの，まだ実用に耐えるものとの事であった。

この様なハプニングもあったが，調査の途中に於いて空中写真の撮影も行い，10月2日にC地区の調査は終了し，立野遺跡の調査は完了した。

立野遺跡の調査終了後，再度，宮原遺跡へ移動し，A・D地区南半部の調査に入った。重機とダンプに追いたてられながら，第11地点の永い永い調査を完了したのは，菜の花の咲き乱れる昭和59年春4月であった。

この間，立野遺跡B・D・E地区の村落遺構を第2集として，A・D地区の埋葬遺構を第5集として報告した。今回のC地区の報告で立野遺跡の報告は終了し，宮原遺跡は現在整理の途上にあり，東端のB・C地区について，本年度末に報告する予定である。

なお，立野遺跡C地区の調査関係者等は以下のようである。

第Ⅰ次調査

調査期間　自　昭和56年10月6日
　　至　昭和57年2月6日

調査関係者

日本道路公団福岡建設局

局　長	持永竜一郎	
総務部長	田代　勝重	
管理課長	布川　堯	
管理課長代理	村上　博之	谷口　浩二

日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所

所　長	江口　正一	
副所長	矢野　浩司	
庶務課長	森本　太助	
用地課長	溝口　萩男	
工務課長	深町　貞光	
小郡工事区工事長	田口　裕	
甘木工事区工事長	瀬戸山邦雄	
朝倉工事区工事長	吉永　英一	

福岡県教育委員会

総括	教育長	友野　隆	
	教育次長	守屋　尚	
	管理部長	森　英俊	
	管理部文化課長	藤井　功	
	〃　課長補佐	蓮尾　謙吉	
庶務	文化課庶務係長	内山　孝之	
	〃　事務主査	平尾　敏映	三島　洋輝
調査	文化課調査第2係長	栗原　和彦	
	〃　主任技師	石山　勲	児玉　真一
	〃	新原　正典	佐々木隆彦
	調査補助員	高田　一弘	武田　光正
	〃	日高　正幸	

第II次調査

調査期間　自　昭和58年6月5日

至　昭和58年10月2日

調査関係者

日本道路公団福岡建設局

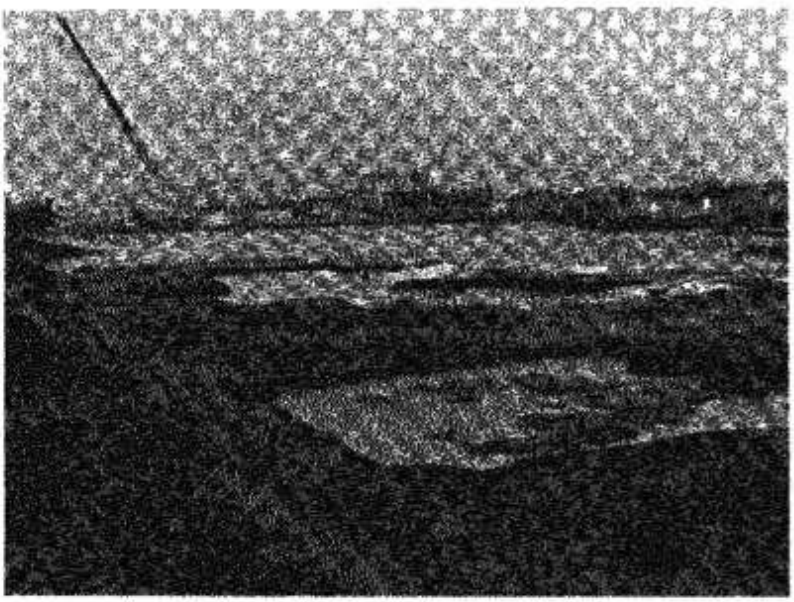
局長	今村　浩三	
総務部長	落合　一彦	
管理課長	梅田　道人	
管理課長代理	野口　利夫	

日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所

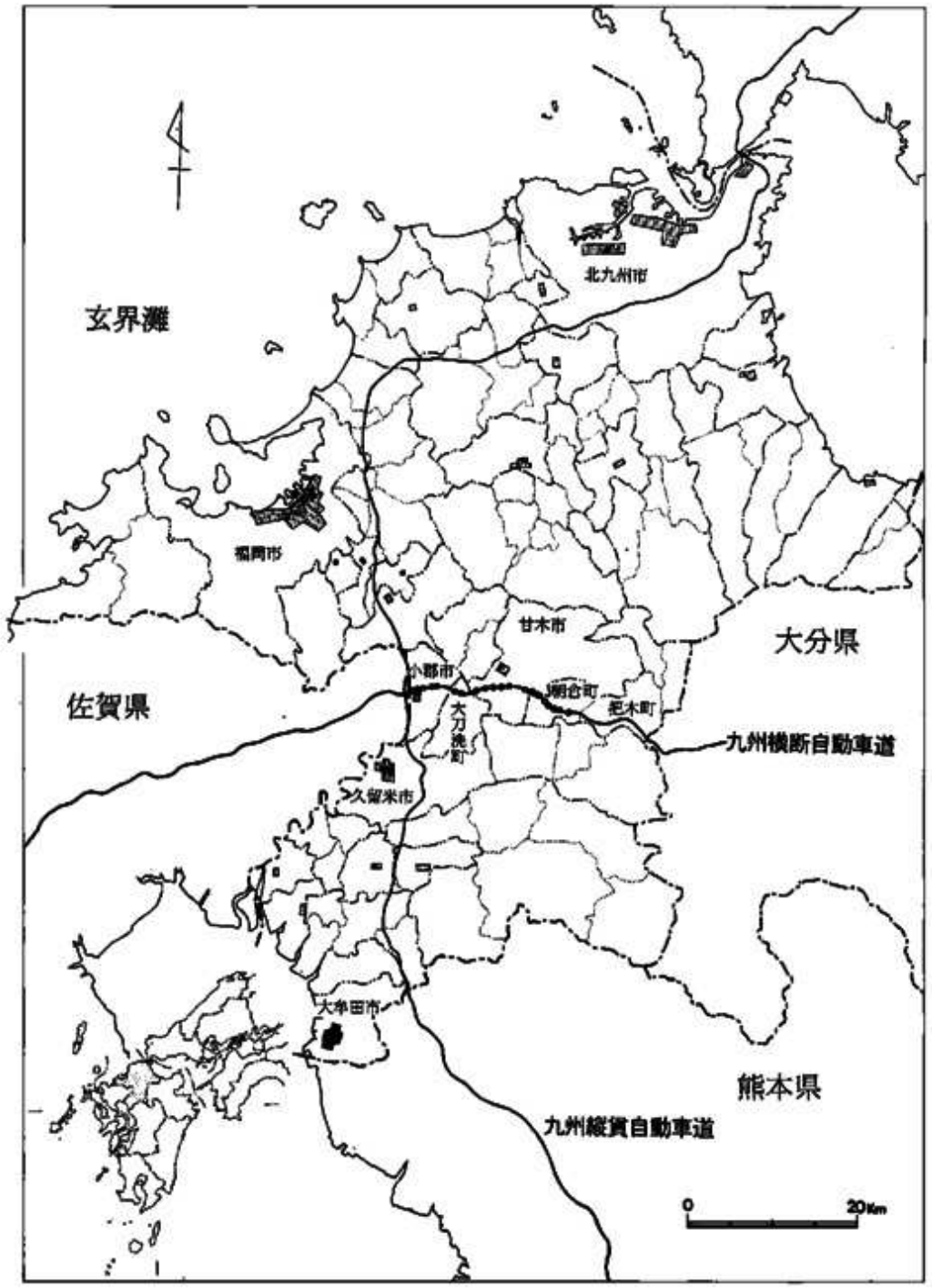
所長	乗松　紀三	
副所長	西田　功	
〃　(技術)	中村　義浩	
庶務課長	松下　幸男	
用地課長	岩下　剛	
工務課長	山口　宗雄	
小郡工事区工事長	友田　義則	
甘木工事区工事長	狩野　宗雄	
朝倉工事区工事長	平沢　正	

	杷木工事区工事長	前田　雄一	
福岡県教育委員会			
総　括	教育長	友野　隆	
	教育次長	安部　徹	
	管理部長	伊藤　博之	
	管理部文化課長	藤井　功	
	〃　課長補佐	中村　一世	
庶　務	文化課庶務係長	松尾　満	
	〃　主任主事	長谷川伸弘	
調　査	文化課調査第2係長	栗原　和彦	
	〃　主任技師	児玉　真一	
	〃　技　師	伊崎　俊秋	
	調査補助員	武田　光正	日高　正幸
	〃	狐塚　省蔵	

なお，I次・II次調査を通じて，現場の図面作成には次の方々の協力を得た。
池田和博・吉橋秀美・富森裕子　（児玉）



第2図　調査中スナップ①



第3図　九州横断自動車道路線図

II. 位置と環境

所在地：福岡県甘木市大字下淵字立野

立野遺跡の地形的概要と周辺の関連する遺跡については『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』の第2集及び第5集において既に述べられている。(註1)(註2) また，周辺を含めた立地については『上川原遺跡』(註3)にて触れられているので参照されたい。ここでは横断道に関連した遺跡を中心として周辺を簡単に概観しておく。

九州横断自動車道の建設に先立つ文化財の発掘調査においては，この数年間で多くの遺跡がそのヴェールをぬいできた。小郡市から朝倉町に至る路線内で最も顕著な特徴は奈良時代を前後する遺構・遺物が目立つことである。これまでの30数ヶ所に及ぶ路線内外の遺跡の内で，半数以上は奈良時代に関わっていると言ってよい。集落としては，小郡市域で前伏（2地点），大板井（3・4地点），薬師堂（5地点），薬師堂東（6地点）があり，大刀洗町では宮巡（8地点），春園（9地点），甘木市で宮原（11地点），高原（16地点），塔ノ上（19－A地点），朝倉町で大還端（19－B地点），石成久保（19－C・D地点），中道（20地点），西法寺（21－A地点），大庭久保（21－C地点），上の原（21－D地点），狐塚南（22－C地点），才田（24地点），長島（27地点），中妙見（28地点）等々がある。墓地としては，この立野遺跡と大還端遺跡の土壙墓群と甘木市柿原古墳群(註4)(註5)がある。多くは他の時期と複合しているが，前伏・塔ノ上・大還端のように奈良時代のみの遺跡もある。各遺跡の詳細はその本報告を待つとしても，奈良時代を前後する時期の，この地方の集落構造の解明に向けて資料が蓄積されつつあると言えよう。

この立野遺跡の主要な時期は6世紀後半～7世紀前半代であり，この時期に属する遺跡は上記の中にもあまり見当らない。ただ，東隣にある宮原遺跡が，この時期から8世紀代に及ぶ大集落であり，この立野集落との関連も注意されるところである。

立野遺跡においては多くの祭祀関連の遺物が出土したが，時期のちがいを別として同様の遺物を出土した遺跡も多くはないが幾つか見られる。佐賀県基山町伊勢山遺跡(註6)，小郡市西中隈遺跡(註7)では手捏土器が多い。甘木市上々浦遺跡(註8)の土製模造鏡などはつくりの良好なものである。もう少し目を転ずれば，夜須町松延池畔祭祀遺跡(註9)などは当時の祭祀関連遺物の様相を知るに貴重な資料であろう。

また，立野遺跡では弥生終末期の住居・建物もあるが，この時期については甘木・朝倉地方に於いて現段階で内容の知られる遺跡はあまり多くない。甘木市小田道(註10)，上々浦(註11)，西原(註12)，小隈出口(註13)，神蔵(註14)など，佐田川と小石原川に挟まれた段丘上に集中して知られているのは意味のあることかもしれない。蛇足ながら，甘木市上川原遺跡(註15)では甕棺内から扁平磨製石鏃が出土しており，立野遺跡36号住居跡出土石鏃を考える際に参考となる。

なお，この立野遺跡の立地する台地上には，1918（大正７）年に日本陸軍の飛行場がつくられた。現在のキリンビール甘木工場敷地とその西南部一帯である。その時分の“遺構”[註17]も検出[註16]された。

註

1．福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告――(2)――』　1983

2．福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告――(5)――』　1984

3．甘木市教育委員会『上川原遺跡』（甘木市文化財調査報告　第13集）　1982

4．羅列した遺跡は全て未報告であり，その内容については各遺跡の担当者に御教示をいただいた。

5．福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告――(4)――』　1984

福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告――(6)――』　1986

6．佐賀県教育委員会『基山町伊勢山・鳥栖市永吉遺跡』　1970

7．福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告――V――』　1974

8．福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告――(1)――』　1982

9．赤崎敏男・島津義昭「福岡県朝倉郡松延池畔発見の土製模造品」　九州考古学49・50　1974

10．甘木市教育委員会『小田道遺跡』（甘木市文化財調査報告　第８集）　1981

11．註８に同じ

12．福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告――(3)――』　1984

13．調査担当者の小田和利氏の御教示による。

14．甘木市教育委員会「神蔵古墳」（甘木市文化財調査報告　第３集）　1978

15．註３に同じ

16．桑原進三郎『大刀洗飛行場物語』　葦書房　1981

17．機関銃の出土した土壌を“塹壕”とするにはやや抵抗もあるが，あるいは戦時中に掘られて使われていた可能性もあるのでこの様に呼んでおく。　（伊崎）

〈補註〉

小郡市前伏遺跡は，遺物整理の進展につれて，７世紀前半代から営まれていることがわかった。

第4図 周辺遺跡分布地図 (1/50,000)

1	小郡正尻遺跡	11(西)	立野遺跡	20	中道遺跡	27	東小田七板遺跡	37	大崎小園遺跡	46	持丸古墳群	55	小隈出口遺跡
2	小郡前伏遺跡	11(東)	宮原遺跡	21－A	西法寺遺跡	28	隈遺跡群	38	井上廃寺	47	鬼の枕古墳	56	小田小塚古墳
3	大板井遺跡	14	上々浦遺跡	21－C	大鹿久保遺跡	29	津古古墳群	39	干潟遺跡	48	古寺墳墓群	57	小田茶臼塚古墳
4	大板井遺跡	15(西)	下原遺跡	21－D	上の原遺跡	30	三国の鼻古墳	40	焼ノ峠古墳		池ノ上墳墓群	58	石成古墳
5	薬師堂遺跡	15(東)	西原遺跡	22(西)	狐塚南遺跡	31	横隈山古墳	41	日の子神社古墳群	49	柿原古墳群	59	狐塚古墳
6	薬師堂東遺跡	16	高原遺跡	22(東)	治部ノ上遺跡	32	横隈狐塚遺跡	42	花立南麓窯跡群	50	柿原野田遺跡	60	堂ケ尾廃寺
8	宮巡遺跡	17	ロノ坪遺跡	23	座禅寺遺跡	33	伊勢山遺跡	43	大師堂1号墳	51	大願寺遺跡		
9	春園遺跡	19－A	塔ノ上遺跡	24	才田遺跡	34	西中隈遺跡		西下野1号墳	52	小田集落遺跡		
10	10地点	19－B	大道端遺跡	25	東才田遺跡	35	小郡官衙遺跡	44	宮原古墳	53	小田道遺跡		
		19-C·D	石成久保遺跡	26	東小田峯遺跡	36	向築地遺跡	45	馬田りんりん石古墳	54	神蔵古墳		

＊1～25までは横断道の地点名と同じ

Ⅲ. 調査の内容

A. 概要

立野遺跡C地区では1981年と1983年の2回の調査で次の如き遺構を検出するに至った。

◉古墳時代後期（6世紀後半～7世紀前半）

- 竪穴住居跡　112軒（21～132号）
- 掘立柱建物　40棟（21～60号）
- 土壙　5基（D1～D5）
- 土壙墓　2基（1は7世紀後半）
- 溝　1条
- ピット　多数

◉弥生時代後期

- 竪穴住居跡　4軒（133～136号）
- 掘立柱建物　19棟（61～79号）
- 土壙　2基（D6・D7）
- ピット

◉縄文時代晩期

- 土壙　1基（D8）

◉時期不詳

- 土壙　8基（D9～D16）
- 井戸　2基（SE1・2）

◉近～現代

- 墓壙　1基
- 溝　数条

これらの遺構からは各々の時期に属する多量の土器をはじめとする遺物が出土した。主体は古墳時代後期の竪穴住居・掘立柱建物である。他に遺構は不明ながらも縄文土器1点，スクレイパー1，黒曜石，サヌカイト剥片が出土しており，その時期の遺構をもとめてグリッドを設

定し掘り下げてみたものの，何ら遺構を見出せなかった。(Ⅲ－D－3参照)

この立野C地区の地勢はほぼフラットであるが，遺構検出面でみると座標軸Y＝－34.925の付近（45号住居跡と84～87号住居跡の中間くらい）の調査区中央部あたりがやや低くなる。

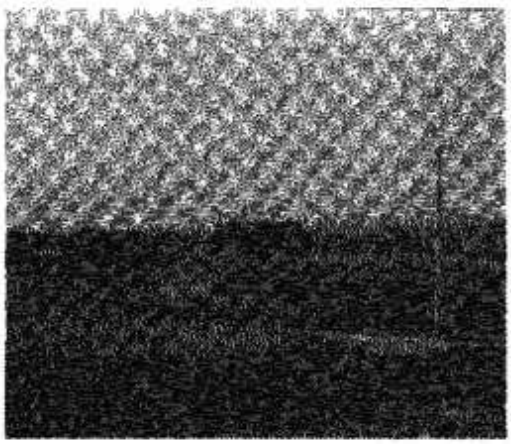
視覚的な遺構のあり方は，上記の低くなった所に空間を持って，東半部と西半部とに分かれる様相を示す。竪穴住居はその西半部に大きめのものが多い。その西半部の中程に幅2.7～3.3m，長さ18m程にわたって堀濠が掘られていた。この堀濠出土の最も新しい遺物は第6図の磁器碗である。約¼の破片であるが復原口径17cmを測り，天草石を使った良質の胎土で，白色の素地に呉須で草木文を絵付する。1945年の太平洋戦争終結時にこの種の碗が使用されていたことはまちがいない。

掘立柱建物の分布は，調査区西北端部，中央付近南端部，岡北半部，東端部といった，大きく4つの箇所に分けられそうである。溝1は調査区のほぼ中程で直角に折れ曲がっている。

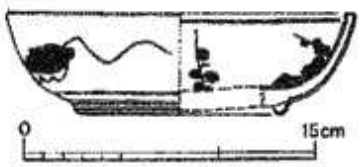
弥生時代の遺構は中央部から東半部に偏在するが，その部分の古墳時代後期の住居跡や包含層からも弥生土器片が多数出土している。北側への拡がりはあまり見込まれず，南側に集落の主体があるのは間違いないところである。

立野遺跡全体の集落のあり方，拡がりについては総括にてふれる。

なお，遺物包含層が随所に見られたが，1号土壙と53～58号住居跡の中間部分を包含層Ⅰ，2号土壙と62号住居跡の中間付近を包含層Ⅱとする。　　(伊崎)



第5図　大刀洗飛行場跡地と花立山



第6図　堀濠内出土磁器実測図
(1/4)

B．古墳時代後期の遺構と遺物

〈遺構・遺物の説明のまえに—凡例—〉

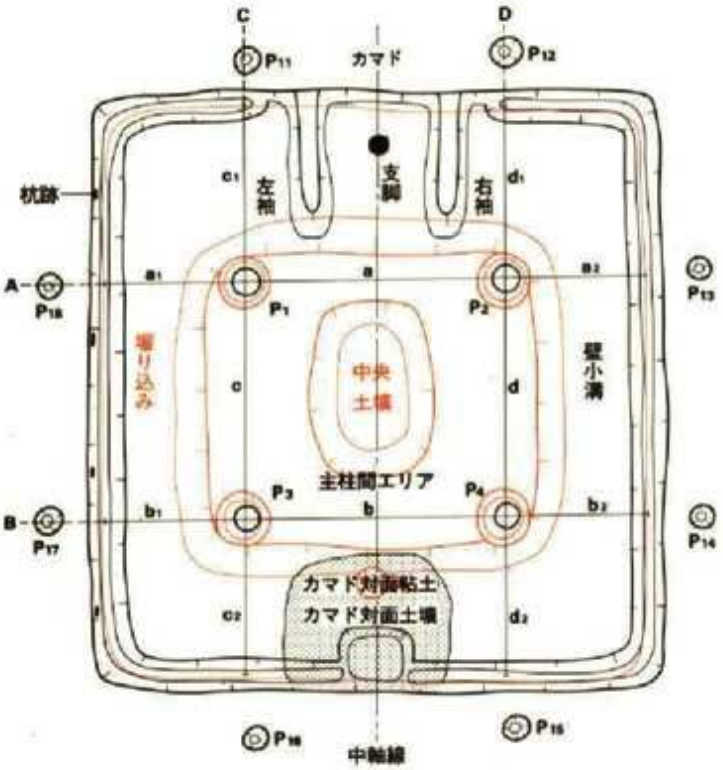
各遺構・遺物については時期的に近接した間の所産とみられるので，あらゆる点で共通した事項がかなり多い。厳密に言えば，各々が全て手づくりゆえに個性を有しているはずであるが，我々が特性を抽出しきれないでいるのが大半といえる。ここで，説明の重複を避けるためと，理解の為の一助として集約できる点は予め一括して記す事にする。

Ⅰ　竪穴住居跡

個別の住居の各部分（第７図の模式図に拠る）の計測値については，第64表①～④を参照されたい。この表については完全なものではないが，翻って不必要かと思われる数値をも取込んでいるところがある。将来的に斬新な視点でその数値が見直されることを期して，現時点での繁雑さを諒とされたい。

なお，第７図の模式図のように名称及び番号を付して説明する。P_9については全ての住居に見られる訳ではないが，出入口に関連するものかも知れない。$P_{11\sim18}$についても，住居に伴う確証がある訳ではないが，関連する可能性もあるものとして呈示する。さらに，それらピット群の外に周堤を想定することも出来るが，今はそれについては触れず，将来に期したい。この図についてはあくまでも模式図として捉えていただきたい。

プラン	方形を呈する。厳密に正方形ではなく，隅円の方形となるものが最も多く，歪んだ方形，長方形気味のもの等がある。
床	貼床で，主柱穴４本に囲まれた部分（主柱間エリア）はよく踏み固められている。それ以外の部分は床面として認知はできるが，あまり固くはない。ほぼ平坦としてよく，レベル差は最大５cm程である。
主柱穴	*4本。第７図のように番号を付す。この４主柱間を主柱間エリアと称しておく。
カマド	本来，全ての住居に見られる。造りつけで，二例（113・115号）を除いて全て北辺から北西辺の壁に付設される。突出型のものは３基（B・D・E地区を入れても５基）しかなく，他は壁の内側に構築される。(註1) 総じて残存状況はよくない。なお，その残存状況に関わることであるが住居の廃棄に際して意識的にカマドを破壊する(潰す)行為が多くなされているようである。
カマド対面粘土	全てではないが大半の住居に見られた。黄色～黄灰色を呈する粘土だが，



第7図　竪穴住居跡模式図と各部の名称（赤線は下層）

各住居が全て同一の質のものではなかった。入口に関連するものと考えている。

マド対面土壙　普遍的なものではないが，いくつかの住居に見られ，土器の遺存しているものもある。これの性格については後述する。

小溝　かなりの住居に見られる。広狭2種があり，また溝中に小ピットを持つものもある。壁体に関与する遺構と考えている。

層の掘り込み　全ての住居に見られ，その代表的形状は第7図の如くである。これの機能については種々の考えが提起されようが，今のところ結論を得るに至らない。

掘立柱建物

行　1間から3間までである。

行　1間から3間までが普通で，例外的に4間のものがある。1間×1間，1間×2間，そして総柱のものは倉庫（クラ）と考えている。2間×2間の総柱でないものもクラとする。居住用と考えられる建物は，立野Cに於いて3棟しか捉えられない。なお，ピットの整然と並ばないもので建物と

したのがいくつかあるが，それは可能性の提示でしかないことを諒とされたい。この点の責は全て編者に帰する。

Ⅲ 遺物

出土した遺物はかなりの量にのぼり，その中から実測・図示したものも相当数ある。本来であれば個々の遺物について多くを語りたいところであるが，あまりに繁をきわめると思えるので特に最も量の多い土器[註2]については下記の如くに概述し，法量のみを第67表①～㉗に掲げる。

須恵器・土師器の出土した全器種は第８・９・10図の通りである。その各器種の名称は必ずしも妥当でないものもあるが，今次の報告に際しての便宜的なものとして諒とされたい。坏形土器・甕形土器等の「形土器」は省略する。

「胎土」「焼成」「色調」「成形」までは概括して述べ，その後「器形の特徴」・「調整」等については，各器種ごとに記す。なお，特に土師器に於いて器形で分類しているのは，あくまでも当遺跡に於いての説明の便の為であって，普遍化出来るものでもないし，これを以て次なる目的の手段とするものでもない。

須恵器・土師器以外の遺物（土製品・鉄製品・石製品）については，出土した各住居の項で出土位置等を触れてはおくが，個々の説明はＢ－５～９に一括する。また，各遺物の出土部位を言うとき，特に触れないものは埋土中出土である。

A 須恵器

〈胎土〉　一般には砂粒を若干含む程度で，割に良質といえる。稀に水ごしした様な極めて精良なものや，反対に大砂粒の目立つ粗質なものもある。その差は器形の違いと相関はないので，大きな問題とはなるまい。

〈焼成〉　ごく一般的な焼上りを示すが，温度不足のものもまま見受ける。器形とは無関係である。遺存状態の良し悪しと誤認する時もあるが，焼成の良否は偶然性もあろう。

〈色調〉　焼成と，一部には胎土とも関わる事であるが，還元炎焼成にて概ね灰色～灰褐色，灰緑色を呈する。灰被りで灰黄色を呈するものも見られる。温度不足は紫灰色，灰白色となるが，量的に多くない。

〈成形〉　粘土紐巻上げで，回転台（ロクロ）を使用するも，一本ビキ法は用いられていない。所謂マキアゲ・ミズビキ法である。[註3]

「坏」　器形　〔蓋〕　口縁が直になるのは稀で，内傾しつつ緩やかに天井部へ移行する。天井部も大半が丸味を持っているが，極端に扁平なものも稀にある。口唇部内側の段，外面天井部と口縁との境に段及び沈線が入るものは皆無

である。

〔身〕　丸みを持った底部から内弯しつつ受部へと移り，受部は外上方へ張り出すのを常とする。立上りは大半が40～50°の角度で受部にとりつき，端部はやや外反気味となる。口唇部を意識的に打欠いている例が非常に多い。

調整　〔蓋〕　天井部外面は回転ヘラ削り，同内面はナデ，口縁の内外は回転ナデを施す。天井部外面についてはナデ及び静止ヘラ削りのものが稀にある。

〔身〕　底体部外面は回転ヘラ削り，同内面はナデ，立上り及び受部の内外は回転ナデを施す。底体部外面に於いてヘラ削りを行わず，ナデのみのものが稀にある。立上り端部が，丸味をもちながらも内側に稜が入るように面をとるものが多いのが特徴的である。

蓋・身ともに回転ヘラ削りは左回り（ロクロは右回り）が大半を占める。ヘラ記号は有するもの全てが外面（天井部・底体部）に施す。

「蓋」　器形　高坏・壺・坩の蓋がある。器形・調整ともに坏蓋に準ずる。摘みを有するものは高坏の蓋とするが，１点だけかえりを持つものがある。壺蓋は口径が大きく扁平である。坩蓋は筒形に近く丸味をもつ。

調整　摘みのあるものは，そこが回転ナデである外は坏蓋と変わらない。

「高坏」　器形　有蓋と無蓋の２種がある。有蓋は１点しか見ない。坏身と同様ながら口径が大きい。無蓋は脚の長いものと脚台状になるものとがある。

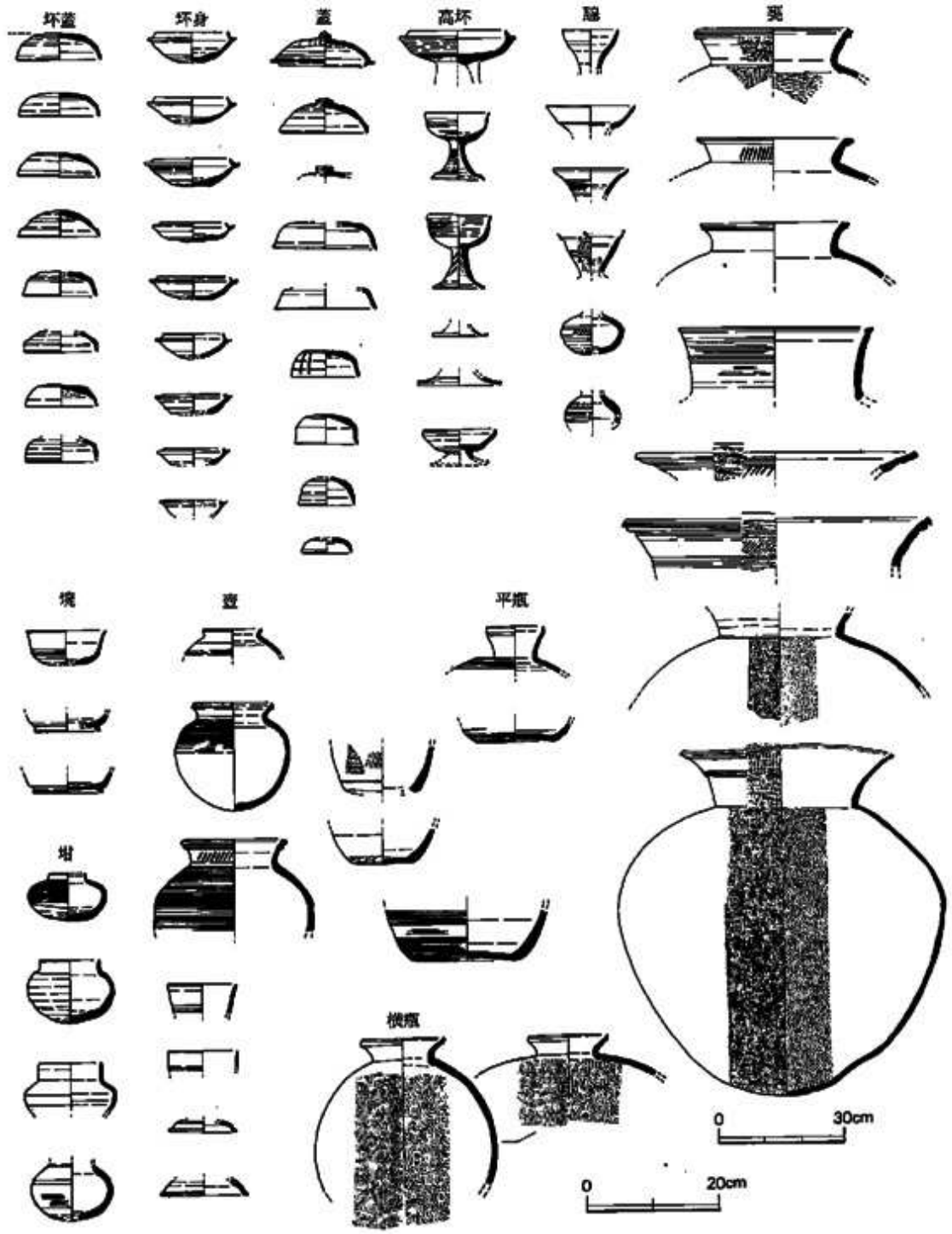
調整　有蓋は底部外面がカキ目を施している。無蓋は坏部が回転ナデとヘラ削りでカキ目を施すものもある。脚部は回転ナデで，筒状部にしぼり痕を見る。

「壺」　器形　丸底で球形の体部に，頸部が細くしまり，口縁が大きく開く形状を呈す。口径のかなり大きくなるものと，やや小ぶりのものとある。

調整　底部はヘラ削り，体部下半はカキ目か回転ナデ，同上半に櫛歯列点文を施し，肩部は回転ナデとなる。頸部は回転ナデを施し，櫛描波状文を持つものもある。

「埦」　器形　高台の付くものと付かないものとがある。高台の付くもの（５号土壙南側拡張部上層と114～117住居跡上面出土の２点）は出土状態からしても，この立野遺跡Ｃ地区に於いては住居群と関連するものとは思われず，掘立柱建物の一部がこの期にあたるのか，或は調査区域外にこの期の遺構があるものと思われる。

調整　坏身のあり方と変わらない。高台の付くものは，高台部分が回転ナデを施している。



第8図　須恵器全器形一覧（1/10，●は1/16）

「坩・壺」 器形　短頸直口で球形の胴部を持った坩と，外反する口頸部に球形胴という甕に近い器形の壺とである。直口で長頸になる壺もあるのかも知れないが，破片の為断定は出来ない。脚台の付くものは壺であろう。坩・壺とも丸底であるが，平底で壺形になるのもあるかもしれない。

調整　底部は外面が回転ヘラ削り，内面がナデ，胴部は外面が回転ヘラ削りとカキ目，内面が回転ナデ，口頸部は内外とも回転ナデを施すのが通有である。ただ壺に於いては胴下半部をタタキの後ナデるものが多い。脚台部分は内外とも回転ナデである。

「平瓶」 器形　数は少なく完形になるものがない。胴部の屈折は緩やかで，稜を持つには至らないと考えられる。

調整　底部は外面がヘラ削り，内面がナデ，胴部は外面がカキ目，内面がナデを施すと思われる。口頸部は回転ナデである。

「横瓶」 器形　はっきり判るのは1点しかない。口径が平瓶のそれよりやや大きい。

調整　胴部は外面がタタキの上を粗い刷毛目，内面が同心円の当具痕である。

「甕」 器形　胴部破片は多いが，全形の判るものは少ない。口頸部が直立気味に開くもの，ほぼ直立に近いもの，大きく外反して開くものの3様を見る。孰れも肩部がやや張った形状を呈すと思われる。口縁端部の形態はヴァリエーションにとむ。

調整　底部～胴部は外面が平行タタキ（擬格子になるものもある）で，内面は同心円の当具痕を見る。外面に所々カキ目の入るものもある。口頸部は基本的には内外とも回転ナデで，個体によっては沈線を入れたり，斜めタタキ痕が認められる。

なお，この甕の破片で同一個体と覚しき資料が複数の住居・ピット等から出土しているので，それについてはB－4にて同一個体資料として触れる。

B　土師器

〈胎土〉　大きく精製と粗製の二種に分けられる。前者はきめの細かい良質の粘土を使用しており，坏・高坏・塊・坩と鉢の一部が含まれる。これには焼成温度とも相俟って遺存状態の不良なものが多い。後者は粗製といっても，大きめの砂粒を含み，あまり良質と言えないという程度のものが多く，極端に粗悪な質のものは少ない。粗製・精製の孰れとも言い難いものすらある。前者との比較の中での粗製としてよく，甕・甑と鉢の一部が該当する。角閃石・雲母片を含むものがある。

〈焼成〉　ごく一般的な焼成と言えるが，精製の土器に温度不十分のものをよく見る。

〈色調〉

粗製のものは黄褐色・橙褐色などの褐色系を呈し，甕・甑に於いては2次的火熱を受けて赤味がかったものや，煤が付着したものを見る。精製土器は黄桃色・黄橙色の明るい黄色系統の色調である。

〈成形〉

坏・高坏・埦・鉢・坩等に於いては，粘土紐及び粘土帯の巻上げか積上げと思われるが，その痕跡を器表面に見ることは出来なかった。一本ビキ法での成形は見ない。

甕・甑は粘土紐巻上げであり，断面を見ると粘土紐接合の様子が良く判るものが多い。それは断面図に於いて間違いなく，右上りの斜線となって描かれる。粘土紐の幅は1cm弱の狭いものから，4cm強のものまであるらしいが(註4)，2cm前後のものを多く見る。なお，「器の下半部は外型のなかに粘土をつめて成形し，その上へ粘土を巻上げて上部をつくる方法(註5)」が存するか否かは判らない。(註6)

把手の接合は，把手に突起をつくって本体に差込むようにするソケット式，粘土塊か粘土棒かを介して接合するジョイント式，ただ単にお互いを貼り合わせる方式の三様があるらしい。把手自体の外面に貫通しない孔を穿ったものが多数見られる。(註7)

大型品に於いて，底部と口縁部は分厚いが，胴部はかなり薄いものも見られるので，タタキしめの成形を行っているものと思われるけれども，その痕跡は見出せなかった。

「坏」　器形

形状に大きく4つの種類がある。

I．鉢に近い形状をなす。直口のものと口縁部が外反するものを見る。高坏Iの脚をとった形状である。

II．屈折部があり，直立するものとS字気味に立上るものとがある。

III．埦に近いもの，鉢に近いものを見るが，深さに於いて浅いものをさす。

IV．皿としても良い形状をなす。量は少ない。

調整

口縁内外(IIに於いては屈折部まで)は回転ナデ，底体部内面はナデ，同外面は横方向のヘラ削りを行う。

「高坏」　器形

坏部は脚との接合部から丸味を持って内弯気味にカーヴしつつ伸びてゆくが，その形状に3種類ある。

I．通有の器形であるが，屈折部から口縁にかけては外弯しつつ開くもの，直に開くもの，端部に至って急に外反するもの等，ヴァラエティに富む。

II．屈折部の所がS字状になるもの。数は少ない。Iと区別しにくいものもある。

Ⅲ．屈折部を有しないもの。これも数は少ない。脚部は筒状部に長短の差をみるが，等しくラッパ状に開いて裾部へ至る。ヘラ削りの施し方によって裾部内外に段を持つものと持たないものがある。

調整　坏部は口縁下の屈折部までが回転ナデ，底部内面はナデ，同外面は削りを施す。脚部は筒状部が外面は縦方向，内面は横方向のヘラ削り，裾部は内外とも回転ナデにて調整する。全体に磨滅して，調整の詳細を掴みにくいものが多い。

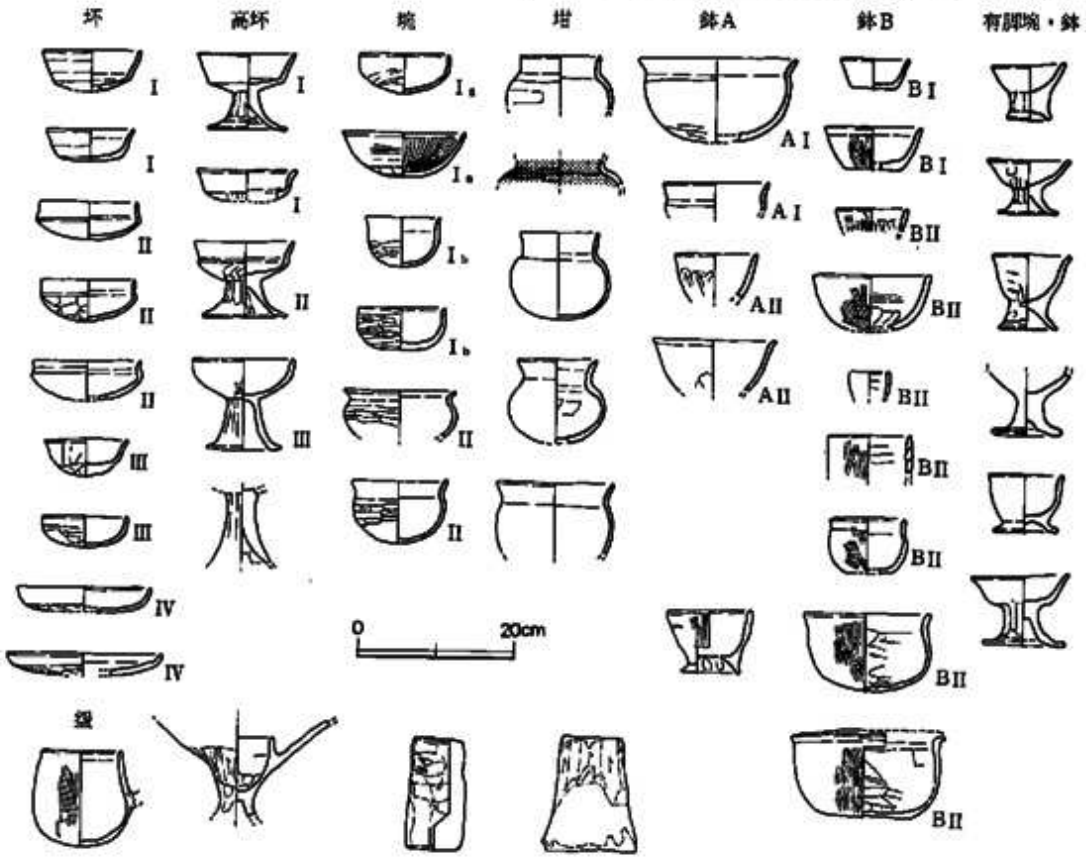
「塊」　器形　坏・鉢と区別しにくいものもある。大きく2種類がある。

Ⅰ．やや浅めのもの（a）と深めのもの（b）とがあり，両方ともに口縁が直口とやや外反するものとを見る。

Ⅱ．口縁下でS字状に屈曲するものである。

調整　坏と全く同じである。外面ヘラ削りが口縁のすぐ下にまで及ぶものが稀にある。

「坩・壺」　器形　口縁が外反するものと直口するもの，頸部でのすぼまりが強いもの弱い



第9図　土師器全器形一覧①（1/10）

もの等若干の変化はあるが，球形の胴部，丸い底という点は共通する。

調整　口頸部は回転ナデ，胴部・底部は内面がナデ，外面がヘラ削りを行う。磨滅が著しい為詳細の不明な点が多い。

「鉢」　器形　精製（A）と粗製（B）とがある。この2種は基本的には異なった用途に供するものとしてつくられたと思われる。両方とも2類に分けうる。

AⅠ．口縁下がS字状に屈曲するもの。

Ⅱ．大きく外上方へ開口するもの。

BⅠ．浅めのもので多くは平底である。

Ⅱ．深めのもので，小型品は平底・丸底両方を見るが，やや大型になると丸底のみである。

調整　A類は坏・塊と全く同様の調整を示す。ただ，AⅡは外面の削りが縦方向となる。B類は口縁周辺は回転ナデであるが，胴部・底部については内面がナデかヘラ削り，同外面がナデか刷毛目を施す。外面にヘラ削りは見ない。

「有脚塊及び鉢」　これは高坏としてよい形状のものもあるが，胎土・成形にかなり異質な点があるので分けることとした。この器形のものが精製と粗製の中間的胎土を示している。調整は高坏に準ずるが，特に脚部のナデにおいて指押えの著しいものがあり，それらは手捏的外観を示している。

「脚台」　本来は・小型の甕か鉢に付くものである。口縁まで一部なりとも残存していたのは，僅か4例にすぎない。

器形　本体の底部から外反して開く形状のものと，やや踏んばるように内彎気味になるものとがある。前者が圧倒的に多い。脚台の高さは最大3.6cmである。明確な底部穿孔が3例ある。

調整　脚部自体は回転ナデで，天井部はナデというのが普通だが，内面に刷毛目をもつものと，しぼり痕の見られるものがある。

「蓋」　断定は出来ないが，僅か甕かに被せた蓋形の土器であろうと思われる破片が若干ながら出土している。摘みらしき部分4点，裾部4点があり，陣笠形のものは無いようである。ナデと刷毛目にて調整する。

「甕」　器形　大きく2類に分ける。

Ⅰ類

頸部ですぼまって口縁が外反するという普通に見られる形態である。大きさで大・中・小の3つに分けられるが，分類の常として中間的大きさのものも当然有り得る事で，厳密な区分ではない。完形に復しえた器形を参考として，全体の形状を以って判断するけれども，一応の目安は口径である。破片資料の多い中での判断は困難を伴うが，主観的ながらも全体の形

状を念頭においた。(第10図の器種一覧では甕II類，甑との図中のバランス(註8)より，大型品から先に並べた。)

①小型　口径11cm以下のもの(b)。稀に7.5cmに満たぬもの(a)があって，これは特殊的な小型品といえる。丸底であるが，若干平底がかるものもある。胴部の張りは少ない。口縁は僅かに外反する形態のものが多い。脚台の付くものが稀にある。鉢の深めのものと区別しにくいものもある。

②中型　口径11～17cmを普通の基準とするが，次の大型のより大きい口径を持ちながらも，器形としては大型にしえないものもある。これらは更に小（a．口径11～13cm)，中（b．同13～15cm)，大（c．同15～17cm，稀に18cm程のものあり)，特大（d，同19cm以上）の4種類には分けうる。底部は丸底だが，大甕と同様に平底風になるものが多い。胴部の張りは顕著でない。口縁はその形態に種々のものを見る。脚台を有するものがある。

③大型　完形品に復しえた物で見ると，口径17cm以上，胴径24cm以上，器高30cm以上を測る。ただ，稀に口径17cmを切るものもあるが，形態からみてどうしても大型としか考えられないものがある。底部はおよそ平らになっているが，完全に平底というのではない。平坦地に置いた際には，倒れはしないけれどもぐらつきながら立っている。底部から胴部へはやや開きながら，長胴の形状で肩部へと移行する。肩部は所謂いかり肩の張った形状が大半を占める。口頸部は大きなカーブを描きながら外反し，如意形に開く口縁となる。頸部のすぼまる形状と外反する口縁・長胴のあり方など，全体的に均整のとれたプロポーションと言える。

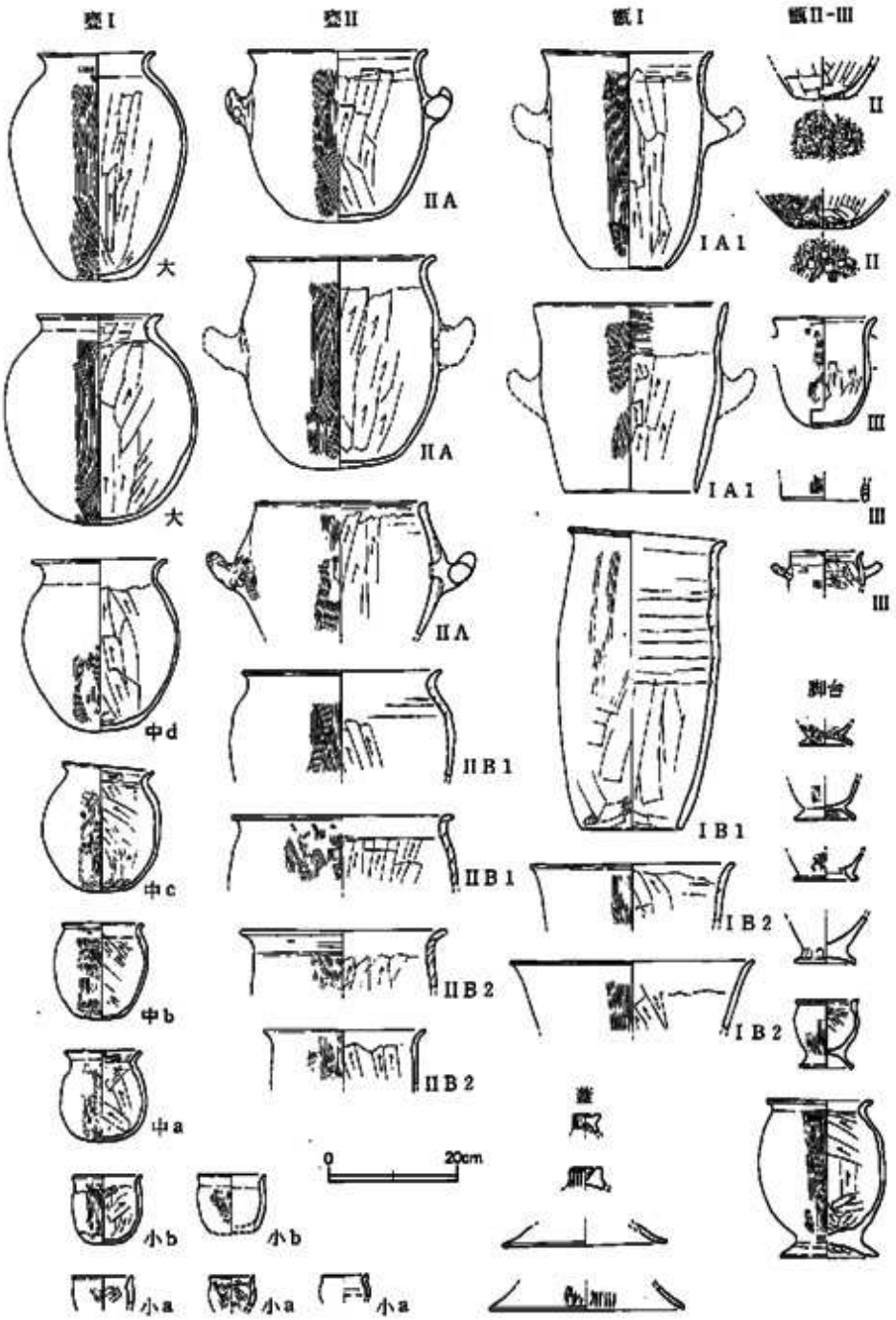
II類

普通甑の下に置く甕であろう。把手の付くIIAと，付かないIIBとに分(註9)ける。双方とも機能上，口径の大きいものを常とし，頸部のすぼまりは殆どなく，胴部の張りもあまりない。口径23cmをこえる。

IIA　口縁の外反度の強い物と弱い物とがある。

IIB　破片が多い為，IIAになる物（把手が付く）もかなり出てこよう。甑IAとも区別しにくい物がある。肩部に張りを持つIIB_1と持たないIIB_2がある。口径23cmを切る，やや小型の物が若干存す。

調整　I．II類ともに調整は全て同じである。外面は底部が刷毛目の後にナデ，胴部から頸部までは刷毛目，口頸部は回転ナデを施す。稀に胴部を削り上げるものもある。刷毛目の起点の判る例は全て上（口頸部）から下（底部）方向へなされている。化粧土をかけたらしい個体も稀にある。内面は底部がナデ，胴部は下から上への縦方向へラ削り，口頸部は回転ナデを行う。



第10図　土師器全器形一覧（1/10）

		頸部最下端に横方向ヘラ削りを施すものが，大型のものの一部に見られる。また，口頸部は横方向の刷毛目後に回転ナデを行うものが多い。
「甕」	器形	全体の形状により，3類をみる。
		I類
		把手の付く物（IA）と付かない物（IB）に分ける。
		IA－1．底部から丸味をもって（やや張りをもって）開くか，或は殆ど土管状になる。口縁の外反度は前者が大きく，後者は小さい。
		IA－2．底部から直線的にラッパ状に開く物。口縁の外反は殆どないのが多い。1・2とも把手は口縁下4～10cmの所につく。
		IB　把手のない事以外はIAと全く同じである。
		II類
		甕IIA類と同様の形状を示すと思われ，小円孔を多数穿ったものである。
		III類
		特殊な小型品である。
	調整	底部透し部分端部の内外を回転ナデする他は，甕と全く同様である。

註1．115号については北西辺になく，また南西辺の残存する壁面にも見られない事から，北東辺と推定したものである。

2．実測した土器は1,500個を越している。

3．中村浩『須恵器』考古学ライブラリー5　P45　ニューサイエンス社　1980

4．甑（I類）底部の透孔周辺の断面で，右下りの接合痕らしきものがある。これは底部から口縁まで円筒状に成形した後，倒立して透孔部分の整形にもう一段分の粘土紐を積み上げて（この時は輪積みとなる）接合したものかと思われる。この点についてはいま少し検討の余地がある。

5．4cmにも及ぶように見えるのは，多分その中間の接合痕が見えないものと思われるが，未だはっきりしない。

6．田中琢「畿内と東国　—古代土器生産の観点から—」　日本史研究90　1967
　またこの中で，刻痕の存否を問題とされているが，立野遺跡C地区に於いては気付いただけでも20数点の土器・支脚に刻痕があった。ことに，土製支脚に多数の刻痕を見るものについては，その背後に別なる意味付けを考えるべきであろう。

7．この孔の用途については，1．装飾的なもの，2．実用的なもの —例えば，この孔に棒を留め置いて本体を支えるなど—，3．マジカルなもの等が考えられるけれども未だはっきりしない。

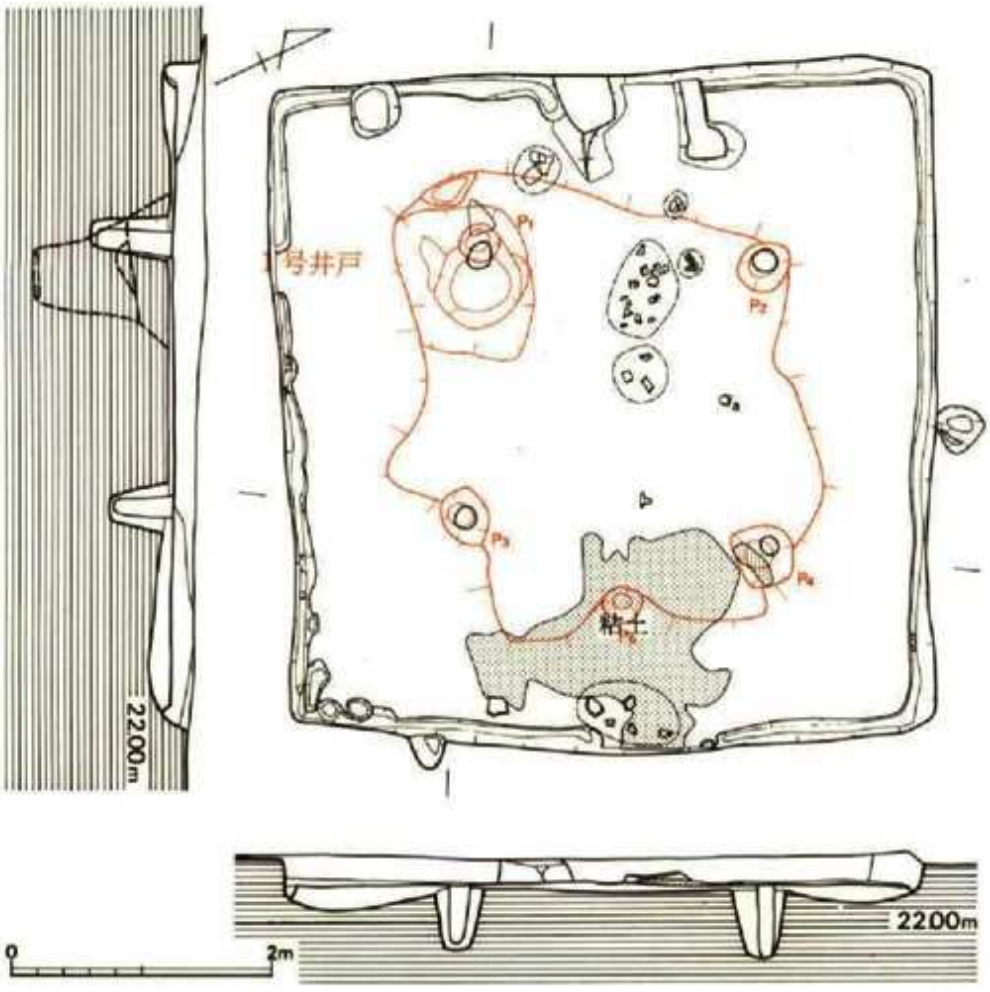
8．カマド内での支脚に転用されるのは，小型のbと中型のa・bである。

9．60号住居跡のカマド内に遺存した炊飯具のセットを見ると，甑の下に甕I類の大型品が置かれた状態であった。この様な例もあるのか特殊事例なのか現時点では不明。　（伊崎）

1．竪穴住居跡

21号住居跡　（図版7，第11図）

C地区西南端に位置し単独で営まれている住居跡である。一部現代溝に切られてはいるものの，主に黒褐色土の埋土であった。平面形態・規模や主柱穴の位置は一般的なものであり，北西辺中央部の壁際にカマドが付設されている。壁小溝はカマド部とカマド対面以外に一ケ所途切れてはいるものの巡っている。カマド対面には灰色系粘土がやや広範囲に潰れた様相を呈して散布している。床面は略水平に成形され，主柱間エリアがかなり硬化していた。床面下層には壁に沿って掘り込みが存し，P_3～P_4間中央でP_5も検出した。P_1に切られた井戸1も存した。



第11図　21号住居跡実測図（1/60）

カマド　(第12図)残存状態はあまり良くないく支脚も存しなかった。火床面は51×67cmを測りやや窪む程度である。

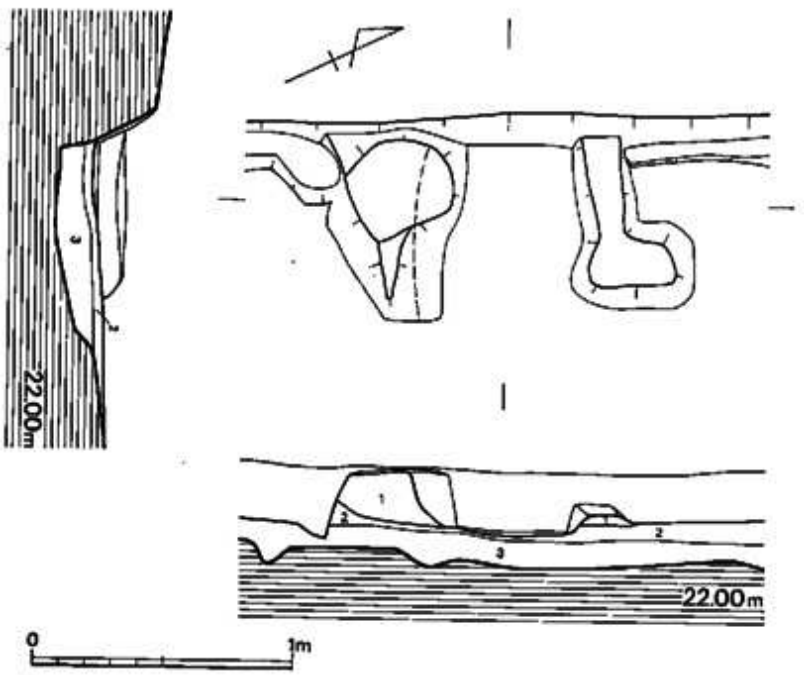
出土遺物　(図版65，第13図)

出土量はやや多い方である。土錘と若干の不明土製品が埋土中より出土した。

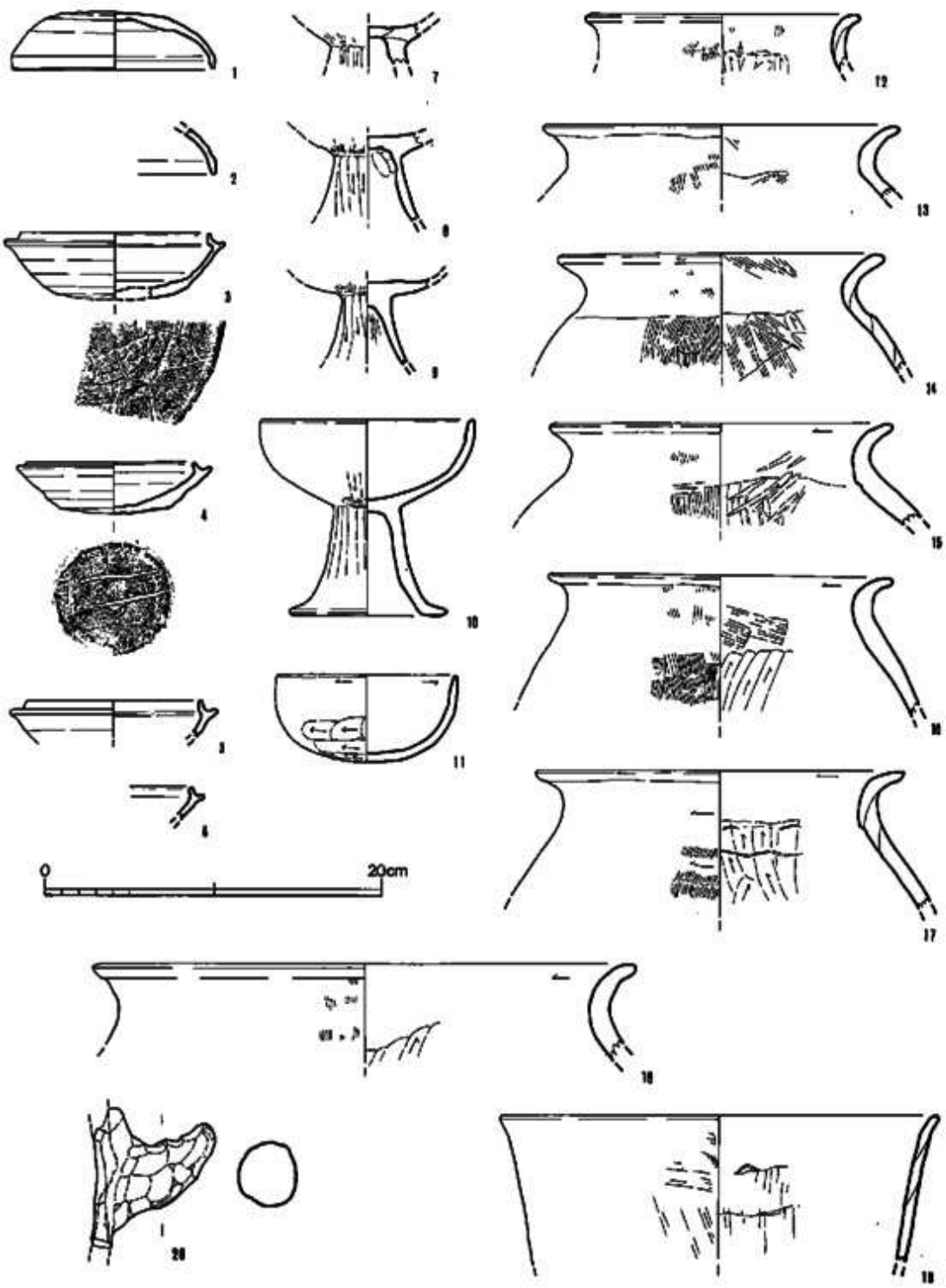
須恵器　(1～6)　1・3と4がカマド対面粘土付近よりの出土で，地は埋土中である。若干時期が異なる3と4が同一地点より出土したことは，埋没状態を考える上で問題となるであろう。

なお，埋土中より出土した坏身片が22号住居跡埋土中より出土したのと接合した。

土師器　(7～19)　甕類の大半が中～大型で12はカマド対面粘土付近より出土し，他は埋土中より出土した。甑は19が主柱間エリア床面上の出土である。7・8と10は丹塗りの精良な高坏である。8は主柱間エリア床面上で出土したもので，廃棄時に使用された可能性を有する。11は完形の精良な埦で主柱穴より出土したもので築造時のものか。　(武田)



第12図　21号住居跡カマド実測図 (1/30)



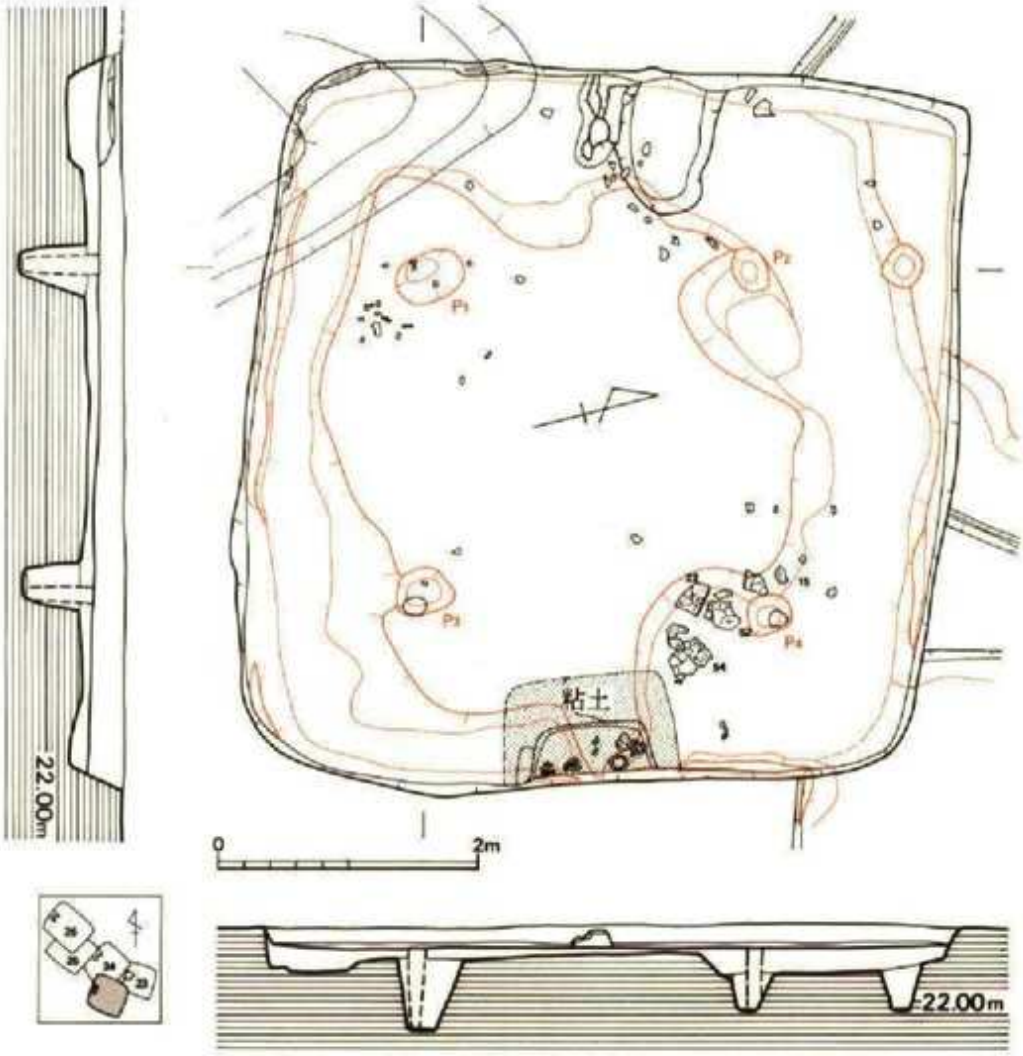
第13図　21号住居跡出土土器実測図（1/4）

22号住居跡　（図版8，第14図）

23・24号住居跡を切って営まれ，21号住居跡と主軸をほぼ同じくしている。西側コーナー付近は近時の溝により攪乱を受けていた。P_3・P_4の2主柱は径15cm程の柱痕を確認した。壁小溝はごく一部に見られるのみである。床下層の中央土壙は見られない。

カマド対面土壙　（第15図）　黄色砂質の粘土が略長方形状に広がり，その下に土壙が見られた。95×40cmの長方形プランである。土壙中には土玉と須恵器坏身が完形で，土師器の高坏・坏等が潰れた状態で出土した。

カマド　（第16図）　左袖の一部が残存するのみで，右袖から火床にかけては後時のピットに

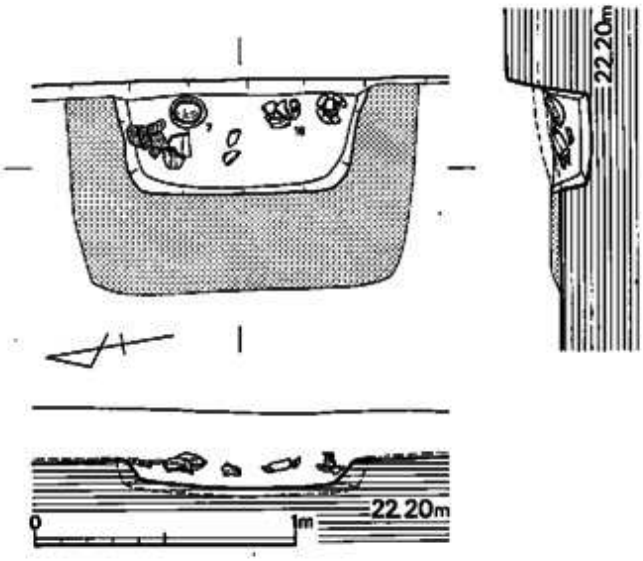


第14図　22号住居跡実測図（1/60）

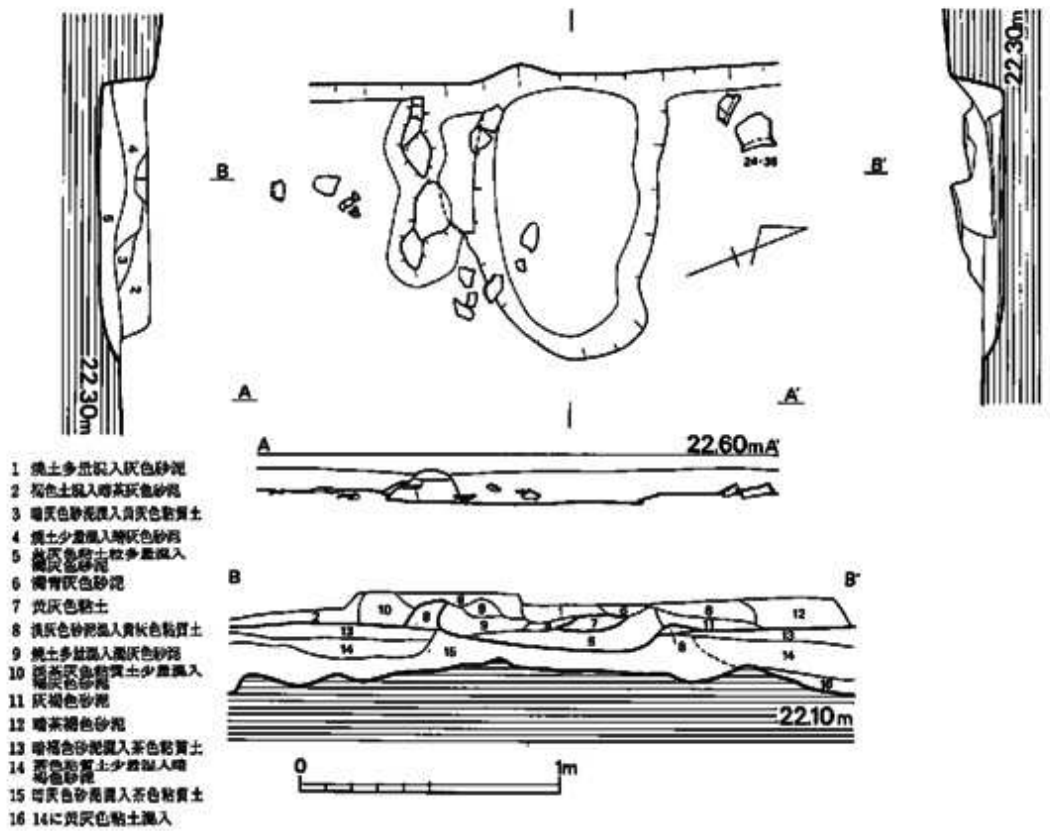
より削平されている。周辺に若干の土師器が散乱していた。

出土遺物　(図版65～68，第17～20図)

かなりの量が出土したが，大半は埋土中，それも主柱間エリアの上面からである。P_4付近では床面に密着して潰れた状態で甕・甑が出土している。北辺中央付近床面の手捏土器，カマド対面土壙内の土玉，その南隣埋土中出土の土製模造鏡，それに把手状・棒状の土製品等については後述する。



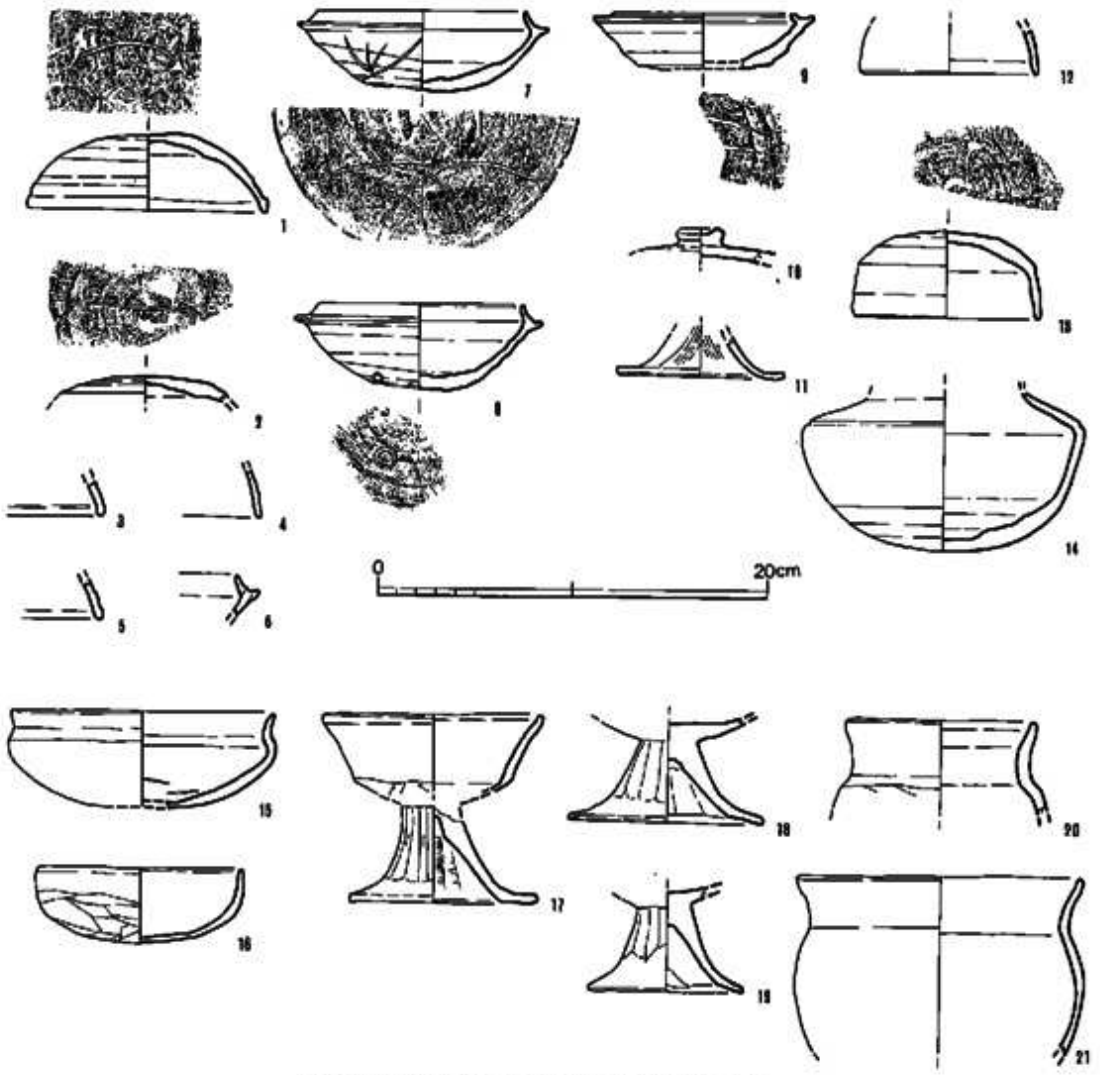
第15図　22号住居跡カマド対面土壙実測図 (1/30)



第16図　22号住居跡カマド実測図 (1/30)

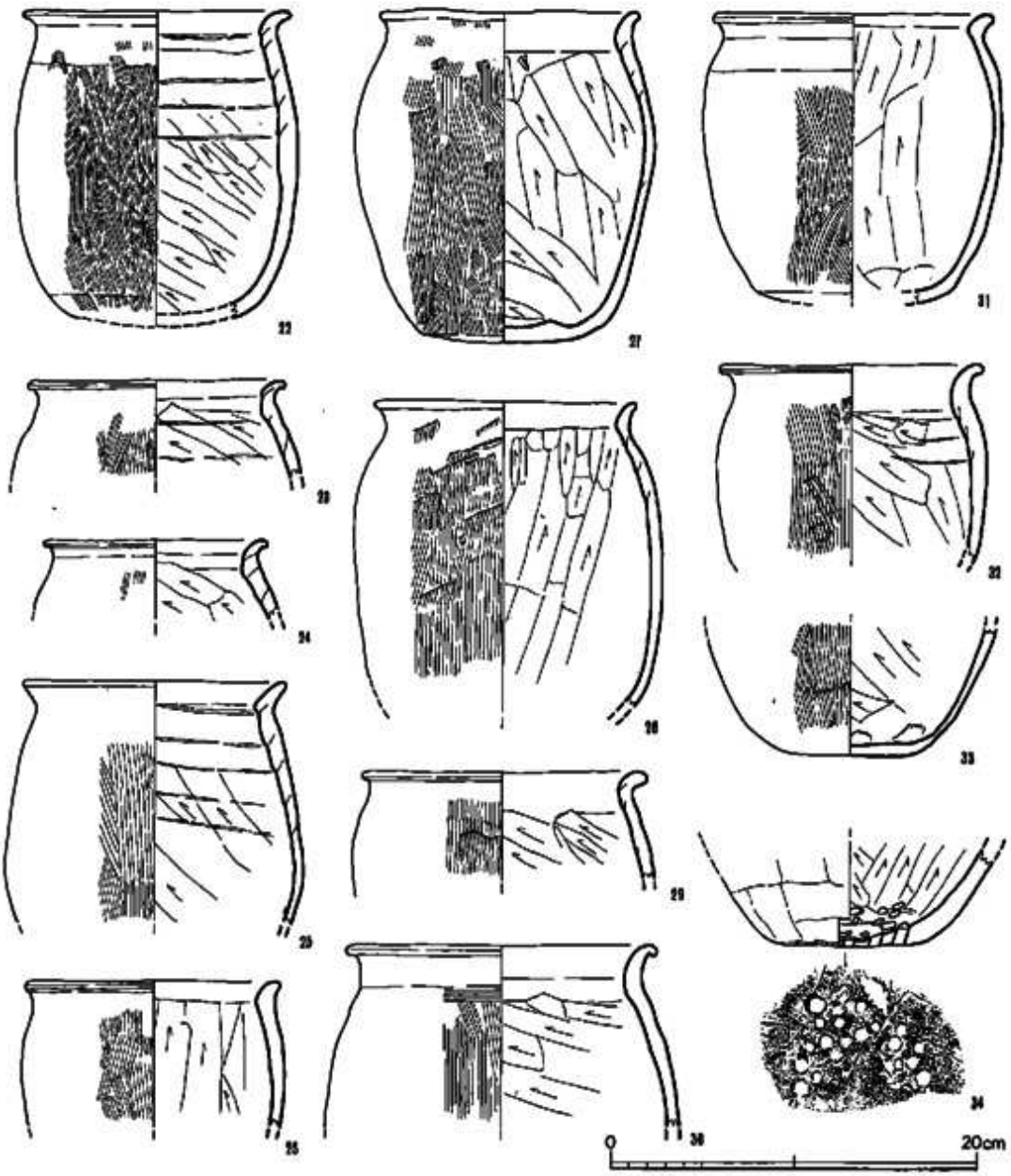
須恵器　(1～14)　12・13は坩蓋であろう。7はカマド対面土壙で，他は埋土中に存した。なお，坏身の1点が21号住居跡のそれと，また別の1点が27号・50号住居跡出土のものと，更にもう1点が25号住居跡出土品と接合した（B－4参照)。

土師器　(15～55)　15～21は精良品であ。甕は小型はほとんどなく，中～大型が大半を占める。34は数少ない甑II類の例であるが，円孔には大小2種類があり，小さい孔には貫通しないものもある。24は2次火熱を受けて赤変しており，支脚として利用されていたものか。16がカマド対面土壙，15・22・23・50・52が床面，24・35がカマド右側の出土である。なお，籾痕のある土器を2点確認した。

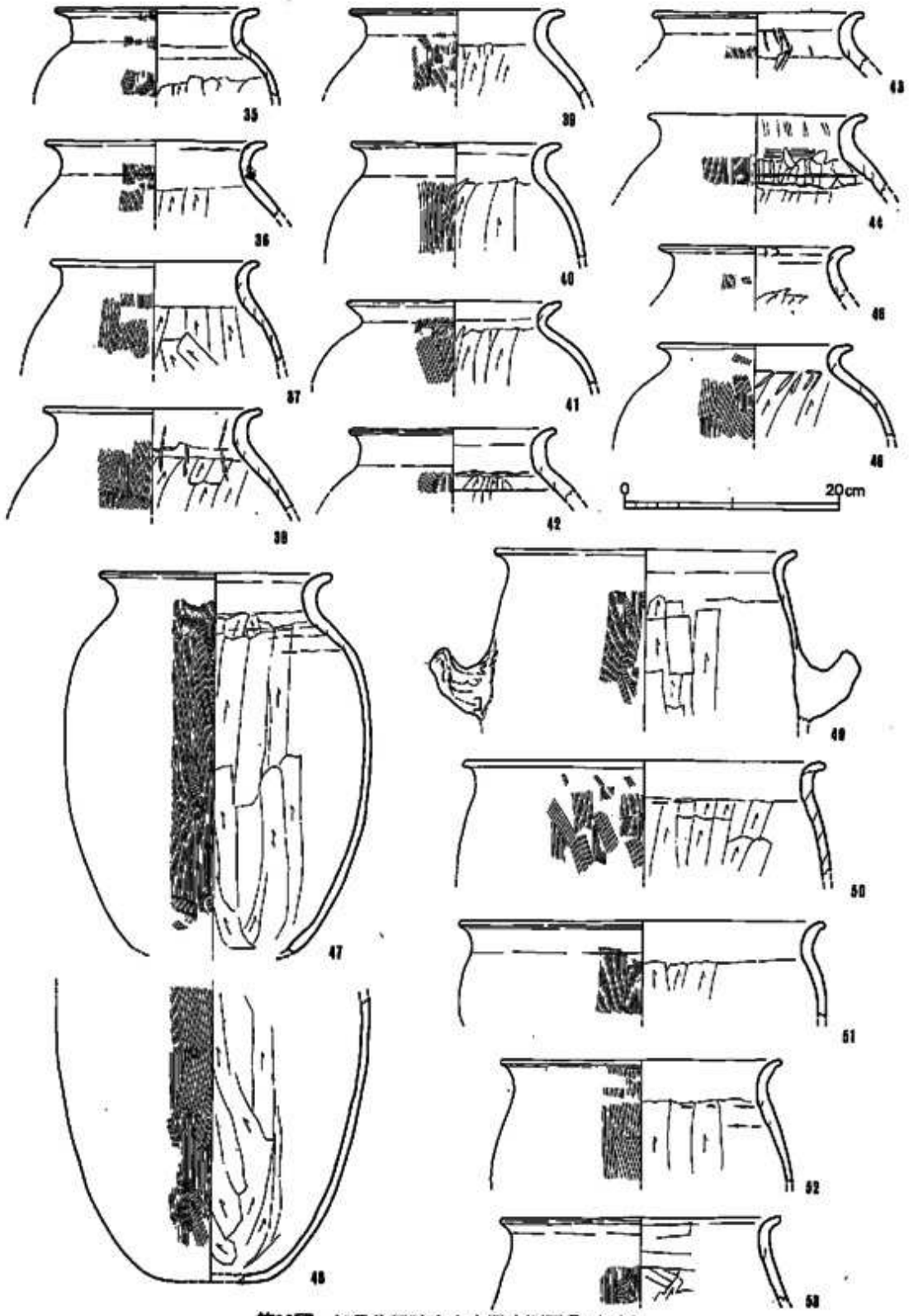


第17図　22号住居跡出土土器実測図①（1/4)

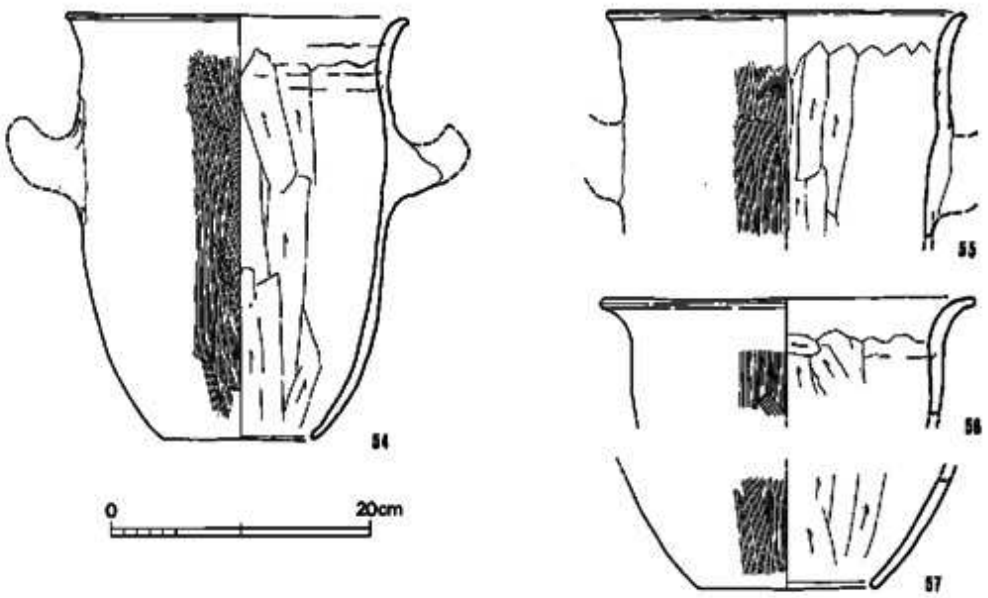
この住居のカマド対面土壙内土器は，住居設営時に置かれたまま残っているものと思われ，また，P_4周辺の土器は廃棄時に置去りにしたと考えられる。住居廃棄跡は凹みとなった所がゴミ捨て場として利用されたのであろう。　（伊崎）



第18図　22号住居跡出土土器実測図②（1/4）

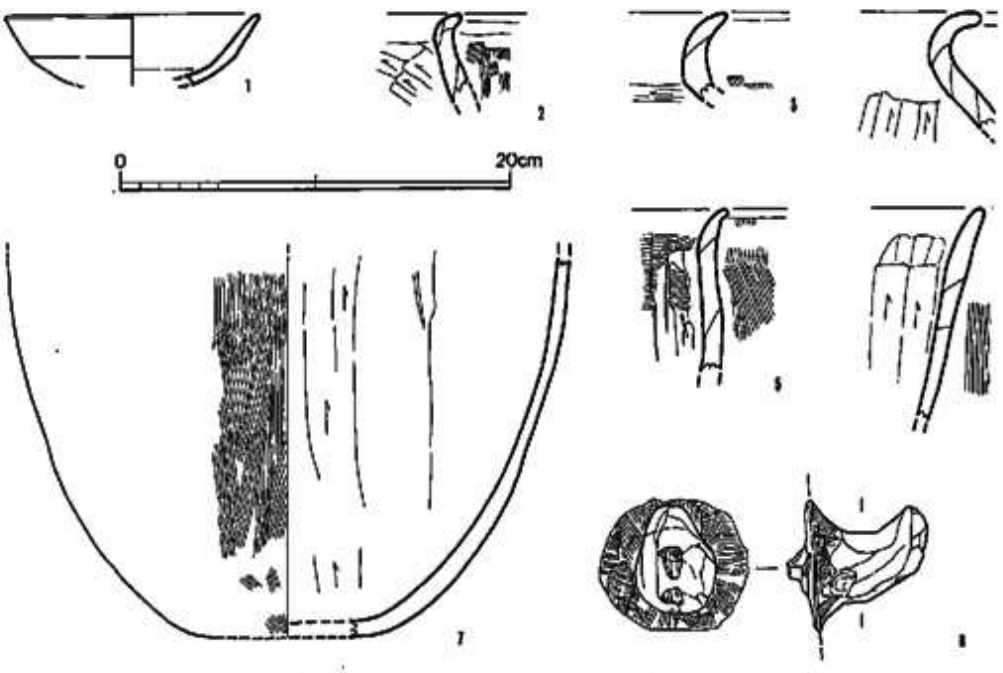


第19図　22号住居跡出土土器実測図③ (1/6)



第20図　22号住居跡出土土器実測図④（1/6）

23号住居跡　（図版8・9，第22図）



第21図　23号住居跡出土土器実測図（1/4）

22号住居跡の東隣にあり，22・24号住居跡に一部を切られている。壁下に斜位に流入した土を除けば，他はほぼ水平の土層を示す。壁小溝は北壁と東壁の一部にのみある。カマド対面には粘土が床面にくっついて広がっていた。下層の中央土壙は見ない。

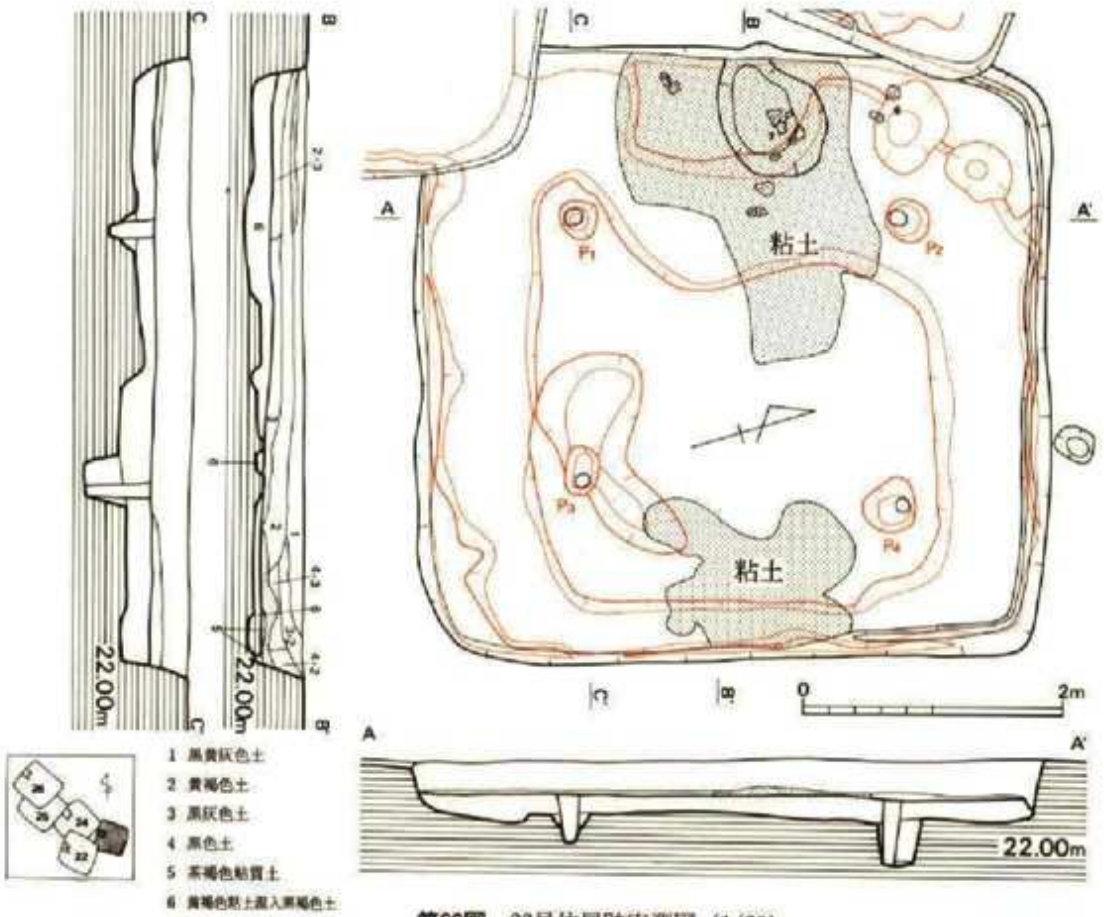
カマド　西壁中央の上層に粘土の広がりが見られたが，カマド本体は完全に潰れた状態であった。周辺に若干の土器片を見るのみである。

出土遺物　（図版68，第21図）

カマド周辺に若干存したのみで，埋土中にもごく僅かしかなかった。須恵器はカメ片が2点と坏片が1点出土したが，その坏片はP1050出土のものと接合した。これはB－4に図示する。埋土中出土の砥石1と土製模造鏡，不明土製品について別述する。

土師器　（1～8）　1は高坏になろう。屈折の度合いは弱い。8の把手は本体とさし込む突起がある。また孔を2個有する。6・7がカマド周辺からの出土である。

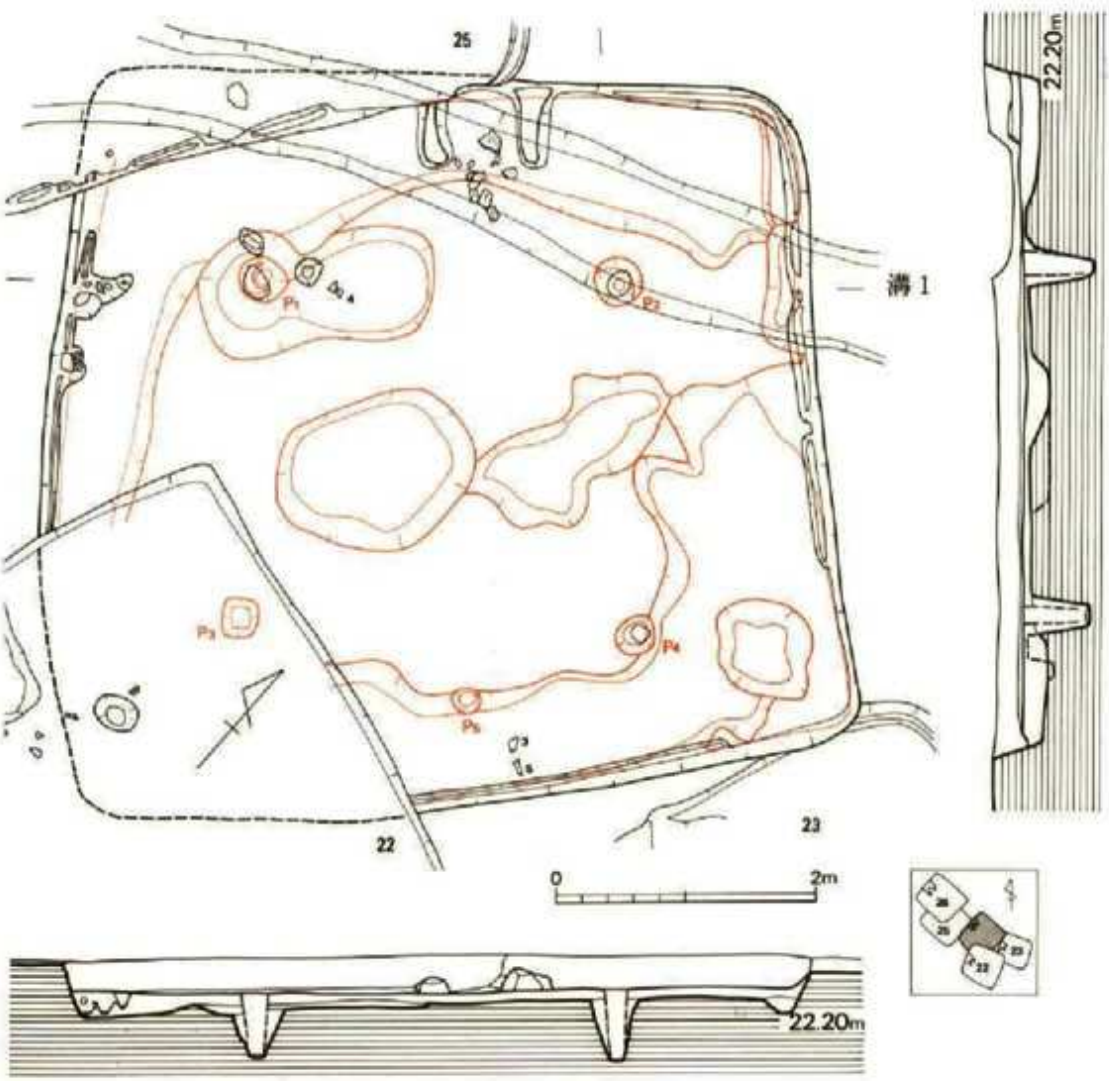
なお，籾痕のある土器片1（甕）を確認した。　（伊崎）



第22図　23号住居跡実測図（1/60）

24号住居跡　（図版８，第23図）

22～26号住居跡の５軒の中で略中央にあり，23号住居跡を切って，22・25号住居跡と溝１に切られるが残存する壁面と下層のあり方とで全形は復原出来る。それはやや台形気味の平面形となる。黄色っぽい黒色土を埋土としていた。壁小溝は途切れながらも全周壁下に存する。カマド対面の粘土はなかった。床下層には中央土壙と P_5 がある。

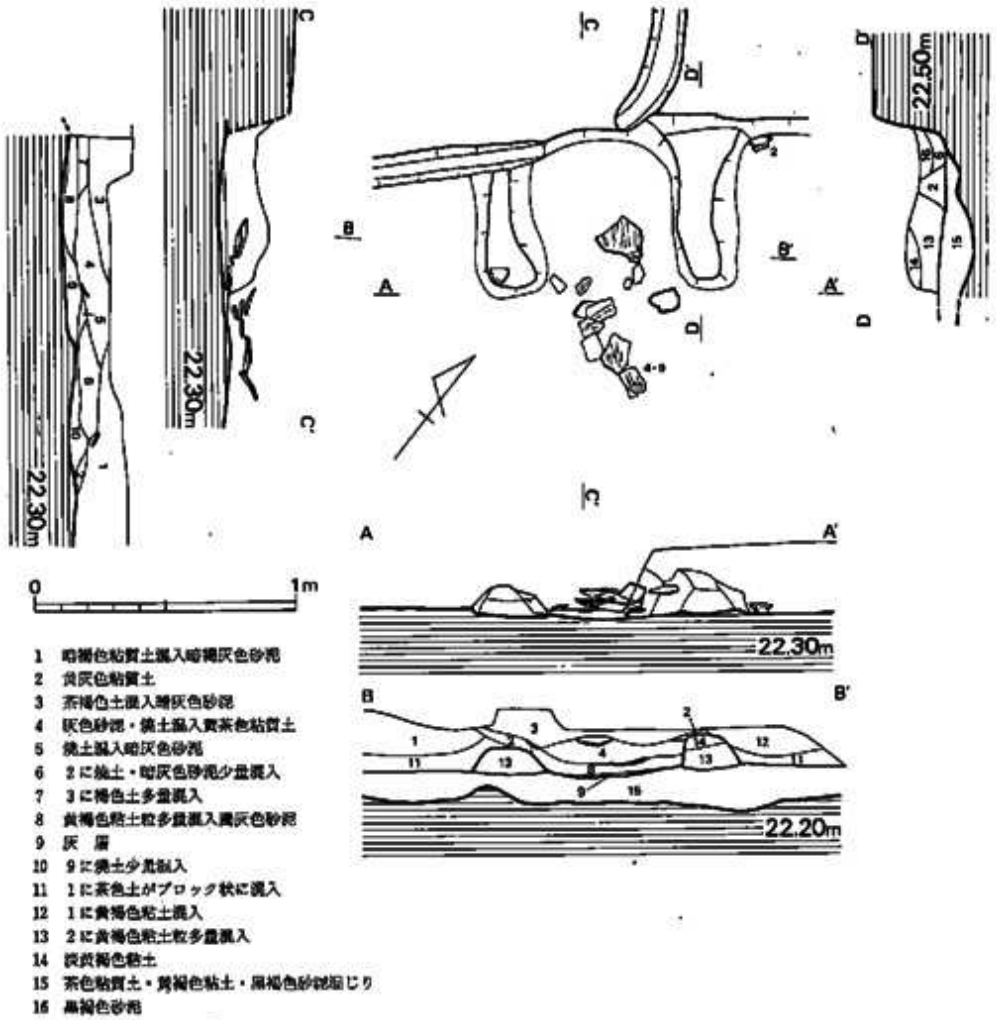


第23図　24号住居跡実測図（1/60）

カマド　（図版９，第24図）　この真上を溝１が通り，一部を25号住居跡に切られるが，両袖とも残存していた。焚口幅51cmでその付近に甕の破片が散乱していた。

出土遺物　（図版68，第25図）

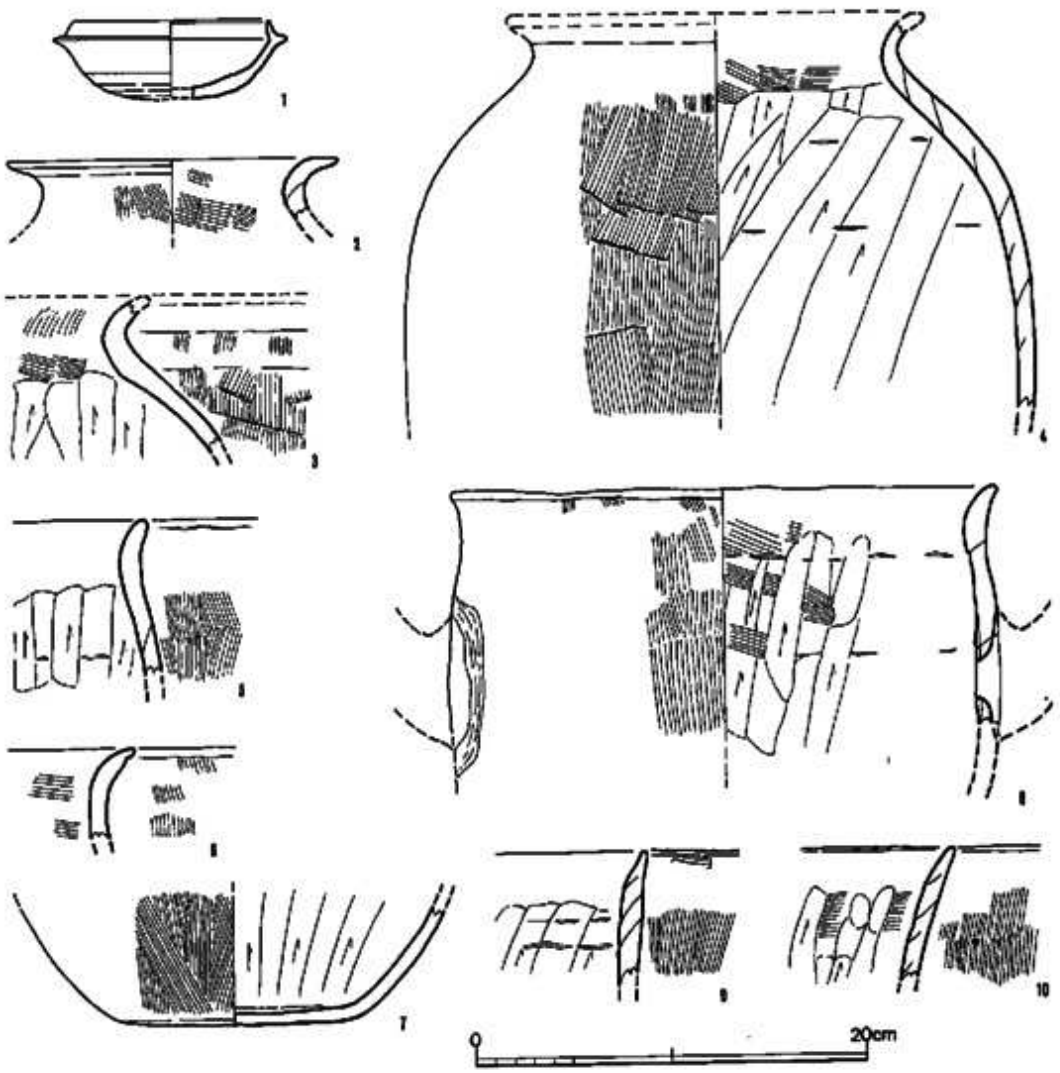
土器量は極めて少なく，土器以外の遺物としては床下層から手捏土器１個があったみのである。



第24図　24号住居跡カマド実測図（1/30）

須恵器　（1）　床下層出土の，この1点のみである。

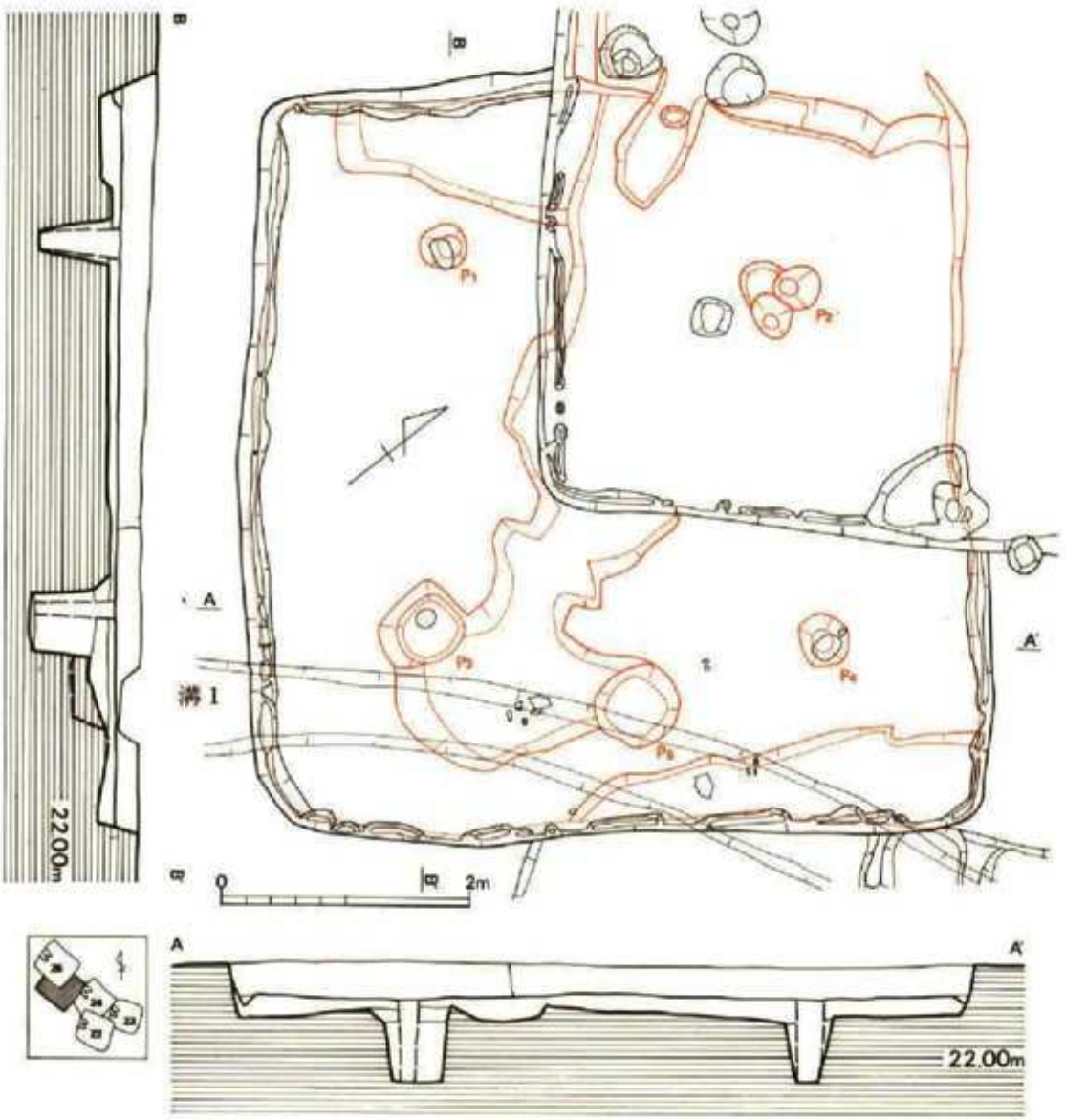
土師器　（2～10）　大型の甕と甑のみである。6が埋土中である外は床面から出土した。8の甑は把手を欠失するが，ソケット式のさし込みの孔が見えている。　（伊崎）



第25図　24号住居跡出土土器実測図（1/4）

25号住居跡　（図版8，第26・27図）

24号住居跡を切り，26号住居跡と溝1とに切られている。26号住居跡に切られた北西辺にカマドを持っていたのであろう。床面はガチガチにしまっていた。壁小溝は所々に小ピットを配する形で全周する。床下層の掘込みは典型的パターンを示さない。



第26図　25号住居跡実測図（1/60）

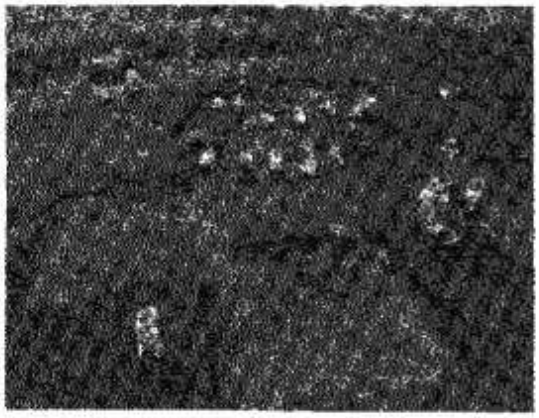
出土遺物　(第28図)

量は少ない。床面出土の紡錘車，やや浮いて出土した鉄器，手捏土器は別述する。

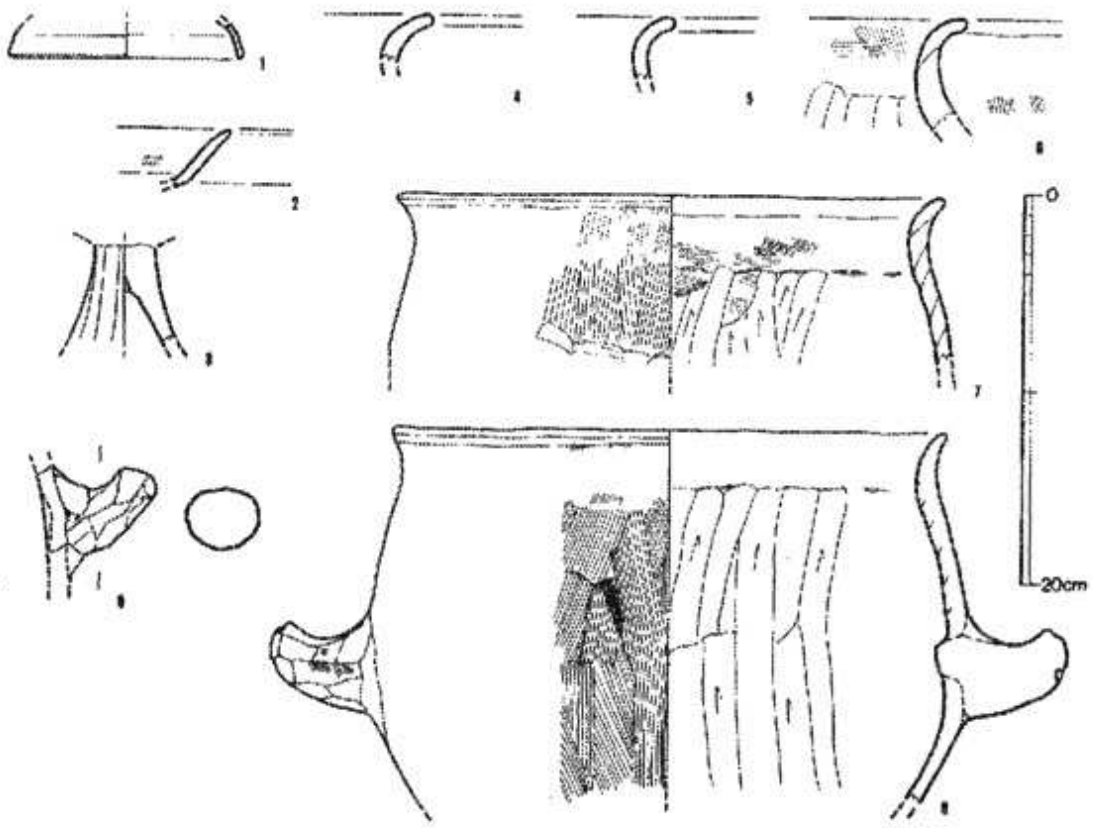
須恵器　(1)　坏蓋片1点の他に甕片1をみるのみであった。

土師器　(2～8)　2・3は精製の高坏である。8はP_8付近の床面から出土した。

(伊崎)



第27図　調査中スナップ②

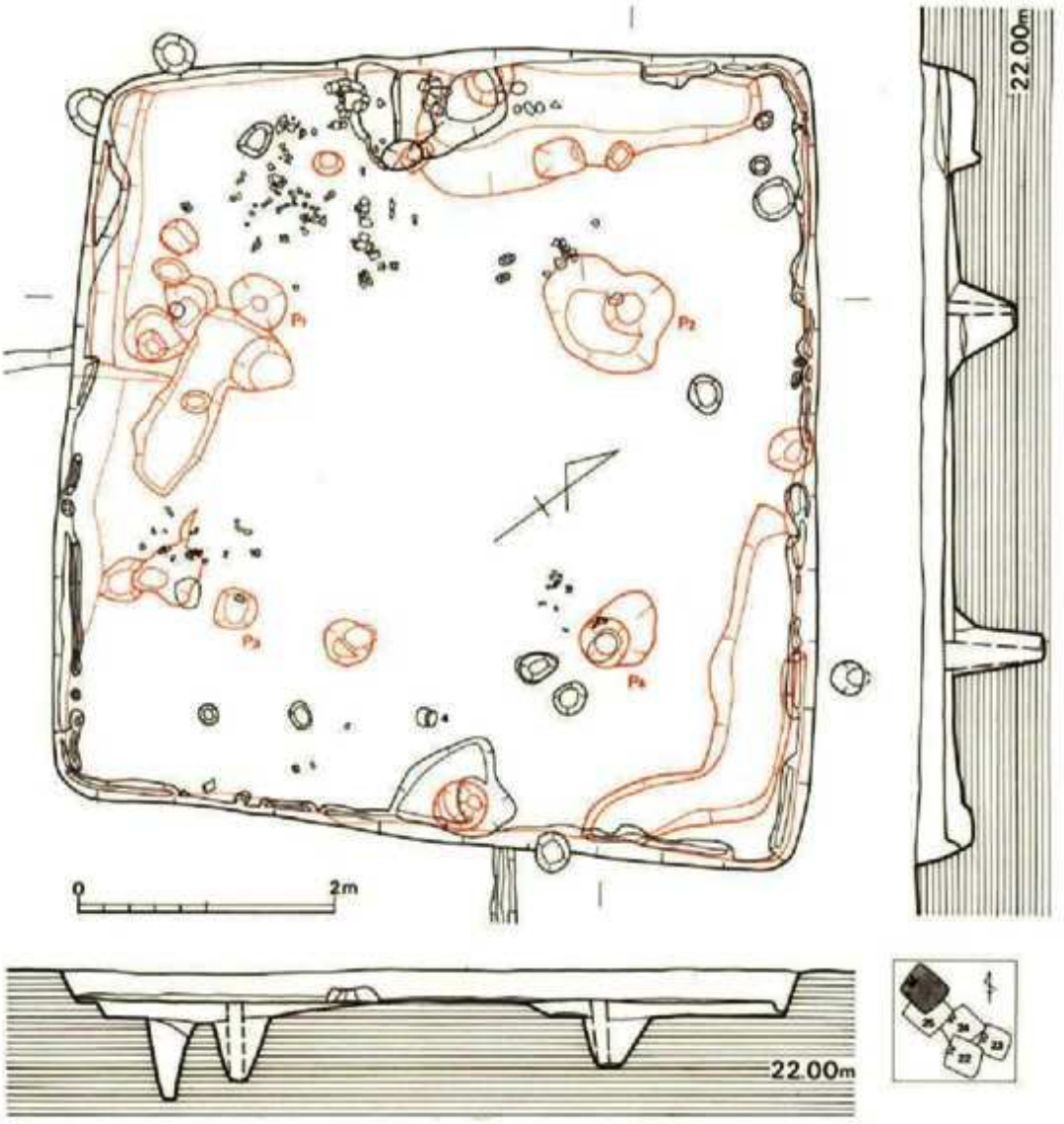


第28図　25号住居跡出土土器実測図 (1/4)

26号住居跡　（図版8・10，第29図）

25号住居跡を切って営まれた大型と言える住居である。黒色土及び淡黒色土を埋土としていた。P_2・P_4については柱痕を確認した。抜き去られた様子は示していない。カマド対面に粘土は無いが，土壙がある。床下層の中央土壙はみない。

カマド対面土壙　床面より40cm強の深さを測る。この住居が使用されていた時に，この土壙自体も機能していたか否かは不明である。この中から手捏土器と須恵器2点が出土し，その須恵



第29図　26号住居跡実測図（1/60）

器のうち1片はカマド右側から出土したもの及び22号住居跡埋土中出土のものと接合した。

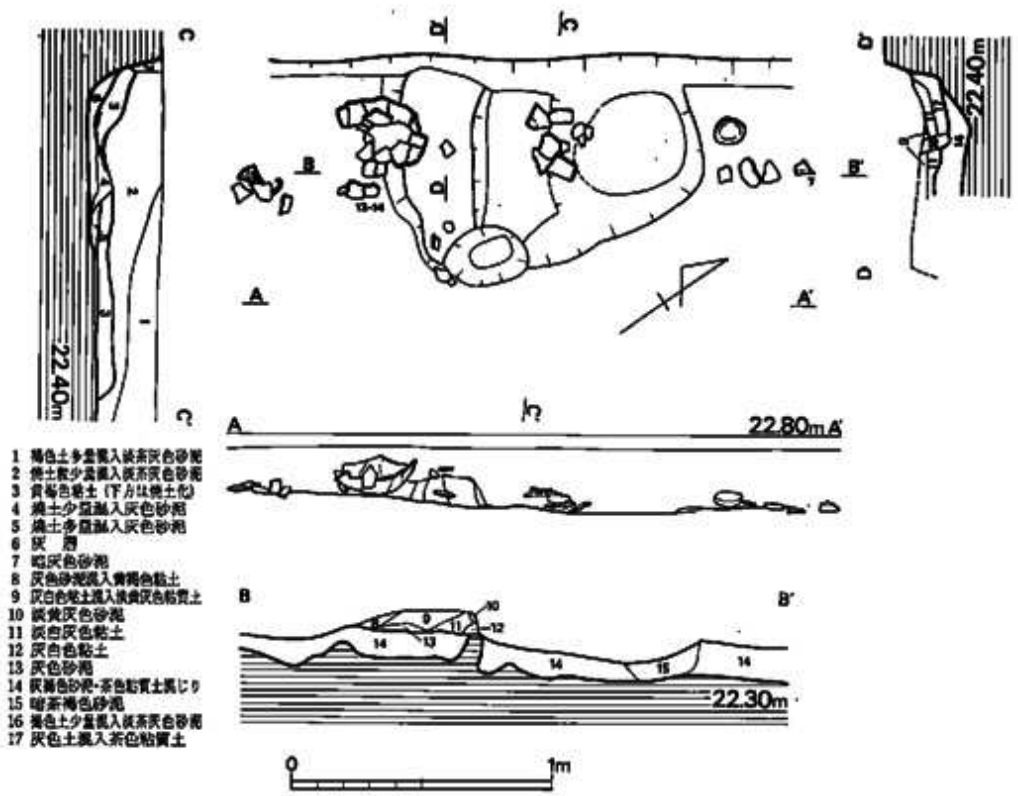
カマド　(第30図)　左袖のみ残存する。丁度22号住居跡カマドの遺存状態とよく似ている。カマド左袖傍には大型甕の下半分が潰れてはいるものの，カマドに寄りかかるように出土した。本来据え置かれていたものだろう。

出土遺物　(図版68・69，第31図)

カマド内外とP_1の周辺，そしてP_2の周辺で床面にくっついて土器が出土した。しかし，埋土中と合わせてもあまり土器量は多くない。カマド対面土壙の北隅・壁小溝上面埋土中に鉄器片が存したが，調査中に紛失した。カマド対面土壙内と埋土中の手捏土器については後述する。

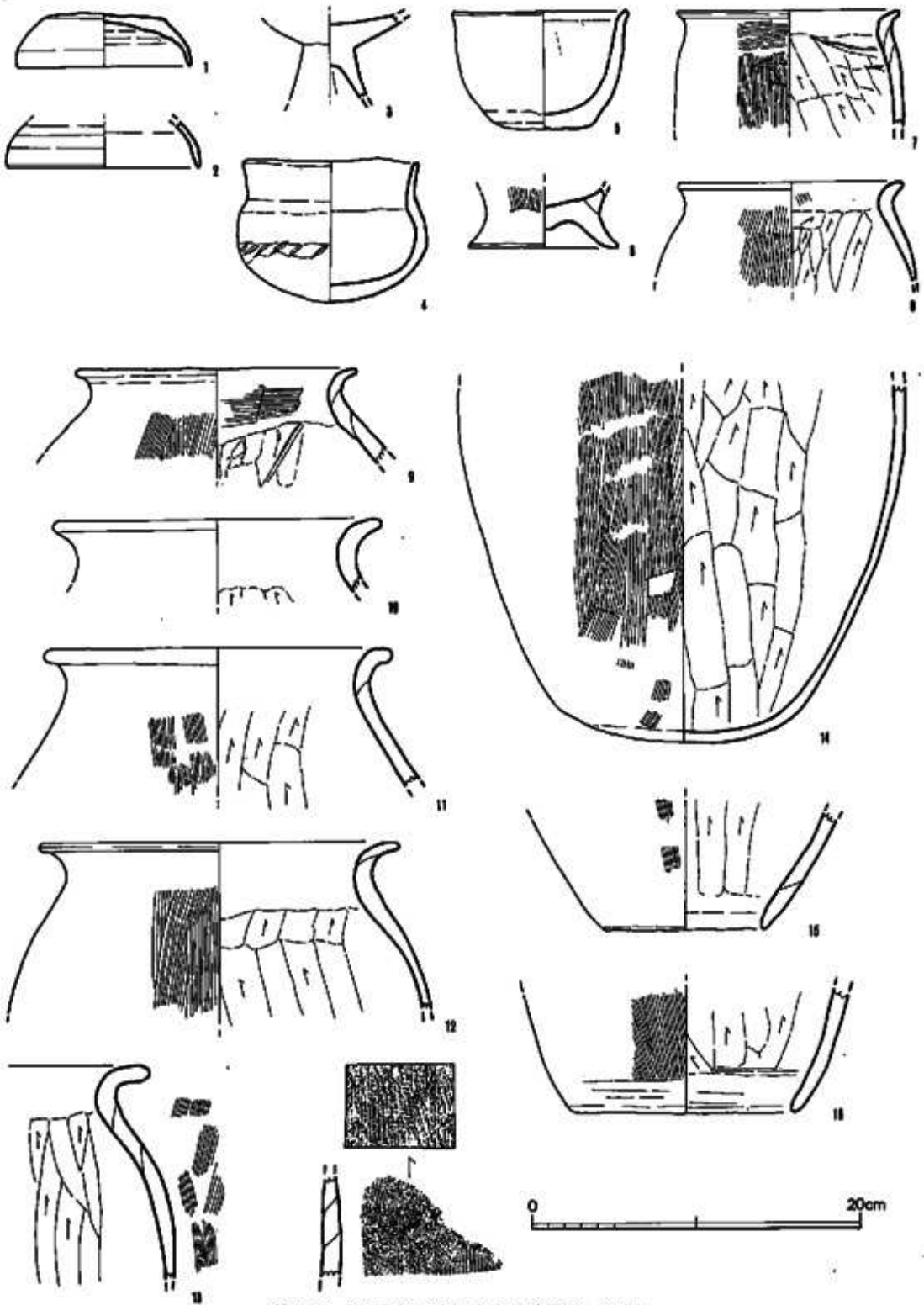
須恵器　(1・2)　1はカマド対面土壙内の出土である。埋土中の壺片で32号住居跡出土品と接合したもの及び先に述べた坏身についてはB－4で触れる。他に甕片が3点ある。

土師器　(3～17)　3・4は精製である。4はカマド対面土壙の西側で床面に窪みをつくって据え置かれたかの様な状態で出土した。7・13・14・16はカマド内外にあり，13・14は左袖横に置かれた甕である。9～12・15は床面に存した。17は埋土中出土の破片であるが，外面に布目痕が存する。わりと粗い織目で経糸・緯糸の間隔が2㎜位ある。　(伊崎)



1 褐色土多量混入淡茶灰色砂質
2 焼土粒少量混入淡茶灰色砂質
3 青褐色粘土（下方は焼土化）
4 焼土少量混入灰色砂質
5 焼土多量混入灰色砂質
6 灰　層
7 暗灰色砂質
8 灰色砂質混入青褐色粘土
9 灰白色粘土混入淡黄灰色粘質土
10 淡黄灰色砂質
11 淡白灰色粘土
12 灰白色粘土
13 灰色砂質
14 灰褐色砂礫・茶色粘質土混じり
15 暗茶褐色砂質
16 褐色土少量混入淡茶灰色砂質
17 灰色土混入茶色粘質土

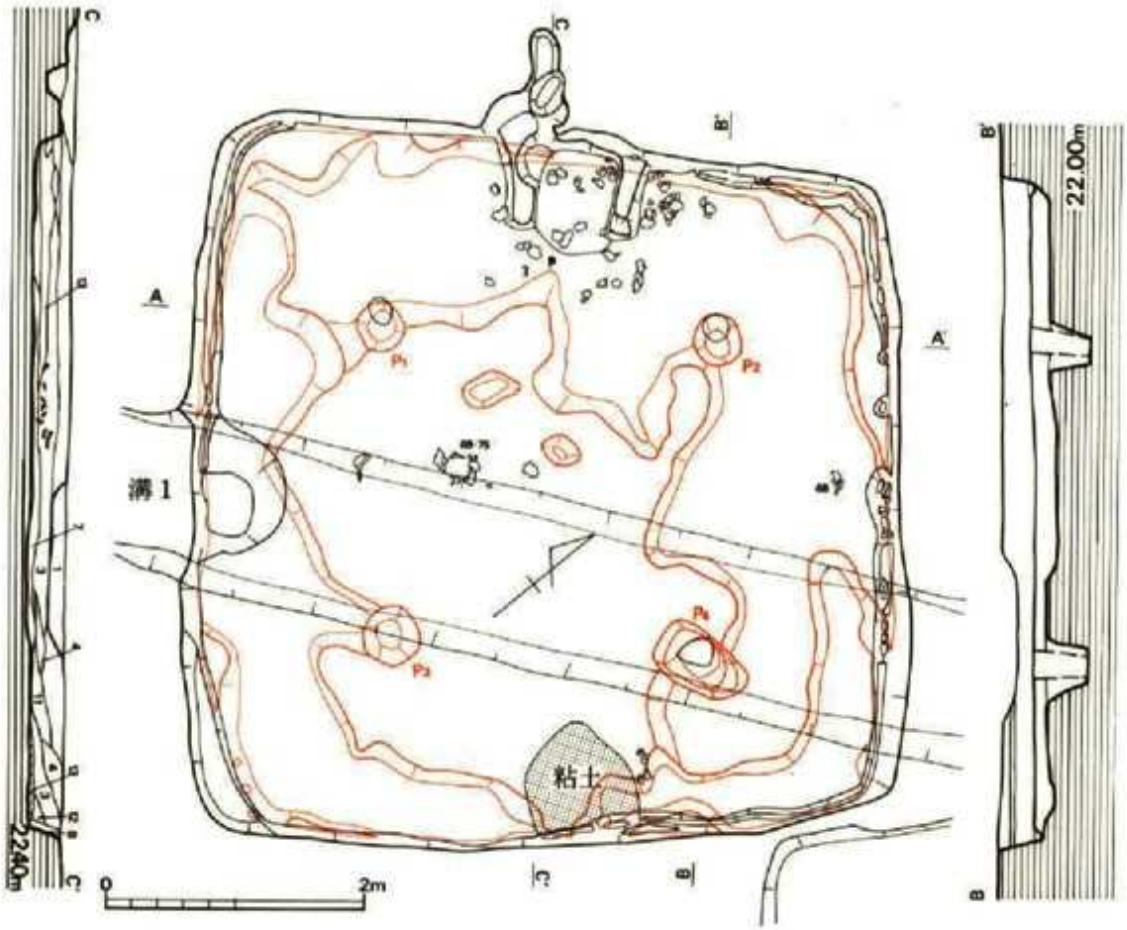
第30図　26号住居跡カマド実測図 (1/30)

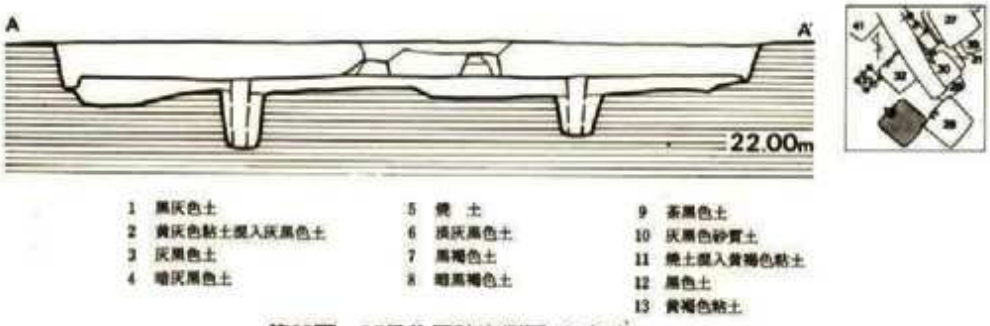


第31図　26号住居跡出土土器実測図（1/4）

27号住居跡　（図版11・12，第32図）

28号住居跡と東隅で接するかの如くであるが，切合いはない。溝1が，上面を略東西に横切っている。検出面から10cmも掘り進めないうちに，大量の土器が出土しはじめ，土よりも土器片の方が多い位にかなりの量が存した。この住居が廃絶された後の窪みに投棄されたものである。





1 黒灰色土
2 黄灰色粘土混入灰黒色土
3 灰黒色土
4 暗灰黒色土
5 焼　土
6 淡灰黒色土
7 黒褐色土
8 暗黒褐色土
9 茶黒色土
10 灰黒色砂質土
11 焼土混入黄褐色粘土
12 黒色土
13 黄褐色粘土

第32図　27号住居跡実測図（1/60）

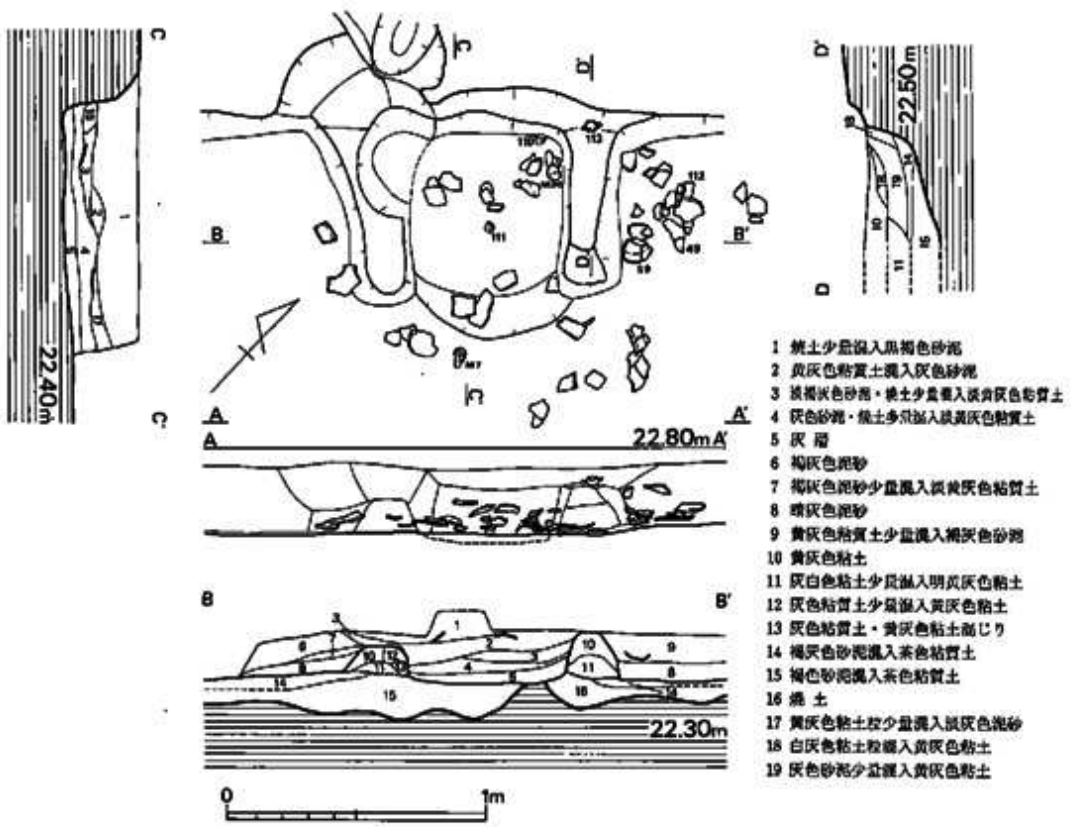
床面のすぐ上から大量に出土しているので，住居廃絶時に上屋も片付けられたのであろう。投棄されていたのは土器ばかりではなく，一部に焼土も見られた。カマド対面にはあまり広くない範囲で粘土が見られた。また，南壁中央付近に土壙が存し不明土製品が出土した。

カマド　(図版12，第33図)　このカマドを特徴づけるものは何といってもその内外出土の祭祀関連の遺物である。焚口幅55cm，奥行65cm程で，焚口前面に不明土製品があり，他に手捏土器が火床中央部と最奥部に各1個，右袖上に1個，右袖右側に1個存した。住居廃棄時に何らかの祭祀（まつり）が行われたことは確実であり，この点については総括で再度触れる。

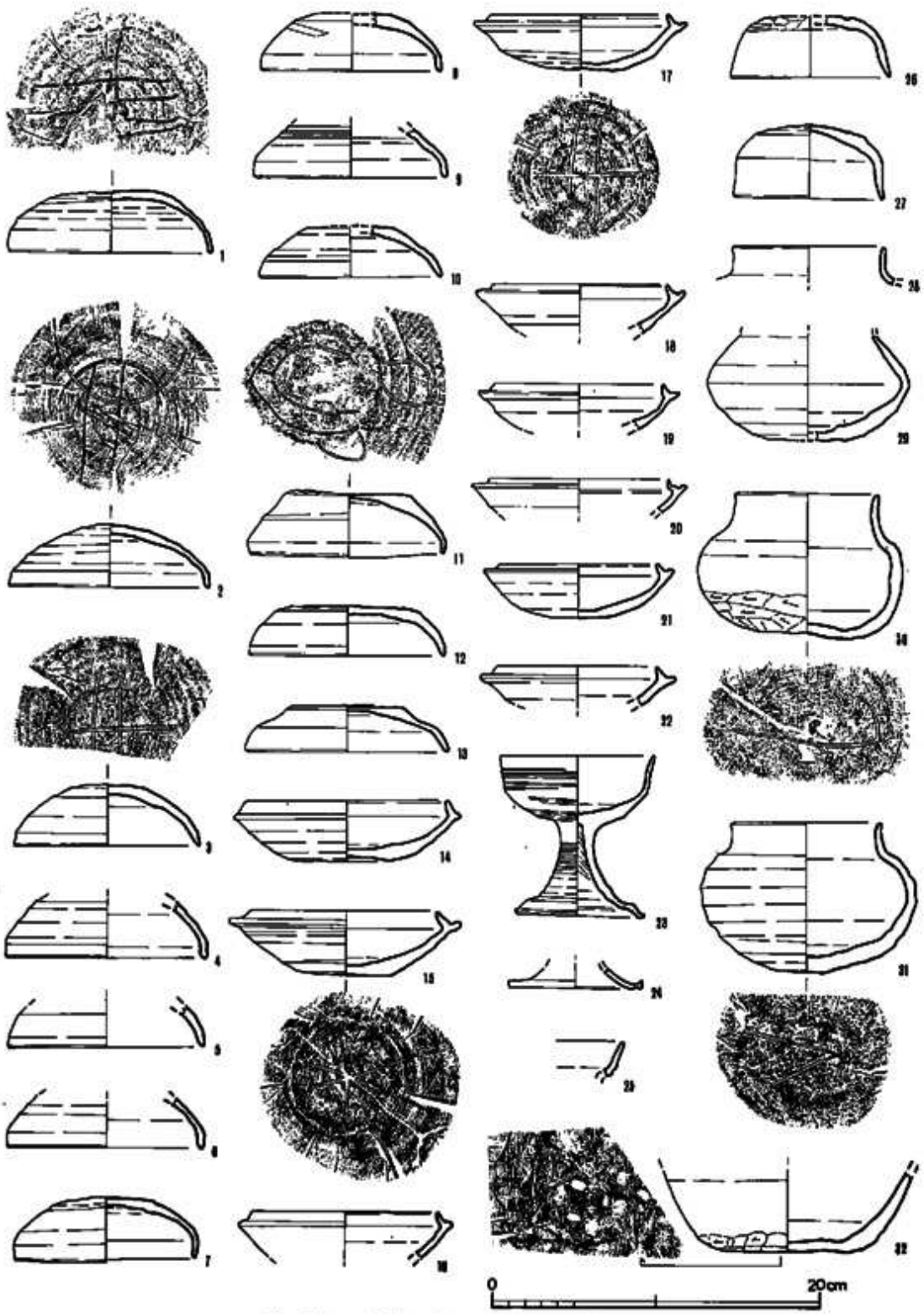
出土遺物　(図版69～75，第34～40図)

既述のように埋土中から大量の土器が出土したが，その他に鉄器(鋤先1，鏃片2)，砥石1，模造鏡，不明土製品，手捏土器2も存した。手捏土器，不明土製品がカマド周辺から出土したことも前述の通りである。

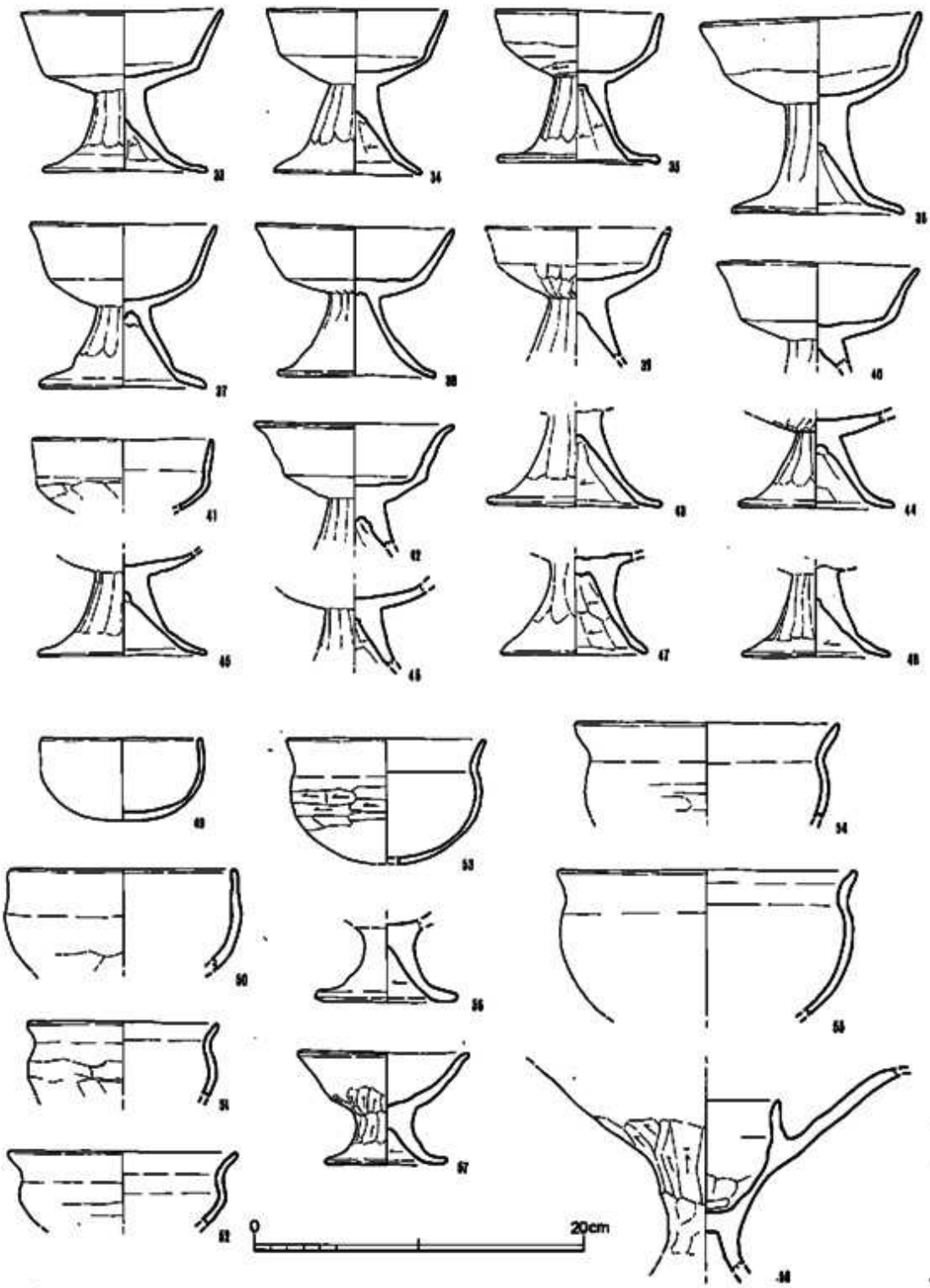
須恵器　(1～32)　図示した以外に甕・横瓶の破片も出土している。25は聴か壺になろう。30・32の底部は静止ヘラ削りを施す。14・30は焼成があまい。24はカマド左から出土した。他



第33図　27号住居跡カマド実測図 (1/30)



第34図　27号住居跡出土土器実測図①（1/4）

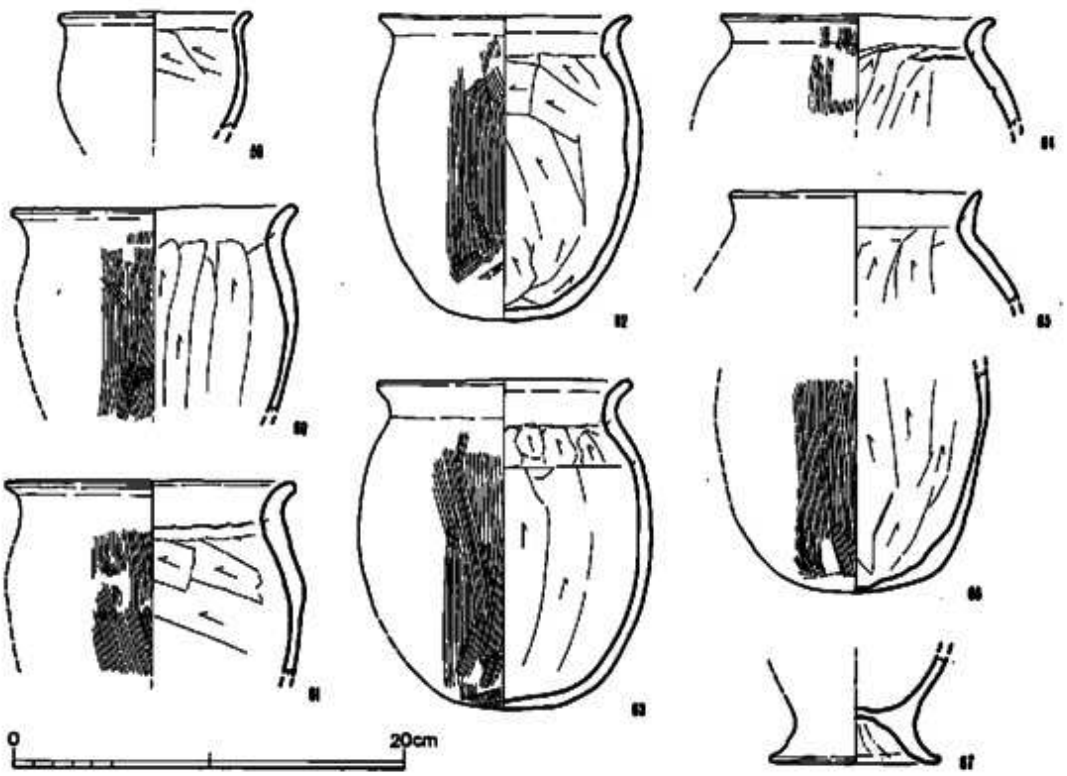


第35図　27号住居跡出土土器実測図②（1/4）

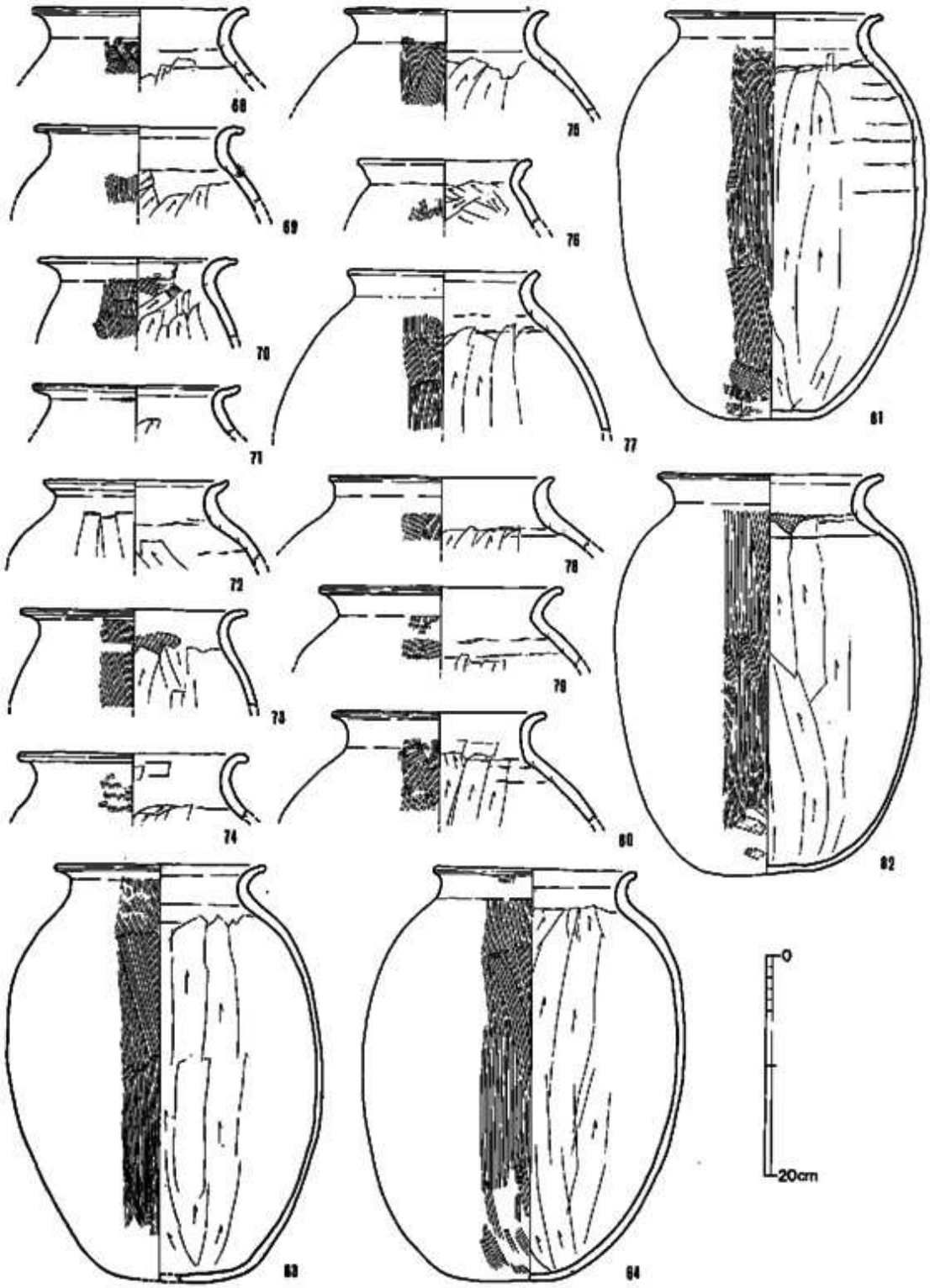
に甕の破片が７点程ある。

土師器（33～108）　精良品（33～58）は高坏が多い。56・57は粗製と精製との中間位である。58は特異な器形で，高坏に椀を折衷した形状をなす。用途としても日常的なものではなかろう。甕は小型・中型・大型と全て揃っている。Ⅰ類の大型は７個が完形に復しえた。甕Ⅱ類の89の把手には３個の孔が見られる。98・99は恐らく蓋となるものであろう。甑は106が土管状を呈して特異である。49・59がカマド周辺に，68，69・75が床面に存し，76は床下層から出土した。

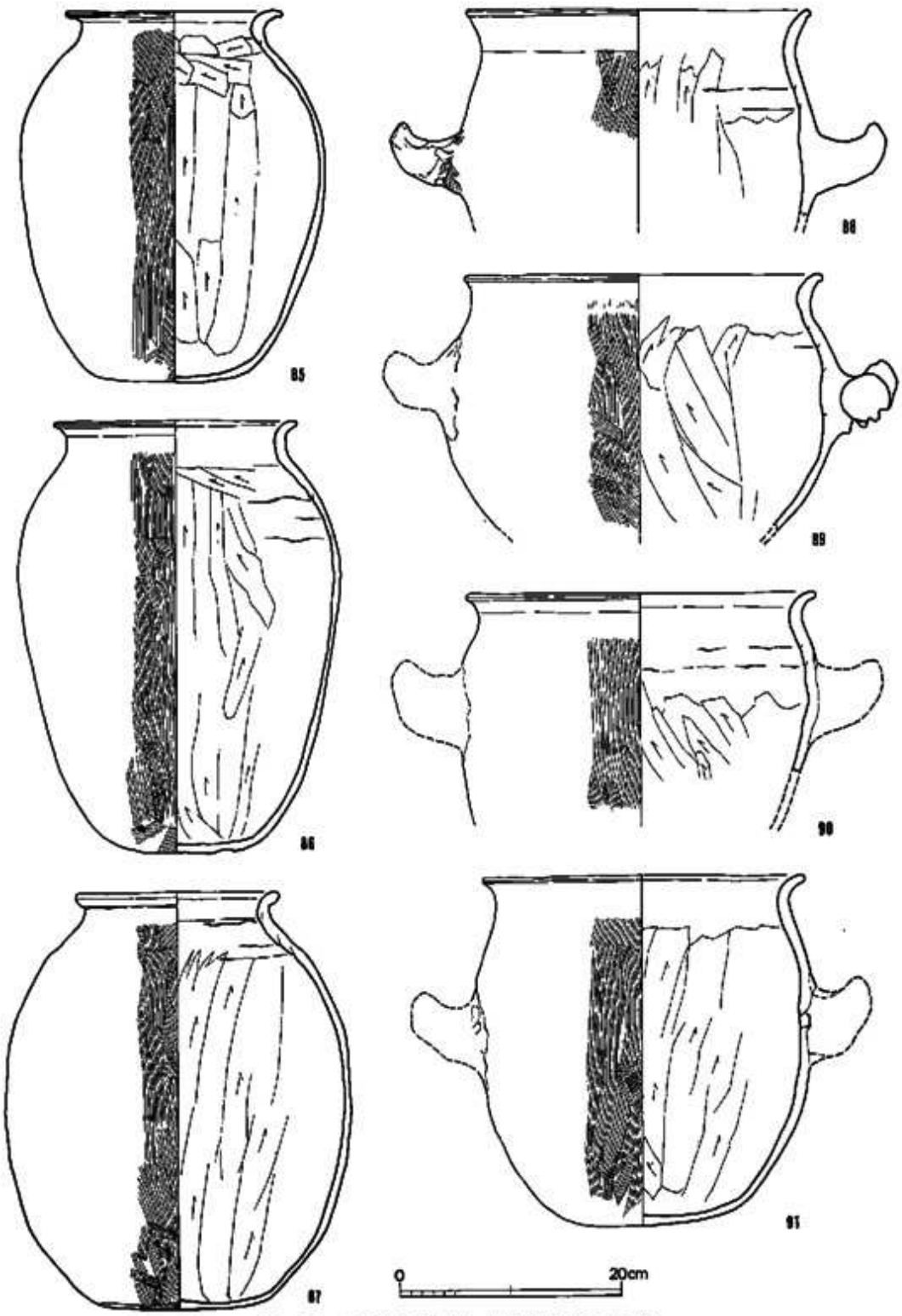
この住居出土品と22・50・51・56・106号の各住居からの出土品と接合したもの及び同一個体であると確認しうるものが存する。特に50号住居跡出土品とは須恵器，土師器ともで５点程が接合しているのは，お互いに住居廃絶後の窪みがごみ捨ての場所に使用されたためであろうし，この２つの住居の廃棄の時期があまり時間を隔てていないことの証左ともなる。　（伊崎）



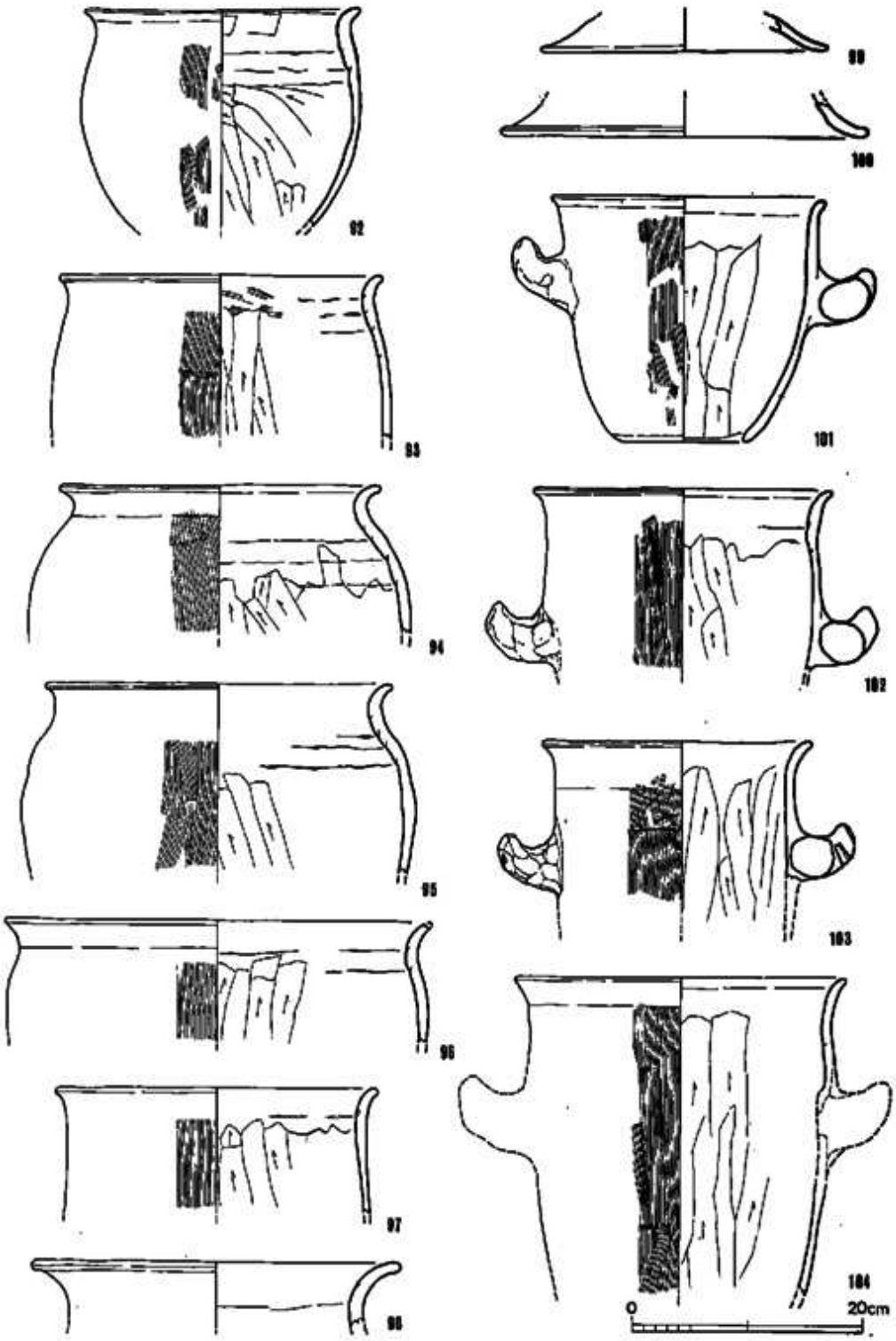
第36図　27号住居跡出土土器実測図③（1/4）



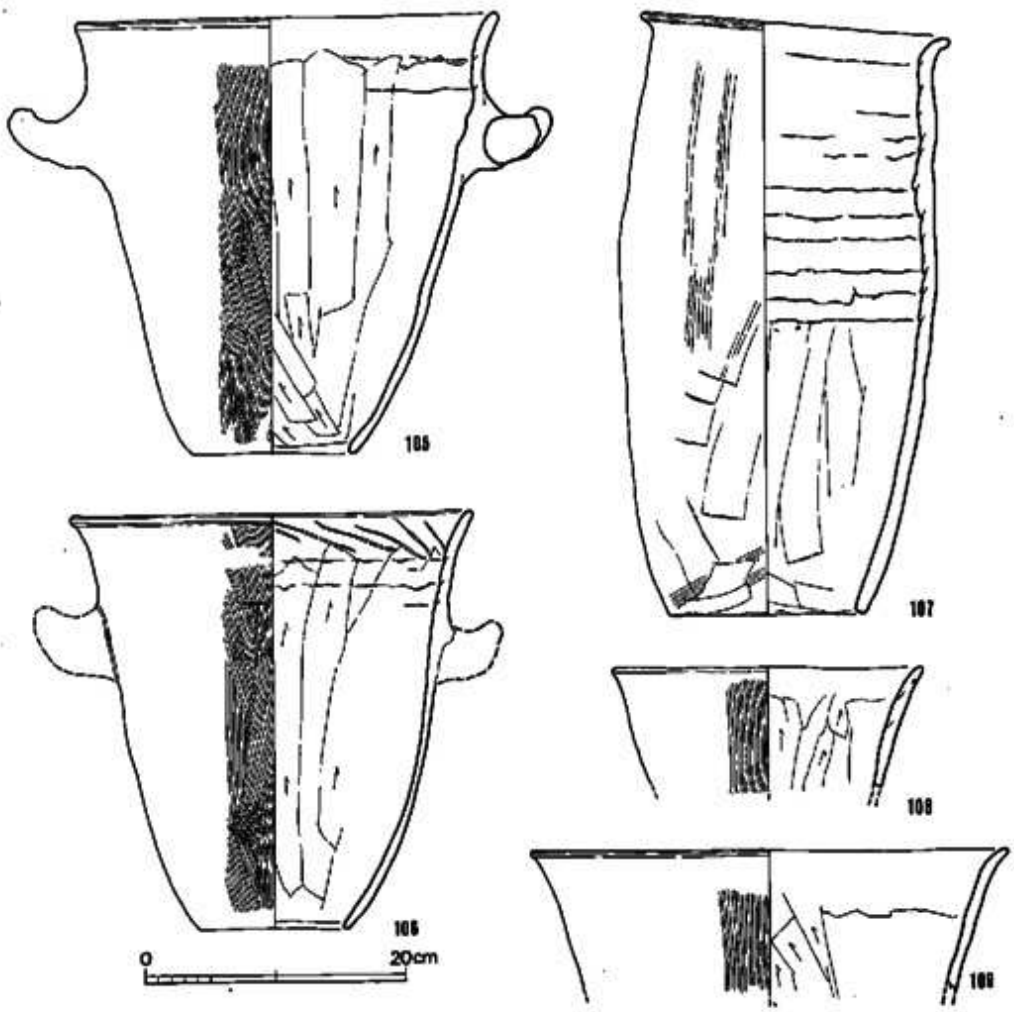
第37図　27号住居跡出土土器実測図④ (1/6)



第38図　27号住居跡出土土器実測図⑤（1/6）



第39図　27号住居跡出土土器実測図⑥ (1/6)



第40図　27号住居跡出土土器実測図⑦（1/6）

28号住居跡　（図版13，第41図）

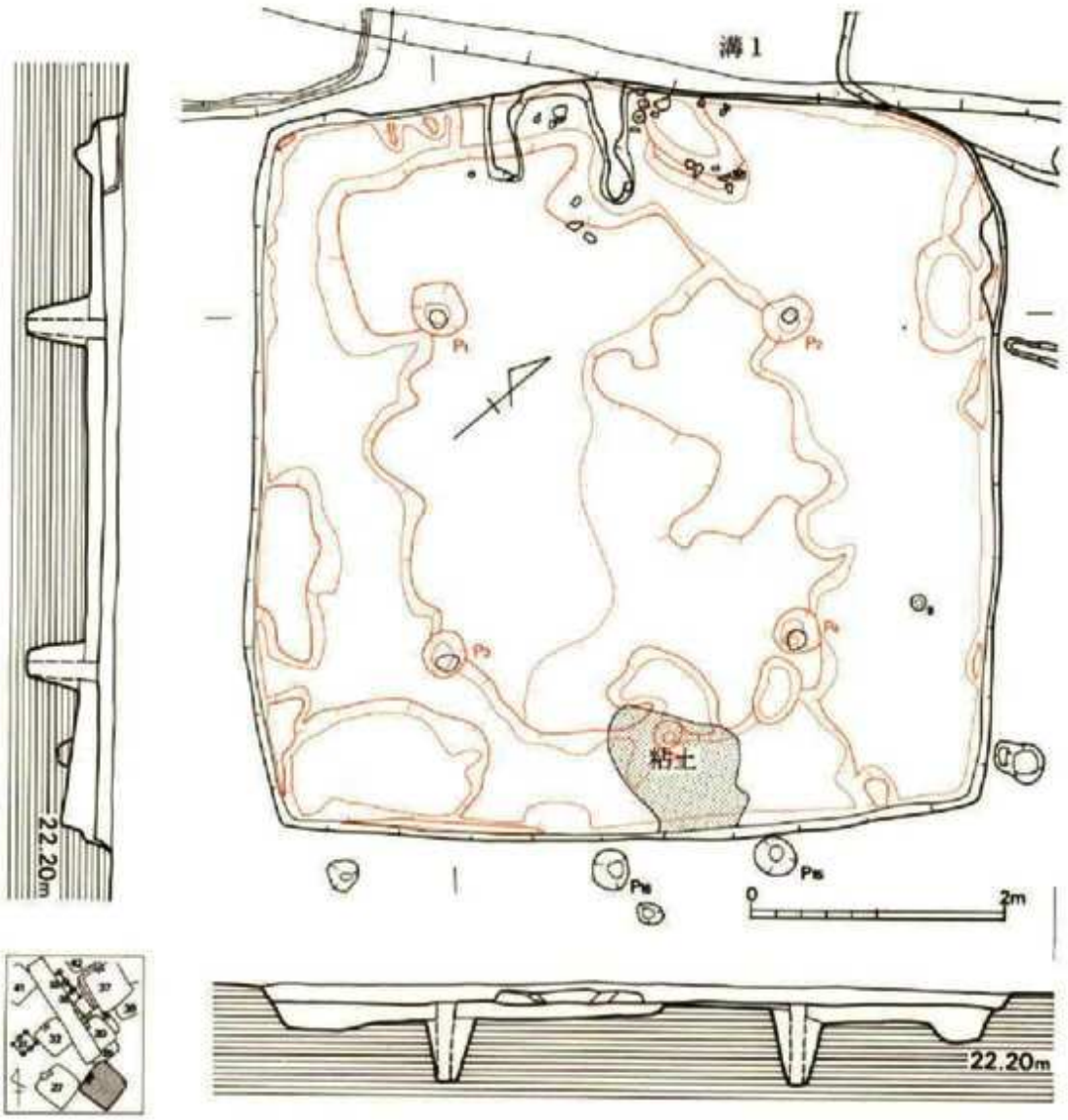
27号住居跡とほぼ主軸を同一にしてその東側にある。29号住居跡の一部を切り，溝1に切られている。壁は10cm強しか遺存していなかった。壁小溝はない。カマド対面にあまり広くない範囲で粘土があった。さらに，その粘土前面の竪穴外に2個のピットが並んで存した。床下層に中央土壙はない。

カマド　（図版13，第42図）　カマド自体がやや東に偏って存する。両袖とも残存し焚口幅60

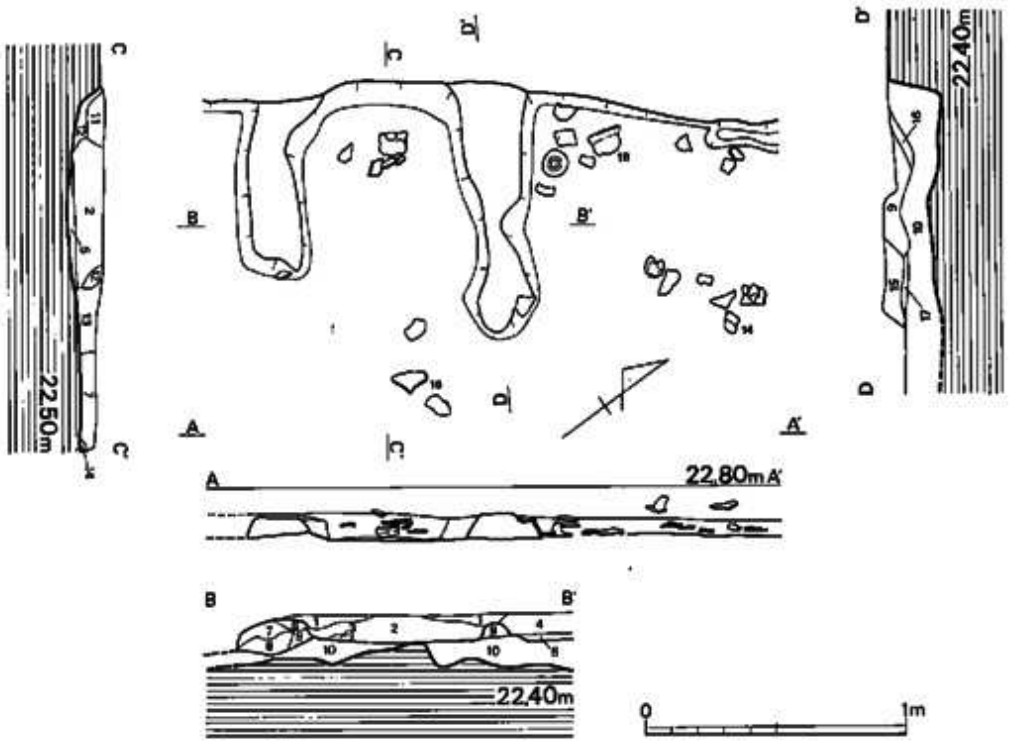
cm，奥行85cm程を測る。火床面に残存した甕破片を支脚と考える。右袖の外側に土器片が散在していた。なお，カマド内とその東外に土製品があった。

出土遺物　（図版76，第43図）

埋土中には割合多くの土器が存したが，図示しうるものは少ない。土製模造鏡１点，手捏土器２点，砥石１点，スラッダ１点，不明土製品２点が埋土中にあった。床下層からも土製品が



第41図　28号住居跡実測図（1/60）



1 暗灰色砂質
2 茶灰色砂質混入淡黄褐色粘質土
3 茶灰色粘質土
4 淡黄褐色粘土少量混入灰色砂質
5 暗灰色砂質混入茶色砂質
6 淡黄灰色粘質土
7 6・茶色粘質土少量混入褐色砂質
8 6に灰白色粘土少量混入
9 暗黄灰色粘質土
10 黒褐色砂質混入茶色砂質
11 2に焼土多く混入
12 1に6が混入
13 淡褐灰色砂質
14 焼土層
15 9に暗灰色砂質少量混入
16 黒褐色砂質
17 焼土少量混入淡茶灰色砂質

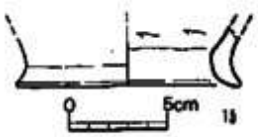
第42図　28号住居跡カマド実測図（1/30）

出土している。

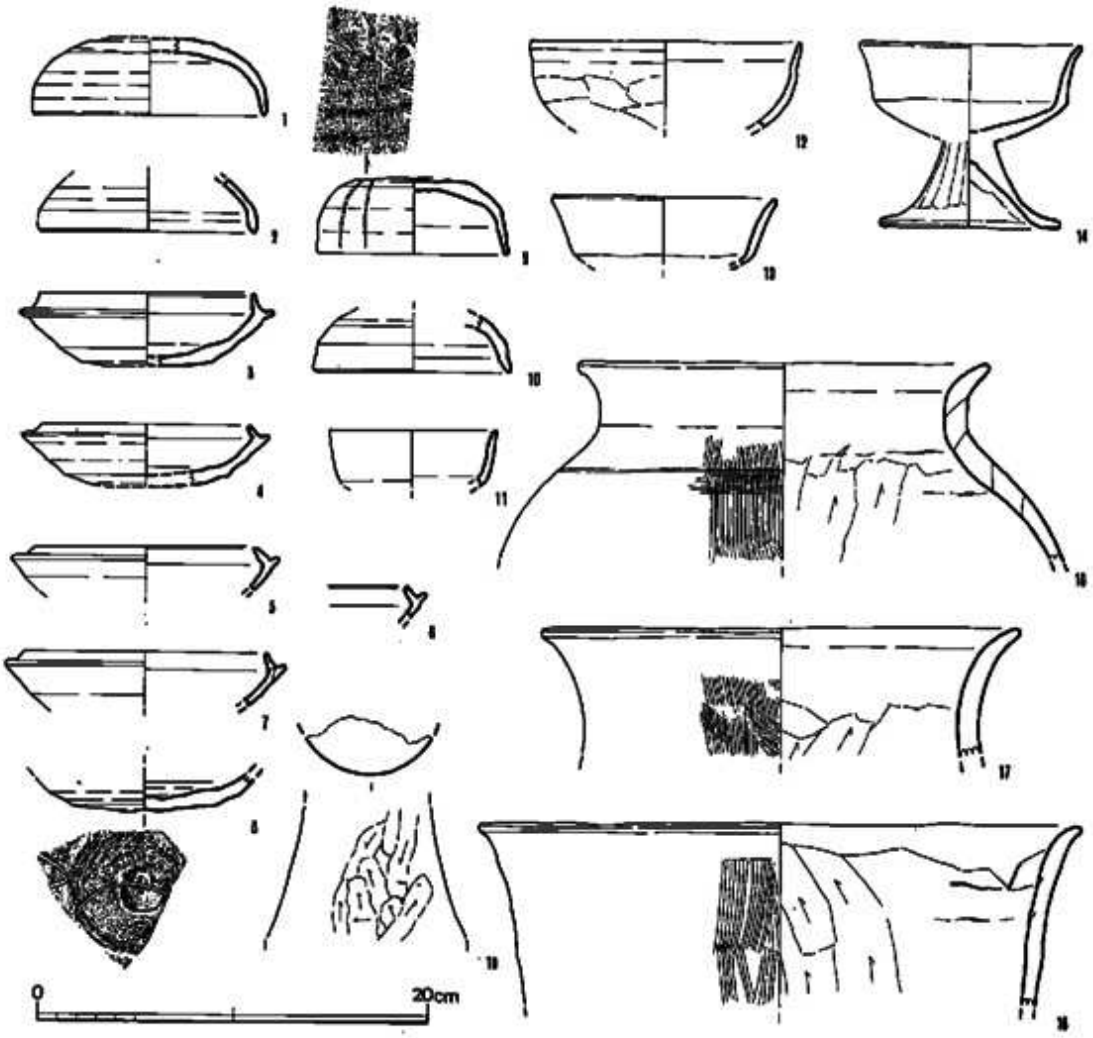
須恵器（1～11）　9の坩蓋はP₄の北側床面に伏せたままの状態で出土した。3はカマド対面粘土中，8・10が床下層の出土である。他に甕片と坩片などがある。

土師器（13～19）　14は脚部と坏部を図上で接合した。脚部はカマド右袖のすぐ横に立位で出土している。この坏部と13もカマド右側の出土である。15はカマド支脚である。16・18はカマド付近，17は床下層より出土した。19は埋土中に出土した支脚片である。

（伊崎）



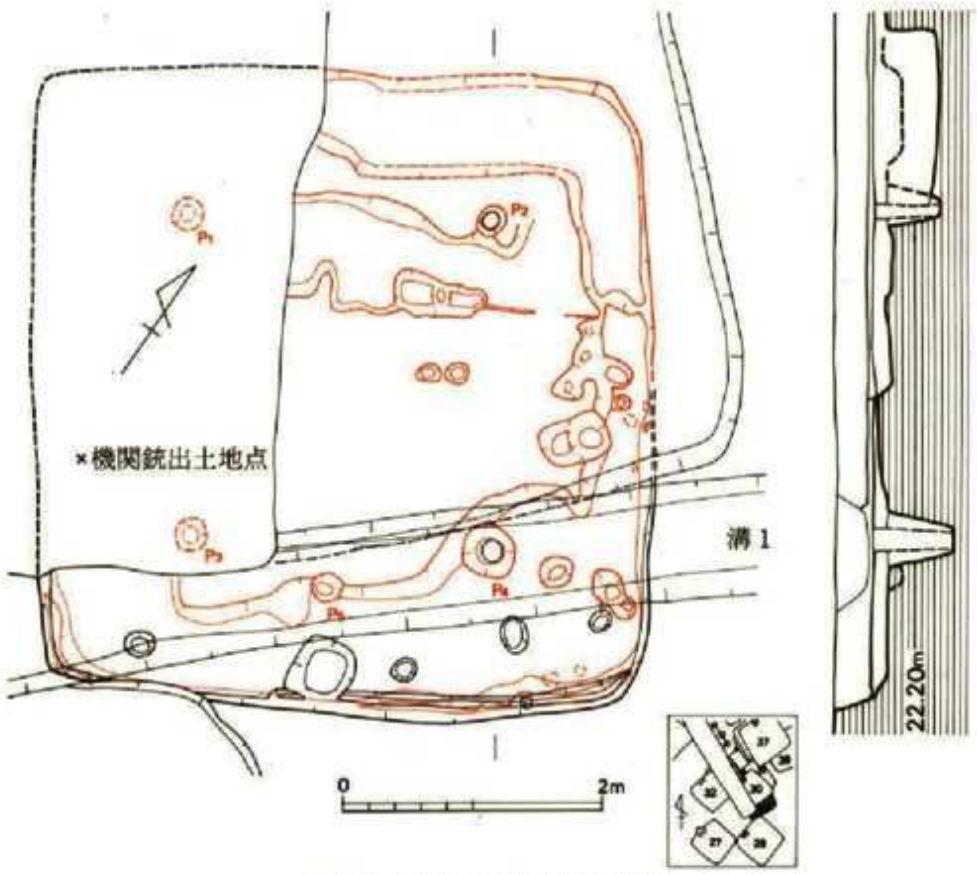
第43図　28号住居跡カマド支脚実測図（1/4）



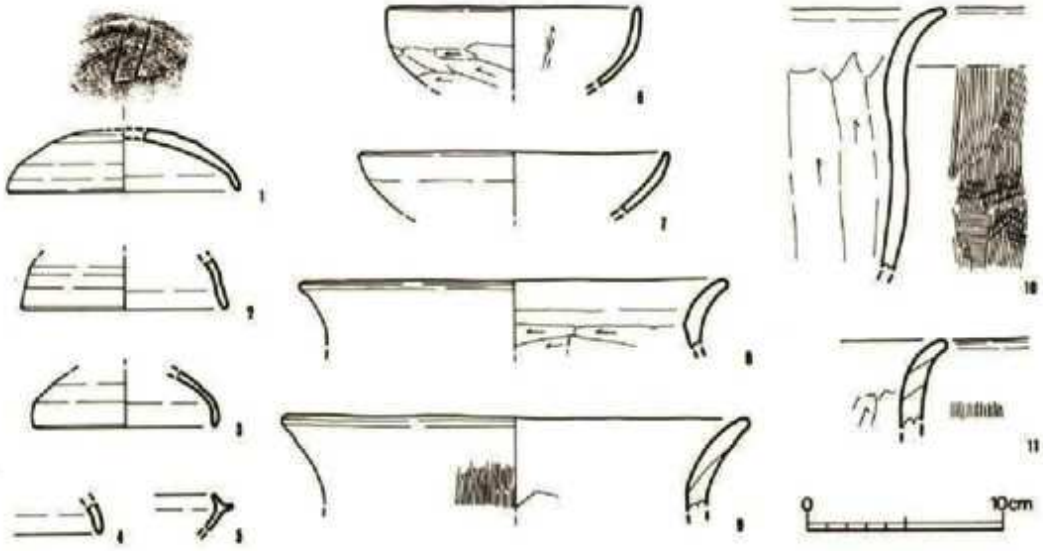
第44図　28号住居跡出土土器実測図（1/4）

29号住居跡　（図版13，第45図）

30号住居跡に2/3以上を切られ，かつ28号住居跡にも竪濠にも切られ，さらに溝1が残った部分を横断するという悪条件ながら，下層掘込みラインから2辺を知りうるので，おおよその規模は復原しうる。床面レベルは30号住居跡より下位にあるが，同じく下位にある31号住居跡により切られる。P_3の存在とその前面の土壙の存在より，カマドは北西壁に存したものとみなされる。



第45図　29号住居跡実測図（1/60）



第46図　29号住居跡出土土器実測図（1/4）

出土遺物　（図版76，第46図）

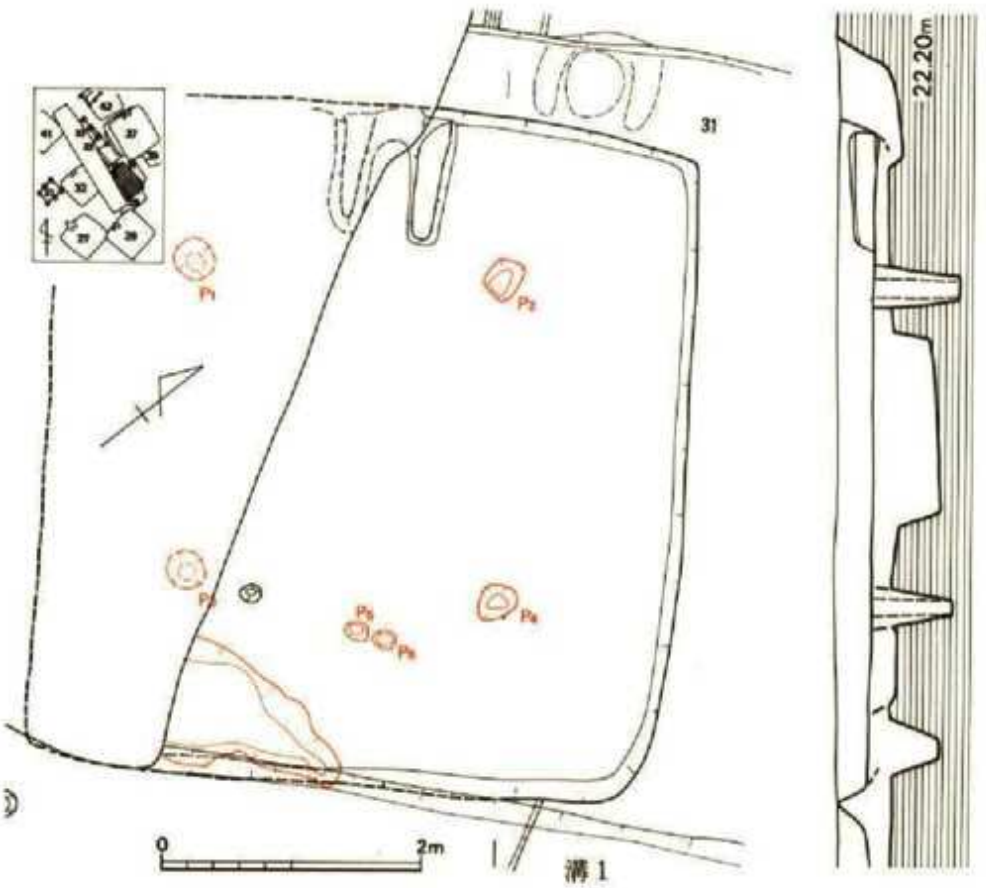
かなり他から切られていた割には遺物が存した。土製模造鏡1，砥石1，手捏土器1，不明土製品が埋土中から出土し，もう1個の手捏土器（29－12）は床面に正立の状態で出土した。

須恵器（1～5）　4・5が床直上，1が床下層の出土である。他に甕片その他がある。28号・50号住居跡等出土品と同一個体とみられるものもある。

土師器（6～11）　7・9・11は床直上の出土である。

30号住居跡　（図版13，第47図）

約1/3程を堅濠に切られ，柱穴2個（P_1・P_3）は欠失している。カマドも右袖しか残って



第47図　30号住居跡実測図（1/60）

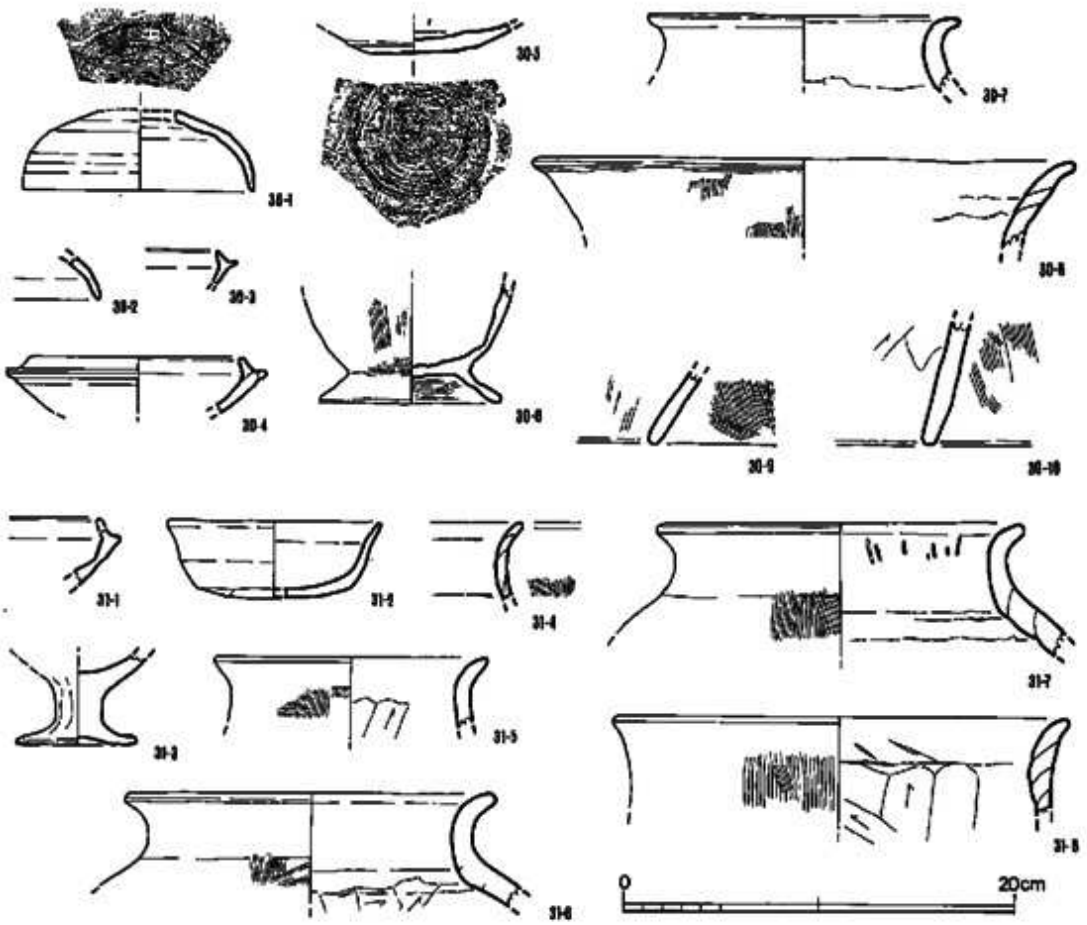
いなかった。29・31号住居跡を切っている。

カマド　右袖部分のみの残存で，焼土は多かったが詳細は不明である。

出土遺物　（図版76，第48図）

遺物量はあまり多くない。

須恵器　（1～5）　1は28（28－1）・50（50－3）各号の，4は44（44－1）・31（31－1）各号の住居跡出土品とほとんど同一の手法・胎土・色調を呈している。1・3が下層，2がカマド内，5が床面の出土である。（伊崎）



第48図　30・31号住居跡出土土器実測図（1/4）

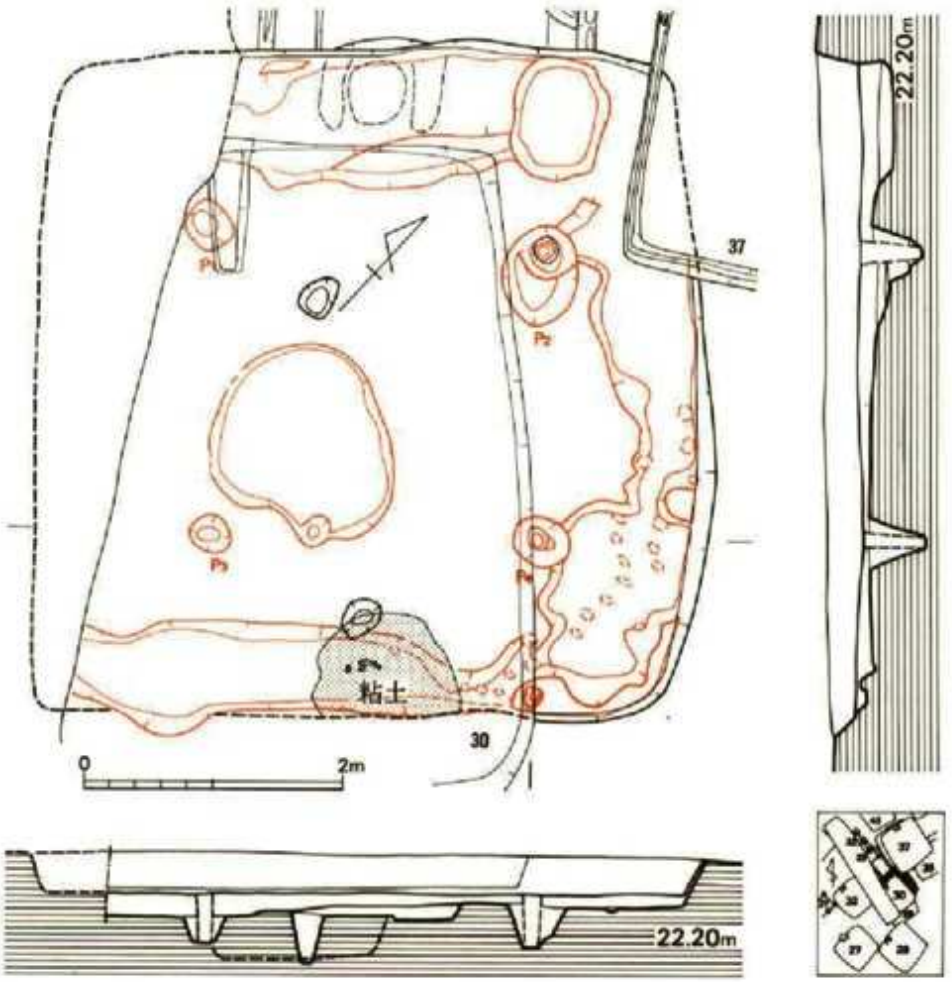
31号住居跡　（図版13，第49図）

重複の著しい中に存する。30号住居跡に切られるけれども床面はまだその下に存する。37・38号住居跡に切られ，29・33・34号住居跡を切っている。カマド対面には粘土が存した。

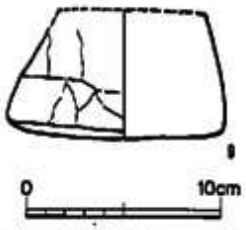
カマド　（第51図）　30号住居跡に焚口付近をカットされていたが，それにもまして潰された様相が著しかった。両袖は殆んど痕跡もなかった。支脚は円錐台形の低いもので，基部を粘土で固めてすえおかれていた。手捏の高坏と不明土製品が周辺に存した。

出土遺物　（図版76，第48・50図）

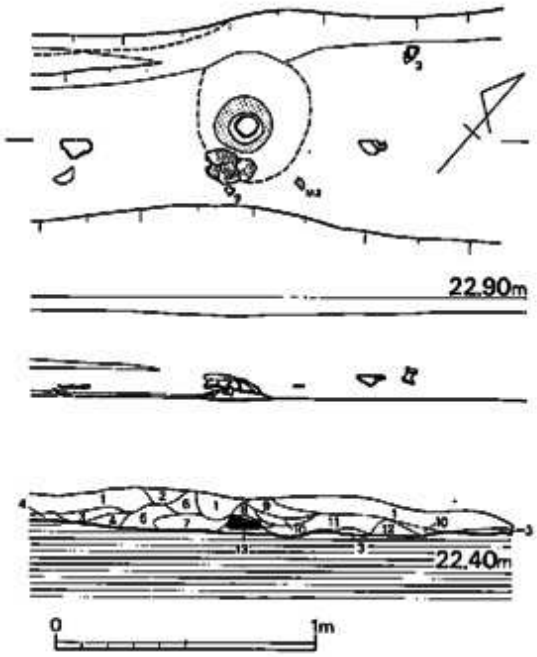
土器量は少ない。埋土中に土製模造鏡の破片と不明土製品が存した。



第49図　31号住居跡実測図（1/60）



第50図　31号住居跡カマド支脚実測図
(1/4)



1．灰白色粘土
2．褐灰色砂泥（1と焼土が少し混入）
3．1＋2
4．茶褐色砂泥
5．灰色砂泥（焼土が少し混入）
6．灰褐色砂泥
7．淡褐灰色砂泥
8．淡褐色砂泥に焼土が多く混入
9．淡茶褐色砂泥に焼土が多く混入
10．暗灰色砂泥＋1（焼土が少し混入）
11．暗褐灰色砂泥に焼土が少し混入
12．淡黄灰色粘土に1が少し混入
13．淡茶灰色粘質土

第51図　31号住居跡カマド実測図（1/30）

須恵器　（1）　立上り端部を欠くもので，下層出土品である。

土師器　（2～8）　3の脚台はカマドのそばでかなり浮いて出土した。2は下層出土で，6はカマド対面の粘土中に存し，7は下層中央土壙内にあった。9の支脚は底径11cm，高さ6.4cmの低いものである。　（伊崎）

32号住居跡　（図版13，第52図）

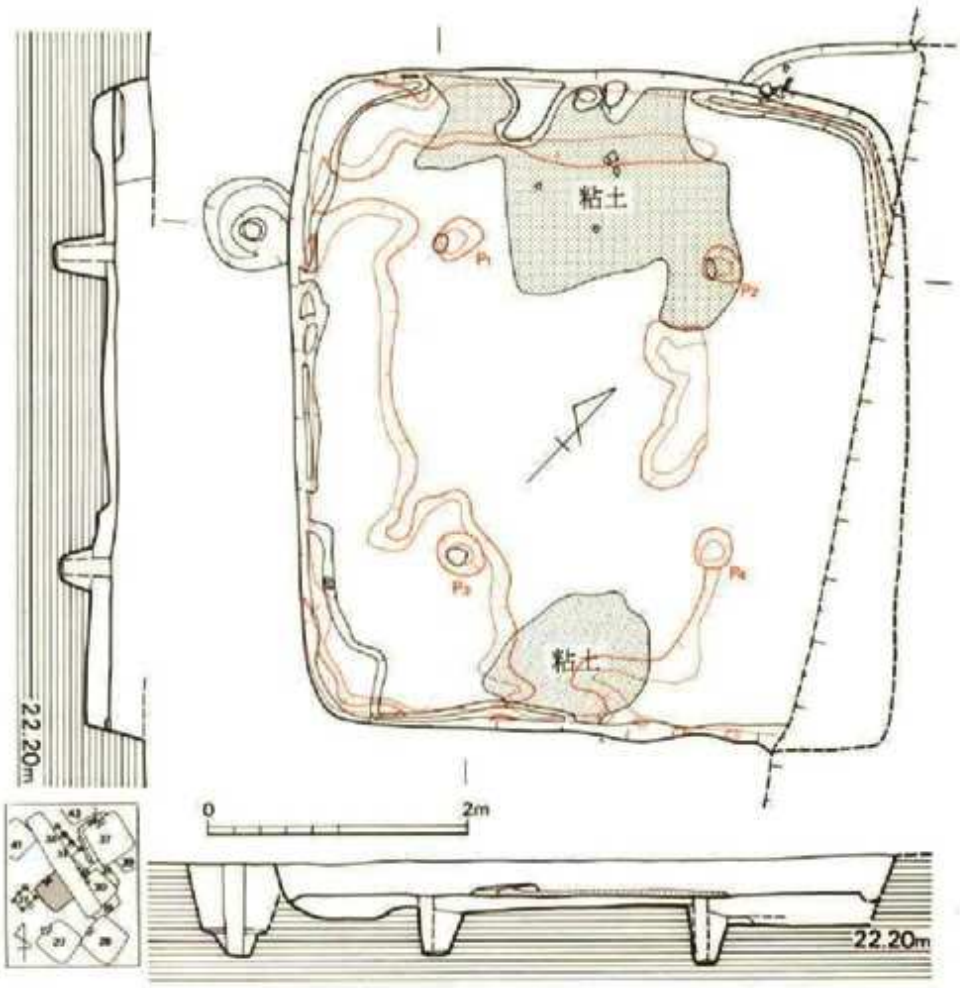
33号住居跡を切って営まれ，一部を攪濠に切られている。また，27号掘立柱建物を切っている。カマド周辺は粘土が崩れて広がっており，僅かに左袖の一部が残存するにすぎない。カマド対面にも粘土が存した。

出土遺物　（図版76，第54図）

カマドの粘土の崩れ去った下に若干の土師器片があったのみで，他に床面に遺物はなかった。埋土中の遺物も少ないが，図示したものは全て埋土中の出土である。埋土中と床下層とに，不明土製品があった。

須恵器　（1～7）　6は壺であろうか。7の甕は焼成不良。他に甕の破片が2点ある。

土師器　（8～12）　13の甑は焼成以前の径3.3cmの穿孔があるが，かなり小型であることより特殊な用途に供したものであろうか。　（伊崎）



第52図　32号住居跡実測図（1/60）

33号住居跡　（第53図）

整濠に中心部を切られ，残存する部分の方が少ないが，32号住居跡の下層に現れた掘込みのラインと2柱穴（P_1・P_3）とにより，もとの規模は大略復原できる。カマドは北西辺にあったものとしてよかろう。34号を切り，32号・31号の各住居跡に切られる。

出土遺物　（図版76，第54図）

北西隅から数個まとまって出土したもののみがある。埋土中に不明土製品があった。

須恵器　（1）　底部は静止ヘラ削りで，その上にヘラ記号を施している。

土師器　（2・3）　2は中型の甕であろう。　（伊崎）

34号住居跡　（第53図）

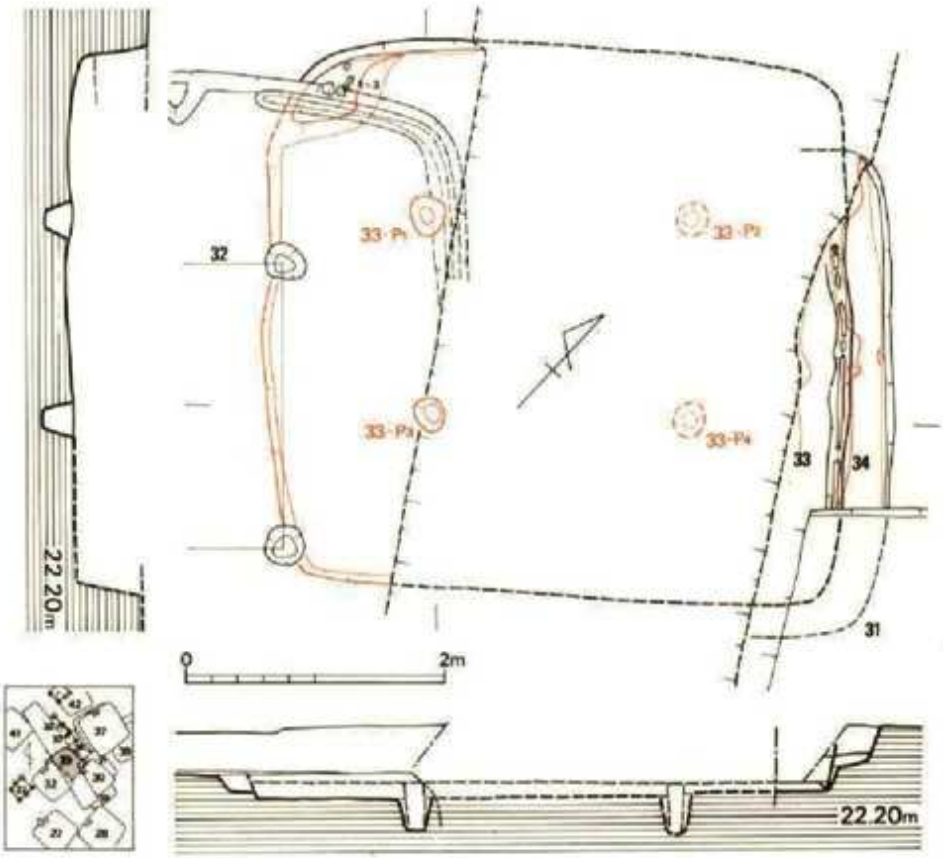
33号・31号住居跡に切られていて殆ど様相はわからない。ただ，残存部からみても規模としては33号とあまり変わらないものと考えられる。

出土遺物　（第54図）

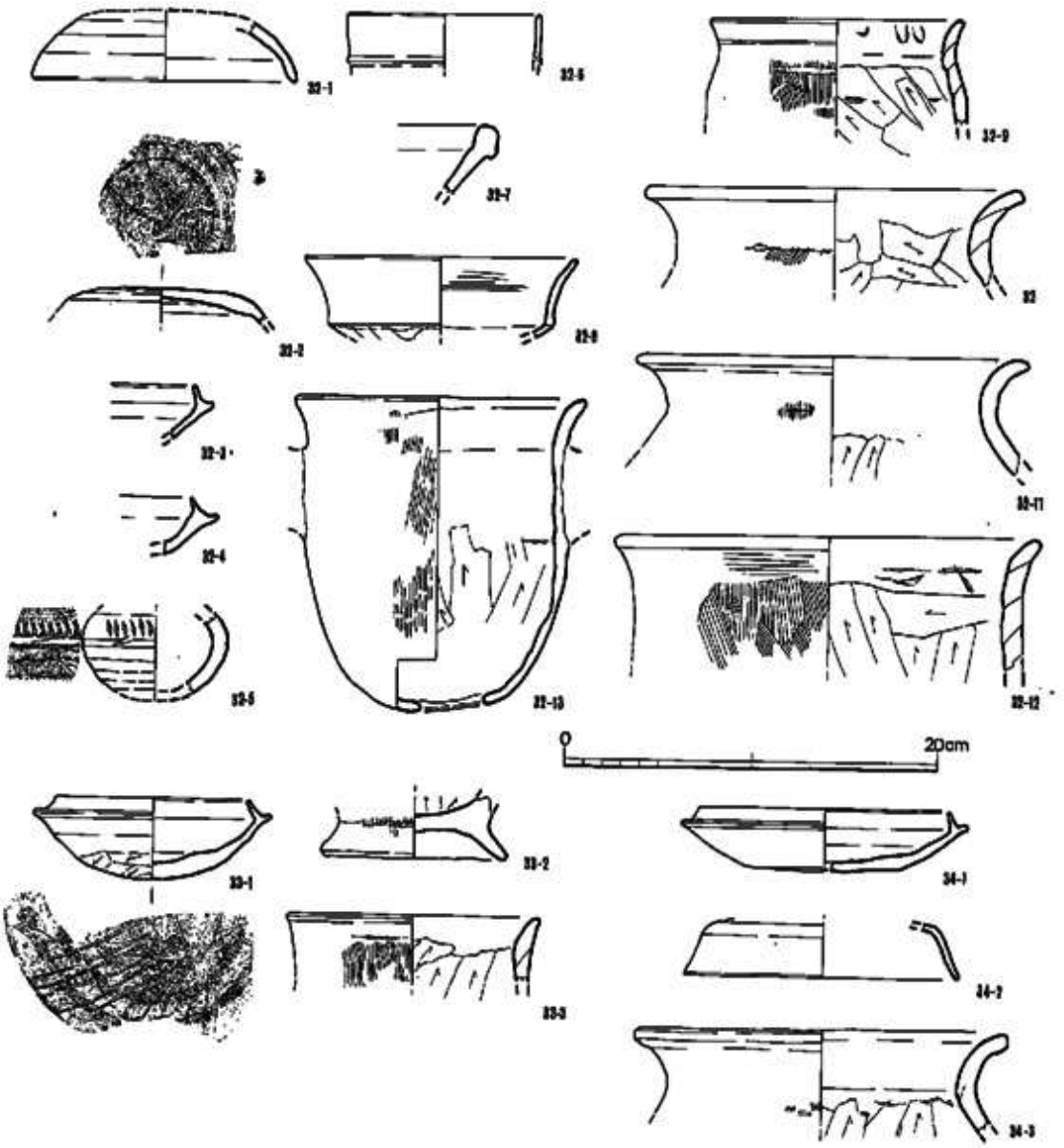
須恵器2点と土師器1点を示すが，これは或は33号に属す可能性もある。

須恵器　（1・2）　2は壺の蓋であろう。きわめて精良な土器である。

土師器　（3）　大型でもやや小ぶりの甕であろう。　（伊崎）



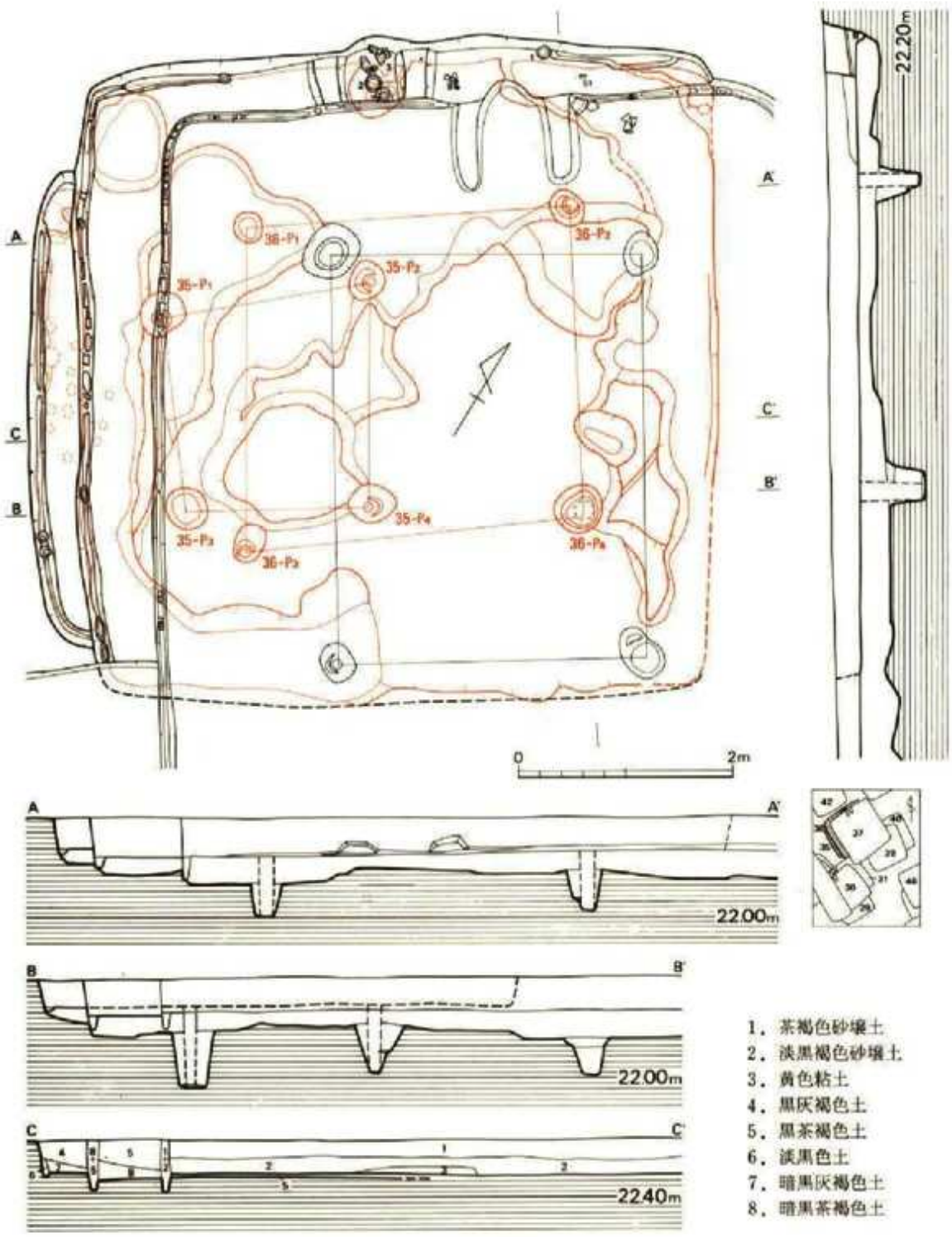
第53図　33・34号住居跡実測図（1/60）



第54図　32～34号住居跡出土土器実測図（1/4）

35号住居跡　（図版14，第55図）

竪濠の東側にあり，36号住居跡に切られる。南西辺とコーナー部分のみの残存であるが，下層より検出した柱穴によりおおよその規模は復原できる。カマドは北西辺にあったものとしてよい。これより新しい36・37号住居跡に比べればかなり小さい。壁小溝は細いが深くはない。



第55図　35・36号住居跡実測図（1/60）

出土遺物は床面に土師器甕破片2 と埋土中に土師器甕片 2，須恵器坏片 1，スラッグ 1があったものの図示しえない。（伊崎）

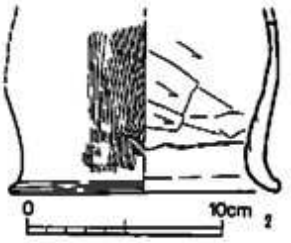
36号住居跡　（図版14，第55図）

35号を切り，37・31号住居跡に切られている。2辺しか残存しないものの柱穴等より復原は可能である。主柱穴を結んだ形状はやや台形気味である。壁小溝は細く，所々にその中に小ピットが存する。

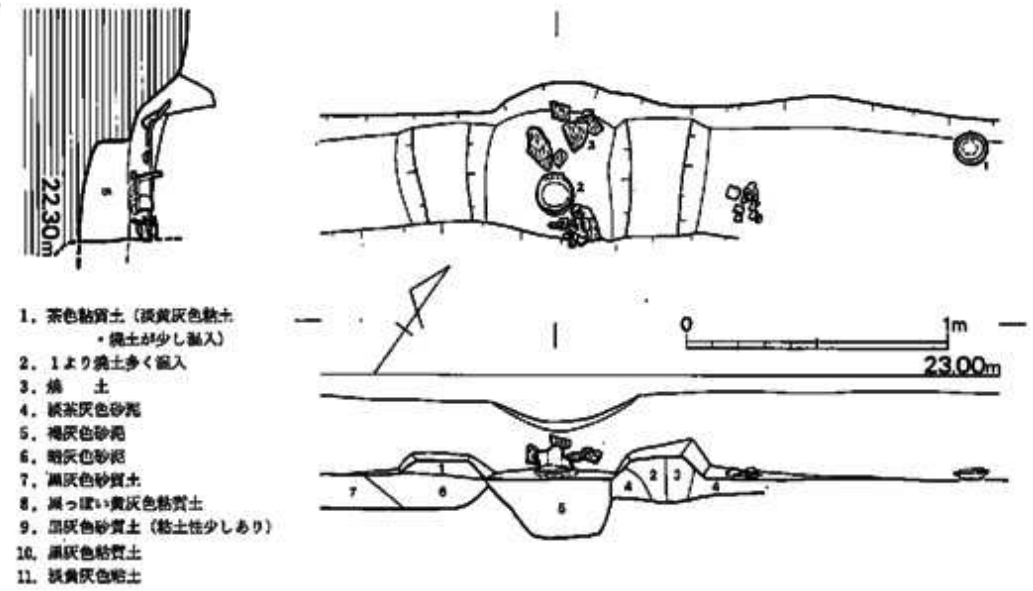
カマド　（図版15，第57図）　37号住居跡に焚口付近が切られている。火床中央には甕を転用した支脚が，口縁付近を粘土で固定して置かれたままになっていた。また，その奥には甑の破片があった。両袖の残存頂部と壁検出面とに20cm程の差があり，支脚の甕底部も欠失しているのは住居廃絶時にカットされたものと思われる。

出土遺物　（図版76，第56・60図）

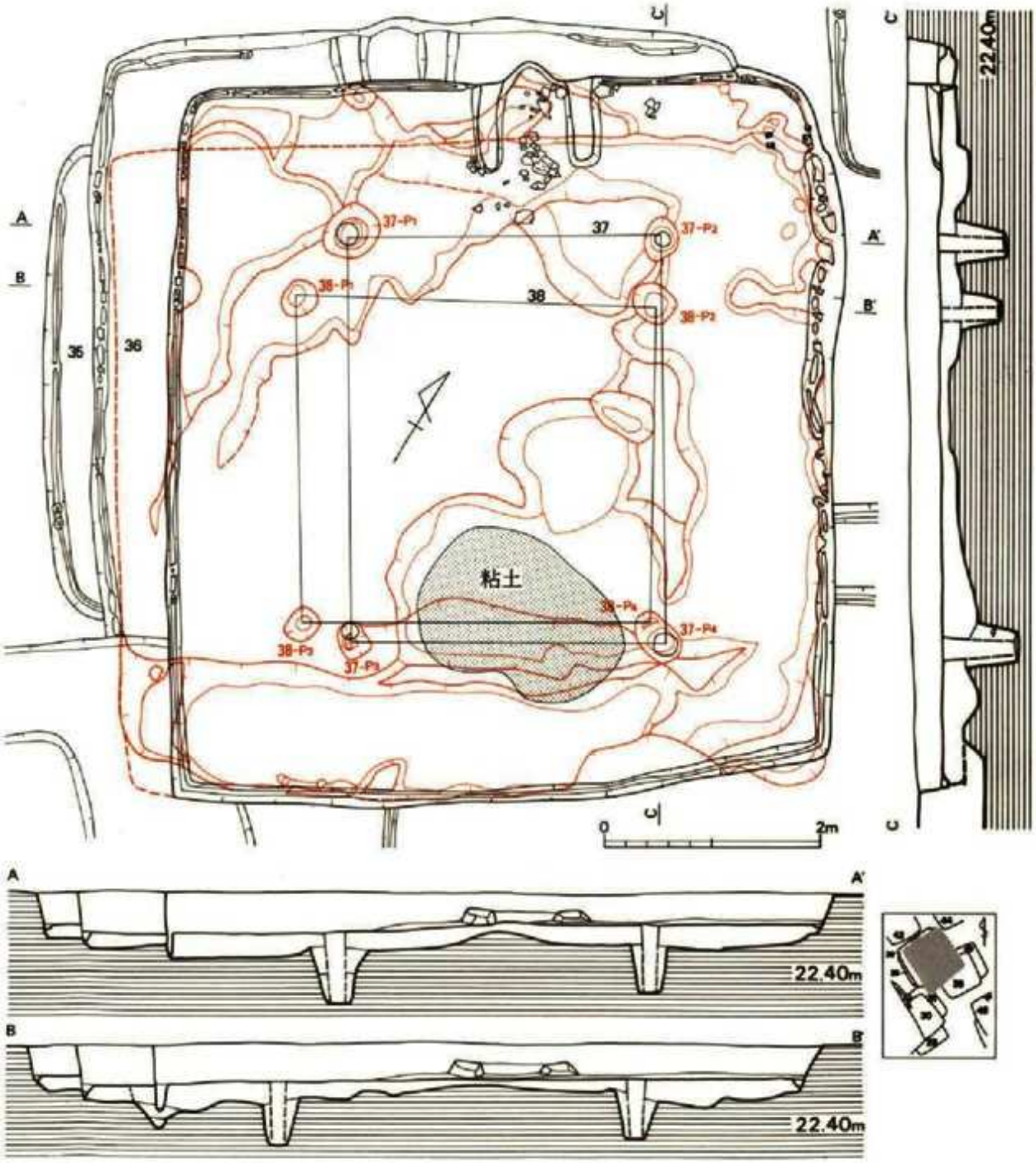
カマド内の土器の外に，カマド右袖より約 1 m離れて須恵器坏身が壁際に正立で，また，それより40cm離れて扁平磨製石鏃が鋒を東に向けて，いずれも床面に存した。磨製石鏃は時期的に合致しないが，床面にくっついて出土している。他に埋土中に須恵器坏片 2，土師器片若干，不明土製品 1 があったのみである。



第56図　36号住居跡カマド支脚実測図（1/4）



第57図　36号住居跡カマド実測図（1/30）



第58図　37・38号住居跡実測図（1/60）

須恵器　(1)　完形で，口縁端部は全周の8割程が打欠かれている。

土師器　(2・3)　2はカマド内支脚に使用された甕，3はカマド内に存した甑である。

(伊崎)

37号住居跡　(図版14，第58図)

31・35・36・38・39・40号の各住居跡を切っており，この近辺で最も新しい住居である。茶褐色の砂っぽい土で埋まっていた。縦長のプランを呈し，柱穴もそれに応じて長方形配置となる。床面はよく固められていた。壁小溝は細く深いのが，小ピットを配しながらほぼ全周している。カマド対面には壁からやや離れて黄色粘土が存した。床下層は重複が激しい為か，かなり不規則な形状を呈する。P_3の柱痕は径14～15cmであった。

カマド　(図版15，第59図)　やや北に寄って設置されている。焚口幅60cm，奥行80cmで，内外に土器片が存したが全て破片である。

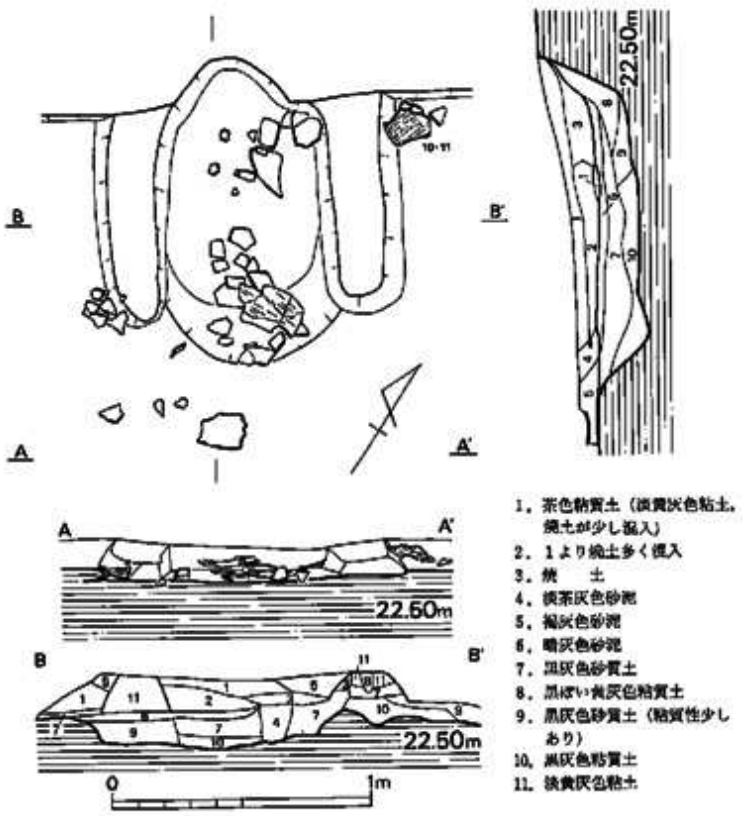
出土遺物

(図版77，第60図)

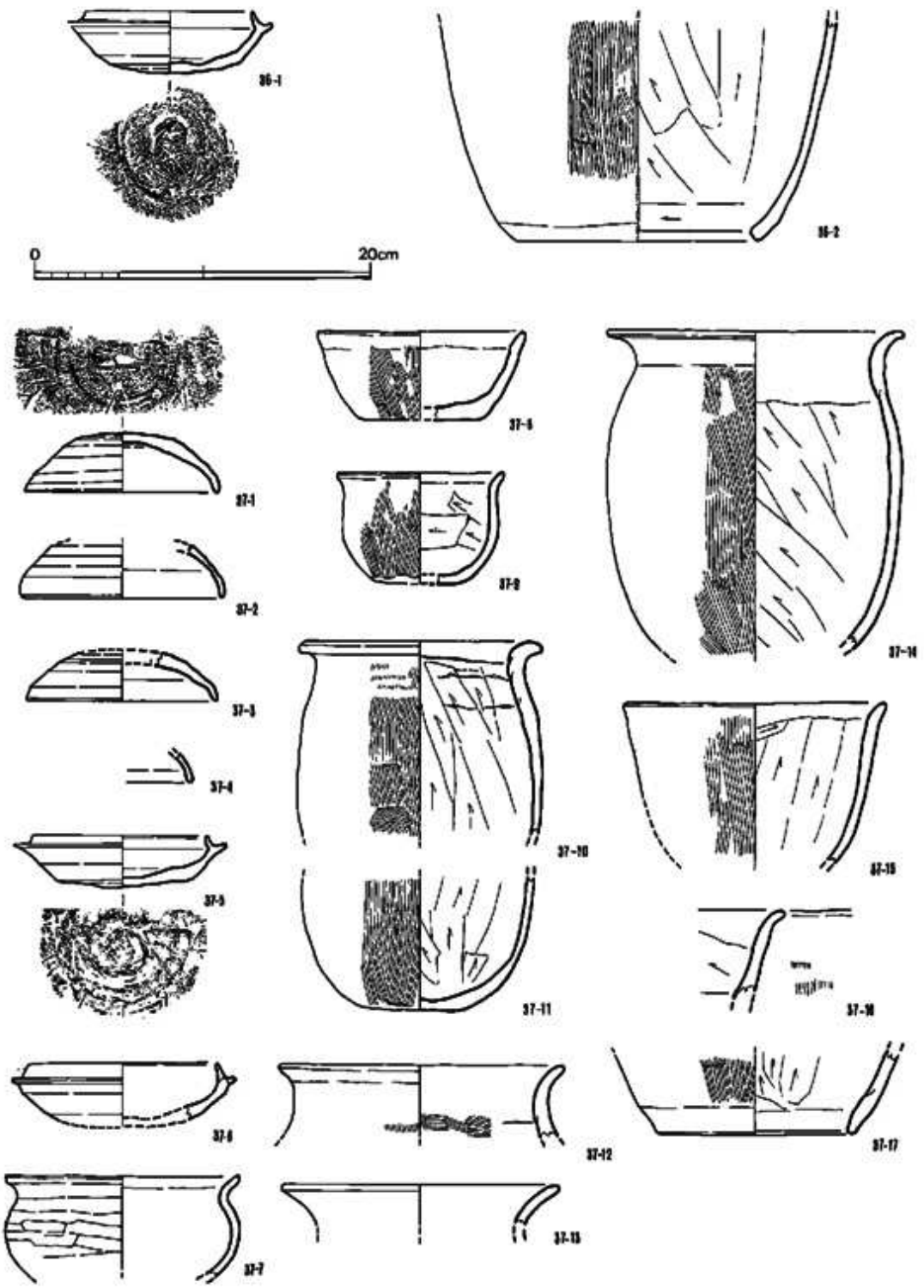
大きい分だけ埋土中には土器片が多かったが，大量ではない。埋土中から紡錘車1，棒状土製品1，不明土製品，手捏土器1が出土し，北側コーナー付近の床面に把手付の手捏土器が横位で存した。また，床下層より手捏土器1とスクレイパー1が出土した。

須恵器　(1～6)　1・3が下層，他は埋土中の出土である。5の底部はヘラ削りを施していないらしい。他に甕の破片が若干ある。

土師器　(7～16)　7は極めて精良な土器である。8はつくりが粗い。10・11



第59図　37号住居跡カマド実測図 (1/30)



第60図　36・37号住居跡出土土器実測図（1/4）

はカマド右袖外側より出土した。同一個体と思われるが接合しない。12は床下層，15は床直上の出土である。（伊崎）

38号住居跡　（図版14，第58図）

37号住居跡と2辺がほとんど重複している為，当初はその存在に気付かなかったが，床下層の発掘の段階で柱穴を確認した事によって初めて認知した。北東辺は37号住居跡のそれより僅かに外に存するも，南東辺はほぼ重なるとみてよい。下層に見られる段と柱穴配置から復すれば，やや横長のプランとなるらしい。37号住居跡に切られ，36号住居跡とは明確にしえなかったが，切っていると思われる。カマドも37号住居跡と同方向に存したであろう。出土遺物は一部が37号住居跡に混在した可能性もあるが，不明としか言えない。（伊崎）

39号住居跡　（図版14，第62図）

37号住居跡に切られ，40号住居跡を切っている。主柱穴を結んだ形状は平行四辺形気味となる。カマドは北辺にあった事が，その対面の粘土より推定される。粘土下の下層にP_8があり，中央土壙も存した。壁小溝は残存部に全周している。

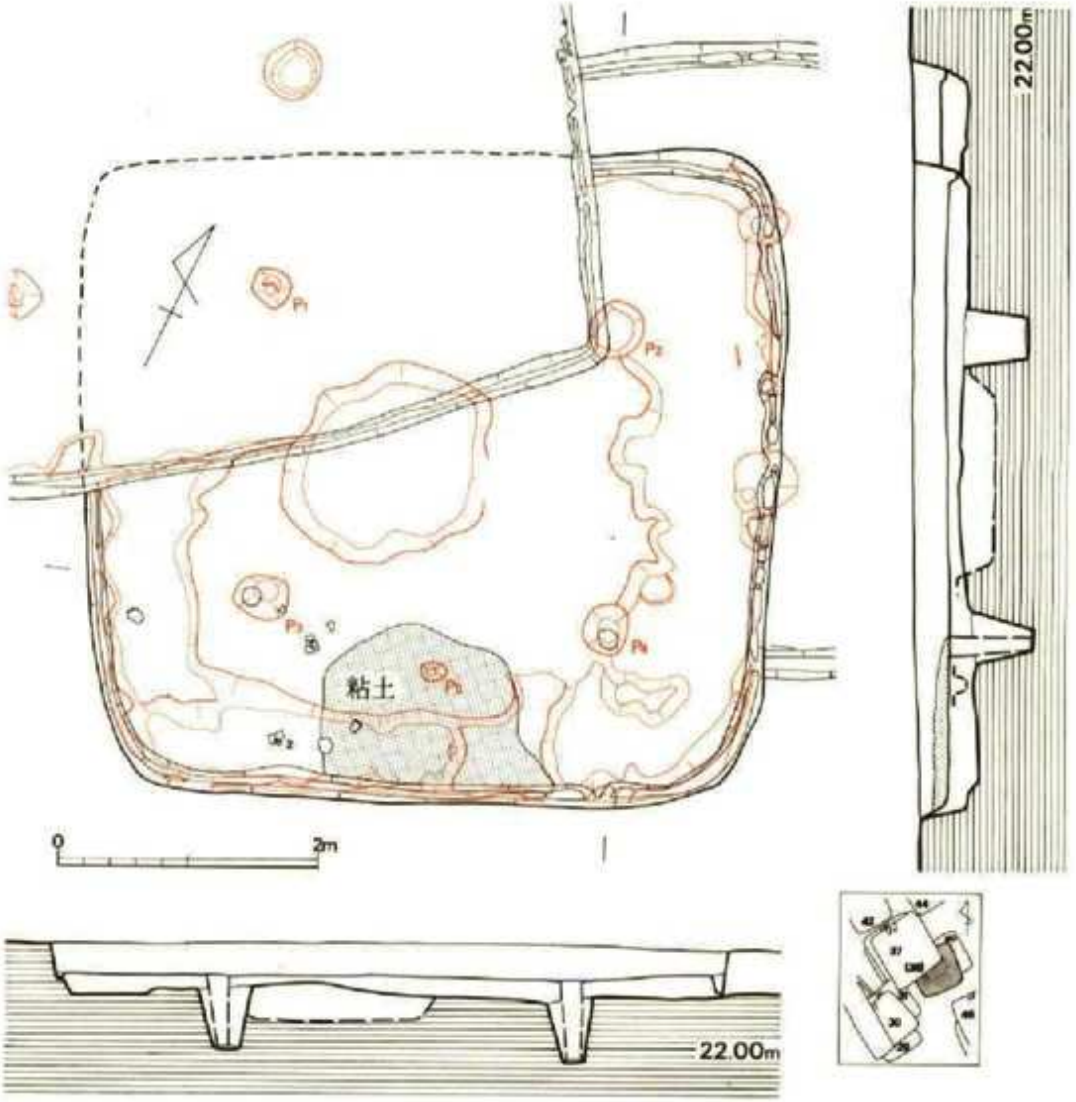
出土遺物　（図版76，第65図）

土器は床面に若干と，埋土中にも少ししかなかった。他に埋土中から土製模造鏡2，手捏土器1，不明土製品1，床下層から手捏土器1が出土した。

須恵器　（1）　床直上から出土している。他に埋土中出上の坏身があり，これは89号住居跡出土のものと接合している。

土師器　（2～6）　6は薄手のつくりながら口径が大きくなる。2はカマド対面粘土のそばの床面から出土した。（伊崎）

第61図　37号住居跡手捏土器出土状態



第62図　39号住居跡実測図（1/60）

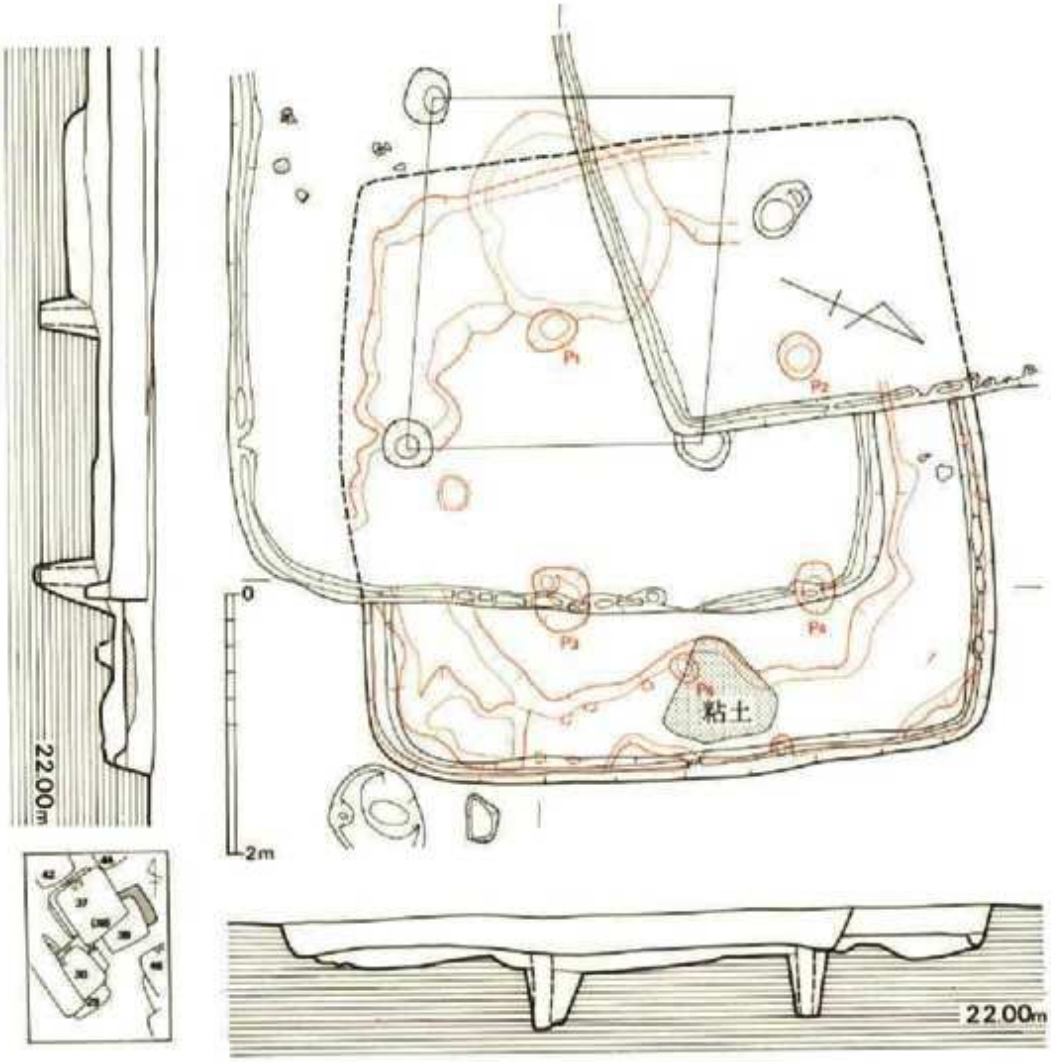
40号住居跡　（図版14，第63図）

37・39号住居跡に切られ，約⅓しか残存しない。これまでの住居と違い，カマド対面の粘土が北東壁に存するので，カマドは南西壁にあったとみられる。その粘土は黄灰色を呈し，こぢんまりと存した。壁小溝は残存部に全周する。

出土遺物　（第65図）

極めて少ない。須恵器は甕破片が１点あったのみである。

土師器　（１～４）　１は精良な土器である。４は床下層から出土した。　（伊崎）

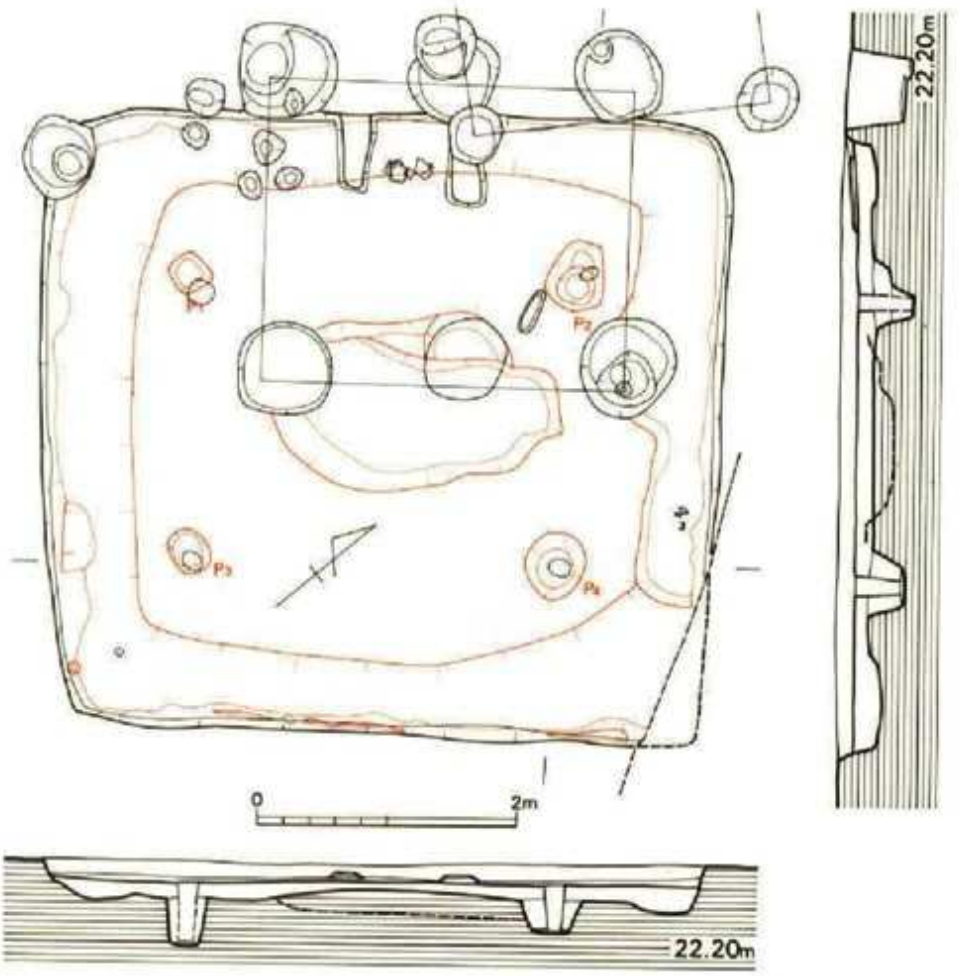


第63図　40号住居跡実測図（1/60）

41号住居跡　（図版56，第64図）

西側コーナーを塹濠に切られている。また，24・28・29号掘立柱建物にも切られる。他の住居跡との切合いはない。やや横長のプランを呈し，4主柱を結んだ形も横長方形を示す。壁小溝は無かった。下層の中央土壙も横長の形状を呈している。

カマド　焚口幅・奥行ともに60cmで，両袖とも残存はするが，殆ど基底部のみである。右袖の一部を29号掘立柱建物のP_4に切られる。左袖の基部は主軸を横断する形で，幅3cmの暗褐色砂泥土が入っていた。火床面に土師器甕破片が存した。

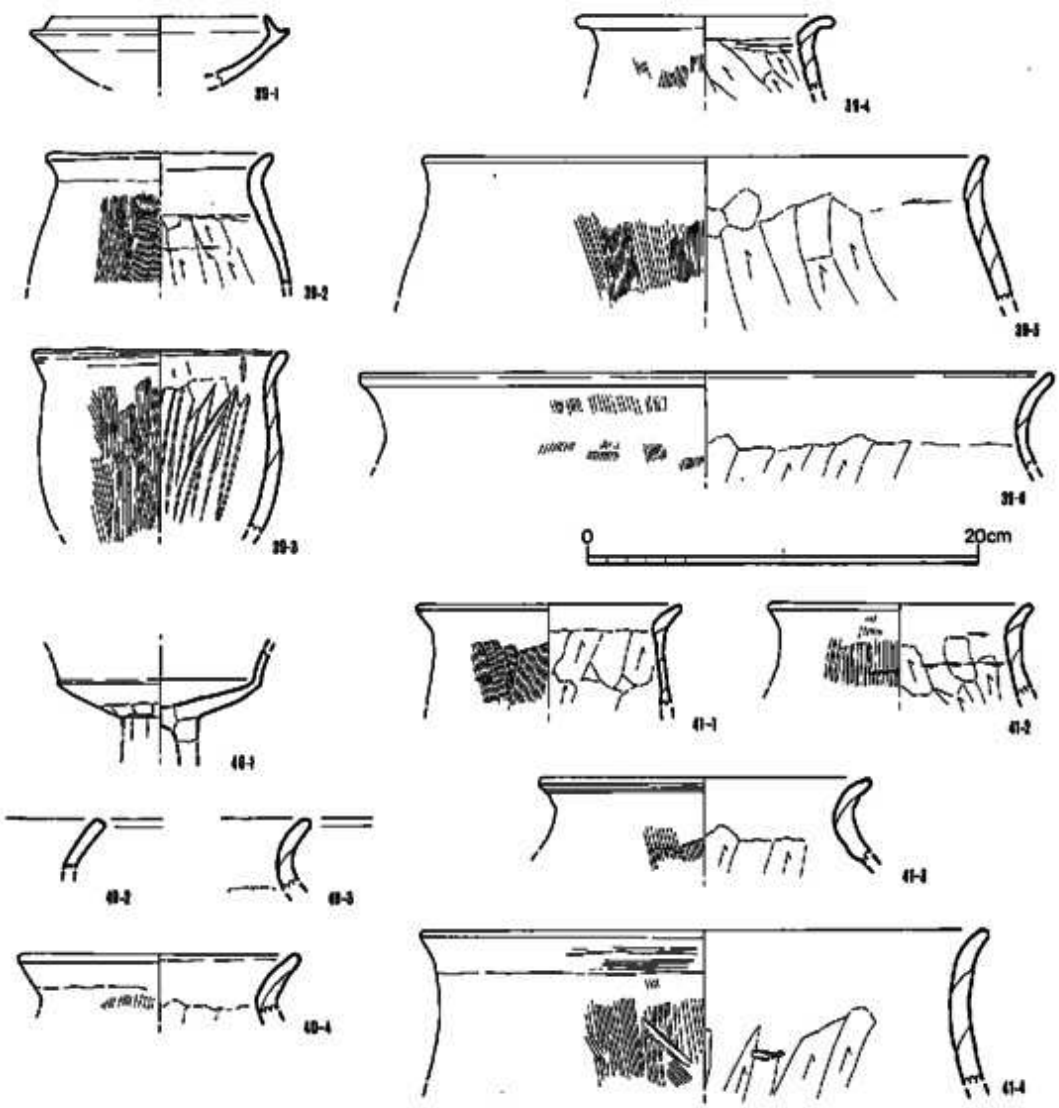


第64図　41号住居跡実測図（1/60）

出土遺物　（第65図）

住居自体の残存が悪いせいもあるが，遺物は極めて少ない。須恵器は皆無で，他は土師器の破片が存するのみである。

土師器　（1～4）　甕のみである。2はカマド内出土で，3は床面に存した。　（伊崎）

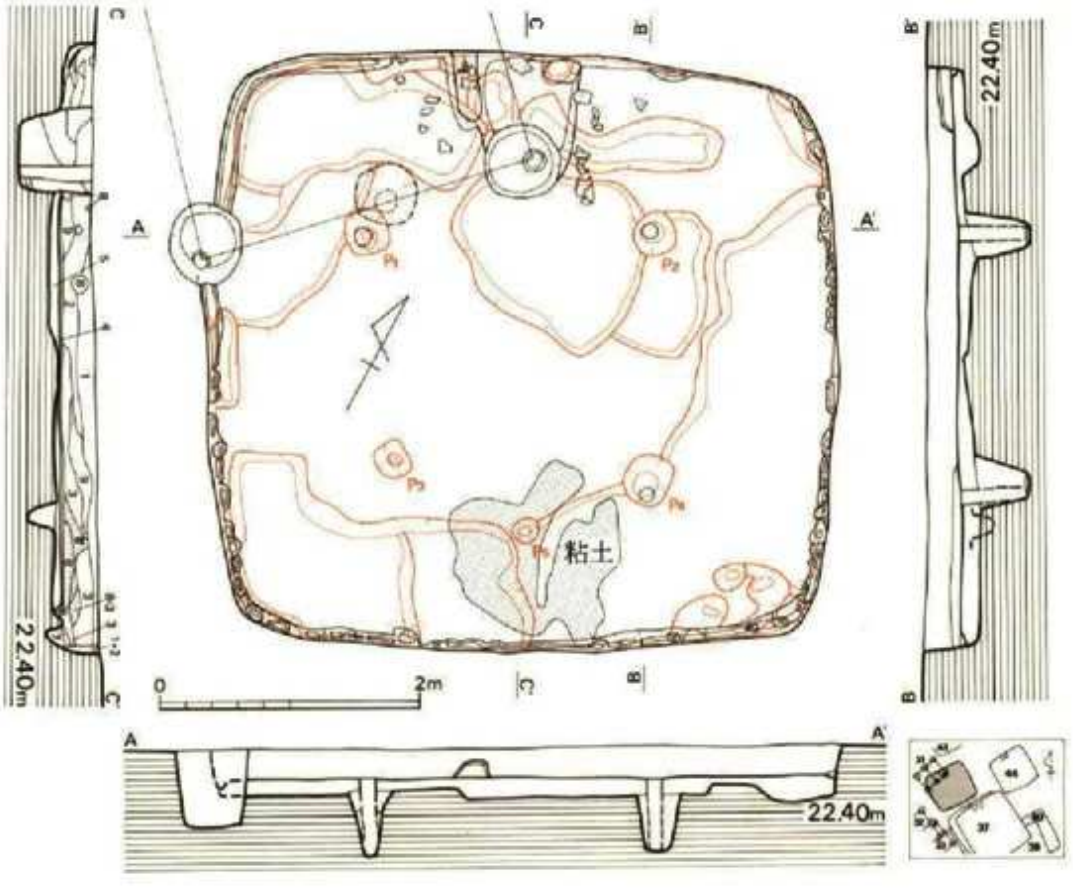


第65図　39～41号住居跡出土土器実測図（1/4）

42号住居跡　（図版14，第66図）

35～38号住居跡のすぐ北西にあり，他の住居跡との切合いは無いが，31号掘立柱建物のピットに切られる。ことにP_6はカマド焚口付近を切っていた。 壁小溝は小ピットの連続といった様相で，一部途切れながらもほぼ全周する。カマド対面に黄色粘土が，また，南側コーナー付近で床面から5㎝程の厚さに黄茶色粘土が存した。下層にはカマド対面粘土の下にP_9がある。また，中央土壙は北側に寄って存した。

カマド　（第67図）　焚口付近が31号掘立柱建物のP_6に切られ，かつ右袖も削除されている。左袖のみの残存は22・26号住居跡のあり方とよく似ている。内部と周辺に土器片が散乱していた。



1．黒茶褐色砂壌土
2．淡黒茶褐色砂壌土
3．黒色土
4．茶褐色粘質土
5．黄褐色粘土混入茶褐色土
6．黄褐色粘質土（やや黒い）
7．黒褐色土
8．黄色粘土
9．黒色土混入明茶褐色砂壌土

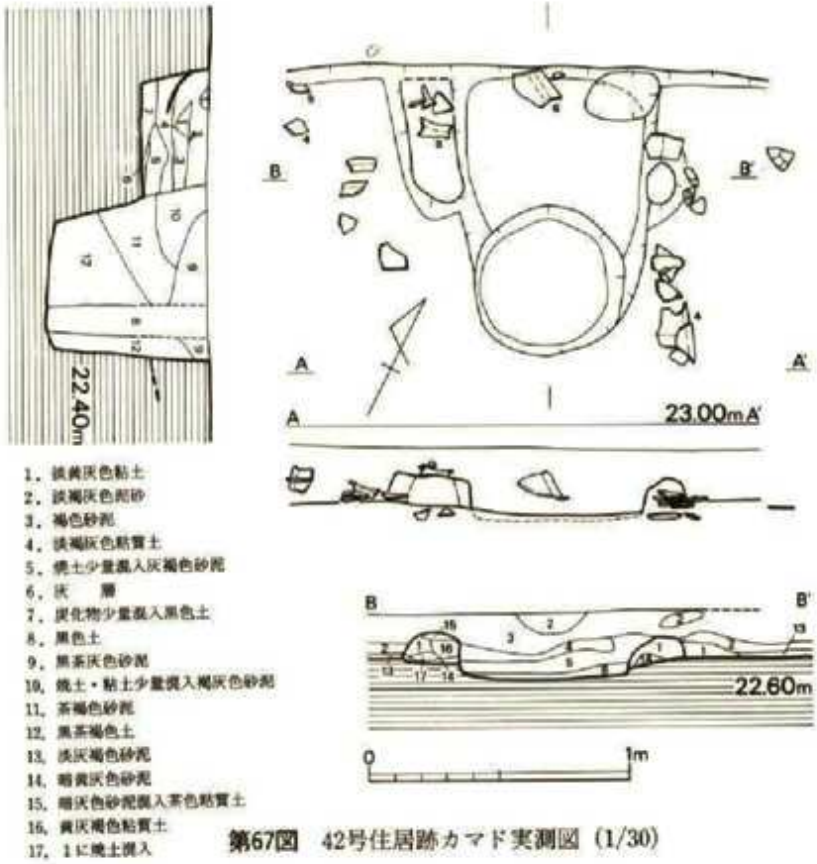
第66図　42号住居跡実測図（1/60）

出土遺物　(図版77，第69図)

カマド内外の土器片以外に，床面に遺物は無かった。埋土中に須恵器甕片1と土師器片若干，手捏土器1が存した。須恵器片は図示しえない。

土師器（1～9）

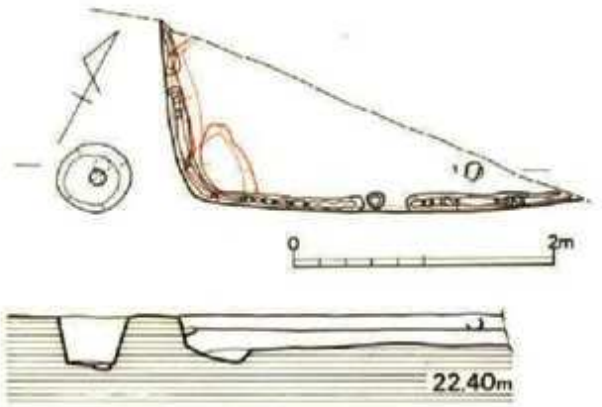
1の精製の高坏と7・9が埋土中で他はカマド内外に存した。6がカマド内，8は左袖上にあった。(伊崎)



第67図　42号住居跡カマド実測図 (1/30)

43号住居跡　(第68図)

42号住居跡の北西にあるが，大半が調査区外にかかり全貌不明である。壁小溝が南東辺で幅30cm強にわたって途切れ，そこに小ピットが配されているのは何かしら意味ありげに思える。南西辺でも1ヶ所途切れるが，溝内に小ピットを持ちつつ全周するのであろう。



第68図　43号住居跡実測図 (1/60)

出土遺物　(図版77，第69図)

床面に密着して土師器が1個ゴロンと横たわって出土した。

土師器　(1)　完形に復される坩である。精良土器であるが，器表は荒れている。(伊崎)

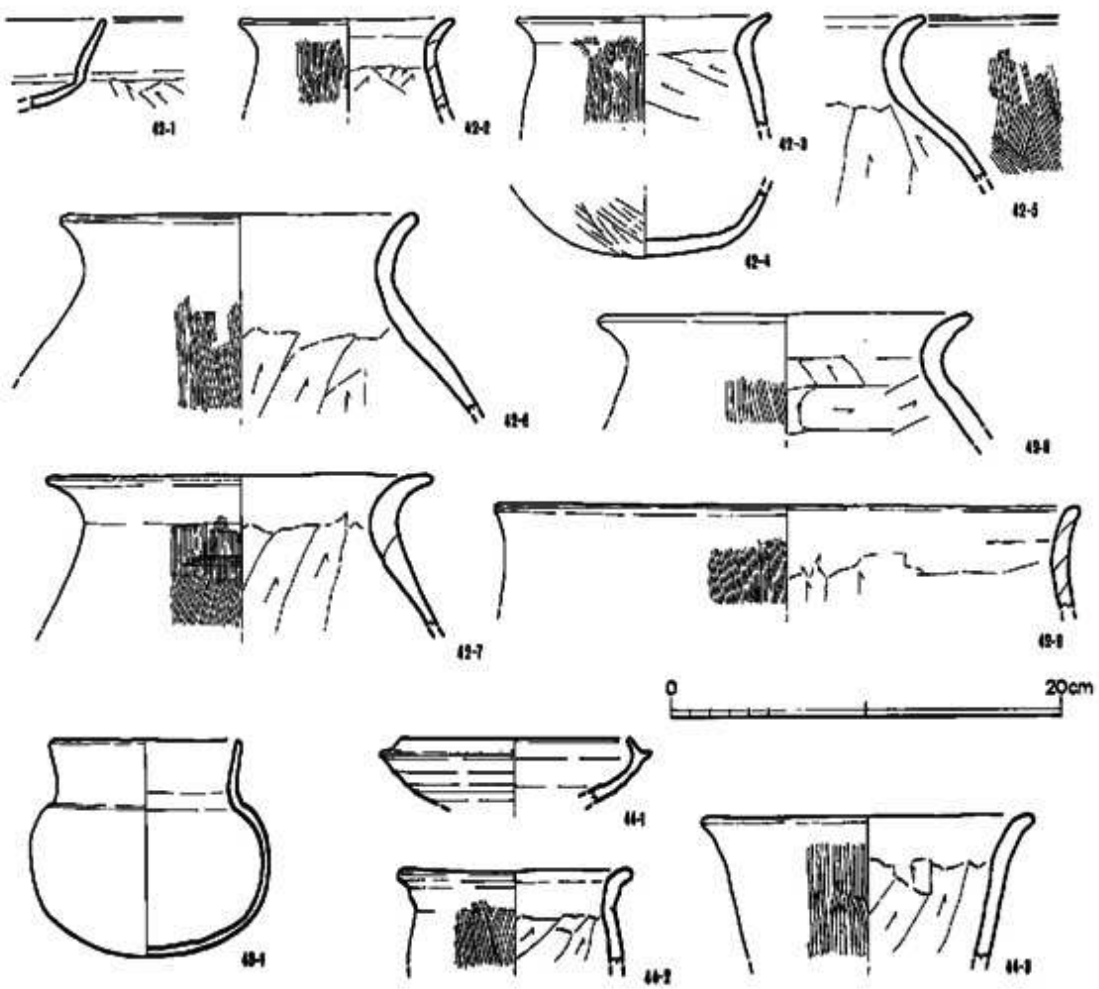
44号住居跡　（図版14，第70図）

切合いはなく単独に存するも，37号住居跡とは南側コーナーで10cmも離れていない。埋土は黒色～暗褐色を呈する砂質土であった。4主柱穴を結んだ形状はやや平行四辺形気味となる。壁小溝はカマドのある壁とその近辺は巡っていない。カマドの上面とカマド対面には黄色粘土が大きく拡がっていた。カマド対面の粘土は，ほぼ検出面の付近から存する。

カマド　（図版15，第71図）　遺存状態は普通である。焚口部幅55cm，奥行65cmを測り，火床部分はやや窪む。内外に土師器の破片が存したのみである。

出土遺物　（第69図）

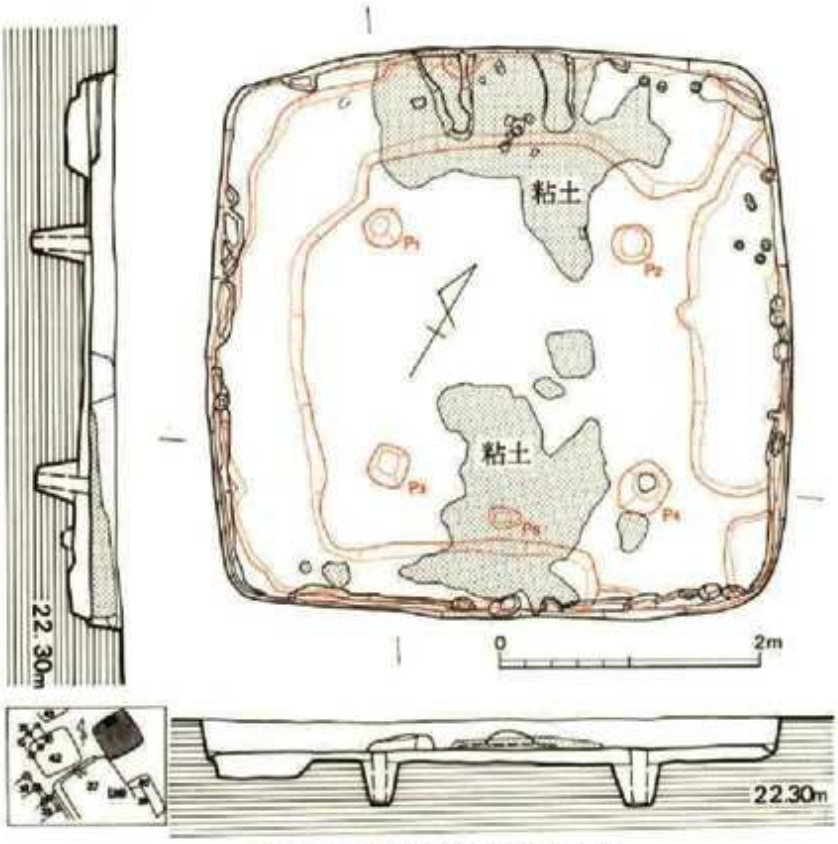
殆ど無かったと言ってよいくらいに少ない。



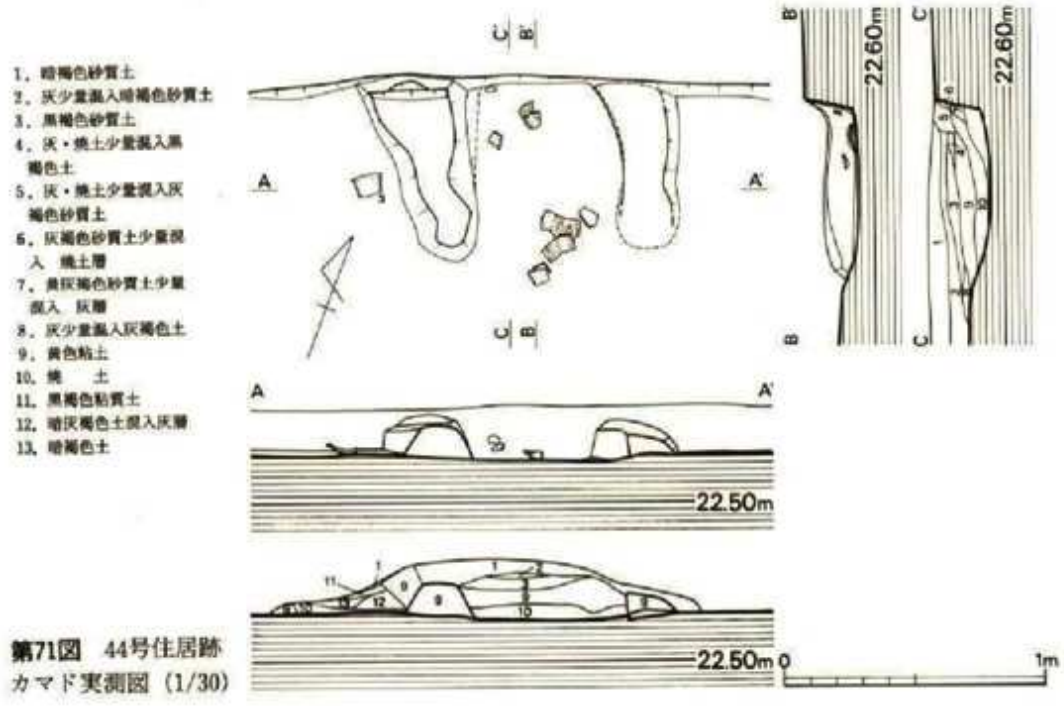
第69図　42～44号住居跡出土土器実測図（1/4）

須恵器　(1) 埋土中に存した。30号・100号住居跡出土品とよく似ている。

土師器　(2・3)　2は埋土中，3はカマド左袖の外側に存した。　(伊崎)



第70図　44号住居跡実測図 (1/60)

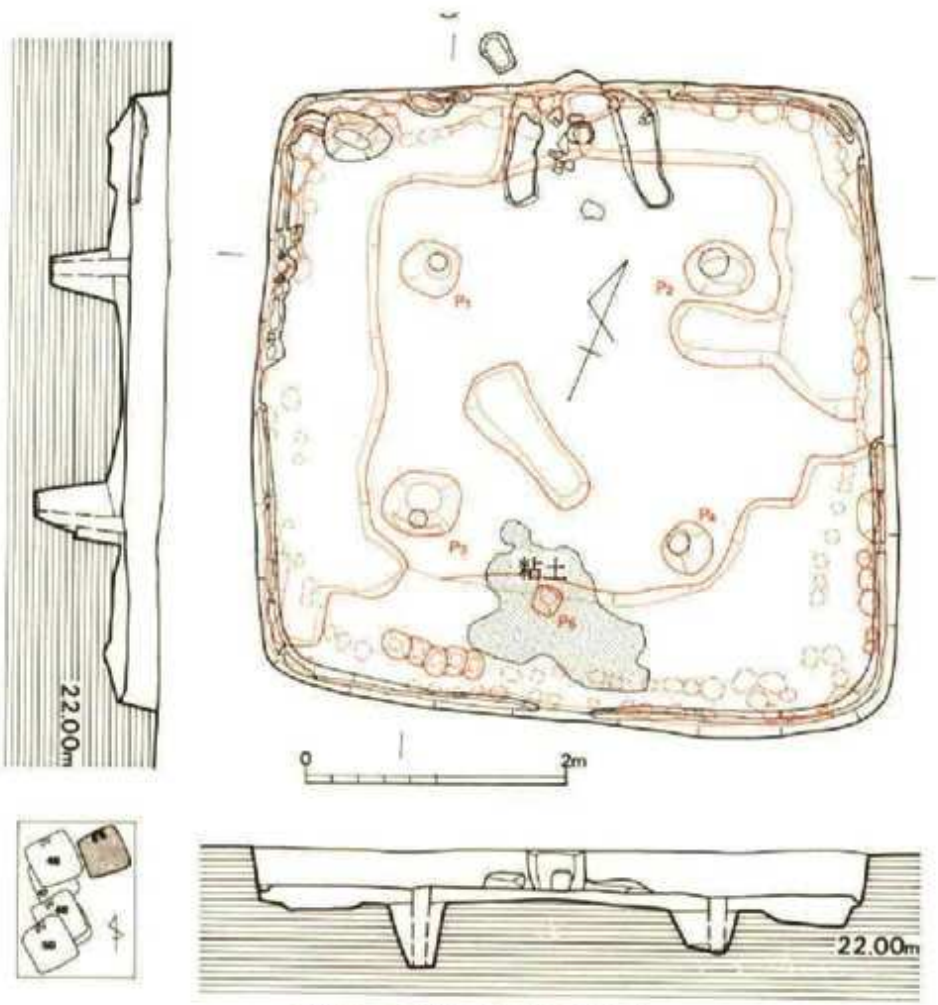


第71図　44号住居跡カマド実測図 (1/30)

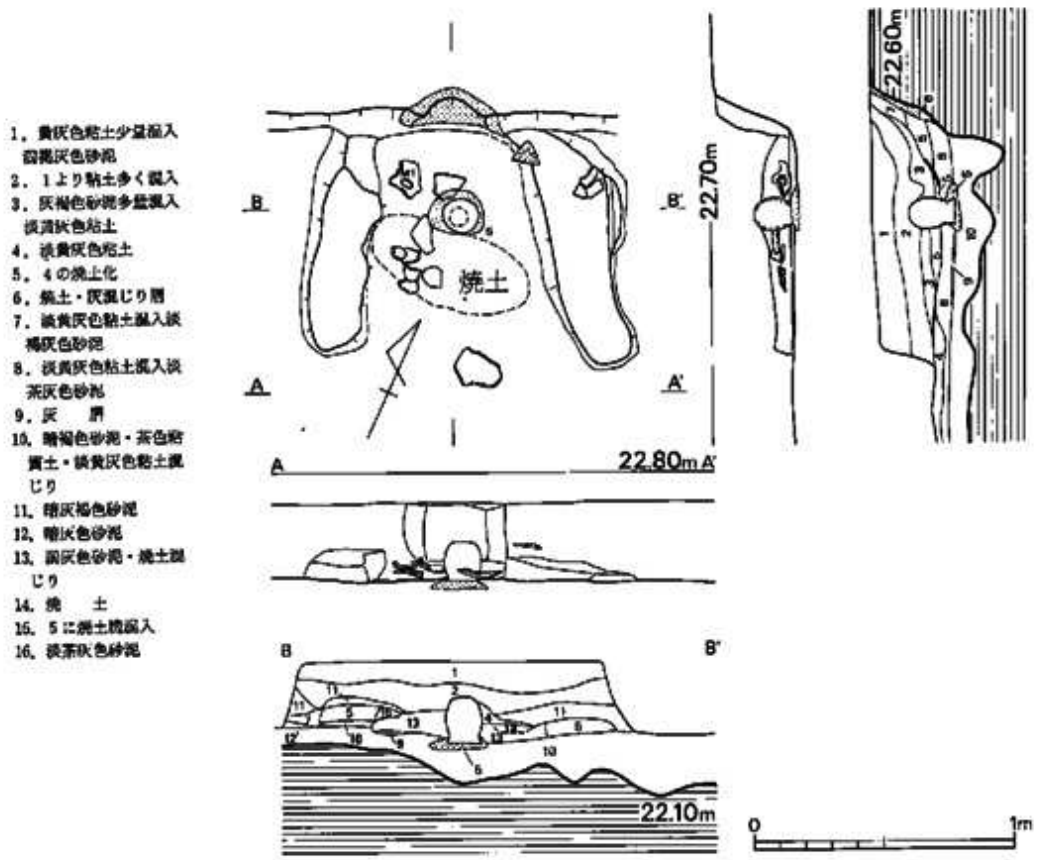
45号住居跡　（図版16・17，第72図）

46号住居跡の東側に単独で存する。主柱穴配置は若干歪んでいて台形状となる。壁小溝は全周するも，四辺の各中央部で途切れるという特徴がある。P_4の柱痕は径15cmであった。カマド対面には黄灰色粘土があり，その下層にP_8がある。下層には四壁に沿って深さ10cm前後のクレーター状の窪みが連続する如く存した。

カマド　（図版17，第73図）　両袖部分は壁高に比して残りが悪いが，甕を転用した支脚はもとの状態で完形ですえ置かれたまま存した。支脚を置く箇所を若干掘りしぼめ，粘土を入れ込んだ甕をそこに逆さに置いて，口縁周辺に粘土を巻き付けて固定している。焚口幅80cm，奥行85cmを測る。煙出し部分がややとび出す形状を示すが，そこは黄灰色粘土混じりの土を塗りこ

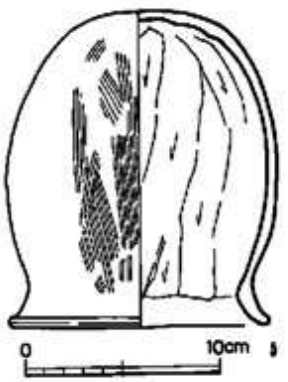


第72図　45号住居跡実測図（1/60）



第73図　45号住居跡カマド実測図（1/30）

めていた。カマド内部左袖寄りに火床面より3cm程浮いて土製模造鏡が出土した。他には土師器甕の破片が内部に，須恵器甕の破片が右袖上面に，周辺に不明土製品1があった。



第74図　45号住居跡カマド支脚実測図（1/4）

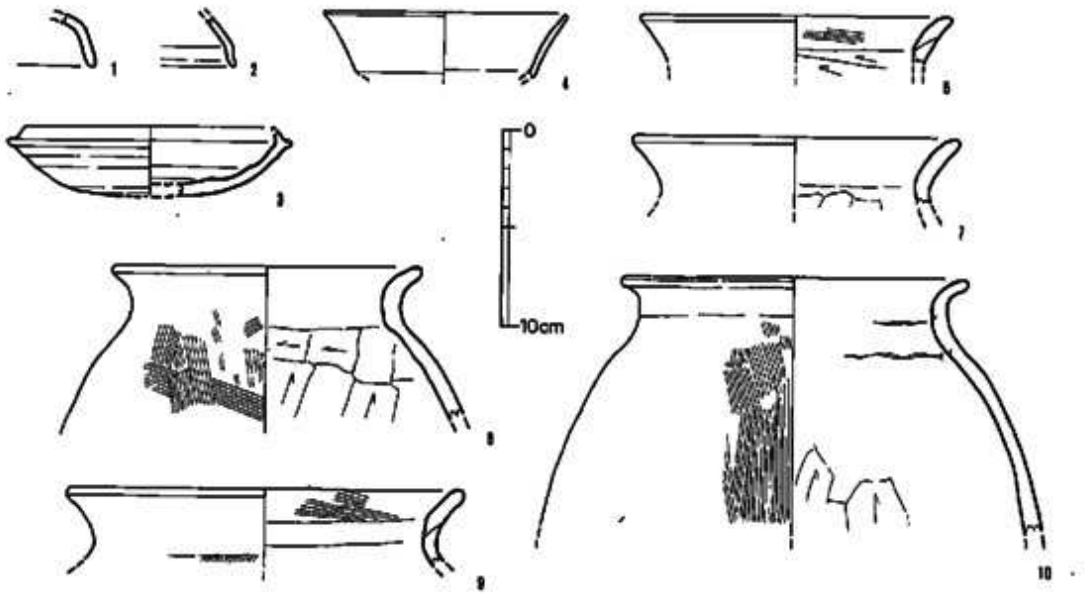
出土遺物　（図版77，第74，75図）

遺物は極めて少ない。床面にも埋土中にも少ししかなかった。カマド内より土製模造鏡1，周辺から不明土製品が出土した。

須恵器（1～3）　1・2は床面に存した。3は口縁端部が打欠かれている。他に高坏があり，これは47・48号住居跡出土品と接合した。また，坏蓋が90号住居跡のものと接合している。

土師器（4～10）　4の高坏，7・9の甕は床面，7はカマド周辺の出土である。5の支脚としていた甕は器高16.2cm。

この住居では，廃絶時にかなり徹底した片付けがなされたものと考えられる。　（伊崎）



第75図　45号住居跡出土土器実測図 (1/4)

46号住居跡　(図版16，第77図)

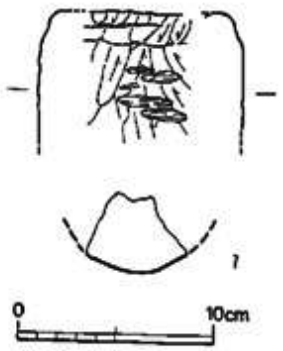
47号住居跡を切り，溝1にカマドの上面を切られる。床面の貼床はしっかりしていたが，47号住居跡との重複部分はやや窪んでいた。P_2が重複しているのは建て直しがあったのかもしれないが確認しえなかった。P_3上面より土師器埦が出土している。

カマド　溝1に切られ，両袖基底部のごく僅かしか残存しない。焚口付近に須恵器横瓶の破片と土製支脚破片が存した。

出土遺物　(図版77，第76・79図)

埋土中の土器は少なく，カマド周辺と床下層に主に遺物が存した。カマド左側の床面から手捏土器1，下層から手捏土器破片が出土している。また，床面から桃かと思われる種子が出土した(図版114)。

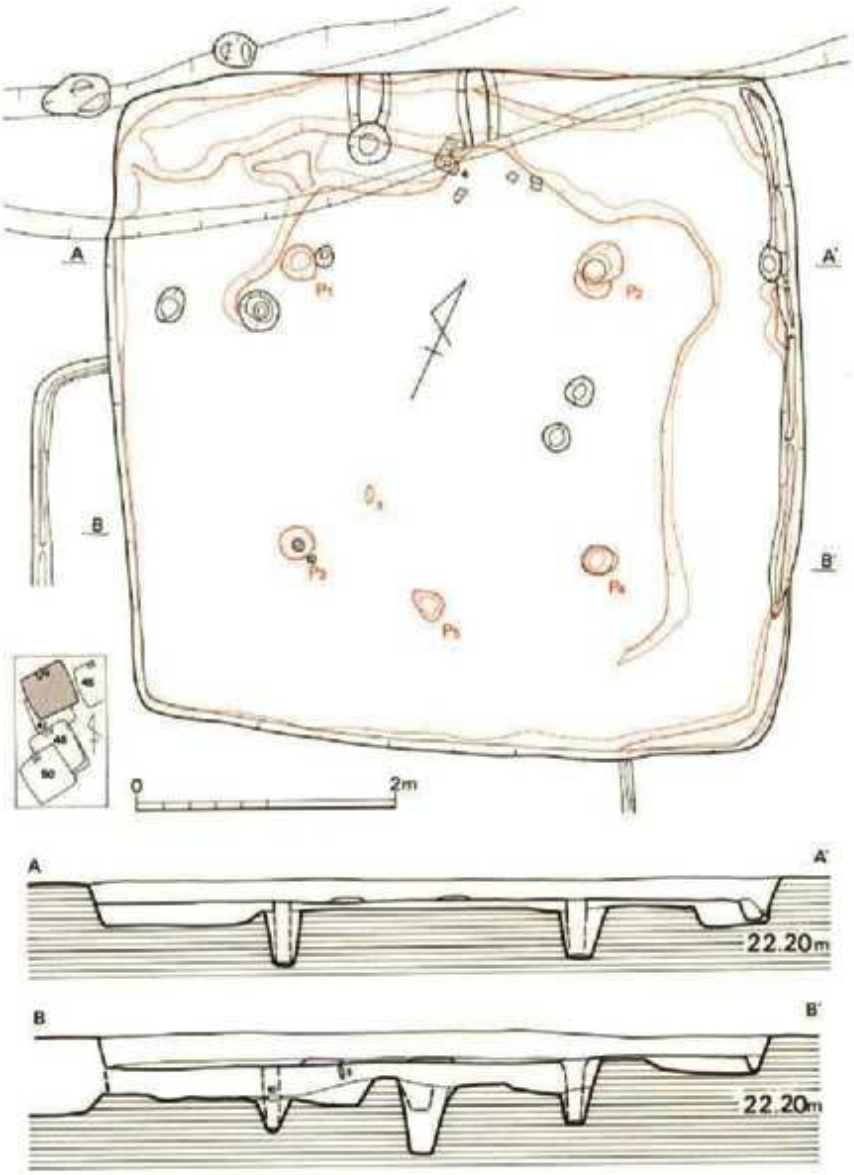
須恵器（1～4）　1・2は床面近くから，3はP_3の近くの床下層から出土した。3は完形品である。4はカマド焚口付近出土で，焼成がややあまい。内面は同心円の当具痕があるが，その同心円の弧線に直交した刻みを持つ当具も用いられている。胴部短径は



第76図　46号住居跡カマド支脚実測図 (1/4)

27.1cmである。また，壺破片もあり，28・29・86・87号の各住居跡出土品と同一個体と思われる。

土師器（5～7）　5は床下層，6は床面近くからの出土である。7はカマド内に残存していた支脚の小破片である。頂部径9cm。二次火熱を受けている。　（伊崎）



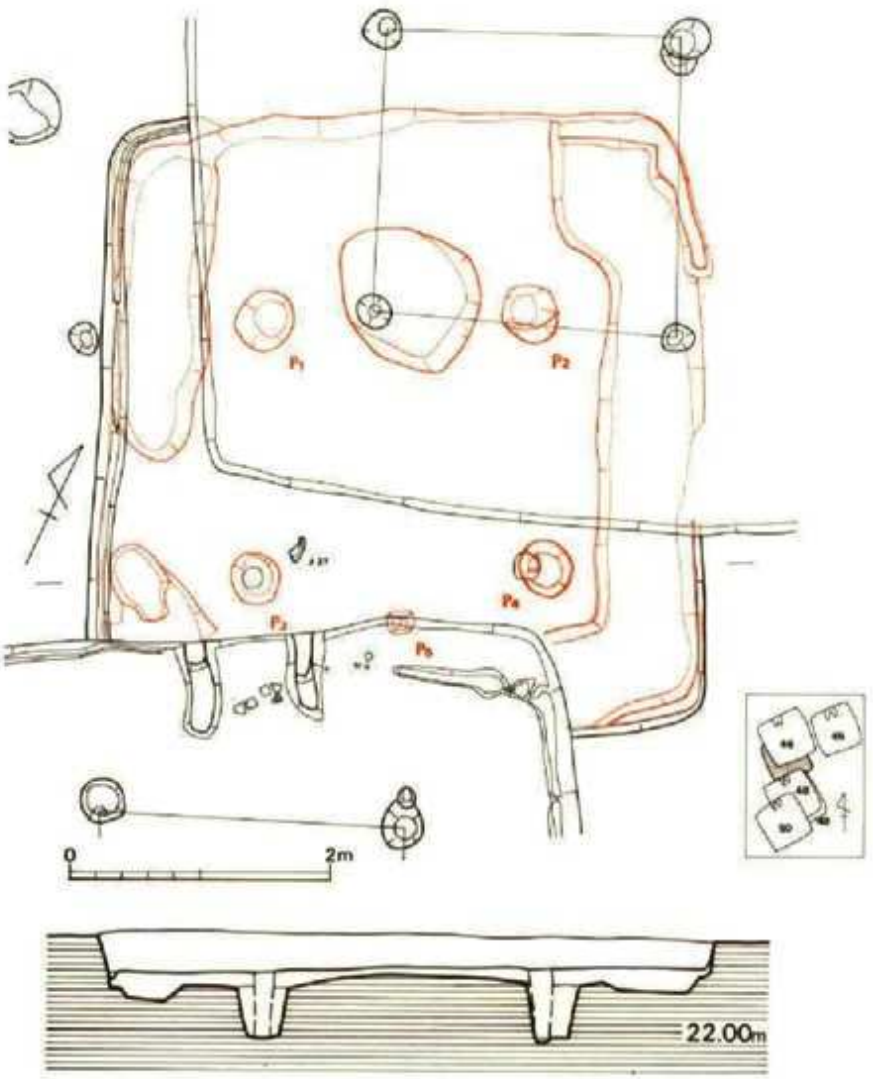
第77図　46号住居跡実測図（1/60）

47号住居跡　（図版16，第78図）

46・48住居跡に切られ⅓程しか残っていなかったが，46号住居跡の下層に，この住居の下層が現れたので規模の復原は可能である。カマドは北西辺にあったとして間違いない。下層の中央土壙はP_1・P_2間に存した。P_3も下層にて確認できた。

出土遺物　（第79図）

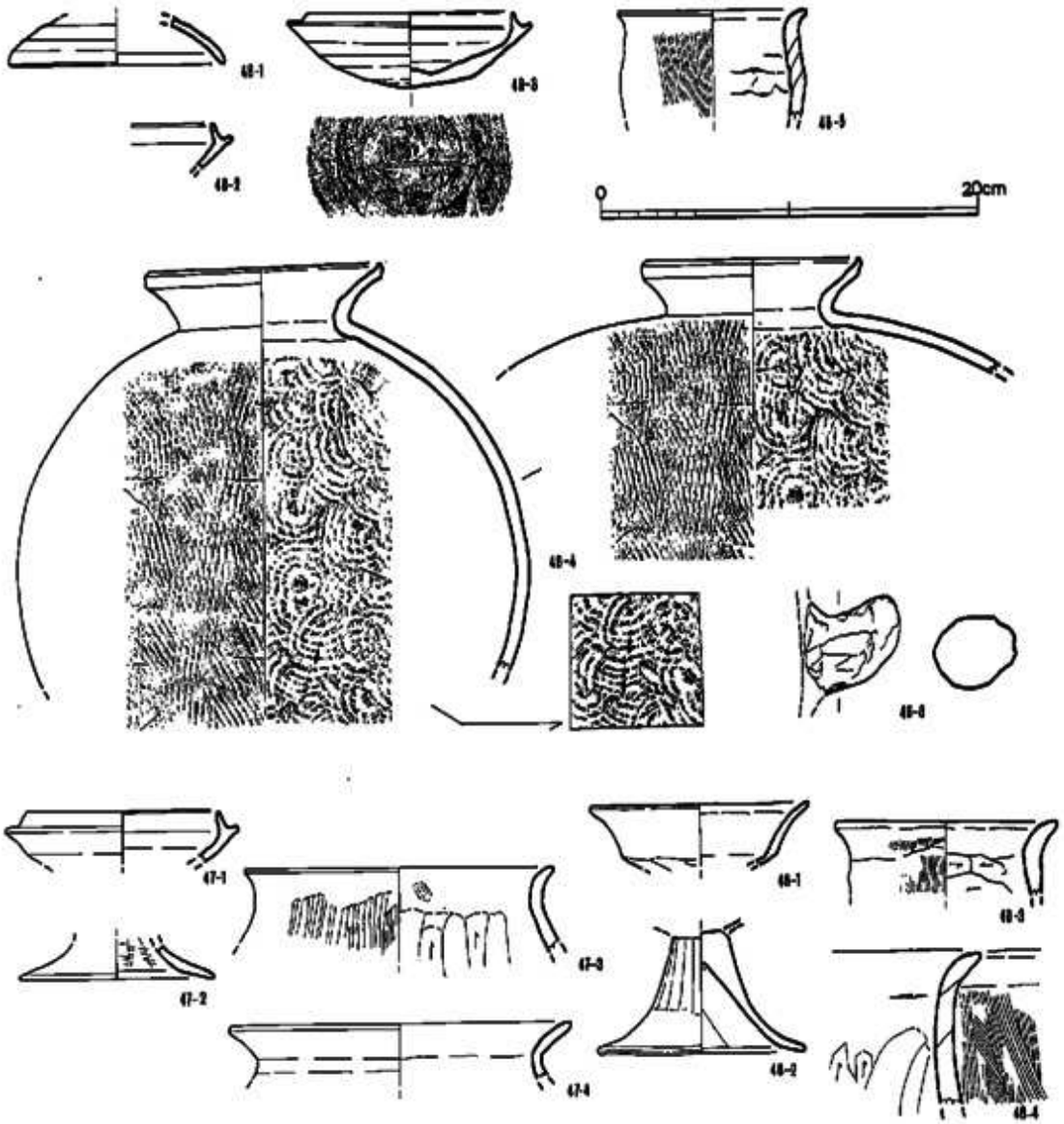
住居自体の残存部が狭小である事もあって遺物は少ない。P_3付近の床下層から出土した須恵器高坏片は45・48号住居跡床面出土品と接合した。



第78図　47号住居跡実測図（1/60）

須恵器（1） 埋土中の出土である。口縁端部を一部打欠いている。他に甕の破片が2点あった。

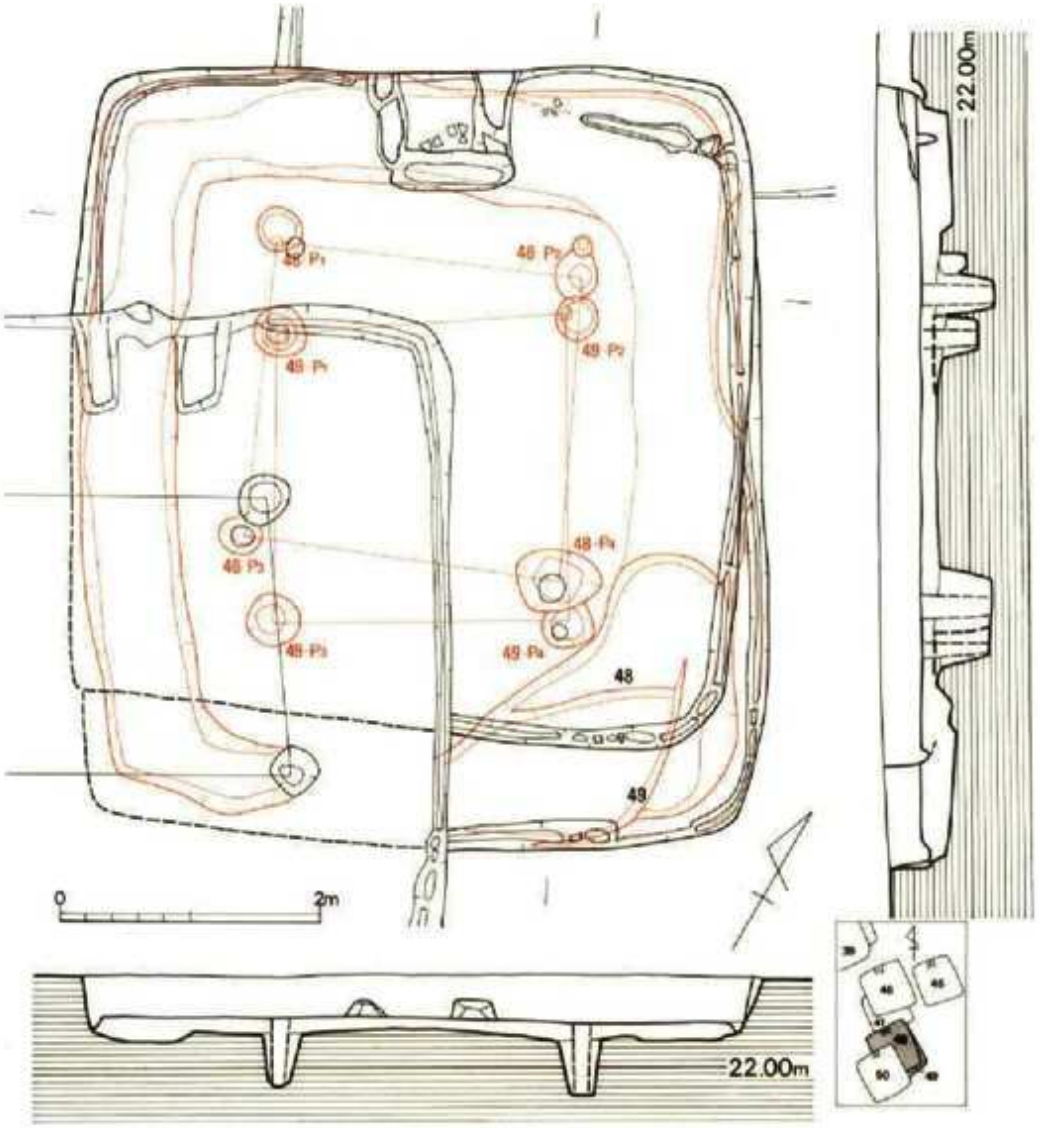
土師器（2～4） 2は床下層から，3・4は埋土中から出土した。4はかなり細身のつくりである。（伊崎）



第79図 46～48号住居跡出土土器実測図（1/4）

48号住居跡　（図版16，第80図）

47・49号住居跡を切り，50号住居跡に切られている。当初は49号住居跡との切合いが摑めず南西辺は49号住居跡のものをそれとしていたが，床面に至って重複のある事に気付いた。よって出土遺物は混入した格好となるが，49号住居跡の残存部分が狭小なので，図示したものは48号住居跡のものとして大過ないと思われる。床面はかなり踏み固められていた。壁小溝は残存部に殆ど巡っている。



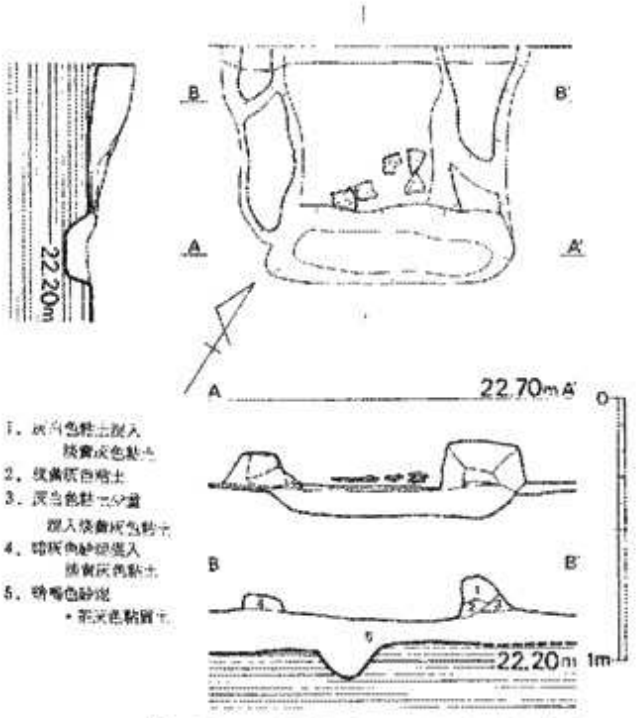
第80図　48・49号住居跡実測図（1/60）

カマド（第81図）　両袖とも残存はするが残りは良くない。焚口付近に横長のピットが掘り込まれている。火床面に土師器片が少し遺存していた。

出土遺物　（第79図）

前述のような取上げであったが，遺物量自体極めて少ない。須恵器は45・47号住居跡出土品と接合した高杯片1点が床面に存したのみである。

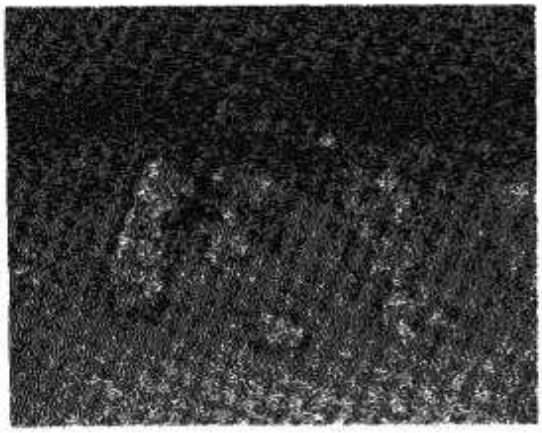
土師器（1～4）　4点ともに埋土中出土である。3の小型甕の内面は煤で真黒になっている。カマド支脚に使用されていたものかもしれない。　（伊崎）



第81図　48号住居跡カマド実測図（1/30）

49号住居跡　（図版16，第80図）

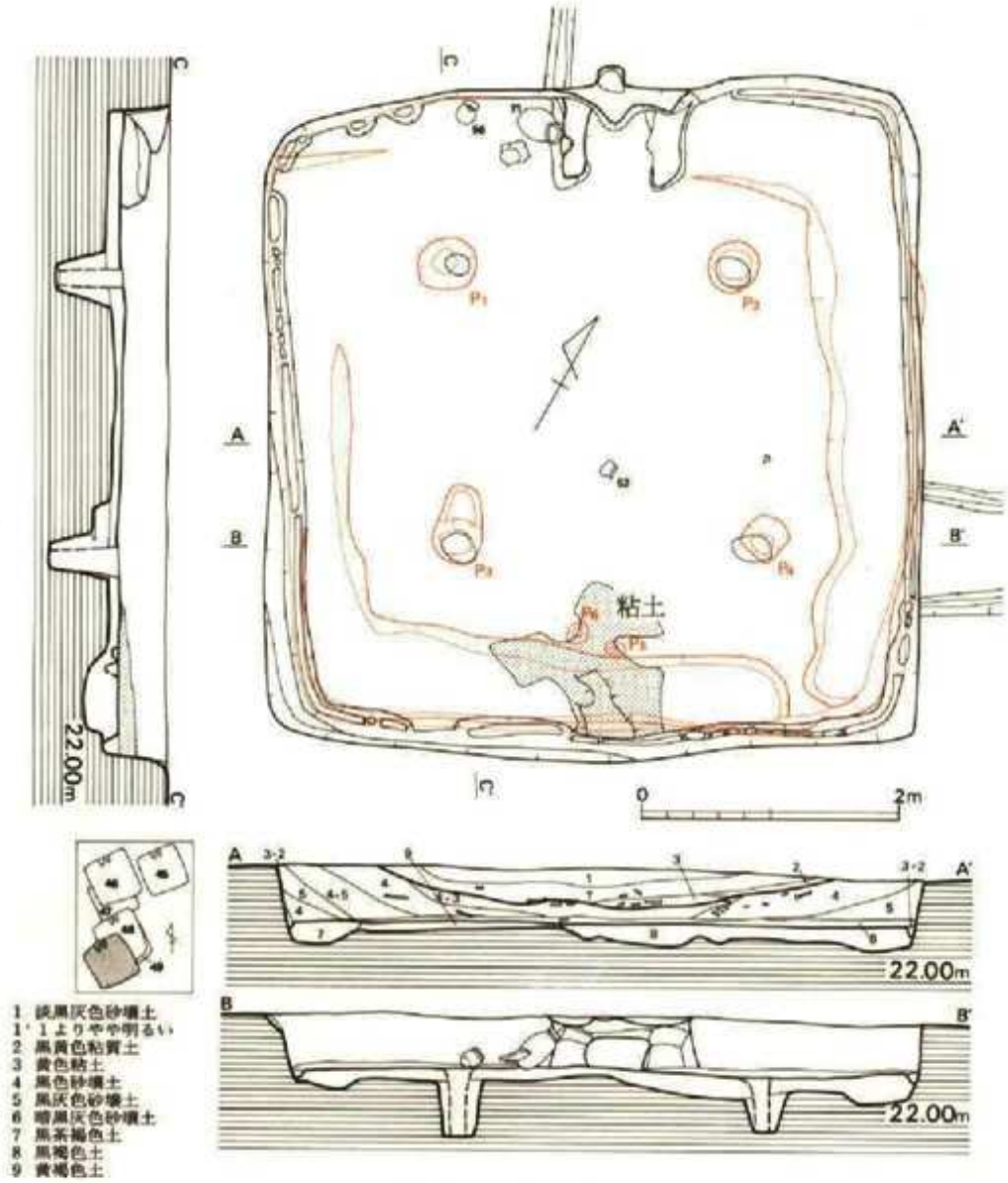
48号住居跡の項で述べたような事情であった。北東辺は48号住居跡のカマドの真下あたりにあったと想定でき，かなり縦長のプランであったと思われる。この事は，P_4と北東壁・南東壁までの各距離の差からも伺い知れるところである。床面のレベルは48号住居跡と殆どかわらなかった。壁小溝は本来は全周していたものと考えられる。　（伊崎）



第82図　45号住居跡カマド

50号住居跡　（図版16・18・19，第83図）

48・49号住居跡を切って営まれている。この住居は立野遺跡の中では最も残りのよかったものである。この住居を廃棄した後，まず黒灰色土が壁際に斜めに流入し，次に黒色砂壌土が堆積するのと併行して遺物の投棄がなされ始めている。そして，更に黄色粘土が投棄された時には，すり鉢状の窪みになっていた。その後も黒灰色砂壌土の堆積と併行して多くの遺物が投棄

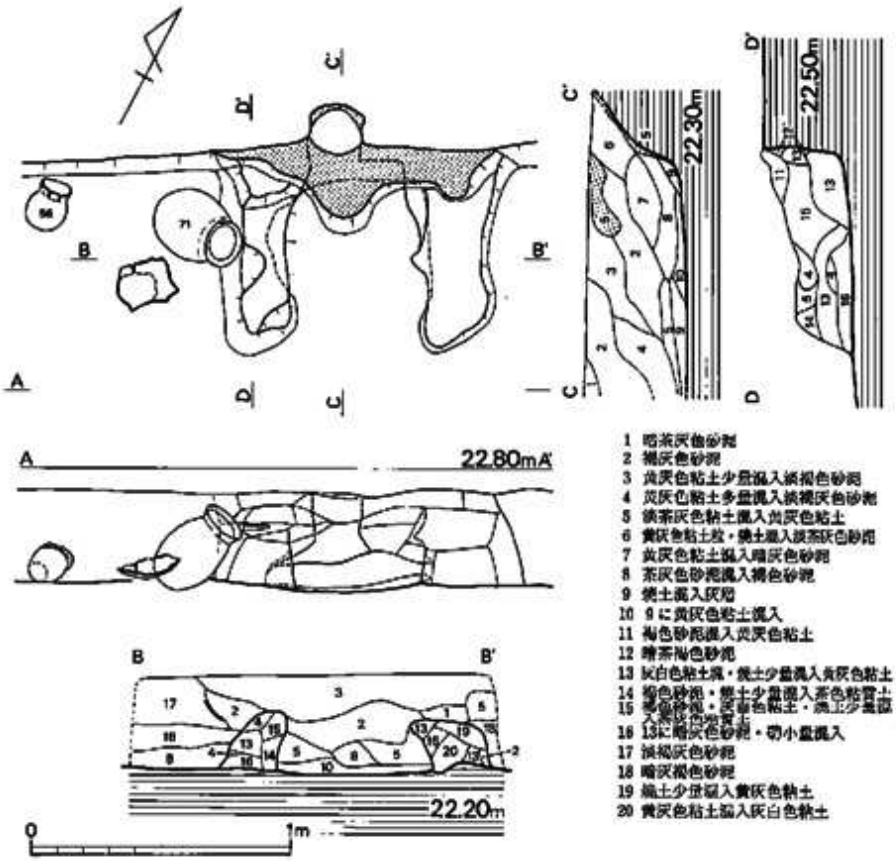


第83図　50号住居跡実測図（1/60）

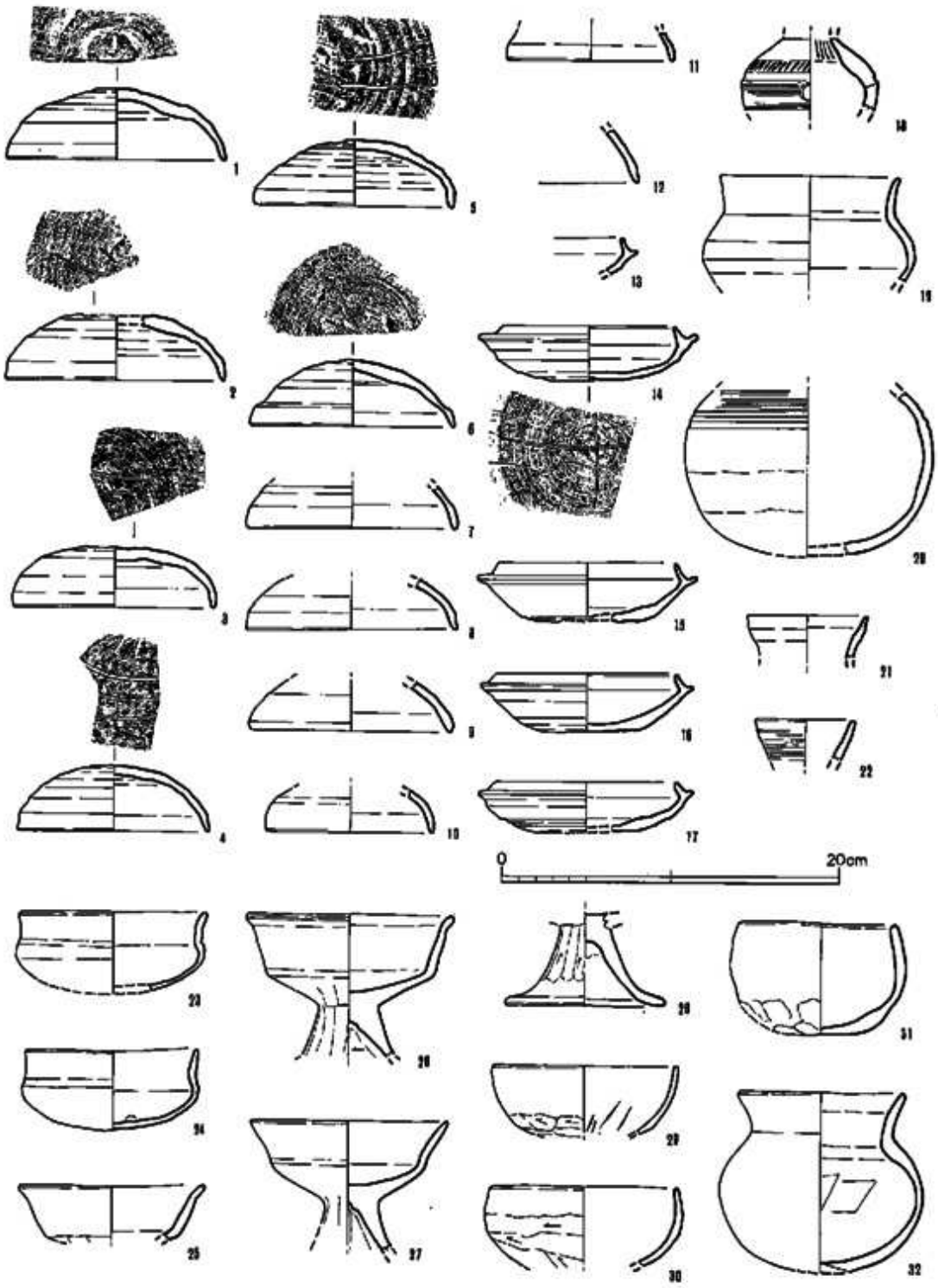
されている。つまるところ，かなりの量の土器等が投棄されて出土した。床面はしっかり固められており，床面上に2～3cmの厚さで黒灰色土が帯状に認められるのは，本来何か敷いてあったものが腐蝕した痕跡なのかもしれない。カマド対面には黄色粘土が壁側から内側へ傾斜をもって床面にくっついて存した。壁小溝はほぼ全周する。下層に中央土壙はなく，カマド対面粘土下には2つのピットがみられた。

カマド（図版19，第84図）　立野遺跡の中では最も残りが良かった。焚口幅47cm，奥行67cm程で天井部の一部が崩れかかりながらも遺存していた。黄灰色粘質土を基調とした粘土でつくられている。煙出しは奥壁が火床面から15cmばかり急傾斜で立上った後，外側へ屈折してのびてゆく。上面で確認した煙出し部の孔径は15～20cmであった。

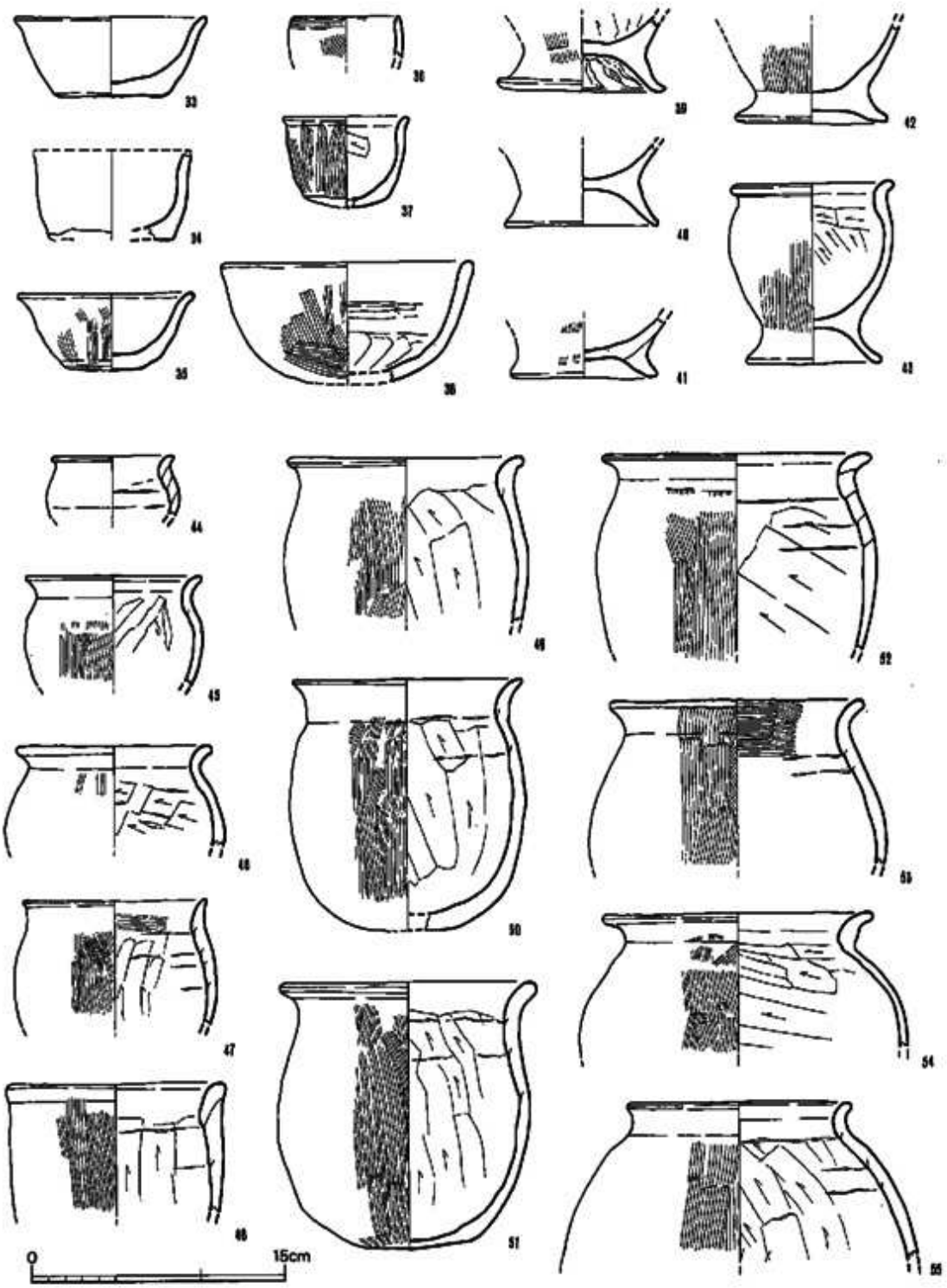
左袖に寄りかかって完形の甕1，そのやや手前に甕底部破片，その左側に脚台を手前に向けて横倒しになった完形の脚台付甕，更にその左に中型の甕が横位にて出土した。孰れも土師器である。但し，脚台の付いた甕は検出後の写真・実測以前に何者かに持ち去られてしまった。また，左袖の斜め南前方の床面上に作業台に使用したと思われる石があった。他にカマド付近にて鉢・脚台・手捏土器各1点が出土している。



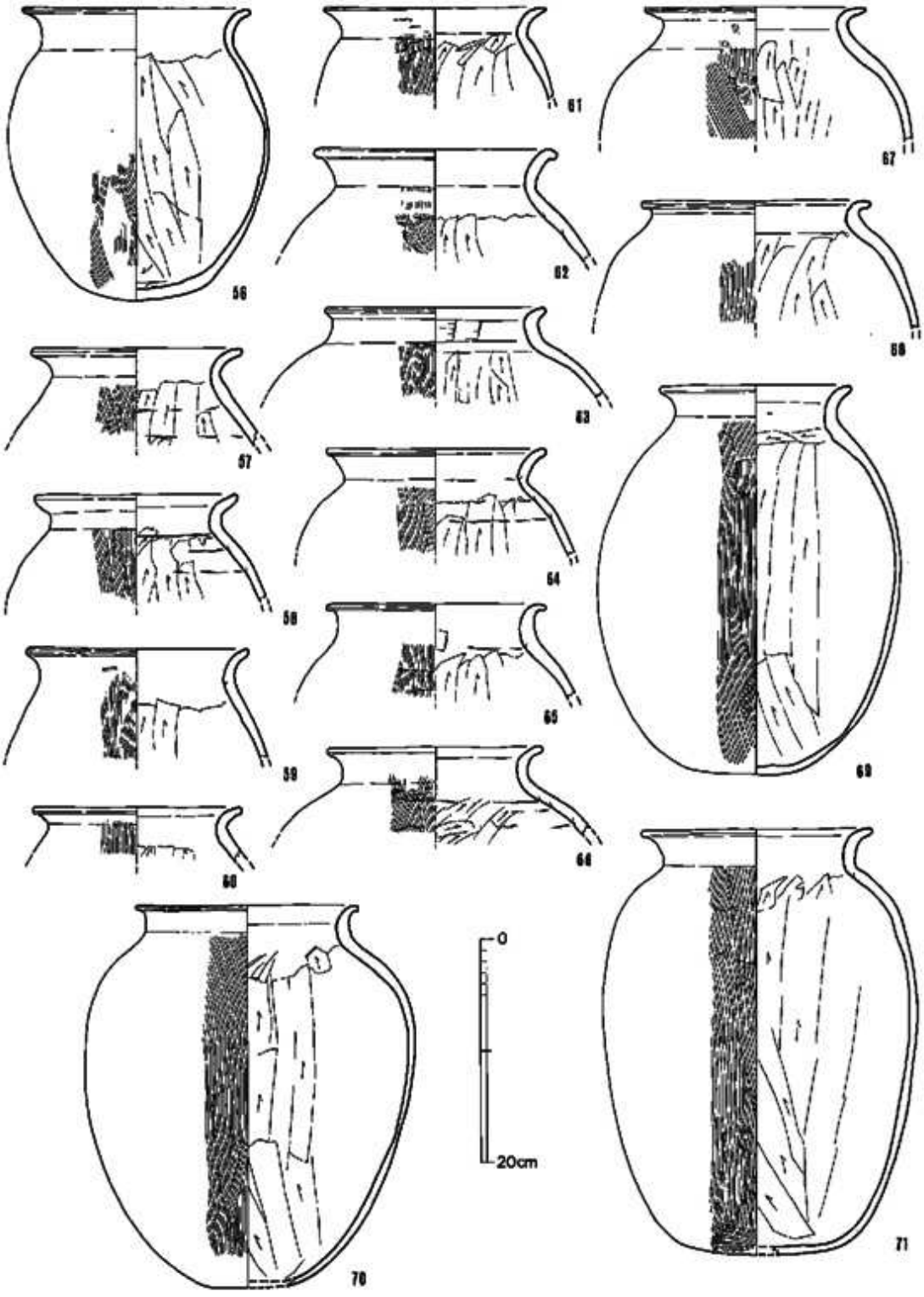
第84図　50号住居跡カマド実測図（1/30）



第85図　50号住居跡出土土器実測図①（1/4）



第86図　50号住居跡出土土器実測図②（1/4）



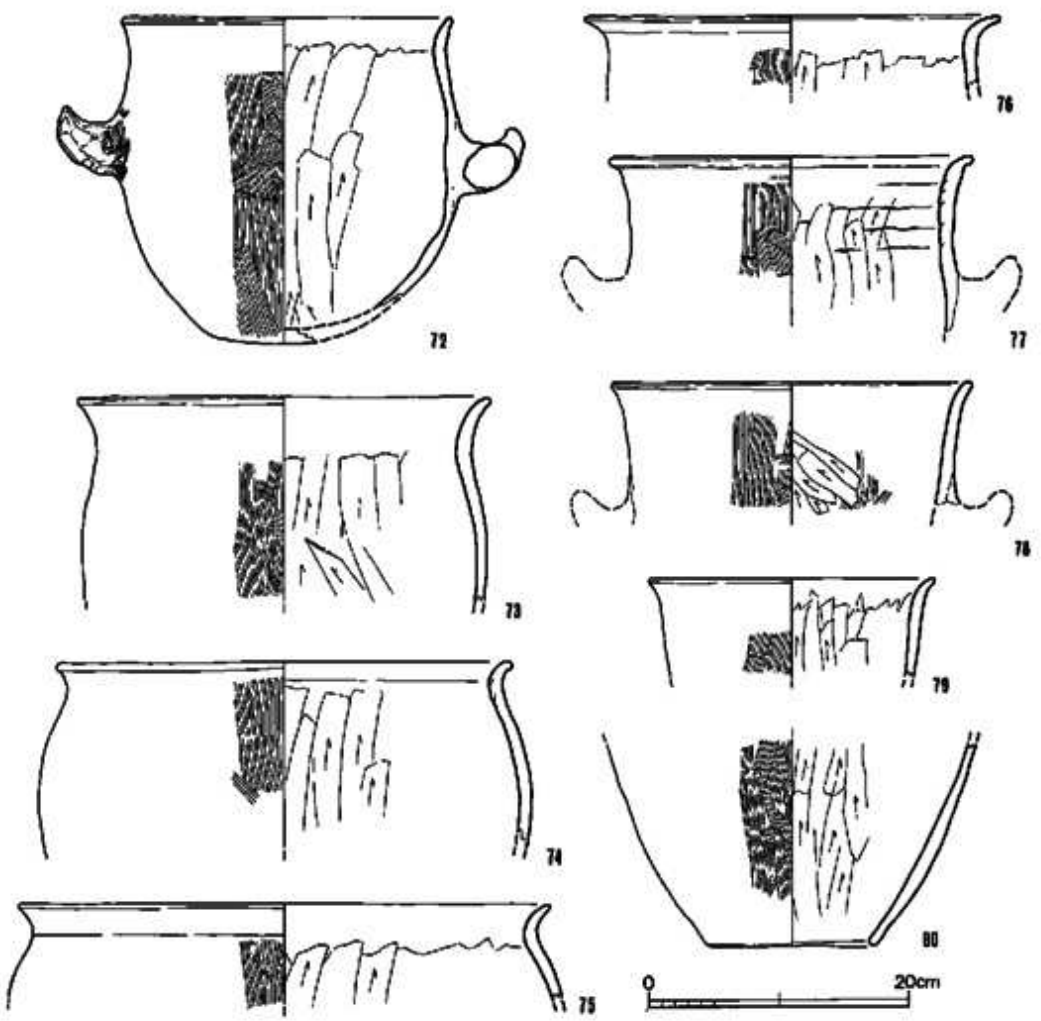
第87図　50号住居跡出土土器実測図③（1/6）

出土遺物　（図版78～80，第85～88図）

上記のカマド周辺を除いて床面に存したのは，土師器坩（32）・甕（52）と手捏土器（85）のみで，他は多量の遺物が埋土中から出土した。通常の土器以外には，鉄器（鎌1・手鎌1・鏃1），砥石1，手捏土器6，把手状と不明の土製品各1，桃の実らしき種子があった。

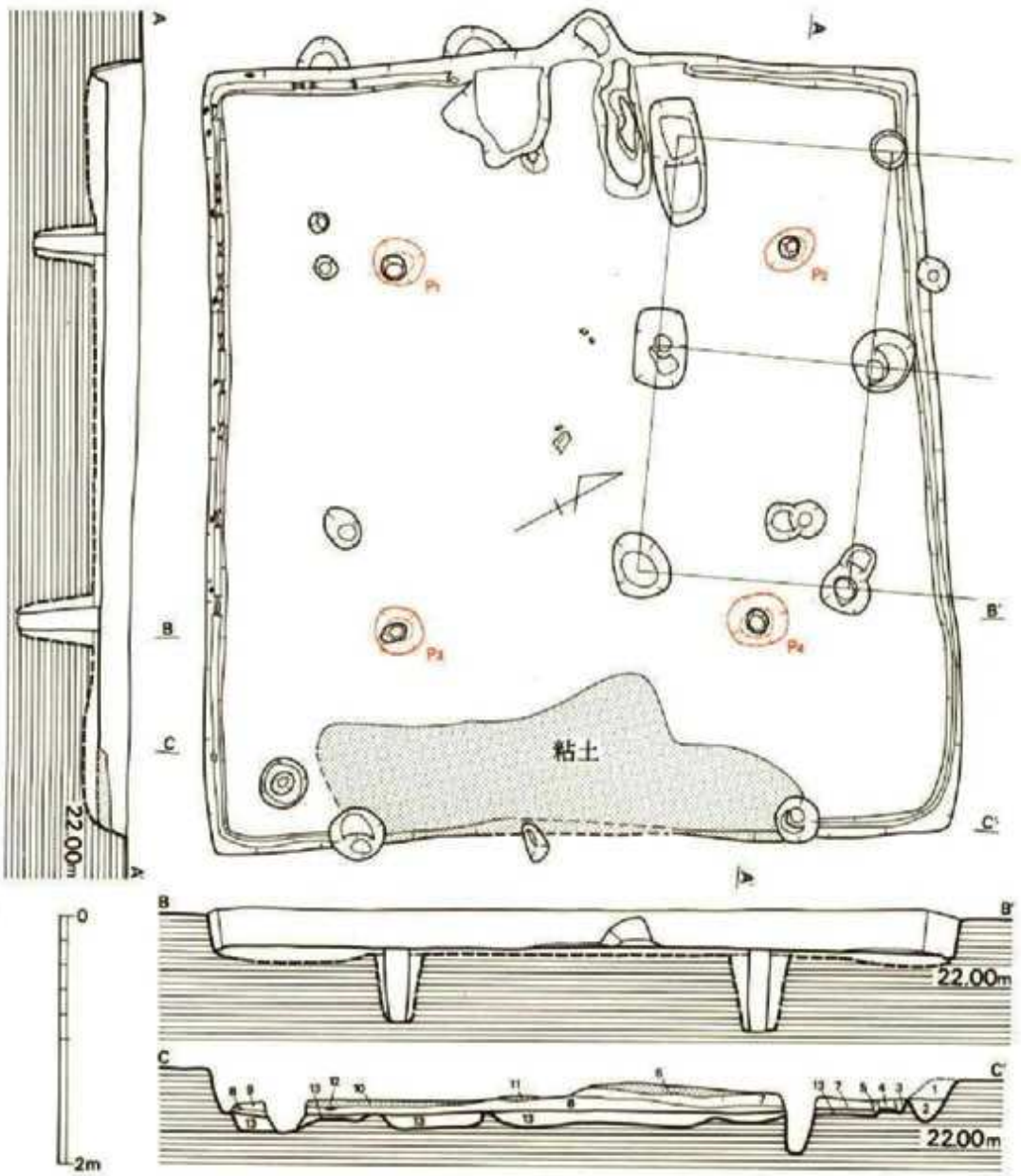
須恵器（1～22）　全て埋土中の出土である。3・4・8は胎土・焼成・ヘラ記号ともによく似たもので，79・30・28号の各住居跡からも同様のものが出土している。また，坏蓋・坏身・壺・壺脚で他の住居跡出土品と接合，もしくは同一個体と認められるものがある。

土師器（23～80）　23～32は精製品である。43は脚台の付く小型甕で完形に近い。32・52が床面，71・56がカマド左，38・40がカマド周辺の出土で他は全て埋土中に存した。また，甕2点が27号住居跡出土品と接合した。　（伊崎）



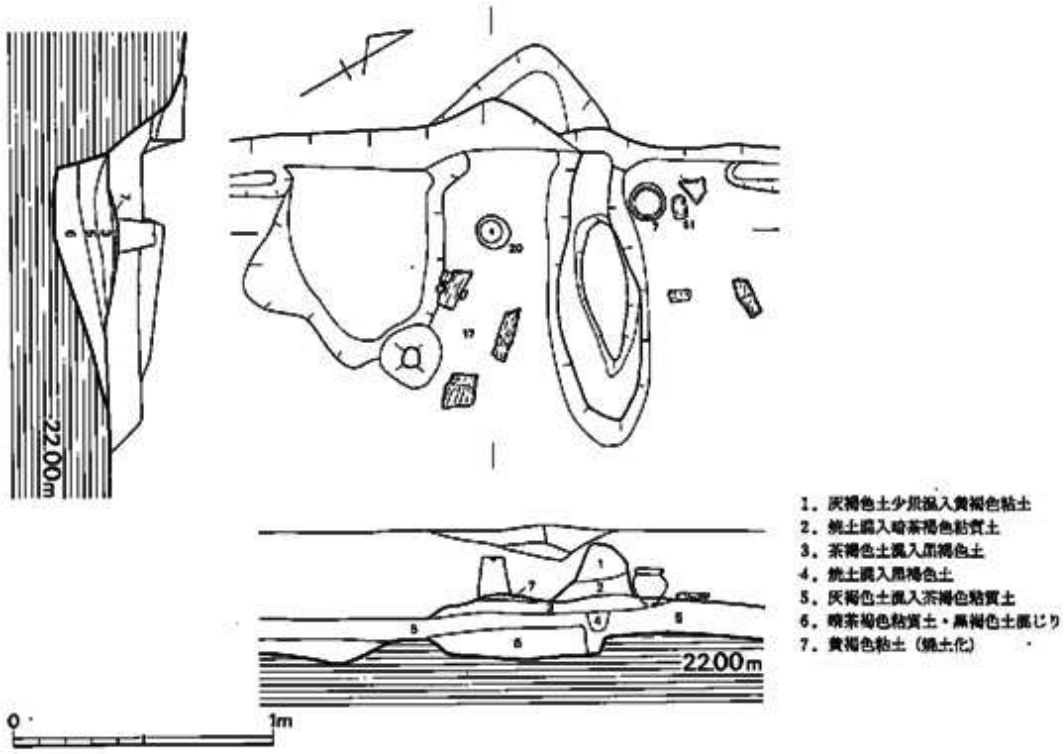
第88図　50号住居跡出土土器実測図④（1/6）

51号住居跡　（図版20，第89図）



1．暗黒灰褐色土　2．暗茶褐色土混入黒褐色土　3．黒茶褐色土
4．暗茶褐色粘質土　5．3に灰色土少量混入　6．黒褐色土少量混入茶褐色粘質土
7．3に黒褐色土混入　8．4と黒褐色土混じり　9．黒褐色土
10．灰褐色土少量混入茶褐色粘質土　11．黒褐色土少量混入黄褐色粘土　12．暗黒褐色土
13．8に黄色粘土混じり

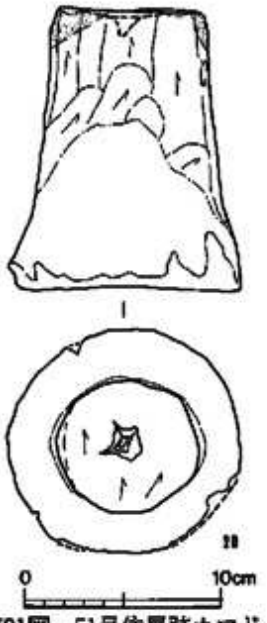
第89図　51号住居跡実測図（1/60）



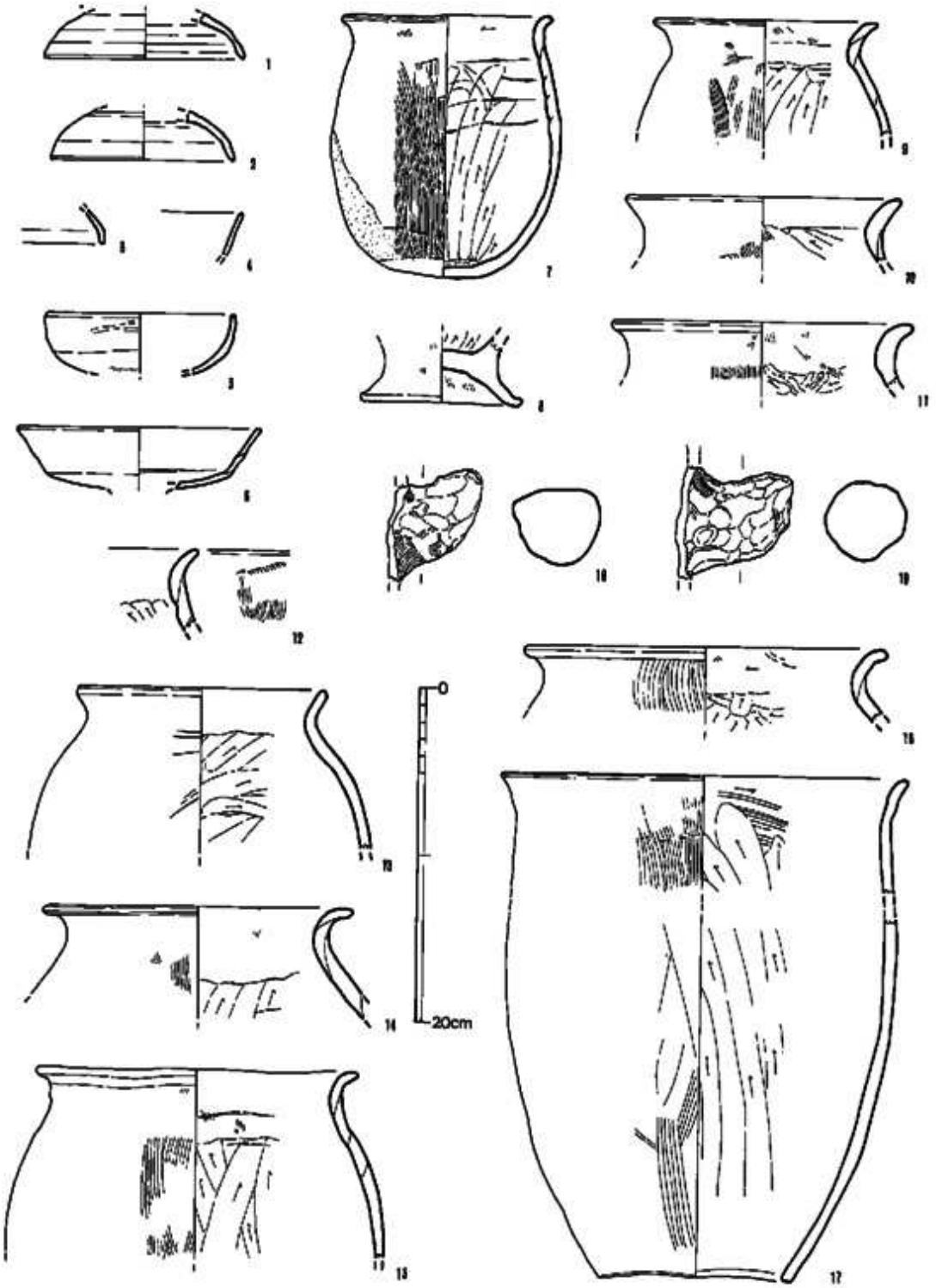
第90図　51号住居跡カマド実測図（1/30）

21号住居跡より東７ｍに位置し，52号住居跡を切り34号掘立柱建物に切られている大型の住居跡である。平面形態は南東部隅が僅かに張り出し気味となるが，略隅円方形を呈している。主柱穴の配置も一般的である。壁小溝はカマド部・カマド対面を除き巡っており，溝内に小穴がやや規則的に確認された。壁面にも小穴と略同じ位置に杭状痕が認められた。カマド対面粘土は南東壁に沿って幅広く散布している。床面は主柱間エリアが著しく硬化していた。床面上より出土した遺物は僅かであった。床下層は明瞭な掘り込みではなく，やや凹凸をなし主柱穴周辺から壁際に向って緩やかに下っている。P_3～P_4間の略中央にP_8が存した。

カマド（図版20，第90図）　北西壁略中央に付設されている。左袖の大半を後世の柱穴で壊されていたが，支脚は円柱状土製品が粘土で固定された状態で出土した。左袖外床面上より支脚として使用されたであろう甕と叩石が出土した。



第91図　51号住居跡カマド支脚実測図（1/4）



第92図　51号住居跡出土土器実測図（1/4）

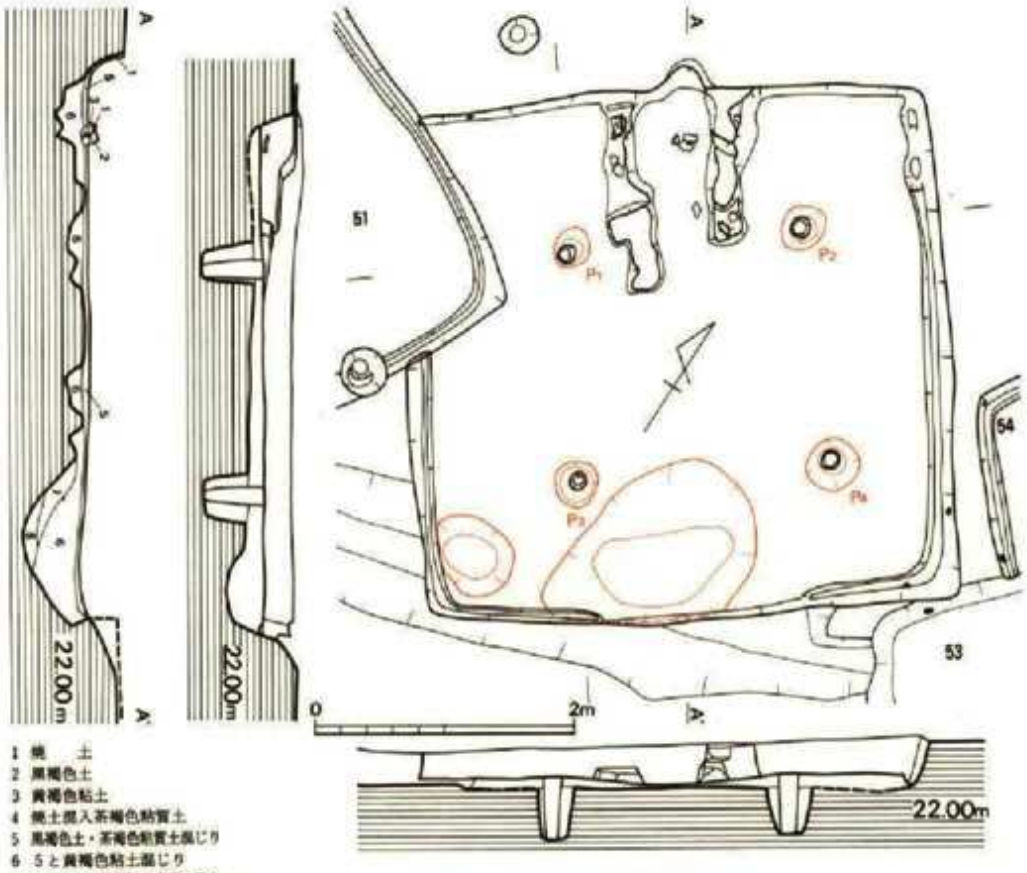
出土遺物　（図版81，第91・92図）

総出土量は少ない部類に属し，大半以上が埋土中より出土したものである。手捏土器２点とも埋土中より，不明土製品がカマド内及び埋土中より出土した。鉄器も埋土中よりの出土である。

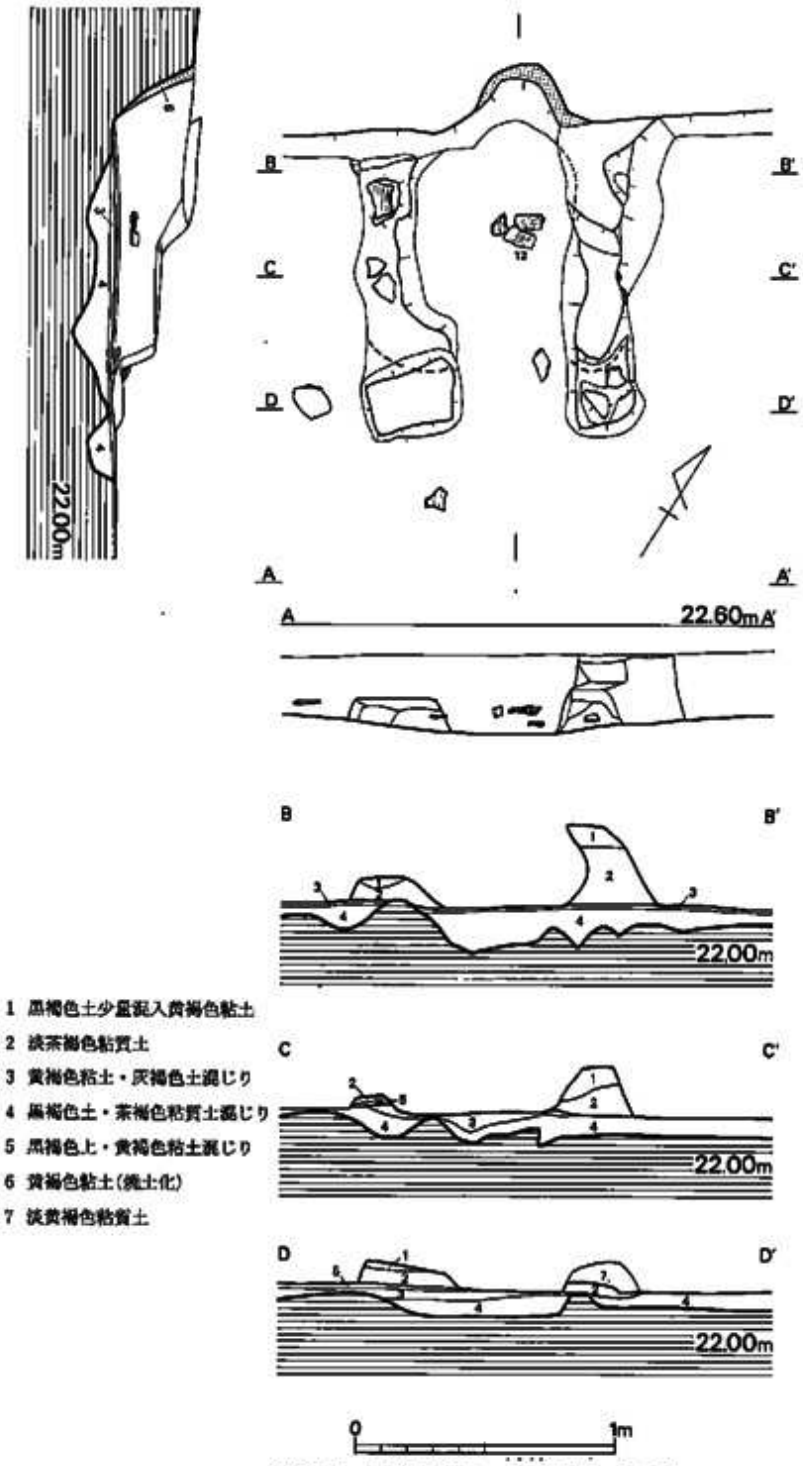
須恵器（１～４）　坏蓋の３は床面より，１は床面下層より，２と高坏の４は埋土中より出土した。

土師器（５～19）　甕は中～大型が殆どで，７・９と15がカマド周辺より出土したが他は埋土中より出土した。甑の17は同一個体になると思われるが，口縁部周辺がカマド周辺部より，下方がカマド内より出土した。高坏と思われる６がカマド右袖内より出土したのは注目される。精良な埦５は埋土中より，台付甕と考えれる８は床面下層より出土した。　（武田）

52号住居跡　（図版21，第93図）



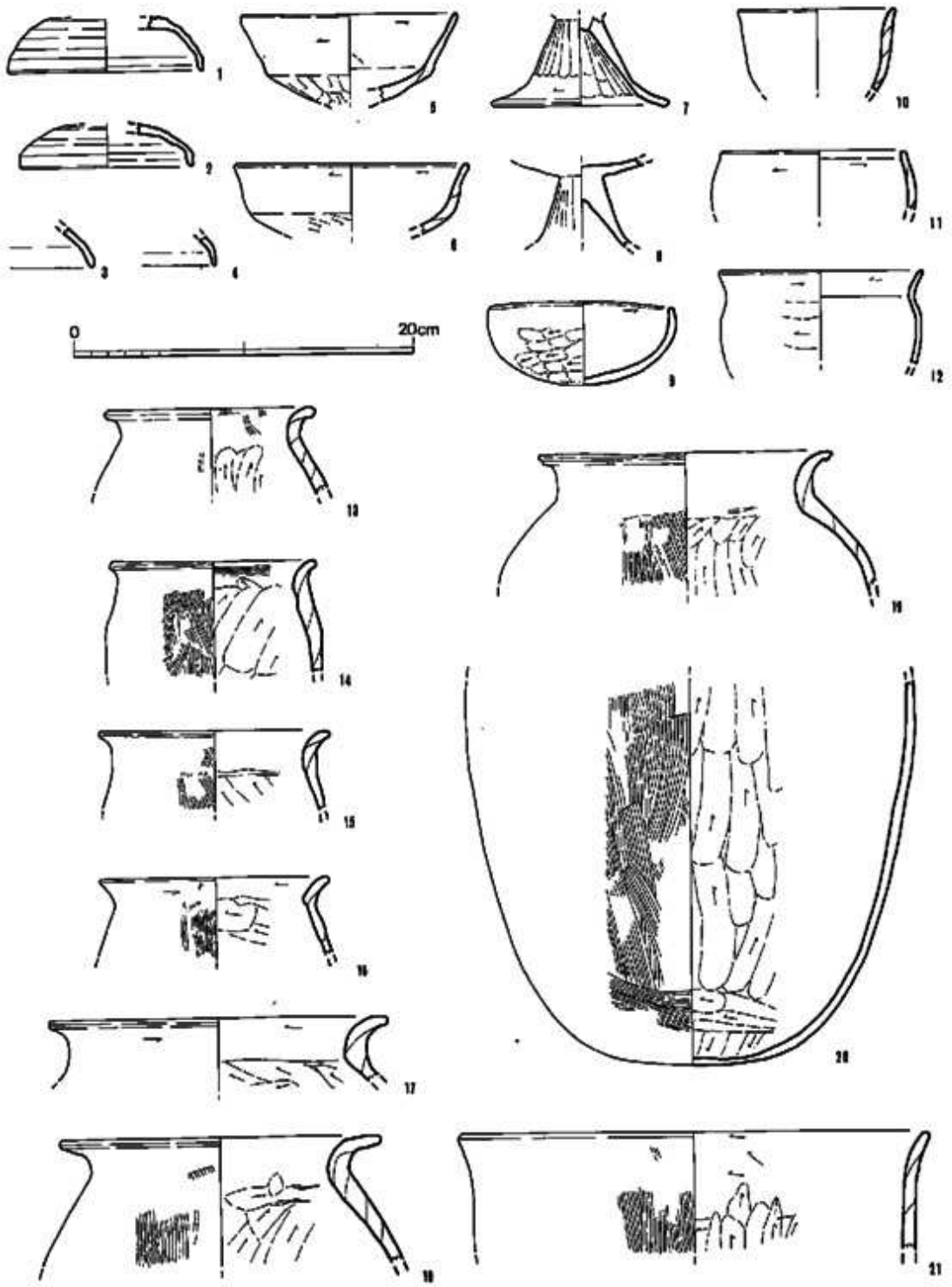
第93図　52号住居跡実測図（1/60）



第94図　52住居跡カマド実測図 (1/30)

51号住居跡に切られ，53号住居跡にも僅かに切られる。平面形態は一般的でやや小型の規模であり，主柱穴配置は北東辺寄りである。壁小溝はカマド付設辺とカマド対面を除き2条存す。床面の硬化は普通で，床面下層はやや凹凸が見受けられた。南西壁際にやや深い土壙を検出したが，所謂中央土壙と同じ性格と推測される。カマド対面に粘土は認められなかった。

カマド(図版21，第94図)　北西壁中央に付設されている。やや広範囲に潰された様相を呈して，粘土及び焼土が散布していた。火床面は54×90cm程と推定されるが，支脚は存しなかった。煙道部は火床面より粘土を貼り付けて造られていた事が窺われる。なお，カマド内及び周



第95図　52号住居跡出土土器実測図（1/4）

辺部より出土した遺物は，一部を除き壁体内に埋め込まれていた可能性を有する。

出土遺物　（図版81，第95図）

総出土量は少ないが，坏や埦類の占める比率は他の住居跡より高い。有孔不明土製品が埋土中より出土した。

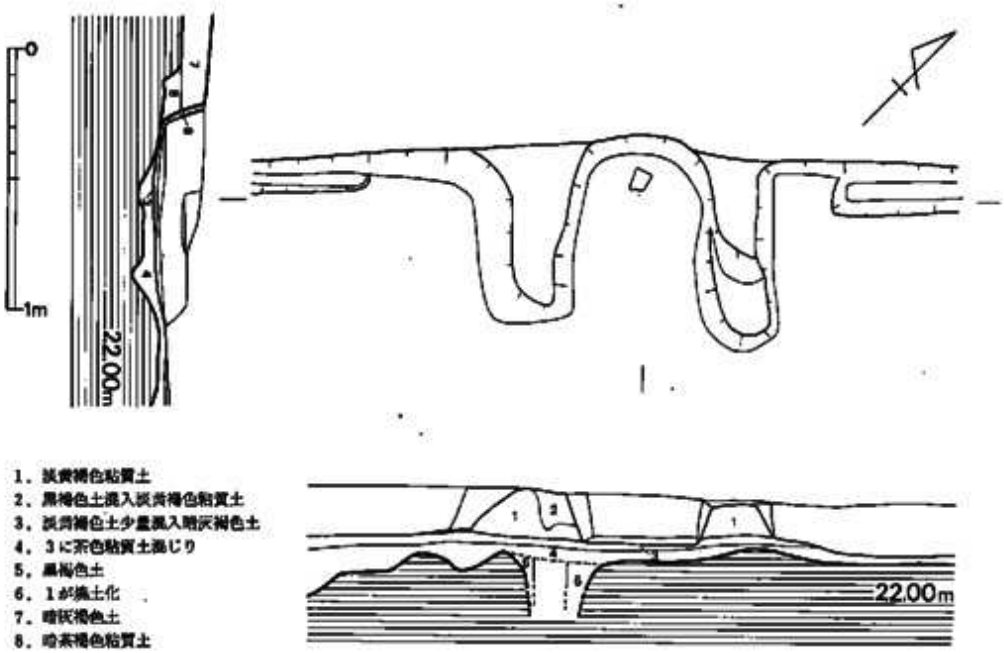
須恵器（1～4）　蓋類のみで全て埋土中より出土したものである。

土師器（5～21）　5～12は精良品である。6・8・10と12は磨滅が著しい。9は略完形品で南東部壁際の床面上より，12はカマド内より出土したが他は埋土中である。13～20の甕は，19が床面上で，16が床面下層より出土したが他は埋土中より出土した。21の甑も埋土中より出土した。

（武田）

53号住居跡　（図版22，第97図）

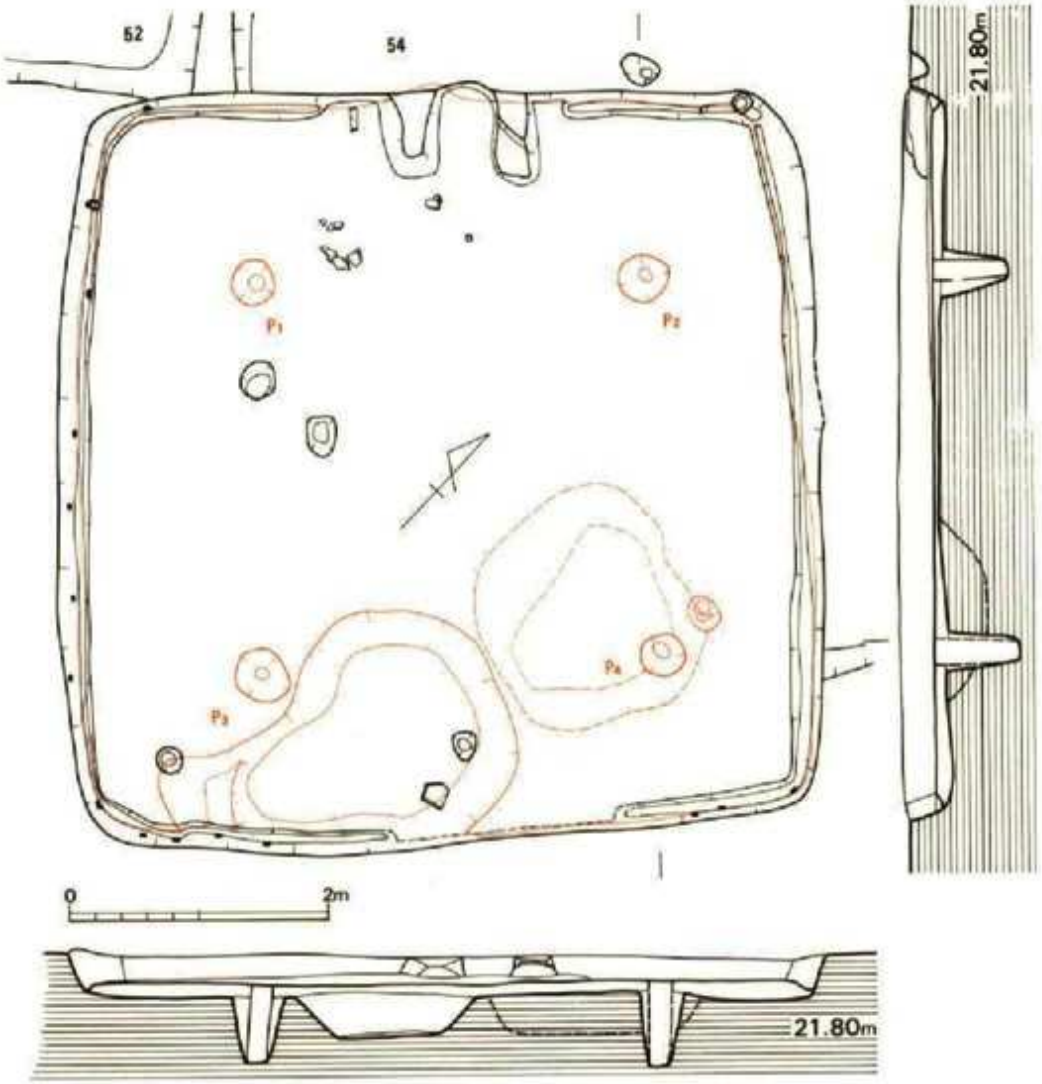
52・54・55号住居跡を切り，56号住居跡と隣接したやや大型の住居跡である。平面形態及び主柱穴の配置は略正方形で整然としている。壁小溝はカマド部とその対面を除いて巡っている。壁面はやや緩やかな勾配の立ち上りで，壁面に十数本の杭状痕が認められた。床面は主柱間エ



第96図　53号住居跡カマド実測図（1/30）

リアが特に硬化していた。床面下層は起伏の乏しい掘り込みが存し南壁付近にやや深い2基の土壙を検出した。他の住居跡より類推するならば東側の土壙は54号住居跡に伴うであろう。カマド対面粘土は存しない。

カマド（図版22，第96図）　北西壁略中央に付設されていたが残存状態はあまり良くない。火床面は46×75cmを計測したが両袖共に若干伸びると思われる。支脚は存せずカマド内外より出土遺物も少なかった。



第97図　53号住居跡実測図（1/60）

出土遺物　（図版81，第100図）

総出土量は少ない方である。手捏土器と鉄器が埋土中より出土し，略完形の有溝円板が埋土中と床面より２個出土した。不明土製品も若干出土している。

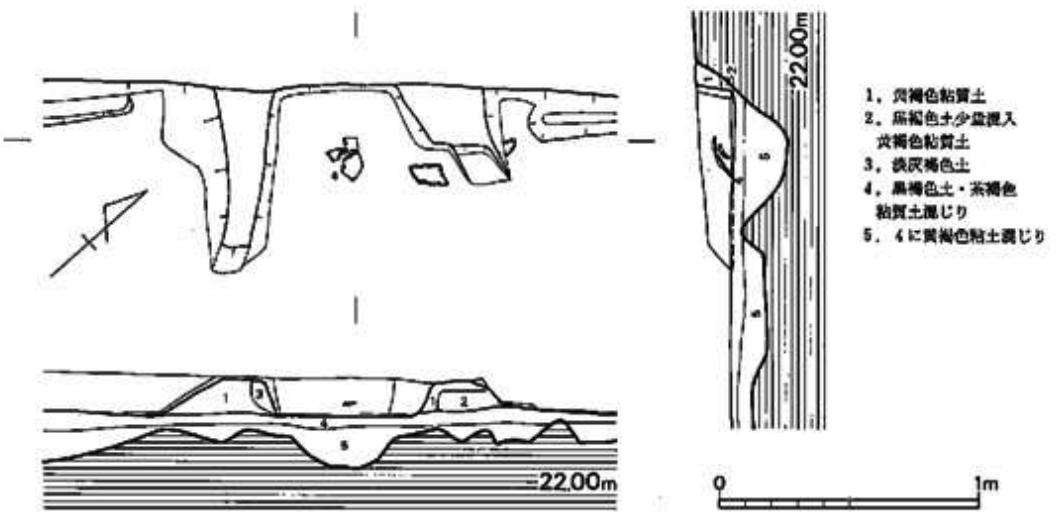
須恵器（１～10）　１～９は埋土中より出土したが大半が小破片である。10は壺の蓋と考えられ，カマド周辺より出土した略完形品である。出自が明確な10が当住居跡の時期を示すであろう。

土師器（11～20）　精良な高坏11は埋土中より出土した。甕類では15と18がカマド内より，19が床面上より，14が床面下層より出土した。超小型の12も他と同じく埋土中より出土したものである。甑の19は床面上より，把手の20は埋土中より出土した。　（武田）

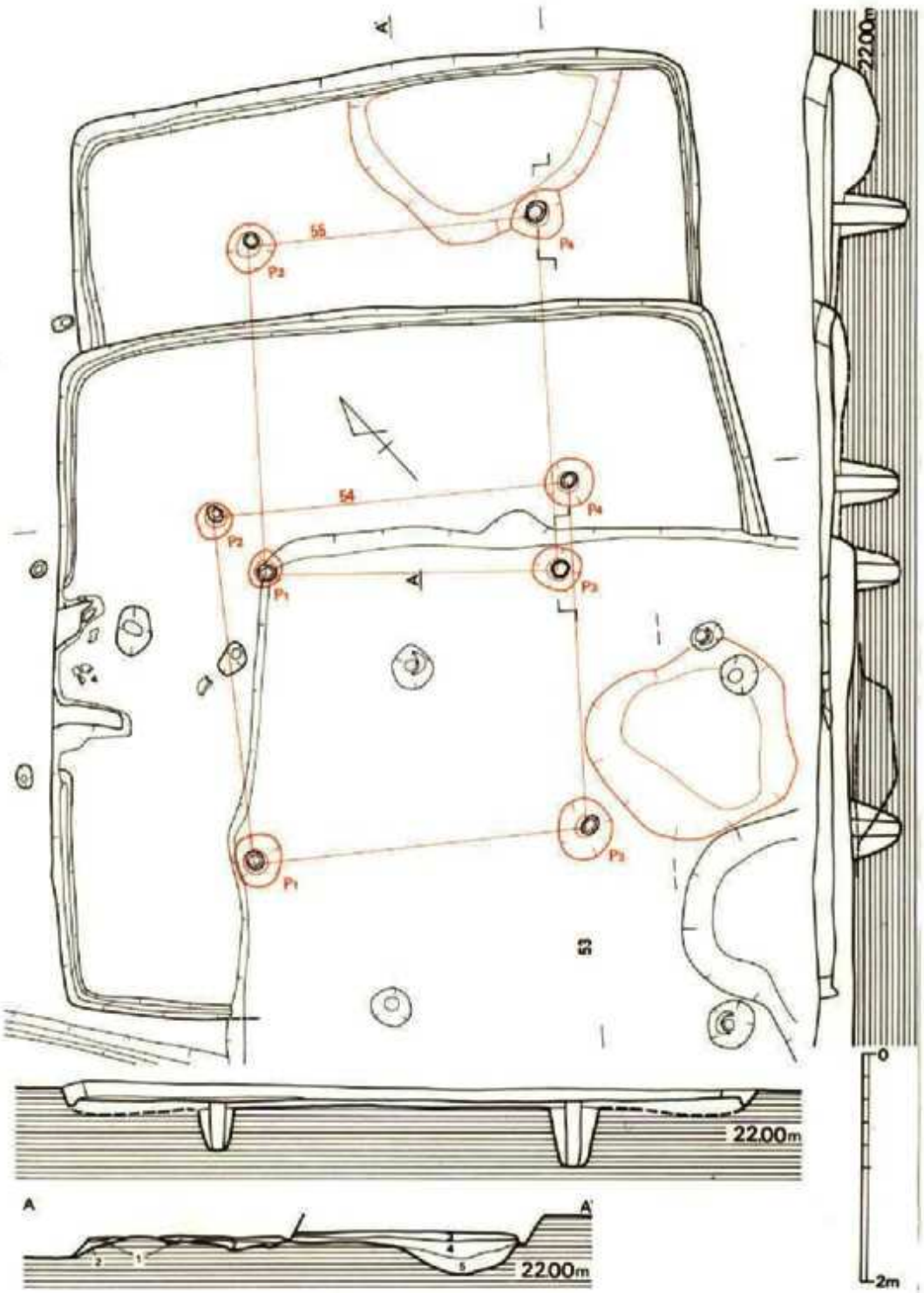
54号住居跡　（図版22，第99図）

55号住居跡を切り，53号住居跡に約半分程切られた住居跡である。53号住居跡下層より２本の主柱穴を検出し，主柱穴は略正方形に配置されている。壁小溝は他と同様になると推測される。床面は残存部分でやや硬化していた。53号住居跡下層で検出された東側の土壙が当住居に伴なう遺構と考えられる。

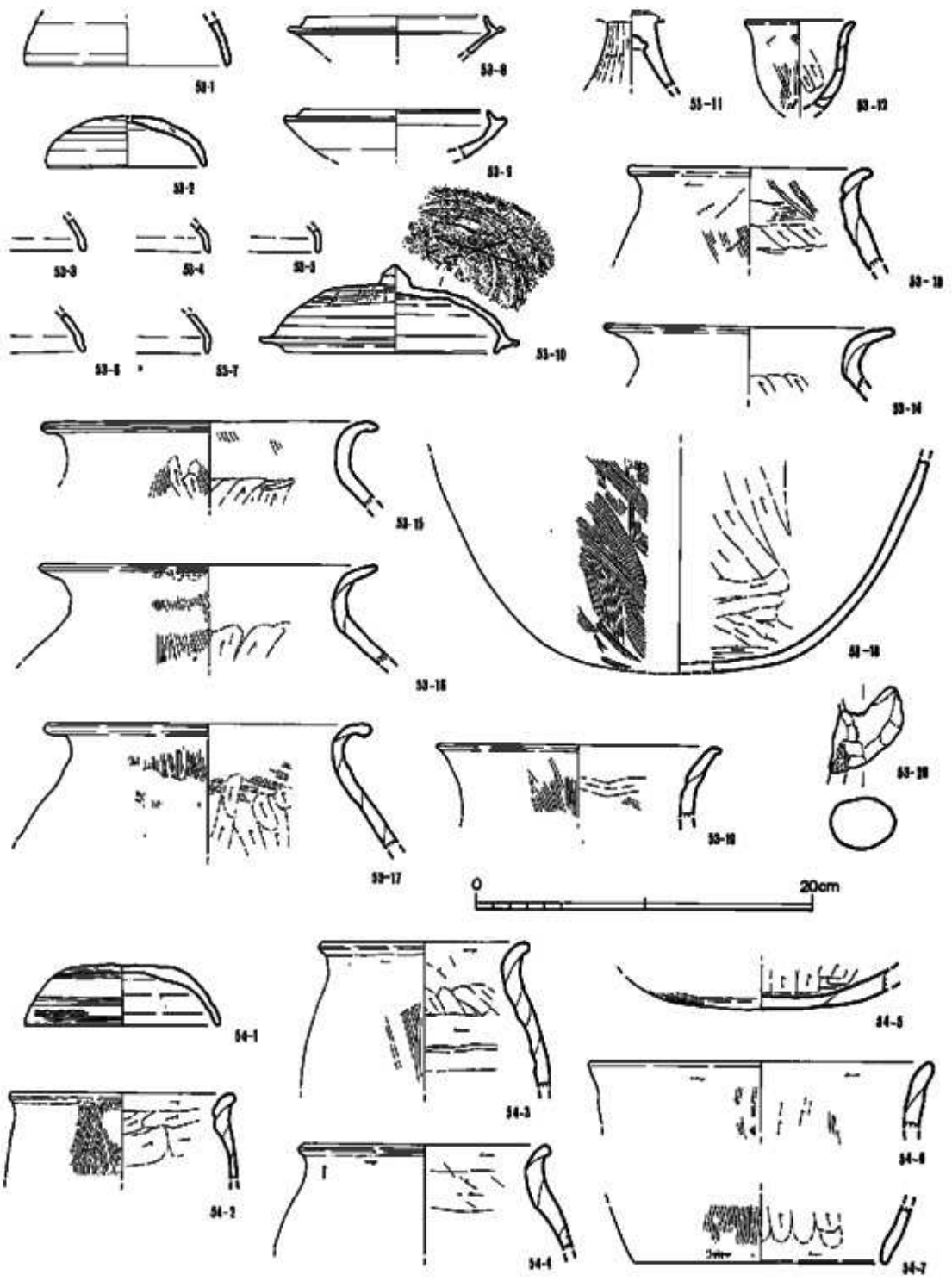
カマド（第98図）　北西壁中央に付設されていたが大半が壊れた状態であった。カマド内からは甕のみが出土し，支脚は存しなかった。竪穴部外で壁際にP_{11}とP_{12}を検出したが当住居跡に伴う可能性を有する。これについては後の項で検討される。



第98図　54号住居跡カマド実測図（1/30）



第99図　54・55号住居跡実測図（1/60）



第100図　53・54号住居跡出土土器実測図（1/4）

出土遺物　(図版81，第100図)

総出土量は少ない。不明土製品も僅かに出土したのみである。

須恵器（1）　蓋の1のみで床面下層より出土したものである。

土師器（2～7）　甕類が殆どで4がカマド内より出土した以外は埋土中よりの出土品である。同一個体と考えられる甑の6と7も埋土中よりの出土である。　(武田)

55号住居跡　(図版22，第99図)

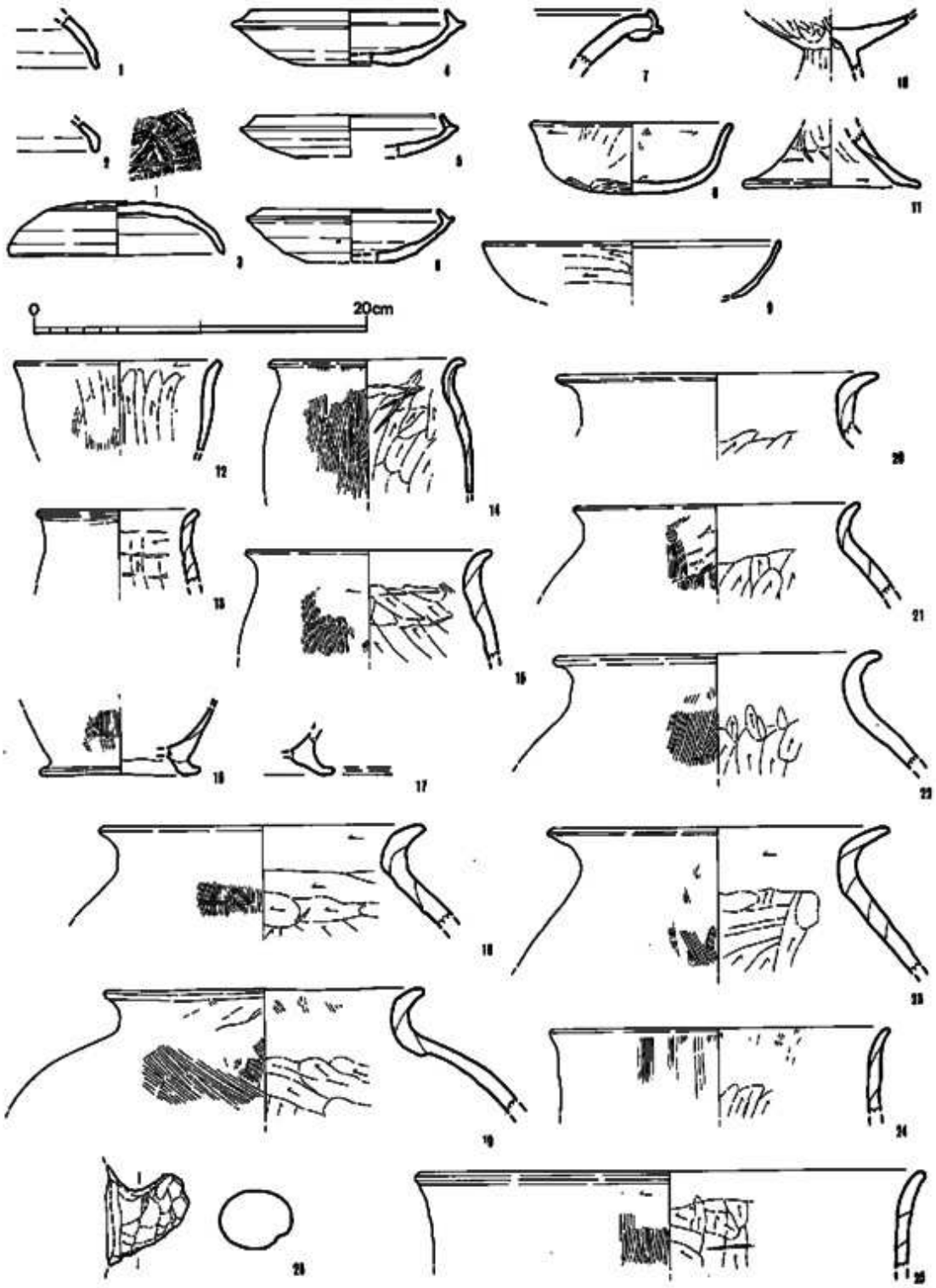
54号住居跡にカマド部も含め大半以上切られている。主柱穴は略正方形を呈し，やや大型規模の住居跡と推定される。壁小溝も残存部分から他と同様になると思われる。床面は主柱間エリアが特に硬化していた。床面下層はやや不明瞭な掘り込みが施されていたし，南東部隅付近に深い土壙が検出された。52～55号住居跡の床面下層より壁際で検出した土壙は，一般的な中央土壙と大差なく，位置が相違するけれども同じ性格と考えられる。北西壁際に僅かな焼土が認められたので，カマドは北西辺略中央付近に付設されていたのであろう。この付近の竪穴部外にP_{12}が存したが，これは54号住居跡と同じ性格の柱穴と考えられる。

出土遺物　(図版81，第101図)

大半以上喪失していることを考え合せれば出土量は多い部類に属する。不明土製品が僅かに出土した。

須恵器（1～7）　殆どが小片であり，2・4と5が床面下層より出土した以外は埋土中よりの出土品である。

土師器（8～26）　8～11は精良な坏・高坏と椀である。16と17は台付甕であろうか。12・13・15と17が床面下層より出土したが，他は全て埋土中の出土であった。　(武田)



第101図　55号住居跡出土土器実測図'(1/4)

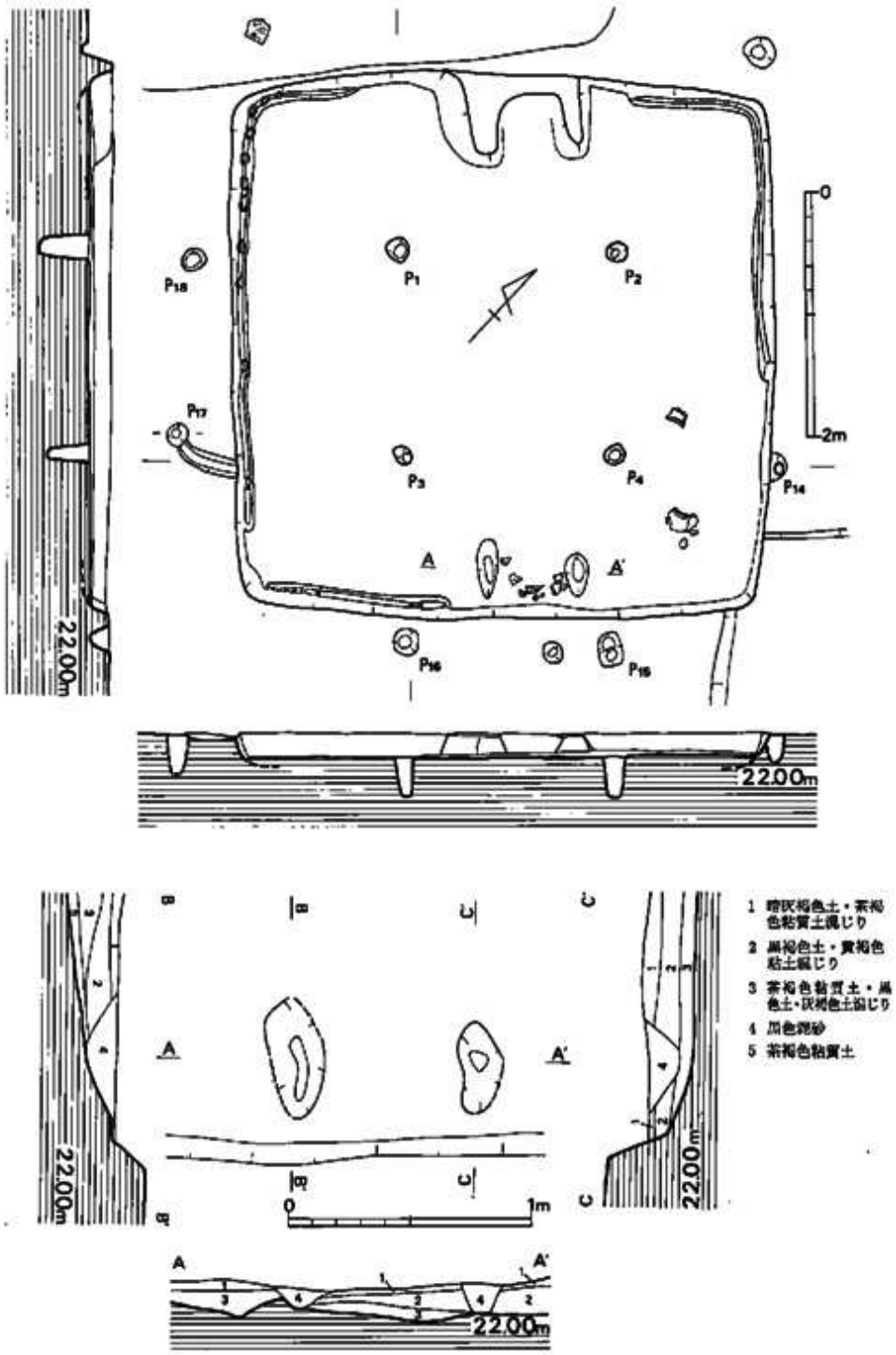
56号住居跡　（図版23，第104図）

53号住居跡とは切り合いはなく，57号住居跡を僅かではあるが切っている。平面形態・規模はごく一般的であるが，主柱穴の配置は真正方形を呈する。壁小溝はカマド部とその対面及び南東部隅付近を除き小穴を多く有して存する。床面は主柱間エリアとカマド対面遺構の周辺部が硬化していた。竪穴部外には主柱穴の略延長上に柱穴を５個検出したが，当住居跡に伴うか否かは不明である。伴う可能性を有するので後の項で検討してみる。

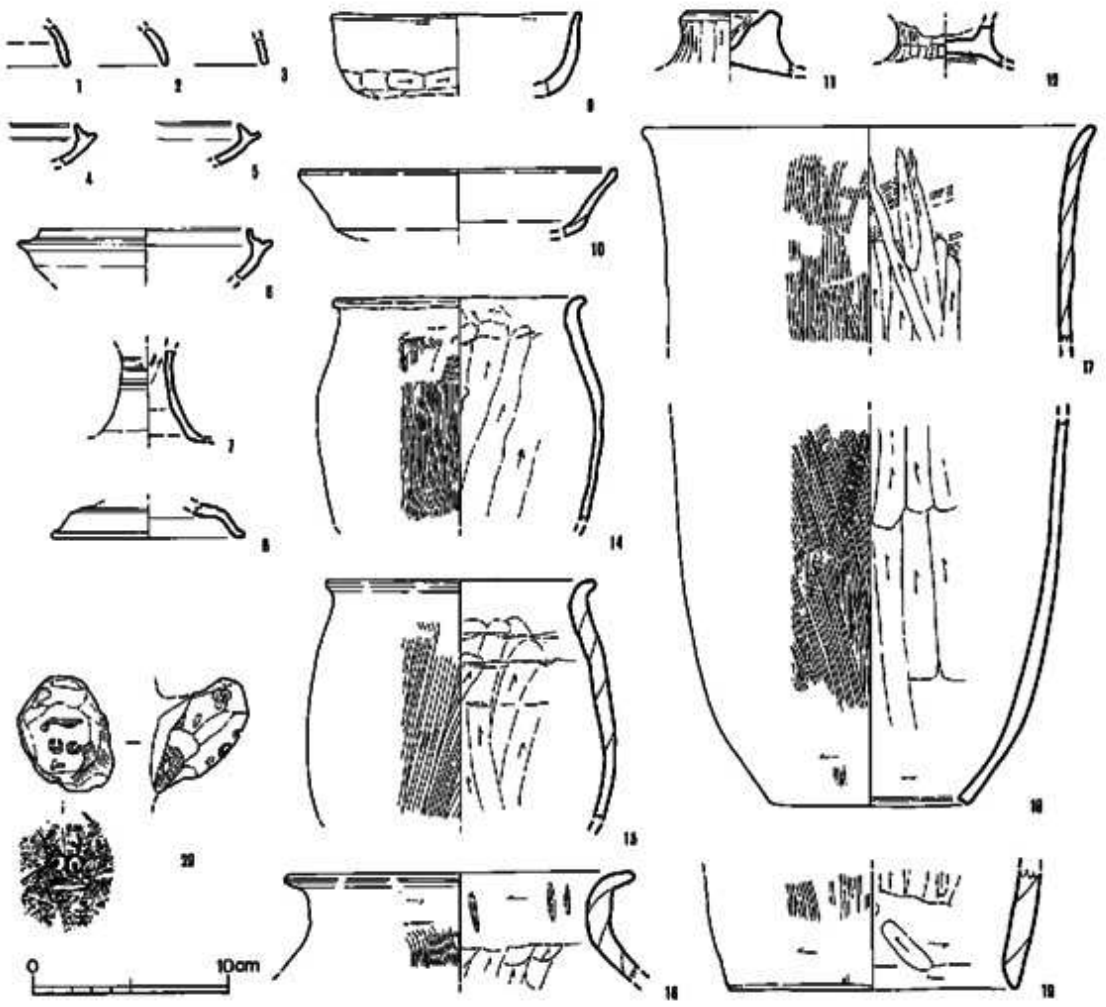
カマド対面遺構（図版23，第104図）　カマドの対面には全く粘土は認められなかったが，平面形態長方形を呈する浅い窪みを２個検出した。心心間72cmを計測し，壁際に面した方が緩やかな傾斜の立ち上りをなす。埋土はボソッとした感じの黒色土であり，周辺部は著しく硬化した床面で差異は歴然としていた。形状及び状況などを考え合わせると何らかの入口施設の痕跡ではなかろうか。当遺跡において１例のみばかりか周辺遺跡にも類例は見受けられないので断定する迄には至らない。竪穴部外の柱穴とも関連させながら後の項で考えてみたい。

カマド（図版23，第103図）　北西壁略中央に付設された残存状態普通のカマドである。両袖共に他と比較して短いのは崩れた（壊された）のかもしれない。支脚は甕を倒立させ粘土で固定したものである。

第102図　56号住居跡カマド支脚実測図（1/4）　　第103図　56号住居跡カマド実測図（1/30）



第104図　56号住居跡・屋内施設実測図（1/60・1/30）



第105図　56号住居跡出土土器実測図（1/4）

出土遺物　（第105図）

総出土量は少ない部類に属し，カマド内より不明土製品が出土した。

須恵器（1～8）　小破片のみで全て埋土中よりの出土である。8は壺の脚部であろう。

土師器（9～20）　9と10は精良な坏と埦である。11と12はやや荒い砂粒を多く含み一部成形面を有するので蓋の摘みと考えた。17と18は同一個体の甕でカマド周辺部より出土したが，他は全て埋土中より出土したものである。20の把手は2個の刺突痕と一条の沈線があり，さも人面を想起させ得る趣がある。　（武田）

57号住居跡　（図版24，第106図）

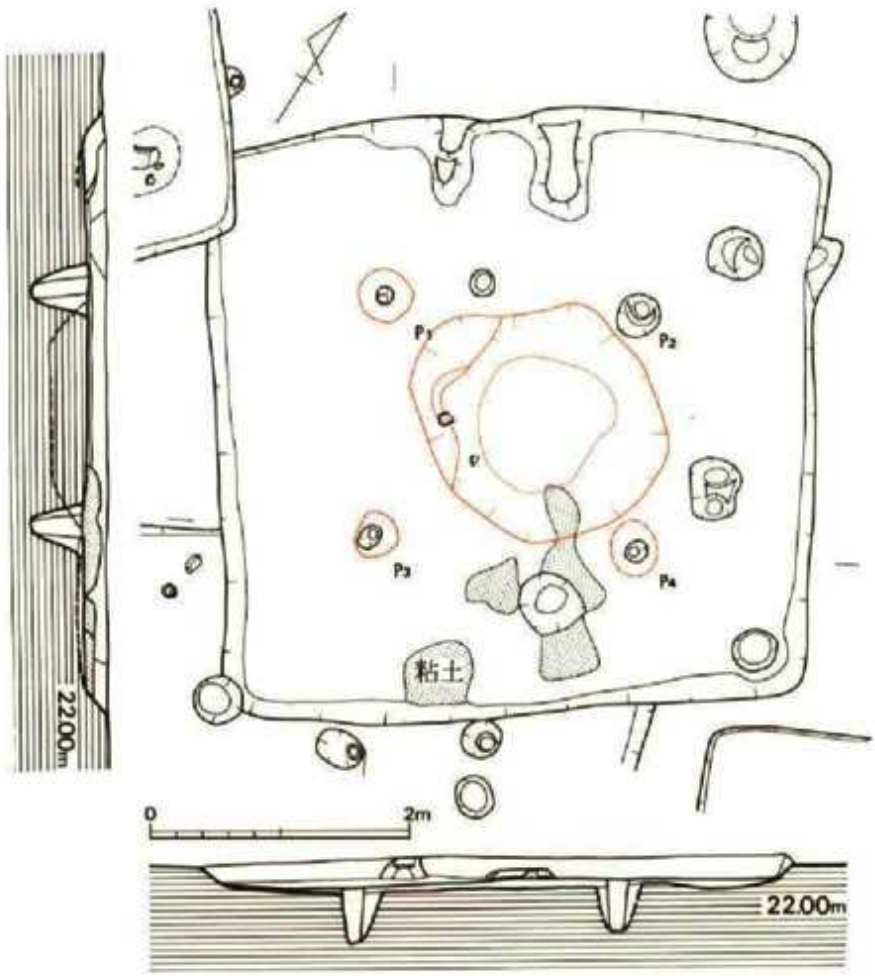
56号住居跡に切られて58号住居跡を切っている一般的規模の住居跡である。なお38号掘立柱建物に切られていた。平面形態は方形を呈しているが主柱穴はやや歪んで配置されている。壁小溝は存しなかった。床面は主柱間エリアがやや硬化し，カマド対面の床面上に粘土が散布している。床面下層の掘り込みは判然としないが中央土壙は存した。

カマド（図版24）　北西壁中央に付設された残存状態不良のカマドである。両袖共に大半が崩れており支脚も存しなかった。

出土遺物　（第111図）

総出土量は少ない部類である。砥石と不明土製品が少し埋土中より出土している。

須恵器（1～5）　小片ばかりで全て埋土中よりの出土である。5は坩の蓋であろう。



第106図　57号住居跡実測図（1/60）

土師器（6～14）　6～8は精良な坏と高坏である。8・10と11がカマド内よりの出土で他は埋土中より出土したものである。（武田）

58号住居跡　（図版24，第107図）

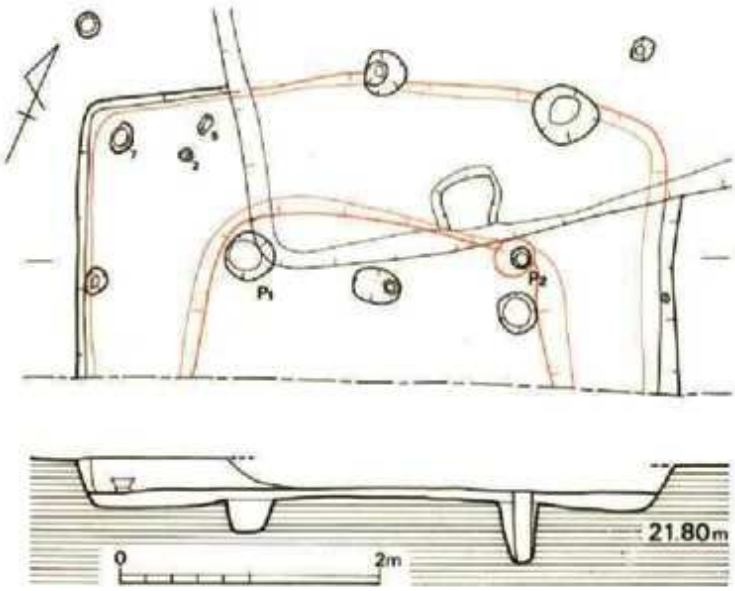
57号住居跡に切られ，約半分程が調査区外に伸展する。壁はやや緩やかな立ち上りで，壁小溝は存しなかった。床面は普通程度の硬化である。北西部隅の床面上に倒立した甕が座位しており置合として用いられたと思われる。床面下層で明瞭な掘り込みが認められた。カマドは存しなかったが，57号住居跡に切られた可能性が大である。

出土遺物　（図版81，第111図）

総出土量は少ないが，不明土製品が埋土中より僅かではあるが出土した。

須恵器（1～4）　2は大きく歪んだ完形品であり2ケ所片口状に窪みがある。4は高坏の坏身であろう。全て埋土中より出土した品である。

土師器（5～9）　5は北西隅床面出土の精良な椀の完形品である。7も略同じ場所より出土したが，他は全て埋土中より出土した。9は小さな器形の把手である。（武田）



第107図　58号住居跡実測図（1/60）

59号住居跡　（図版24，第108図）

57・58号住居跡と隣接し39号掘立柱建物に切られ，大半以上が調査区外に伸展する。壁面は緩やかに立ち上り，壁小溝は存しなかった。床面は普通の硬化度であり，やや不明瞭な床面下層の掘り込みである。

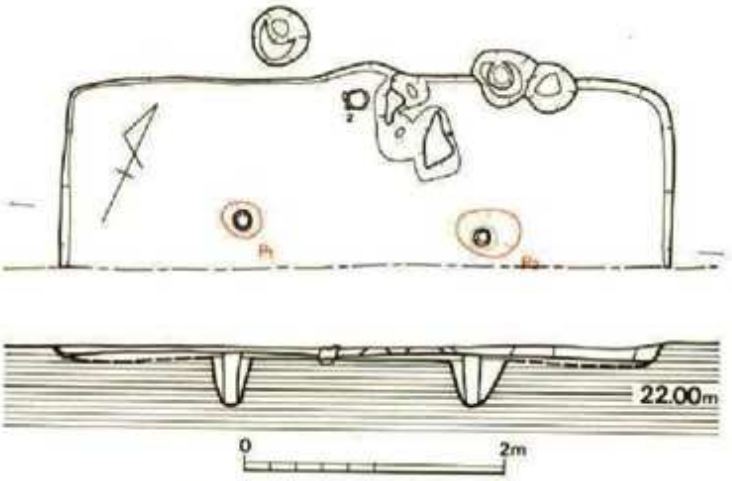
カマド（第109図）　北西壁中央に付設されているが後世の柱穴などで大半以上壊されている。支脚は甕を倒立し粘土で固定させて使っていたと思われるが，廃棄時に壁面の方へ押し倒した状況である。これもカマド祭祀行為の一つと考えられる。

出土遺物　（図版81，第110・111図）

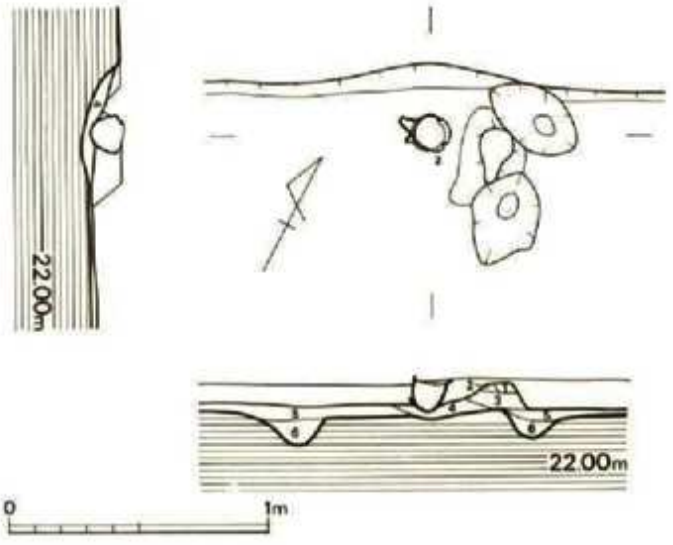
出土量は僅かであった。

須恵器（1）　坏蓋の小片で埋土中より出土した。

土師器（2～4）　器種は甕のみで2は支脚に用いられていた。他は埋土中より出土した。　（武田）

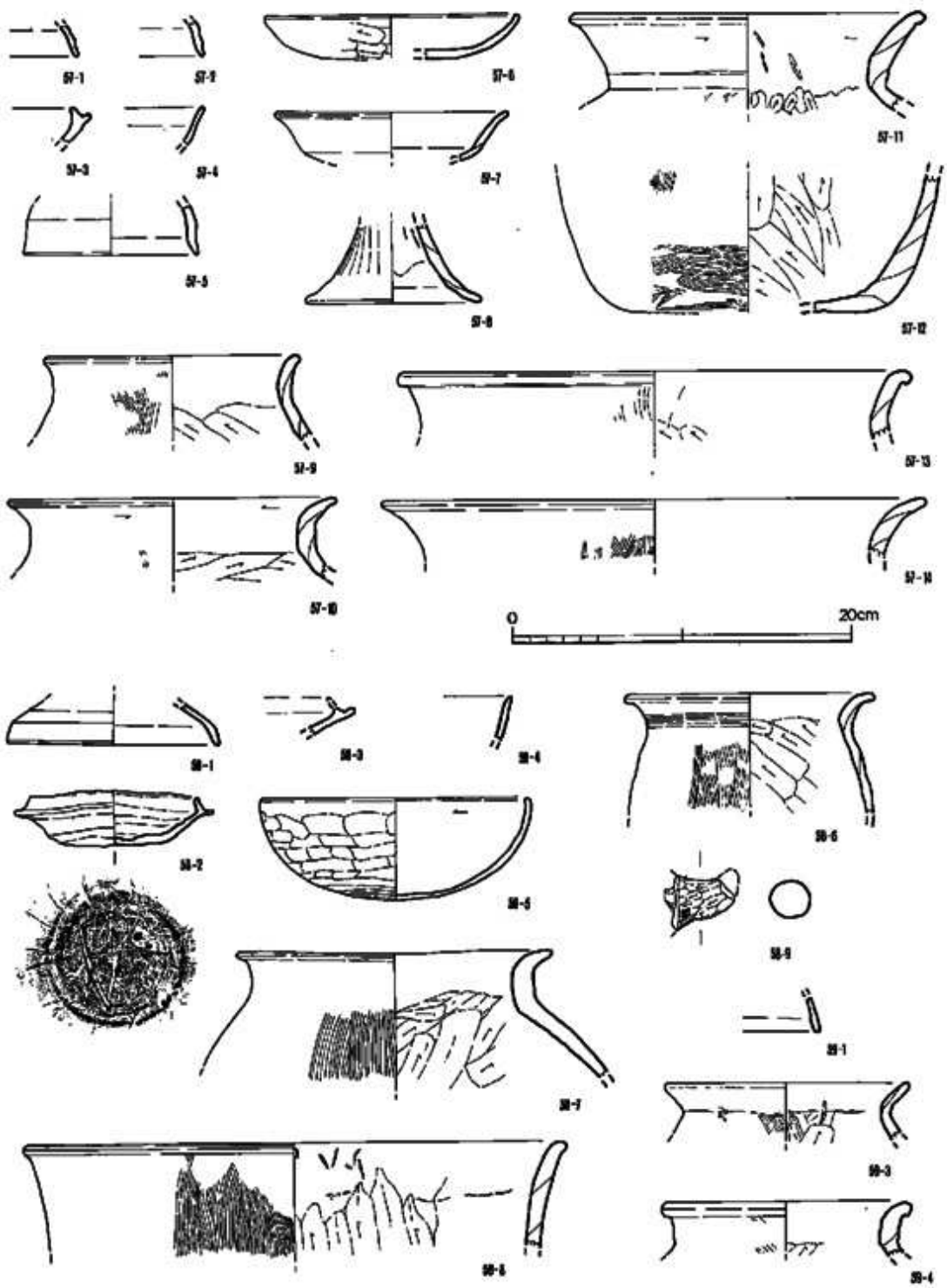


第108図　59号住居跡実測図（1/60）



第109図　59号住居跡カマド実測図（1/30）

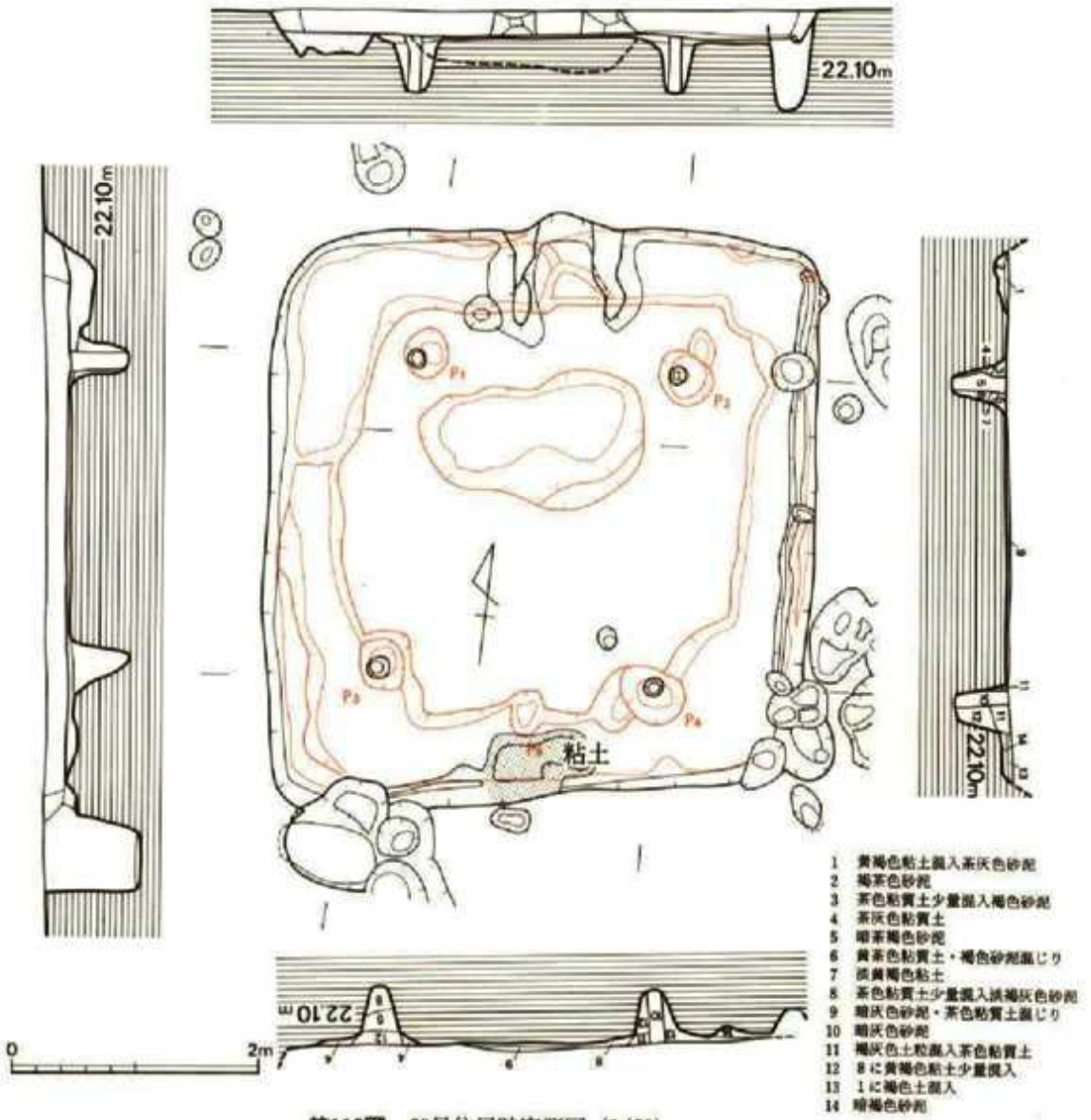
第110図　59号住居跡カマド支脚実測図（1/4）



第111図　57～59号住居跡出土土器実測図（1/4）

60号住居跡　（図版25～28，第112図）

密集した周辺四方の住居跡群と好対照に，61号住居跡と共に２棟が隣接して悠然とした體を醸し出している。平面形態と主柱穴の配置は歪んだ長方形を呈し，覆土が黒色土の住居跡である。壁面は緩やかな立ち上りであり，壁小溝は東辺のみ存する。カマドは北壁中央に付設されており，その対面には粘土の高まりが存した。床面上には使用時の状況が把握出来る程に原位置を略保って遺物が多く出土した。主柱間エリアがかなり硬化していたが，主柱間エリア外は



第112図　60号住居跡実測図（1/60）

やや柔らかい床であった。床面下層には明瞭な掘り込みが壁沿いに巡り，中央土壙もP_1～P_2間寄りに存した。なお南西隅部で壁際より竪穴部外に掘りこまれた袋状を呈する土壙を検出したが，当住居に伴うか否かは不明である。

カマド（図版27・28，第113図）　床面上の遺物出土状況と同じく使用時の様子が窺える状態であった。検出時点の状況は両袖内に土器片がぎっしりと詰り，左袖上に土玉が認められた。カマド内の土器はまず甑（63）があり，口縁部西向きで押し潰れた状態であった。その下方より口縁部が東向きの甕（57）が続いて出土した。甑と甕は口縁部及び底部の向きを違えながら折り重なり出土し，自然的作用（カマド掛口部に西側より作用した力が加わったと推測される）により倒れたと思われる。これらより更に下方から甕（22）を倒立させ粘土で固定した支脚を検出した。支脚と略同じ層より肩部以下を打ち欠いた甕（21）が出土したが，これは器高調整用として支脚の上に置れていたと思われる。(21)の甕と同じレベルで焚口部付近の粘土中より不明土製品（60－M_9～M_{10}，M_{12}，M_{13}）が多く出土した。それらの下方灰層内より（60－M_{11}）の不明土製品も出土している。

カマド本体は，火床面が74×48cmの長方形，袖部長さ95cmで幅38cmの最大値などを計測する。両袖共に壁際及び内側から主に粘土でもって積み上げられていた。なおカマド内より出土した甕（24，27）と袖内出土の甕（23）は袖部の補強用として埋め込まれていたと思われる。

以上，検出時より解体時迄を順に従って大雑把に説明したが，ここで若干補足説明する。出土時に甑（63）と甕（57）はセットとして使用されていたと考えられた。これらを復元した後に甑を甕の上に乗せてみると，甑の底部が甕内に4～5cm程しか納まらなかった。案外動いたり揺れたりしないので使用出来ないとは思えないが，カマド周辺部より出土している甕(60，61)の方を用いたと考えるのが合理的であろう。甕（57）が使用された後に甑を置いていたとも考え得る。不明土製品については，灰層内より出土した品は日常用いられたと考えられる。その他のカマド内より出土した品は土玉と同様カマド壁体内に存した可能性が強いであろう。カマド本体については，左袖が略旧態の長さ及び基底部の厚みと考えられる。また出土状況及び崩れたカマド内の粘土より，掛口部のカマド壁体の厚みは約10cm程度となる。このカマドに関しては，カマドのあり方及び祭祀の項で詳細に検討されるので，この程度の説明とする。

カマド対面粘土及び土壙（第113図）　当住居のカマド対面粘土は他の住居跡と比較するとさほど崩れた様相ではなく，段状ないし粘土の高まりと思われる。この粘土上面に甕（37・53）と砥石が貼り付いて出土した。粘土下方より不整形な土壙（窪み）を検出し，粘土層内及び土壙内よりやや多めの土器が出土した。土器の大半以上が甕の破片であったが，精良な椀（12）が含まれていた。これら出土土器と粘土層内にやや多く焼土が混入していたことが，カマド対面粘土及び土壙の性格を考える上で重要な問題点となるであろう。この件も後で述べることにしたい。

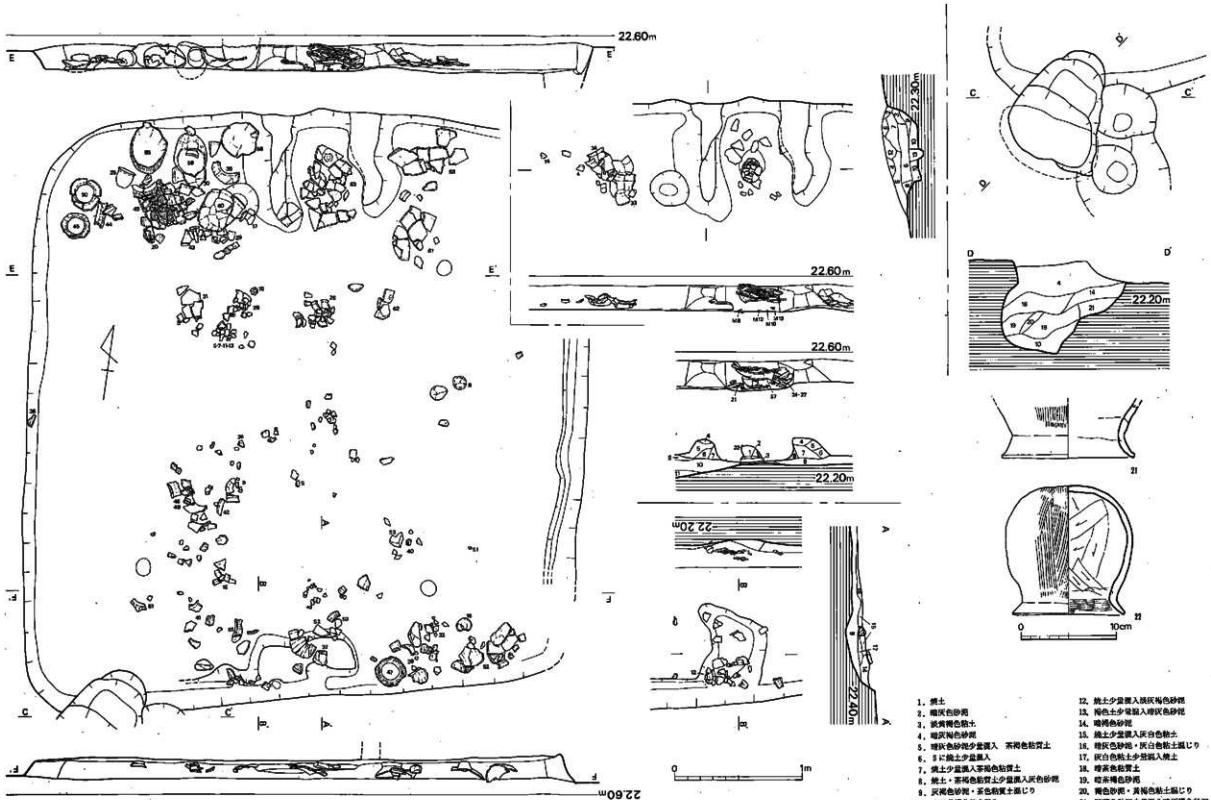
南西部竪穴部外土壙（第113図）　当初は住居跡に伴わないと考えていたが，床面まで掘り下げた時に貼床が途切れていたので伴う可能性も出て来た。埋土は主に黒色土が充填していたが，住居跡の埋土とさほど大差はなかった。貼床が途切れていることで住居跡よりも新しい可能性は残っているけれども，竪穴部外に居住空間の拡がりを持つ可能性がある住居跡もあり，上記のことを考え合せて伴なうかもしれぬと判断し図示した。当土壙は二段掘りで袋状を呈し，大半以上竪穴部外に存する。出土した遺物は甕の破片のみである。この種の土壙を有する住居は当遺跡にはなく，近隣及び北部九州にも類例は少ないと思われる。伴う遺構なら貯蔵穴の可能性が大であるけれども，後々の課題として行かねばならない。

遺物出土状況　（図版27・28，第113図）

当住居跡床面上の出土状況は使用時の面影を残しているので，後項で検討されるので概略を述べるに止めたい。出土状況を大別して，カマド周辺部・カマド対面周辺部と主柱間エリアの三つに分けられる。各所の出土数は表（第1表）に記している。先ずカマド周辺部では圧倒的に甕・甑類が多く出土した。(45) と (50) は置台として機能していた。(55) と (58) は壁面に凭れて座位し，(56)は15cm程底部が埋め込まれて正立している。この三個の甕は貯蔵用具として使用されていたのではあるまいか。カマド左袖外の窪みにも甕が置かれていたかもしれない。その他では (25) が完形品であるが，これ以外は押し潰れ重なりあった状態で出土した。これらよりカマド左側は貯蔵ないし物置的空間と推測された。カマド対面周辺部でも甕類が多く出土した。甕以外では粗製の椀 (16) と精製の坩(15)のみである。倒立して座位する甕(17)も (45)・(50) と同様な置台であろう。すぐ傍には (52) などの大甕が出土している。この空間も貯蔵ないし物置の場所として使用されていたであろう。カマド左側とは出土量も大いに異なるので違った機能を果していたかもしれない。主柱間エリアは精良な供献用土器が多く出土したのが特徴である。主柱間エリアに土器を置くことは不合理と考える（後項の「居住空間の使用法」で述べるので省略する）ので，廃棄時に祭祀行為が営まれたのか投棄されたものなのか，あるいは棚が存しそこに置かれていたものが落ちたのかは判然としない。

第1表　60号住居跡出土土器　器種一覧

器種 / 出土地	須恵器		土師器								
	坏蓋	坏身	甕			甑	坏	椀	鉢	坩	高坏
			大型	中型	小型						
埋土	2	1	1	1	1	1					
カマド周辺			14	7			1	1	1		1
主柱間エリア			3	4		1	2	1			5
カマド対面周辺			5	3				1		1	
カマド内			1	4		1					



第113図　60号住居跡遺物出土状況，カマド・土壙実測図（1/30）

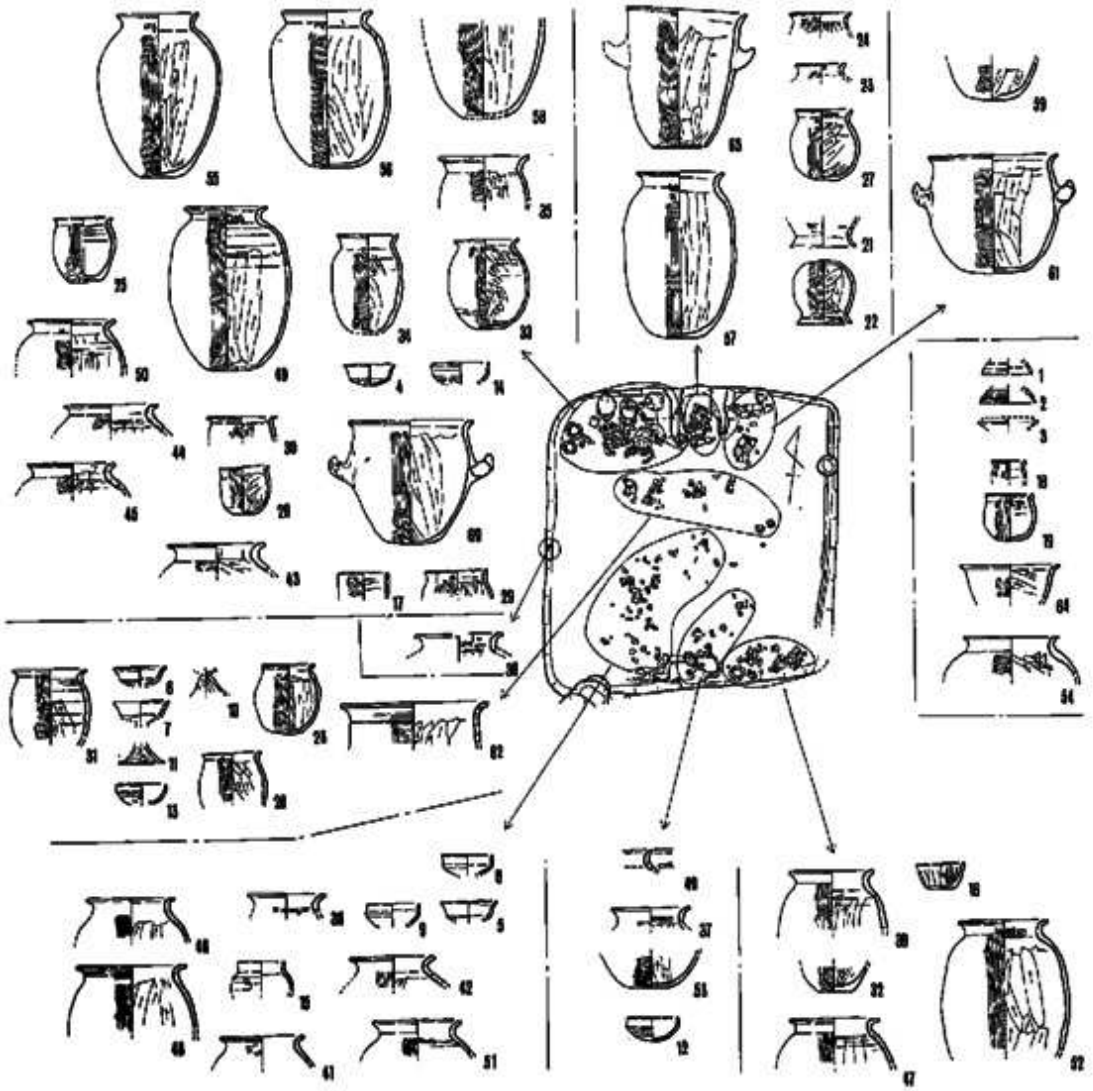
出土遺物　（図版82～85，第114～119図）

出土状況の項で述べられなかったことを記す。埋土中より紡錘車，床面上１～５cmで手捏土器，床面上より砥石が２点とカマド内より剣形土製品が３点出土している。不明土製品も若干埋土より出土した。

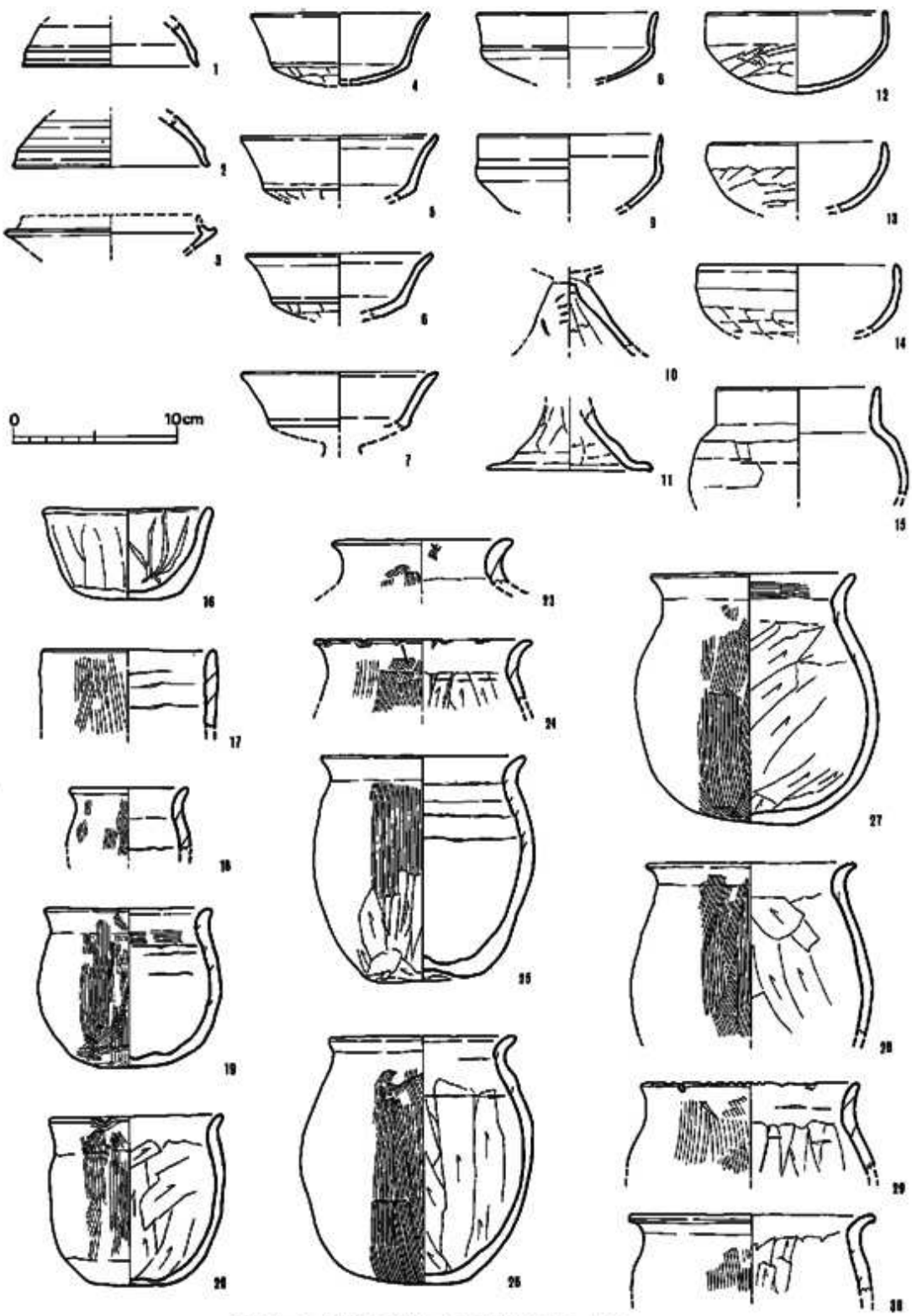
須恵器（１～３）　全て埋土中よりの出土である。

土師器（４～64）　床面上よりの出土品は図示している。それ以外は埋土中より出土した。

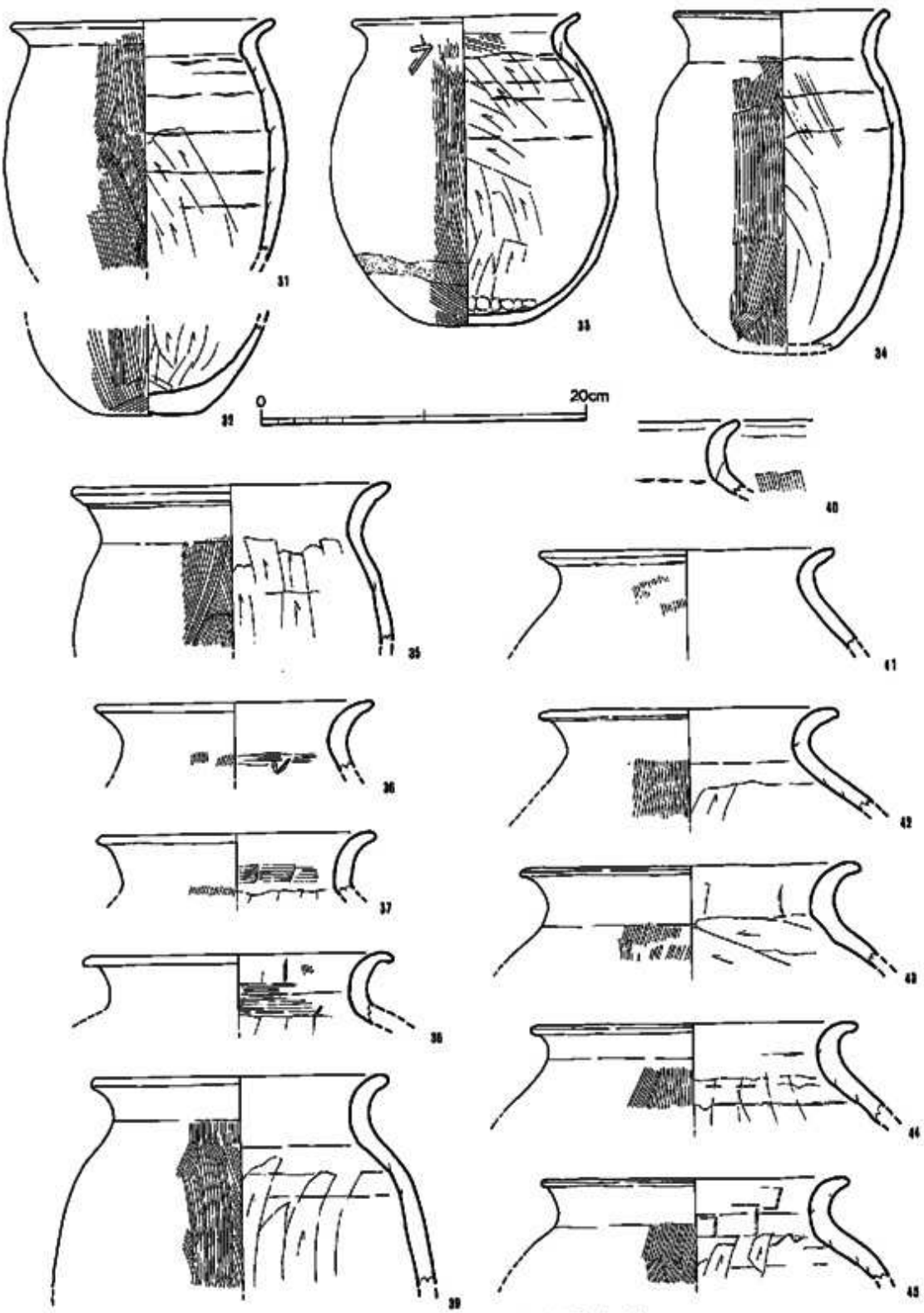
（武田）



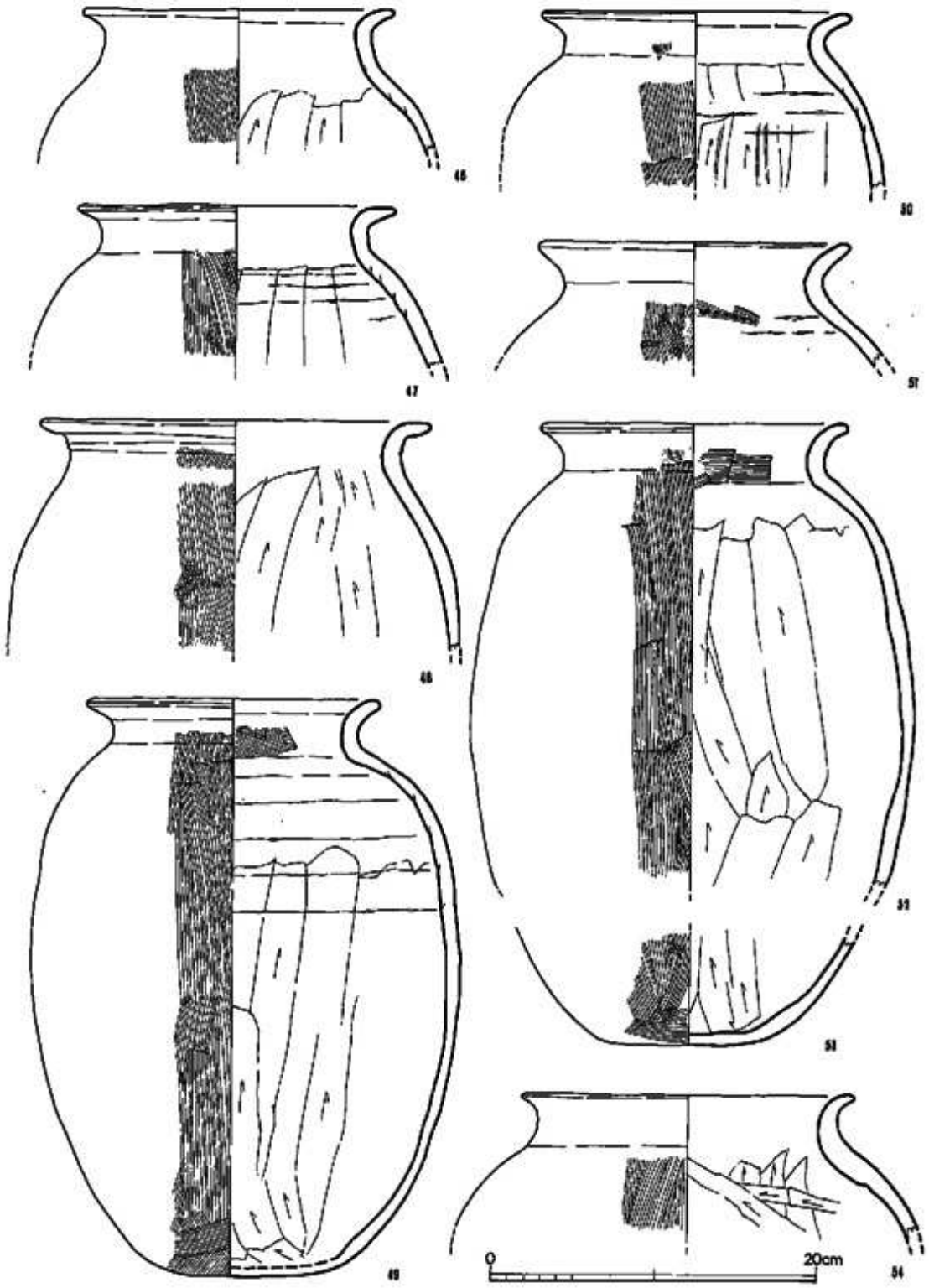
第114図　60号住居跡出土土器位置図



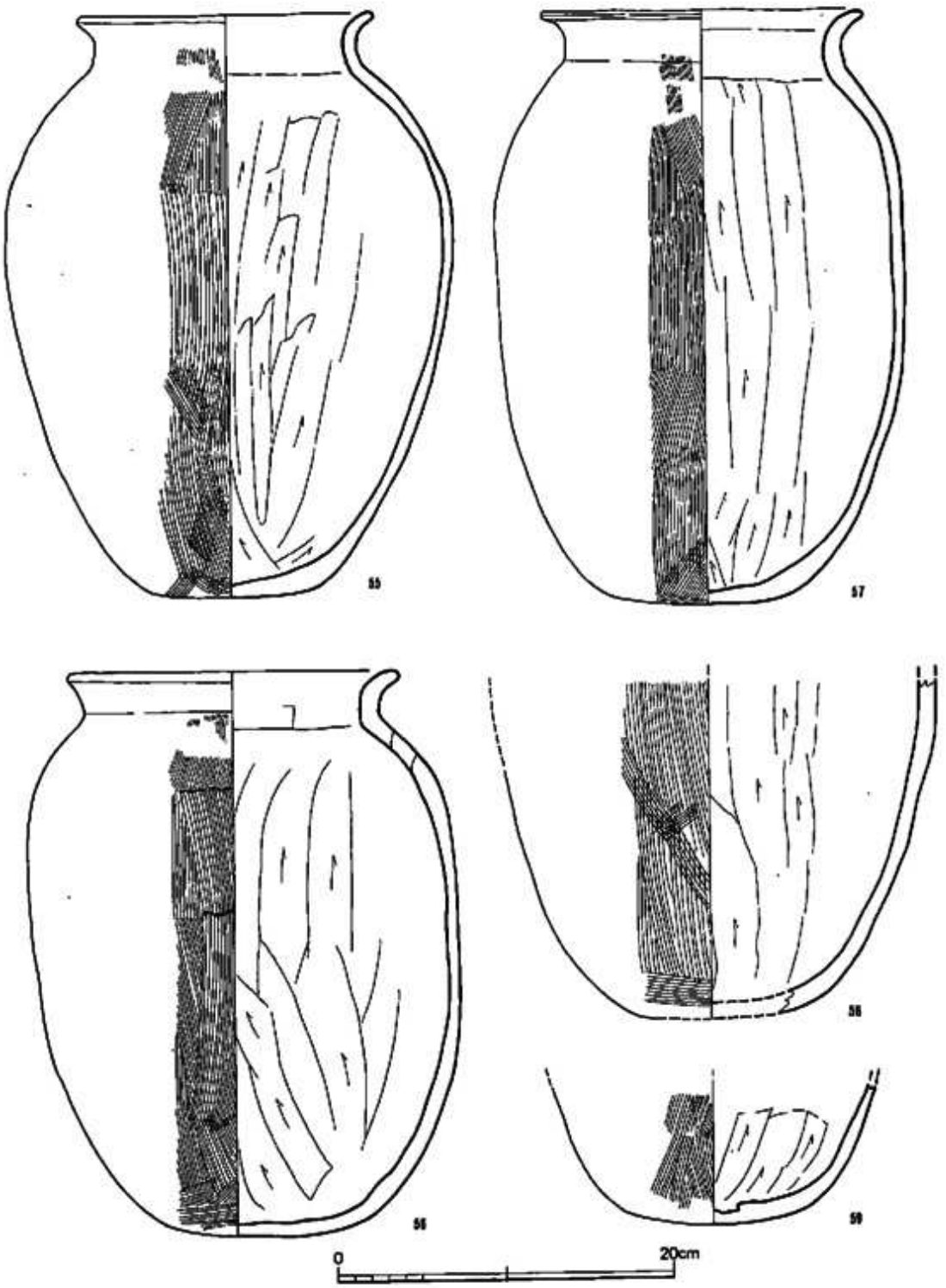
第115図　60号住居跡出土土器実測図①（1/4）



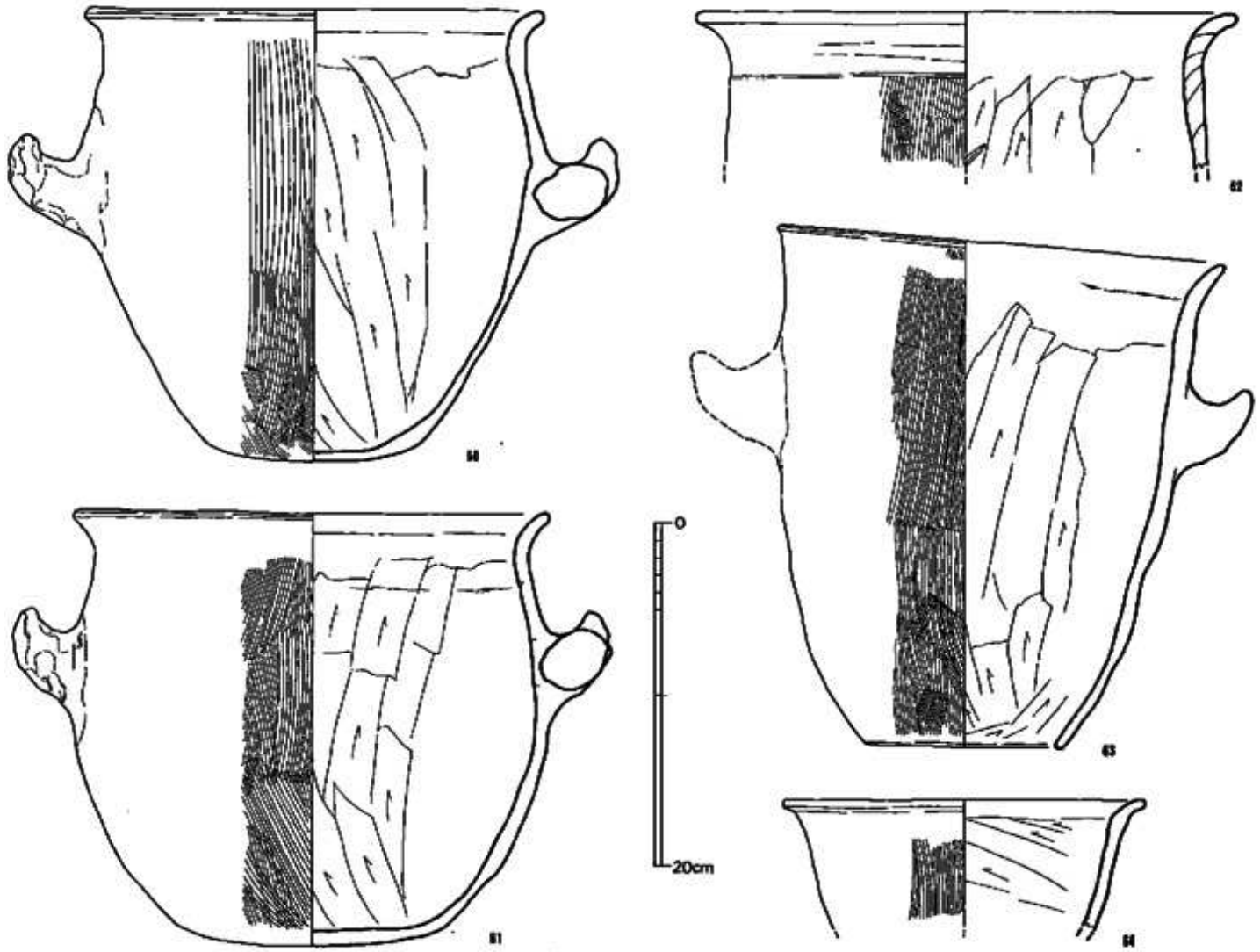
第116図　60号住居跡出土土器実測図②（1/4）



第117図　60号住居跡出土土器実測図③（1/4）



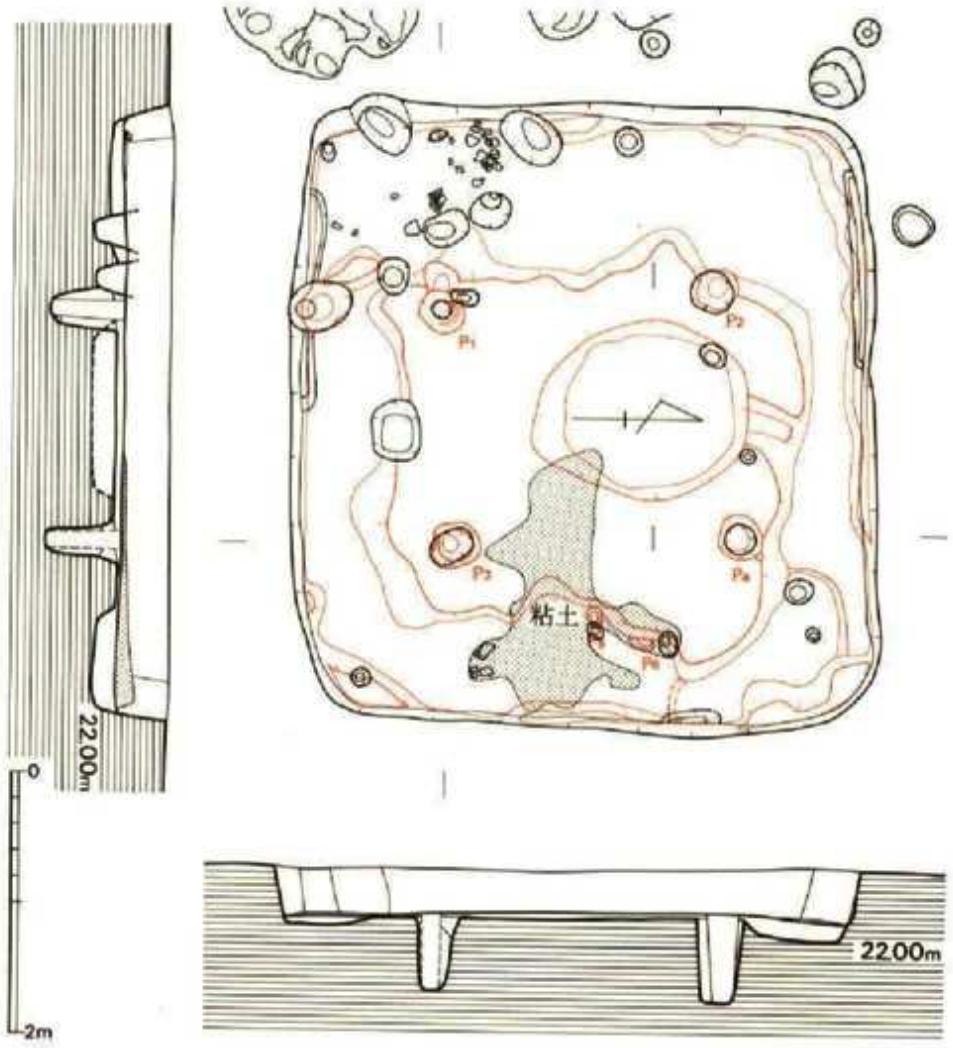
第118図　60号住居跡出土土器実測図④（1/4）



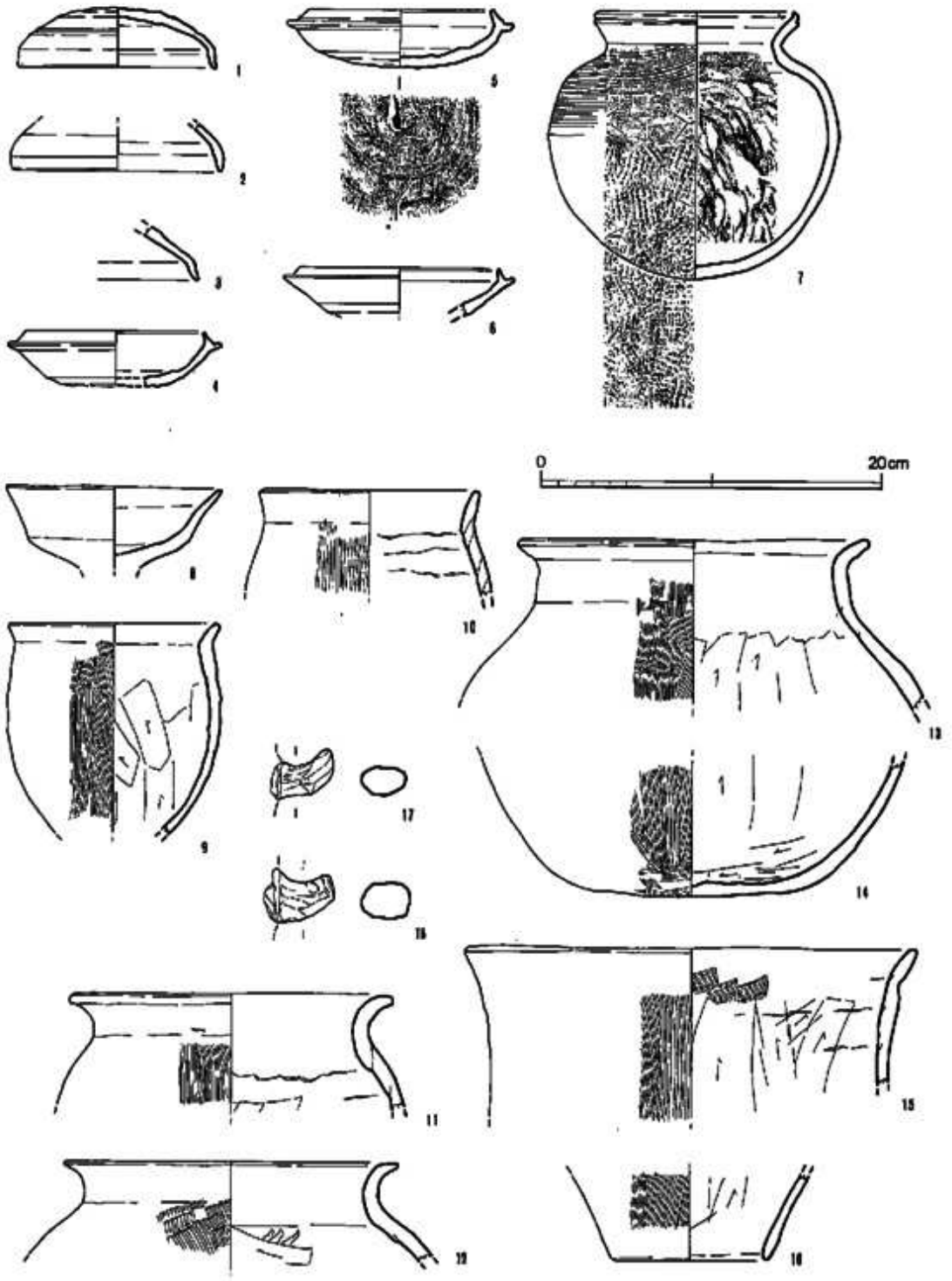
第119図　60号住居跡出土土器実測図⑤ (1/4)

61号住居跡　（図版25，第120図）

60号住居跡のすぐ東に，切合い関係がなく単独で存在する。東西にやや幅広の方形プランで，埋土は黒褐色砂質土であった。西壁中央付近にカマドが付設されていたが完全につぶれ図示出来なかった。粘土を張って踏み固められた床面には柱痕が見え，4主柱穴のプランは住居跡のそれと異なり南北に幅広の方形プランを呈する。カマド対面で床面との間に黒色土を挟んで黄白色粘土を検出した。また，床面下では掘り込みが途切れずに全周し，やや北に偏して中央土壙を検出した。



第120図　61号住居跡実測図（1/60）



第121図　61号住居跡出土土器実測図（1/4）

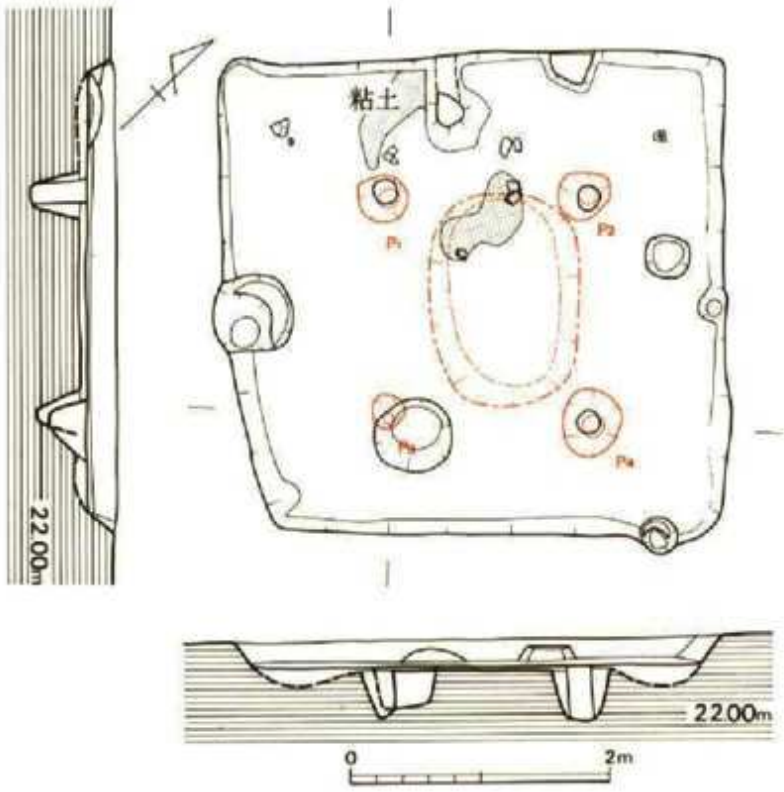
出土遺物　（図版86，第121図）

およそ100個体分程の土器が出土したが，その殆どが埋土中からの出土で，須恵器は全体量の約1割を占める。手捏土器1と不明土製品・耳環1が埋土中から出土した。またスラッグが2点あり，1は埋土中にあった甕（7）の中から，他の1は床下層でP₄のすぐそばから出土した。

須恵器（1～7）　坏5は完形品でカマドの左側の床面上で横転した状態で検出した。他は埋土中からの出土品で，7を除いて反転復原図である。7の体部下半内面にはスラッグによる鉄錆が付着している。

土師器（8～16）　甑15は小破片となってカマドの左側の床面上から出土した。他は埋土中からの出土である。9・10の小型の甕は支脚として使用し，廃棄したものと思われる。（児玉）

62号住居跡　（図版29，第122図）



第122図　62号住居跡実測図（1/60）

61号住居跡の南３ｍに位置し，40号掘立柱建物に切られたやや小型規模の住居跡である。平面形態は少し歪み，主柱穴の配置も若干東偏している。壁面は緩やかな立ち上りをなしているが，壁小溝は存しなかった。床面では主柱間エリアがかなり硬化している。床面下層の掘り込み及び土壙はあまり明瞭ではない。

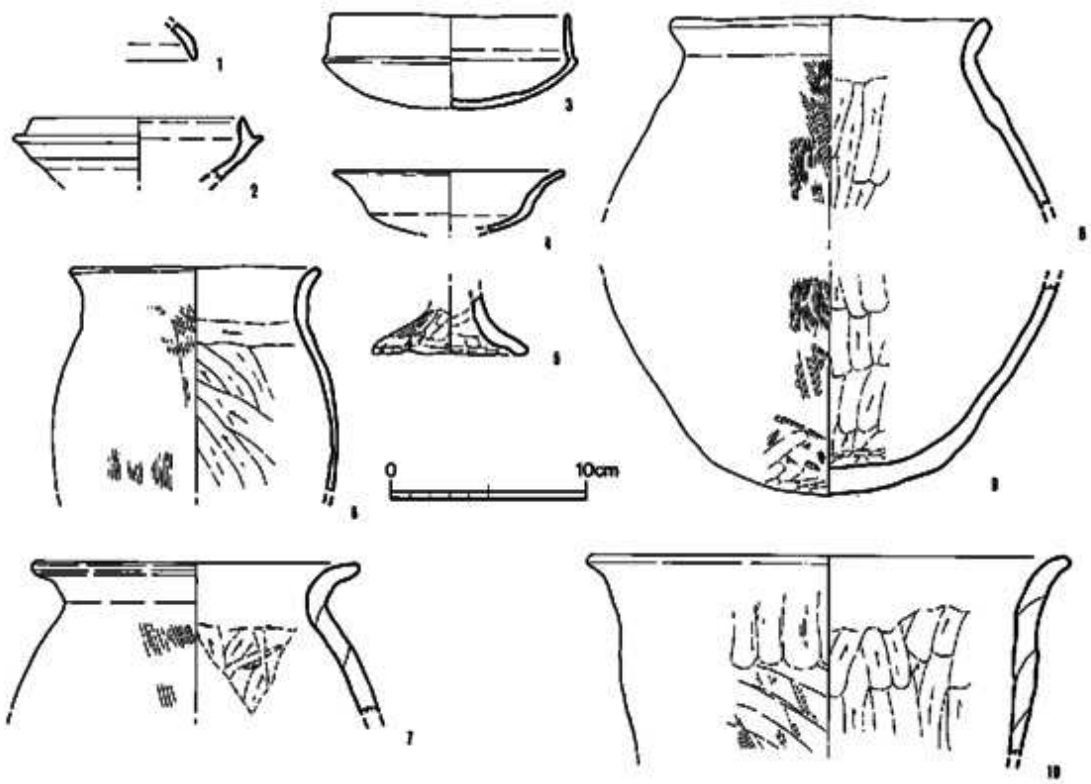
カマド　北西壁中央に付設されていたが，かなり潰された状況で粘土が広範囲に散布していた。両袖の基底部のみが残存し，支脚も存しなかった。

出土遺物　（図版86，第123図）

総出土量は少なかった。不明土製品は埋土中よりやや多く出土し，盤状土製品も床面より出土している。

須恵器（１・２）１は床面上より，２は埋土中より出土した小片である。

土師器（３～10）　５と６がカマド内より，９が床面より出土したが他は埋土中より出土した。３～５は精良な坏と高坏である。６は内外面共に二次火熱を受けているので，支脚として用いられたのであろう。８と９は同一個体と考えられる。　（武田）



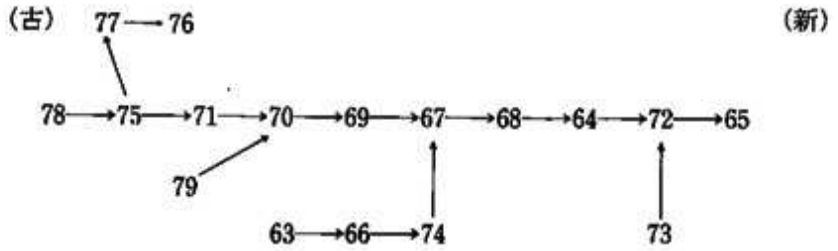
第123図　62号住居跡出土土器実測図（1/4）

63～78号住居跡群の概要　（図版30，第124・125図）

当遺跡中で最も多く切り合った住居跡群である。古墳時代後期の住居跡が方形プランを呈することを念頭に置き，上面での検出作業を行った。けれども正確に全体像を把むことは出来なかったので，セクションを設定し試掘坑を掘り下げていった。その結果大まかに把握出来たけれども，検出面で一部住居跡の床面が喪失していたことで正確に把握するのは困難であった。それら不明な部分を発掘区の土層図で補うしか方法が無かった。

63～66・72～74号住居跡の床面レベルは大差なく，重なり合った状況を呈した。67～71号住居跡では，新しい住居跡がより深く掘削され，古い住居跡は殆ど旧態を留めていなかった。両グループが対称をなしているのは注目される事象ではなかろうか。この件に関しては，種々問題が存するので後日に期したい。なおこの住居跡群の主柱穴を図面上のみで確認したのも一部含まれており，また74号住居跡の如く問題を孕んだ住居も存する結果となった。

以上より下の図の様な先後関係となる。



これら古墳時代後期の住居跡群の下層より，平面形態長方形の柱穴を多く検出した。これは弥生時代の掘立柱建物であり，詳細はC－2で述べられるので図示するに留めておく。

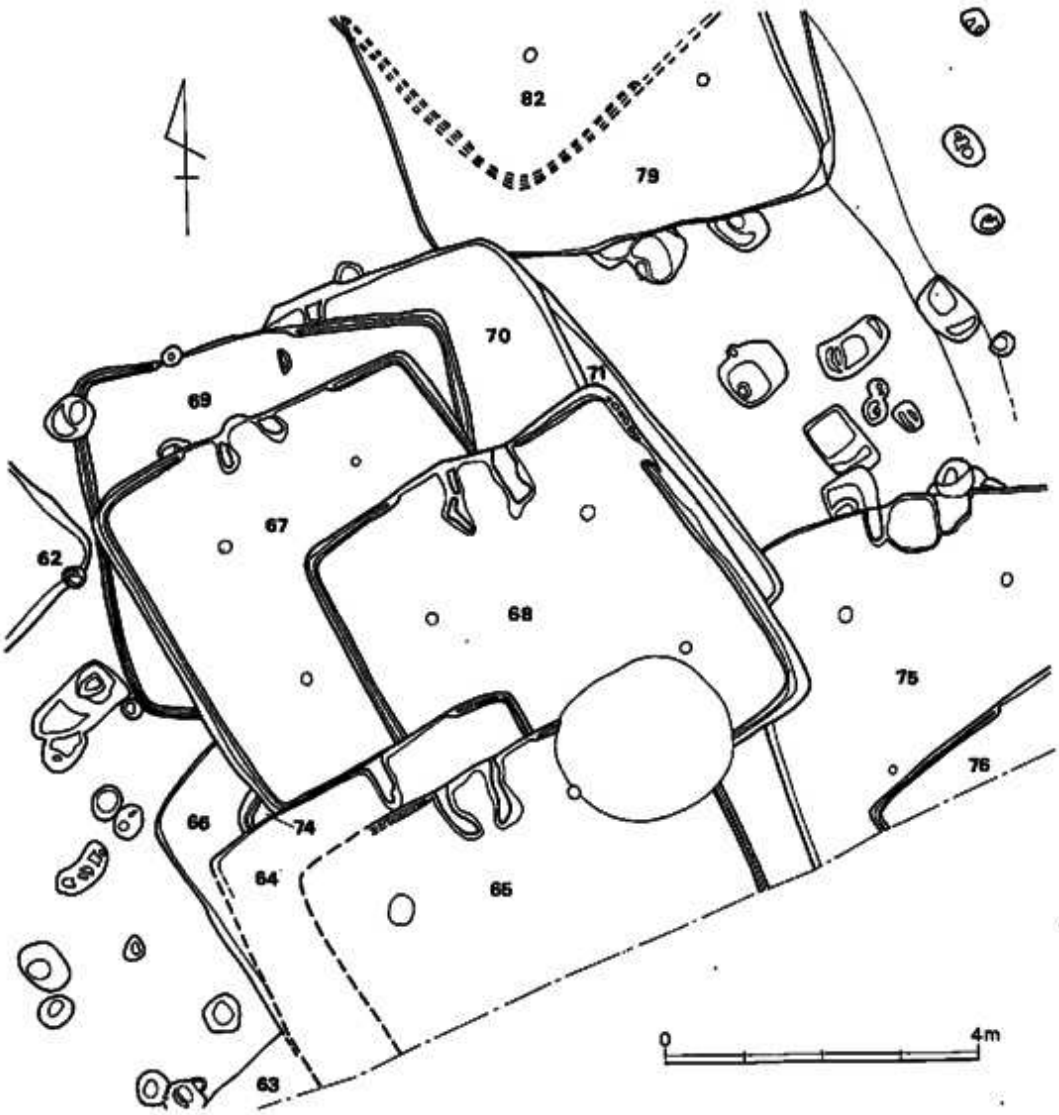
（武田）

63号住居跡　（図版30，第126図）

大部分が調査区外に伸展し，かつ66号住居跡に切られているので殆ど不明である。床面が存したことと南壁土層観察より住居跡と確認した。カマドは存しなかったが，調査区内西寄りに焼土が若干確認されたので少し西に付設されていたと思われる。

出土遺物　（第128図）

出土したのは土師器の小片が僅かで，図示出来たのは甑と思われる１のみである。（武田）

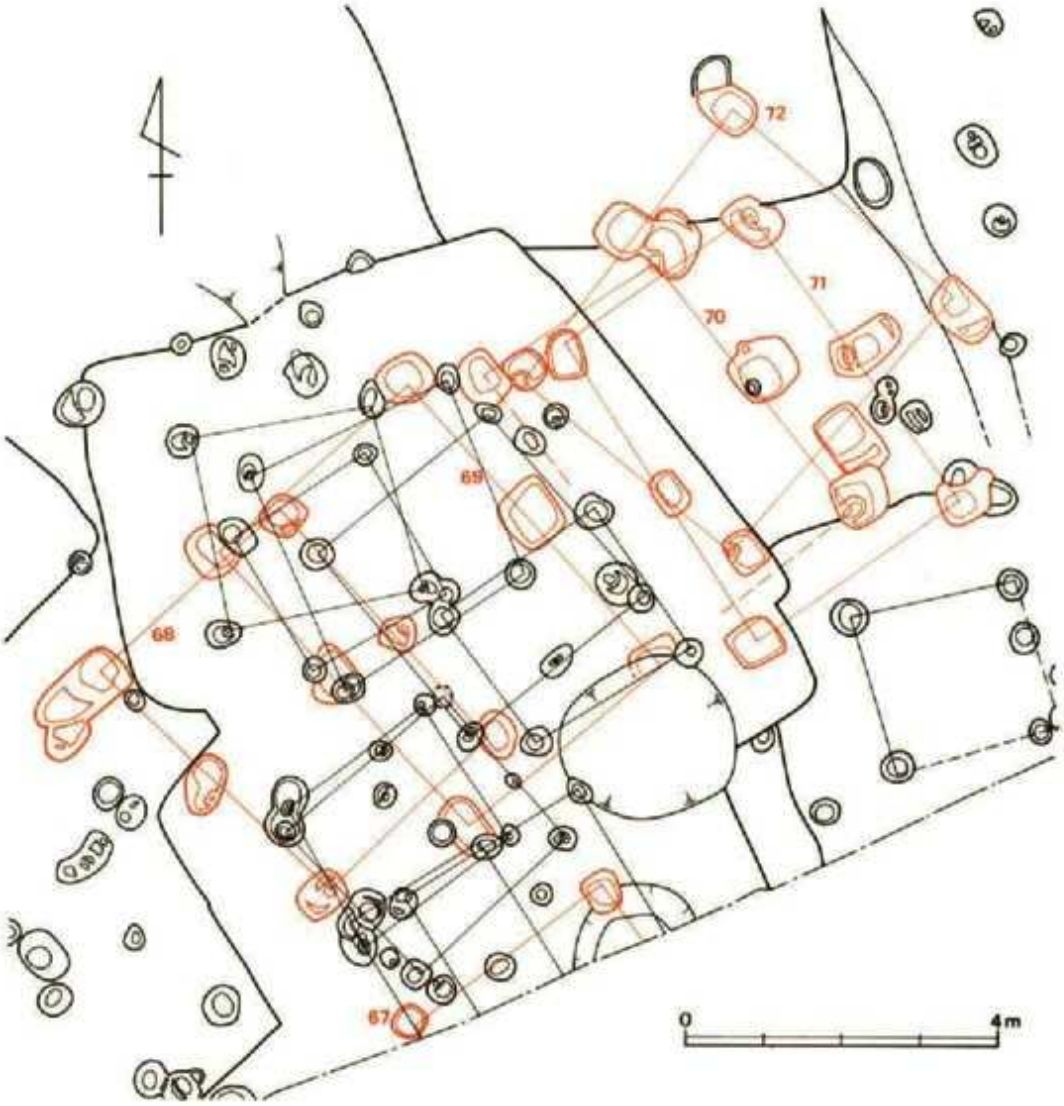


第124図　63～78号住居跡全体図（1/100）

64号住居跡　（図版30，第127図）

65号住居跡に大半を切られ，約½が調査区外に伸展する，中型規模と推定される住居跡である。検出時に床面の一部が喪失しており，床面下層にも明瞭な掘り込みは認められなかった。カマドは北西壁に付設されていたが，堆積状況と焼土範囲より左袖が基底部まで壊れたものと思われた。

出土遺物　（第128図）



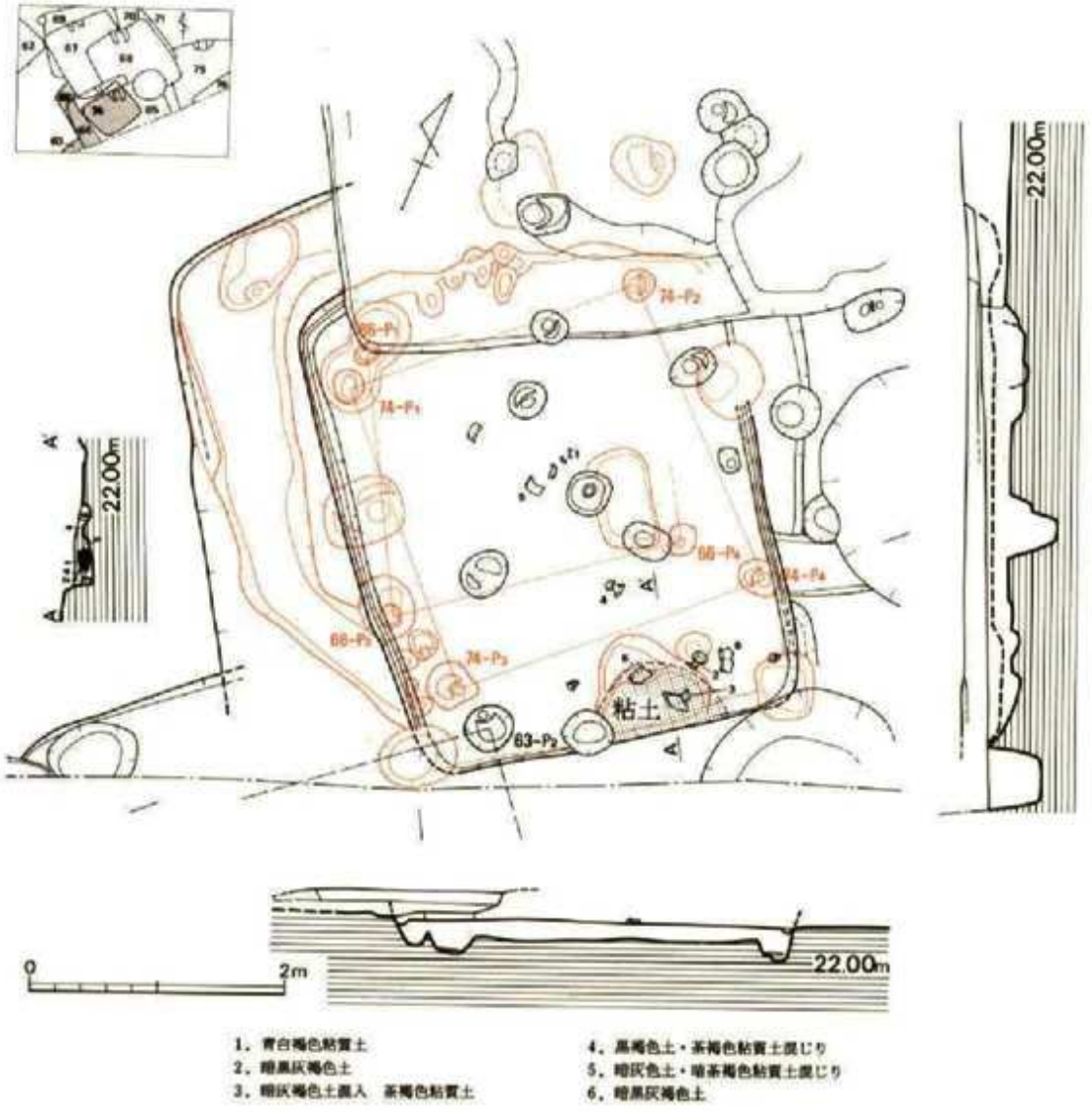
第125図　68～72号掘立柱建物配置図（1/100）

残存状態が悪いので出土量も少なかった。不明土製品が1点出土している。

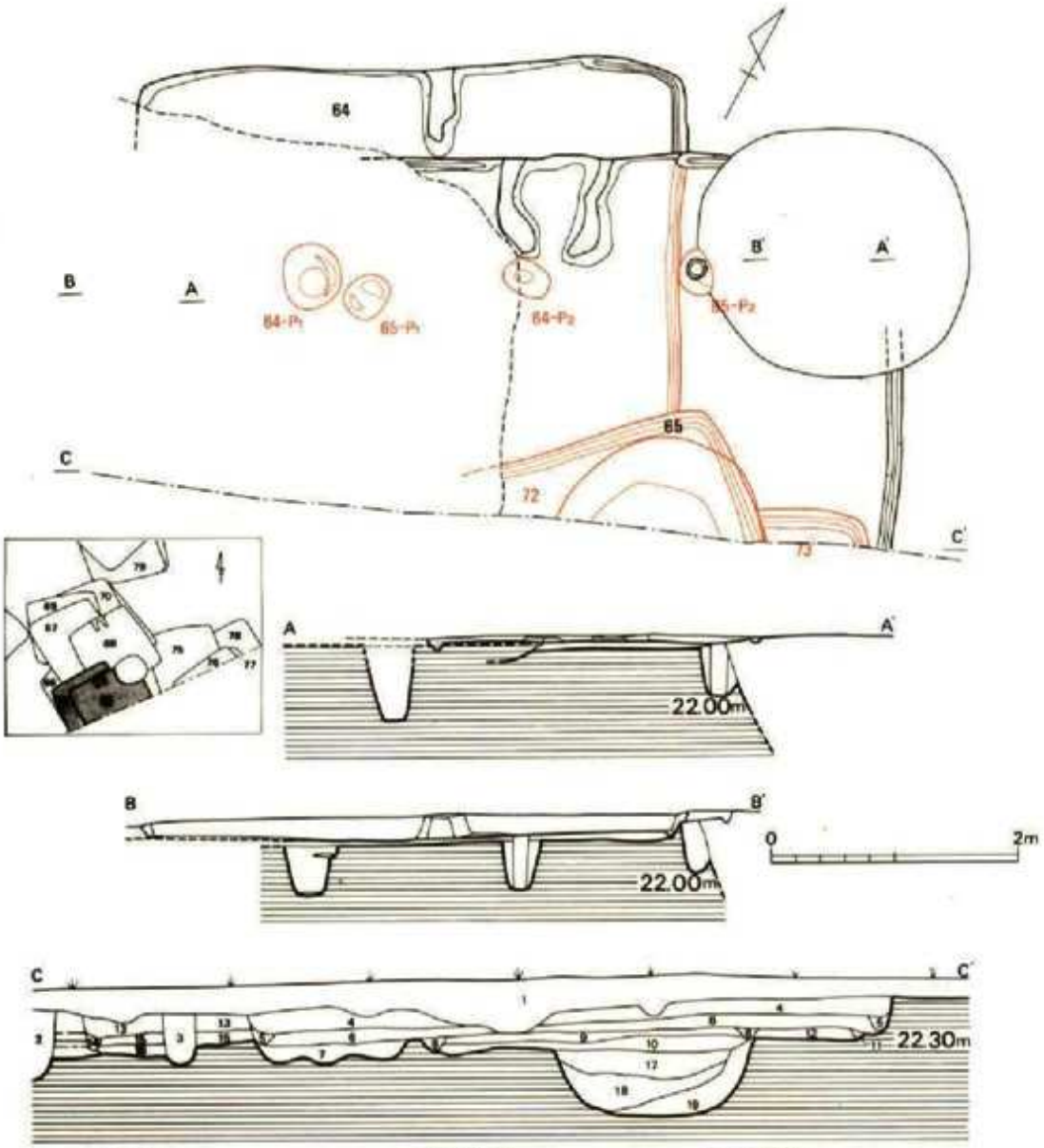
須恵器（1～4）　全て小片である。1は床面より，2と4がカマド周辺より，3が埋土中より出土した。

土師器（5～14）　11が床面より，4・6・10と12がカマド周辺より出土し，他は埋土中から出土した。8は56号住居跡より出土した蓋の摘みと同様である。13は小型の器種の把手であろう。

（武田）



第125図　63・66・74号住居跡実測図（1/60）



1. 耕作土
2. 焼土少量混入暗灰色土
3. 灰褐色砂質
4. 茶色粘質土少量混入暗灰褐色砂質
5. 暗灰褐色砂質
6. 4に黄褐色粘土混入
7. 灰色土少量混入黄褐色粘土
8. 暗茶褐色砂質
9. 茶褐色粘質土
10. 9と黄褐色粘土混じり
11. 暗茶褐色砂質
12. 褐色土少量混入茶色粘質土
13. 11に焼土少量混入
14. 黒褐色砂質
15. 暗褐茶色粘質土
16. 15と黄褐色粘土混じり
17. 黄褐色粘土少量混入褐茶色粘質土
18. 暗褐色土・黄褐色粘土混じり
19. 茶色粘質土・黄褐色粘土混じり

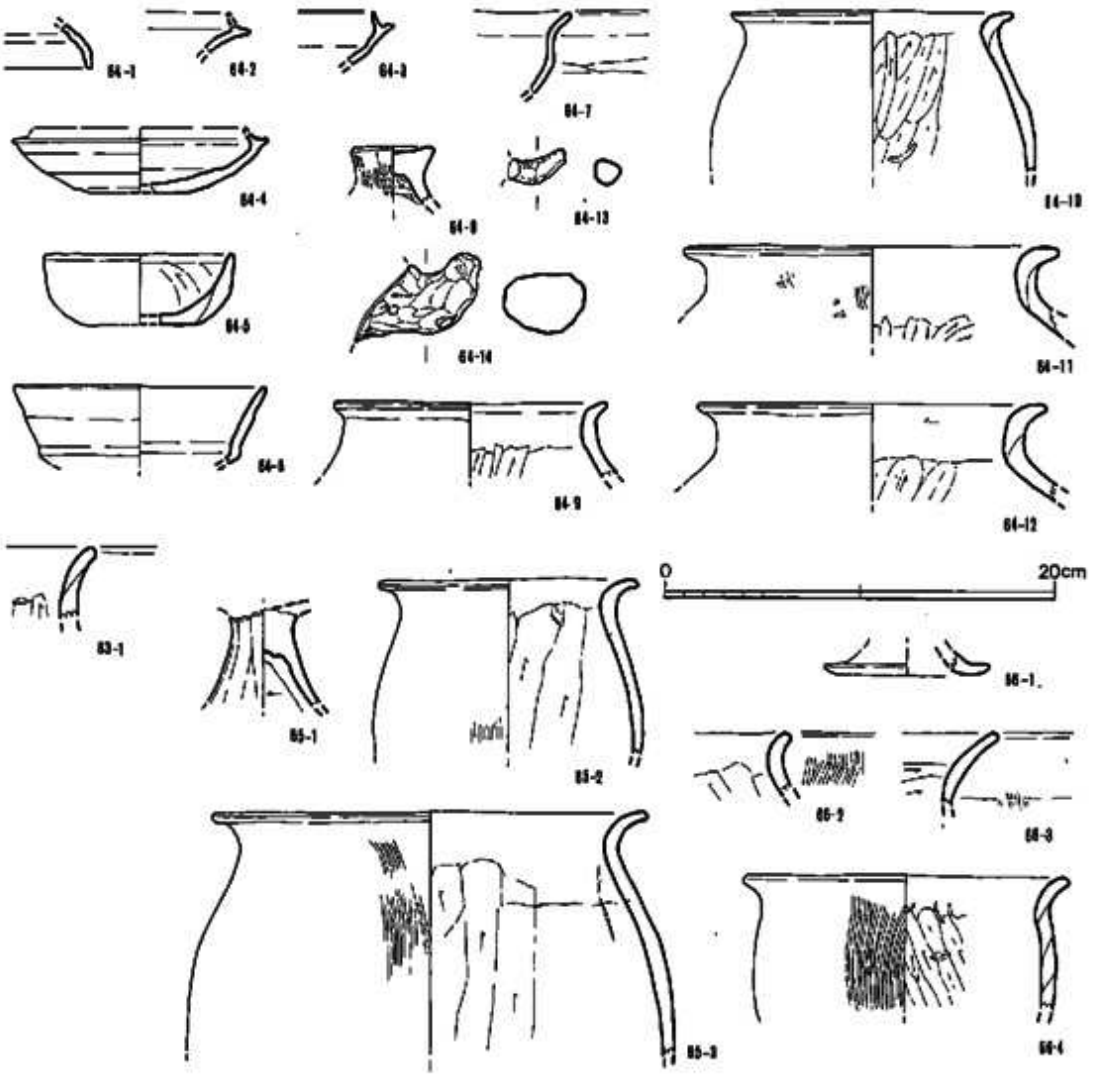
第127図　64・65・72・73号住居跡実測図（1/60）

65号住居跡　（図版30，第127図）

約半分程が調査区外に伸展し，北東部隅を新しい土壙に切られている。主柱穴間より類推するとやや大きめの住居跡となろう。床面はかなり硬化していたが，床面下層の掘り込みは明瞭ではなかった。カマドは北西壁中央よりやや西寄りに付設されていたが，残存状態不良で支脚も存しなかった。

出土遺物　（第128図）

出土量は少なく須恵器は出土していない。スラッグが埋土中より出土し，不明土製品も僅か



第128図　63～66号住居跡出土土器実測図（1/4）

ではあるが埋土中より出土した。

土師器（1～3）　精良な高坏の1は床面より，甕2と3はカマド周辺下層より出土した。

（武田）

66号住居跡　（図版30，第126図）

大半以上を64・67・74号住居跡に切られている。主柱穴は検出時の層序を基に図面上で考えたのを図示したが，P_2は74号住居跡が深く掘られているので無くなったと思われる。しかし74号住居跡の形態及び主柱穴の配置に若干疑問が残るので，74号住居跡の主柱穴としたが本住居跡に伴う可能性も存す。床面はあまり硬化していなかった。床面下層には明瞭な掘り込みが壁沿いに巡っている。カマドは切られて存しない。

出土遺物　（第128図）

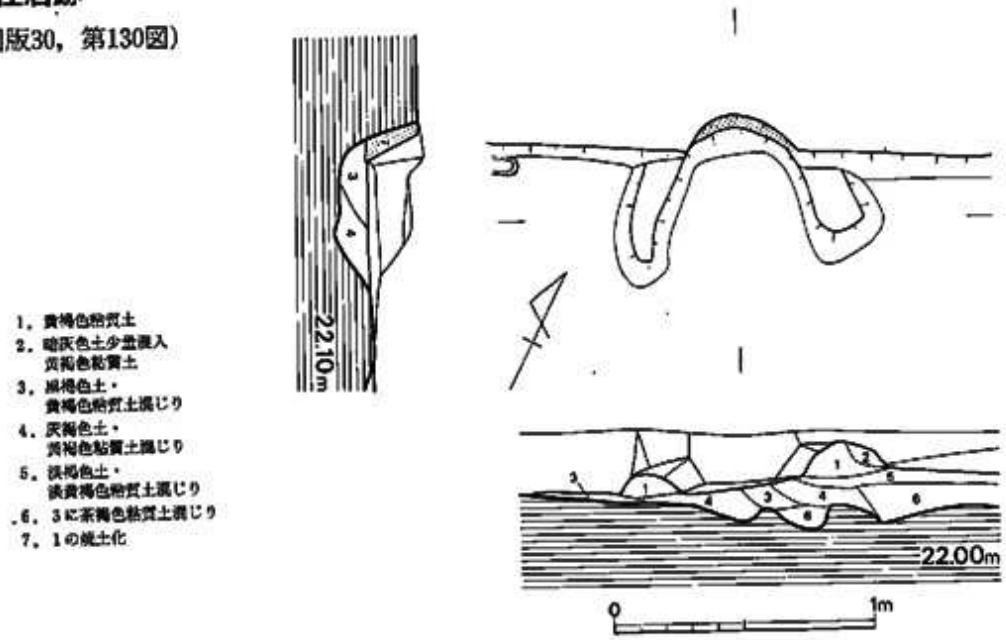
土師器の小片のみ出土した。不明土製品も埋土及び床面下層より僅かに出土している。

土師器（1～4）　2が埋土中よりの出土品で，他は床面下層より出土した。1は精良な高坏であろう。

（武田）

67号住居跡

（図版30，第130図）



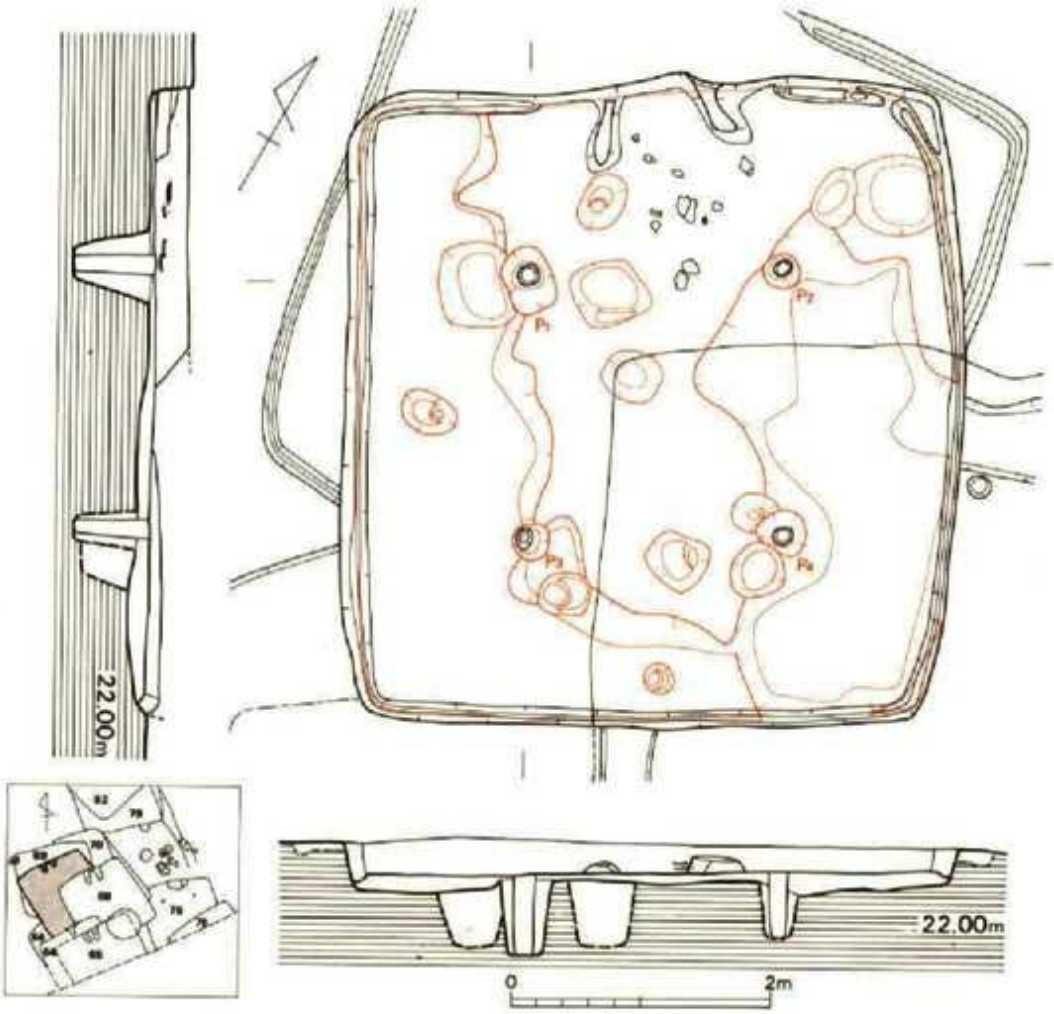
第129図　67号住居跡カマド実測図（1/30）

64・68号住居跡に切られているが中型規模の住居跡と思われる。平面形態は東辺が僅かに膨らんではいるものの主柱穴配置と同様に略方形を呈する。壁小溝はカマド部周辺を除き巡っていた。カマド対面に粘土は認められなかった。床面は主柱間エリアが硬化していた。床面下層にはカマド部を除いた明瞭なコ字状の掘り込みが壁沿いに存した。

カマド（図版29，第129図）　北西壁中央に付設されていたが支脚は存しなかった。煙道部には壁面に粘土を貼り付けた痕が認められた。周辺部より若干の土器が出土している。

出土遺物　（図版86，第132図）

出土量はあまり多くない。棒状土製品が埋土中より，不明土製品も若干出土している。検出時に67・68号住居跡より手捏土器と有溝円板が出土した。



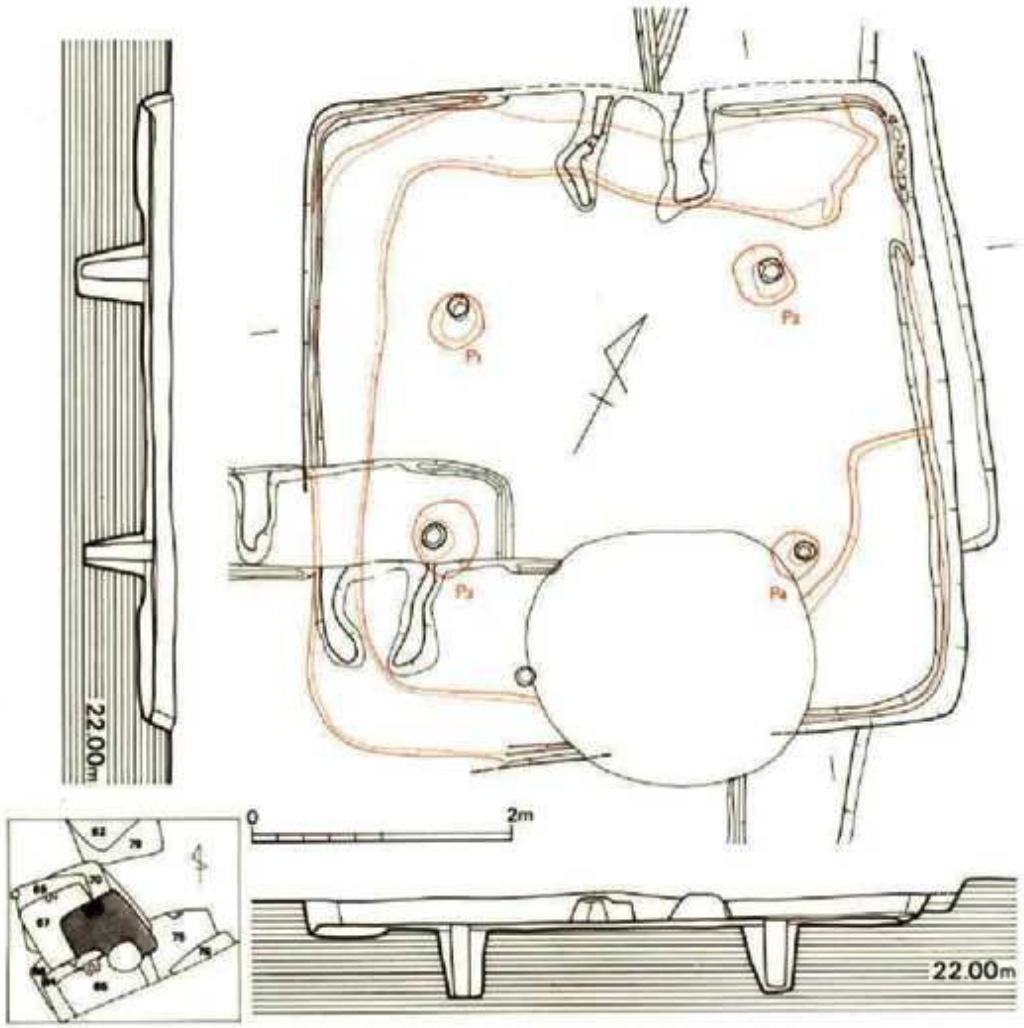
第130図　67号住居跡実測図（1/60）

須恵器（1～4）　4がカマド周辺より出土したが，他は埋土中より出土した。

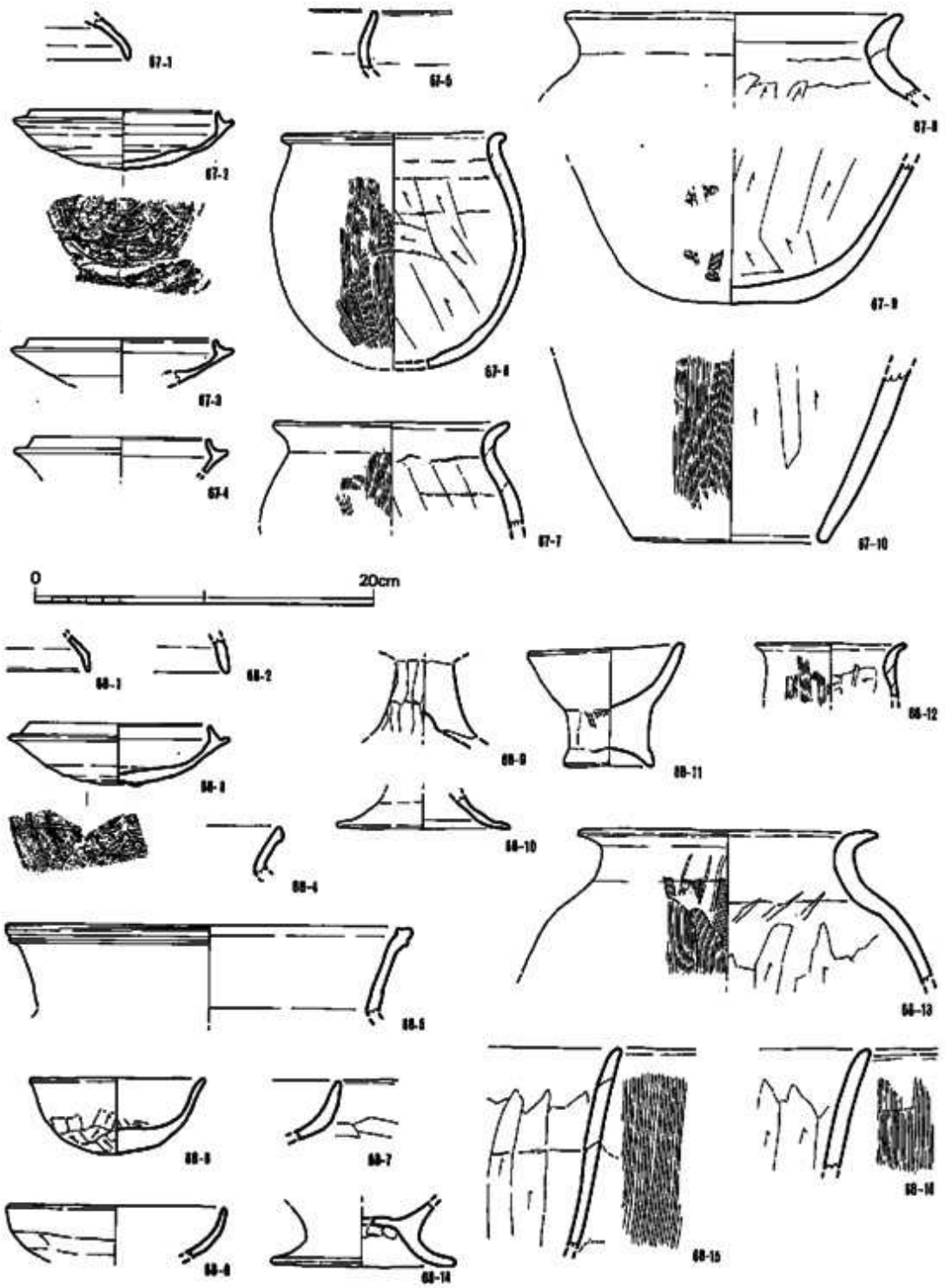
土師器（5～10）　6はカマド周辺，8は床面下層より出土し他は全て埋土中より出土した。5は精良な坩であろうか。6は二次火熱が内外に認められるので支脚に用いられたのであろうか。（武田）

68号住居跡　（図版30，第131図）

新しい土壙と64・65号住居跡に切られてはいるものの概ね一般的規模の住居跡と推定される。一部少し掘り過ぎたが，平面形態と主柱穴配置は台形状を呈する。壁小溝はカマド周辺部を除



第131図　68号住居跡実測図（1/60）



第132図　67・68号住居跡出土土器実測図（1/4）

いて巡っている。床面は主柱間エリアがかなり硬化していたが，その外は普通である。床面下層には東側の一部で途切れるものの壁沿いに明瞭な掘り込みが存したが，中央土壙は存しなかった。

カマド（図版29，第133図）　北西壁中央に付設されていたが支脚は存しなかった。カマドの規模及び形態は一般的である。左袖外に完形の埦と脚付埦が床面上に存した。カマド祭祀が営まれた可能性を有す。

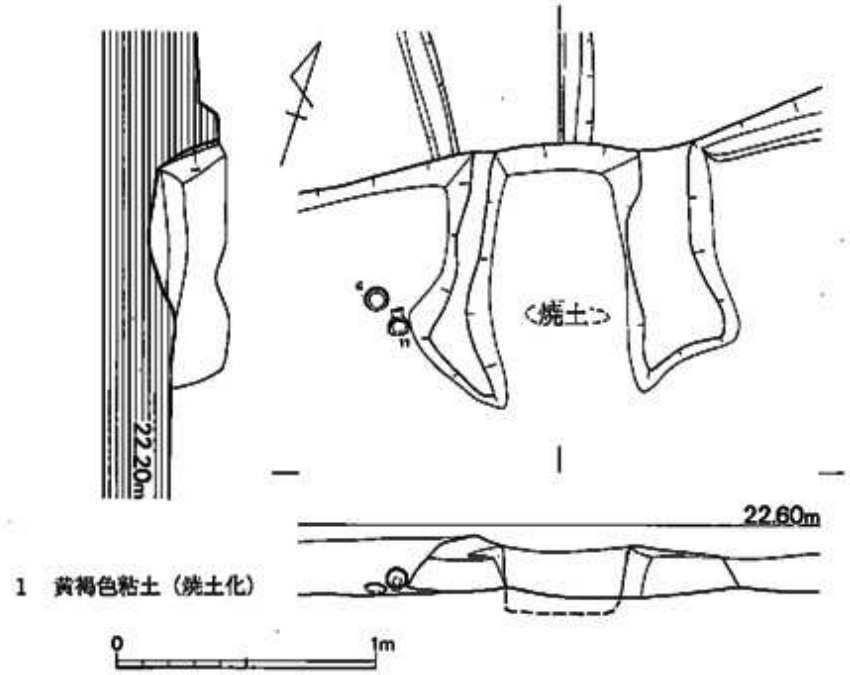
出土遺物　（図版87，第132図）

総出土量は一般的と言ってよい。把手状土製品が埋土中にあり，不明土製品も若干出土している。

須恵器（1～5）　殆どが小片であり，1が床面，2と4がカマド周辺床面，2が床面下層，5が埋土中より出土した。

土師器（6～16）　精良な坏・埦及び高坏が比較的多く出土した。6・7・11と13がカマド周辺より，15が床面上より，16が床面下層より出土したが，他は埋土中よりの出土品である。

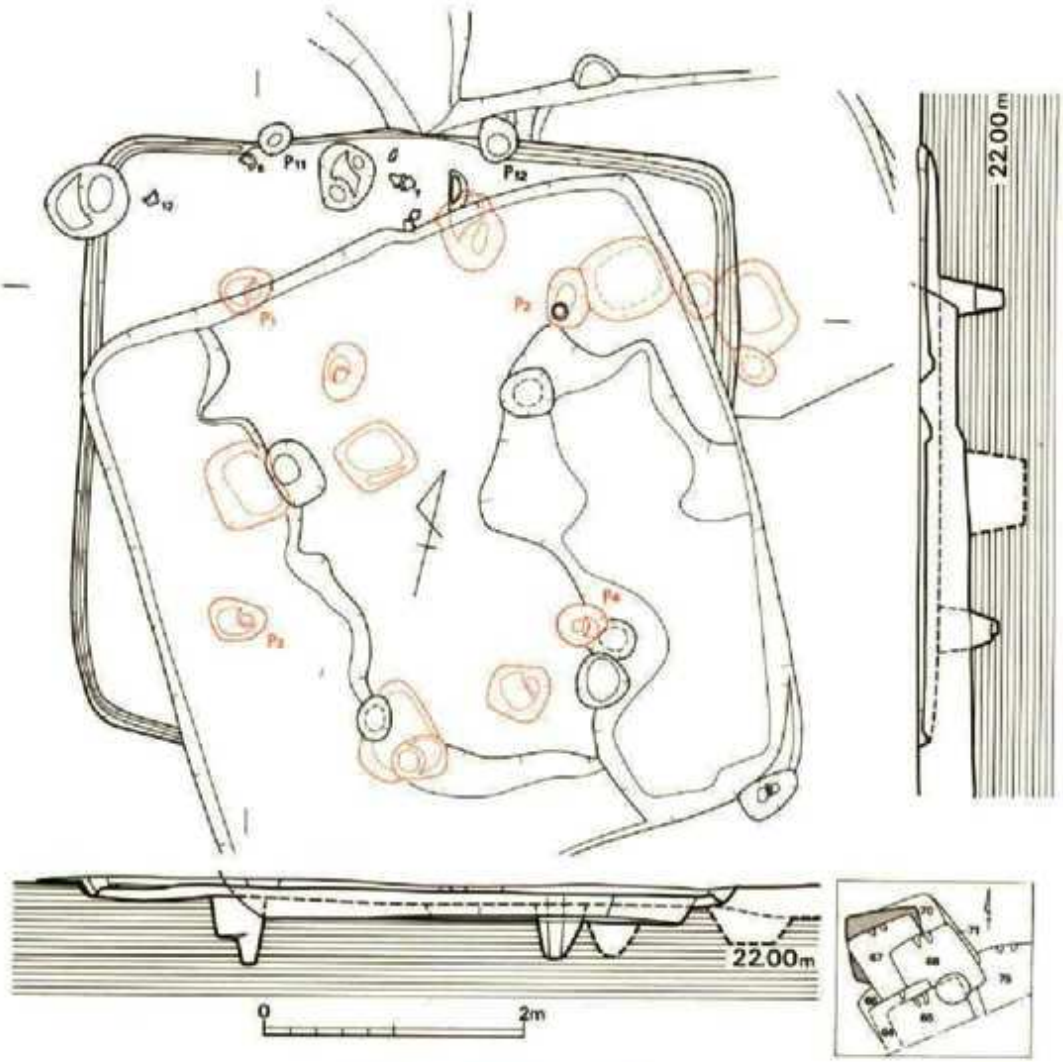
（武田）



第133図　68号住居跡カマド実測図（1/30）

69号住居跡　（図版30，第134図）

大部分を67号住居跡に切られ，70号住居跡を切っているが，62号住居跡との切り合いはない。残存する部分及び主柱穴の配置などより類推すると一般的な規模となろう。主柱穴は68号住居下層で検出し略方形を呈する。壁小溝はカマド周辺を除き巡っている。床面はさほど硬化していないのは主柱間エリア外であり首肯ける。カマドは北壁中央に付設されていたが，現代溝で全んど壊されており袖の基底部が僅かに残っただけである。カマド左側の床面上に若干の土器が出土した。床面下層には明瞭な遺構は存しなかった。竪穴部外にP_{11}とP_{12}を検出したが，54号住居跡と同じ性格を有する柱穴であろう。



第134図　69号住居跡実測図（1/60）

出土遺物　（図版87，第136図）

出土量は少ない部類だが，坏類が比較的多く出土した。埋土中より有溝円板と不明土製品が出土している。

須恵器（1～6）　坏類の破片ばかりで，6が床面より出土したが他は全て床面下層より出土した。

土師器（7～14）　7は床面より出土した精良な埦の完形品である。8はP_1内より出土したが築造時の所産と思われる。10は床面上より出土した脚付の埦であろう。12と13は床面出土で，9と14が床面下層より出土した。（武田）

70号住居跡　（図版30，第135図）

67～69号住居跡に殆ど切られている。主柱穴配置と床面下層の掘り込みより類推すると中型規模の住居跡であろう。壁小溝は存しなかった。カマドは北西壁に付設されていたが，69号住居に大半以上壊されていた。竪穴部外柱穴P_{12}も当住居跡に伴うかもしれない。床面はやや硬化していたし，床面下層に明瞭な掘り込みが存した。

出土遺物　（図版87，第136図）

出土量は少なかった。床面下層より土玉と不明土製品が出土した。

須恵器（1～4）　坏身のみが出土した。1と2が床面下層より，3と4が埋土中より出土した。

土師器（5～6）　5は床面より出土し，6は丁寧なつくりの鉢と思われるが床面下層より出土した。（武田）

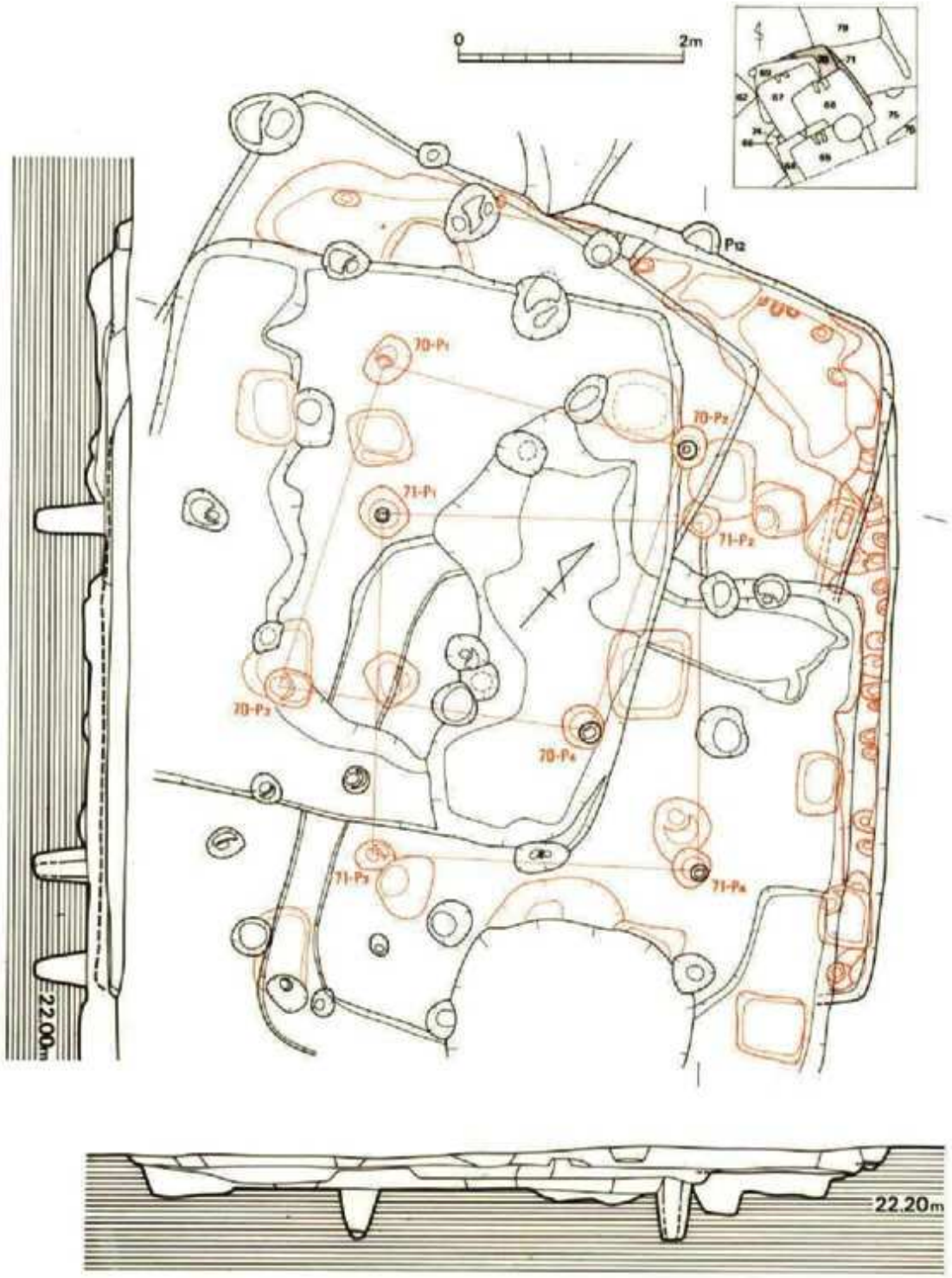
71号住居跡　（図版30，第135図）

68・70号住居跡に殆ど切られて東壁部の一部しか残存しないが，75号住居跡を切っている。主柱穴配置は一般的であり，これより類推すると中型規模の住居跡であろう。壁小溝は存しなかった。床面下層は凹凸が著しく掘削痕であろう。

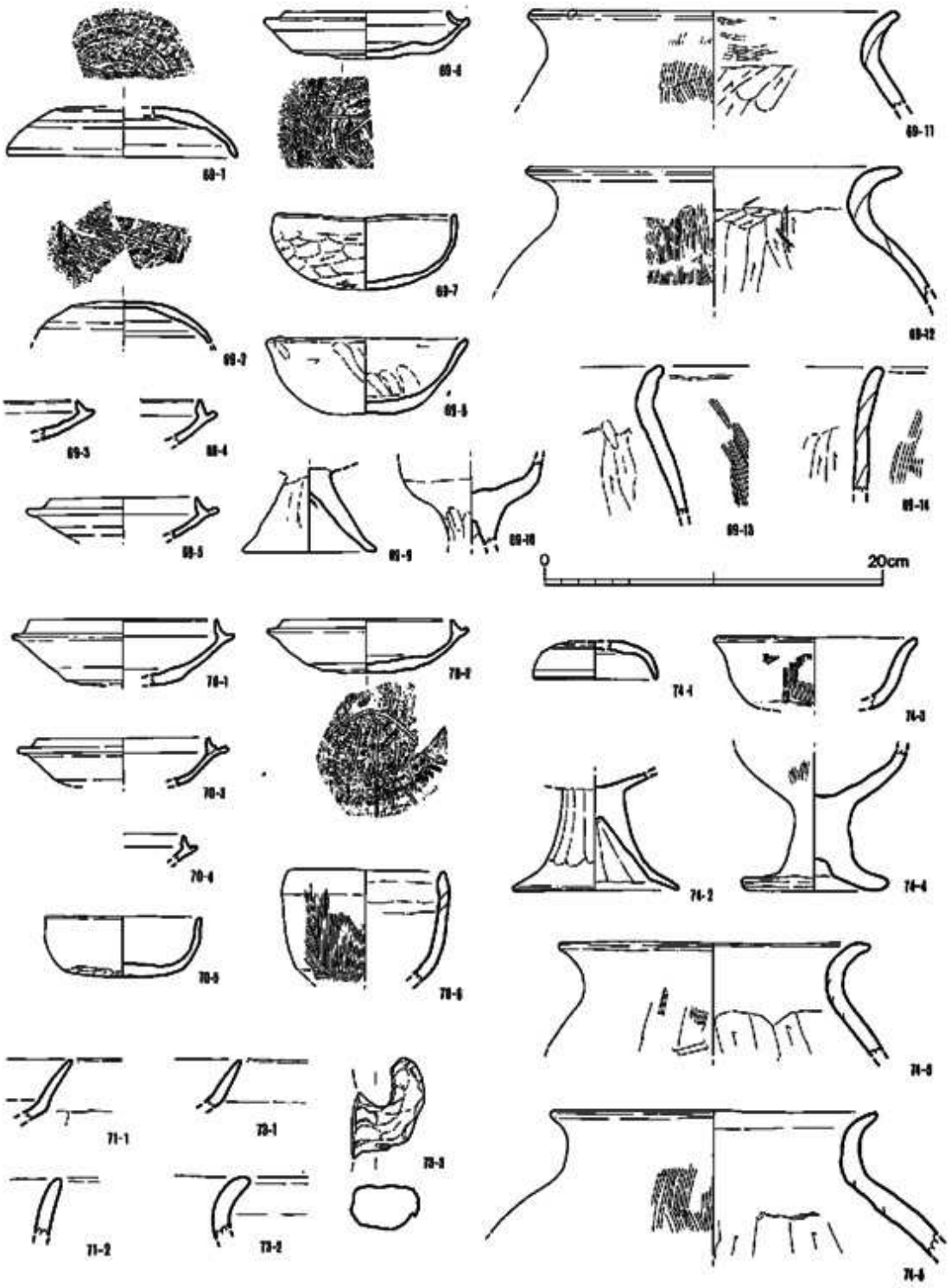
出土遺物　（第136図）

殆んど出土しなかった。不明土製品も1点だけ出土している。

土師器（1・2）　図示出来たのは2点のみである。1は坏であろうし2は甑と思われ，埋土中より出土した。（武田）



第135図　70・71号住居跡実測図（1/60）



第136図　69～74号住居跡出土土器実測図（1/4）

72号住居跡　(第127図)

65号住居跡下層より検出し，64・74号住居跡を切っている。壁小溝が存したので住居跡とした。殆どが調査区外に伸展するので，概ね不明な住居跡である。下層よりＤ３を検出したが当住居跡に伴うか否かは不明である。出土遺物も土師器甕の小片のみで，図示出来るものはなかった。　(武田)

73号住居跡　(第127図)

65・72号住居跡に切られ，殆どが調査区外に伸展する。壁小溝と床面を確認したので住居跡とした。72号住居跡と同様に殆どが不明である。

出土遺物　(第136図)

土師器の小片が出土しただけである。

土師器（１～３）　全て床面直上で出土したものであり，３は精良な坏であろう。(武田)

74号住居跡　(第126図)

64・65住居跡の下方より検出したが，63・66号住居跡よりは新しい。床面とその上方僅かしか残存せず，カマドも67号住居跡に削平されたと考えられる残存状態不良な住居跡である。主柱穴は壁際の４本としたが，当遺跡でこの種の柱配置をなす住居跡はなく問題を孕む結果となった。しかし一般的な位置を精査したのであるが存しなかった。もし図示した主柱穴が66号住居跡に伴う場合は，当住居跡の主柱穴は床面土に据えられていたとしか考えられない。どちらの場合でも当遺跡では不合理であり，後日の課題としたい。床面は全体的に硬化していた。壁小溝は東西壁際に２条存した。床面下層には明瞭な遺構は認められなかった。

カマド対面粘土及び土壙　南西壁中央部にさ程厚くはないが粘土が散布していた。その下方に不整形な土壙を検出したが浅い二段掘りである。壙内及び周辺より甕(６)が，上端部で高坏(２)が出土したが，残存状態を考え合せるとこれらの土器は粘土内に存したと思われる。

出土遺物　(図版87，第136図)

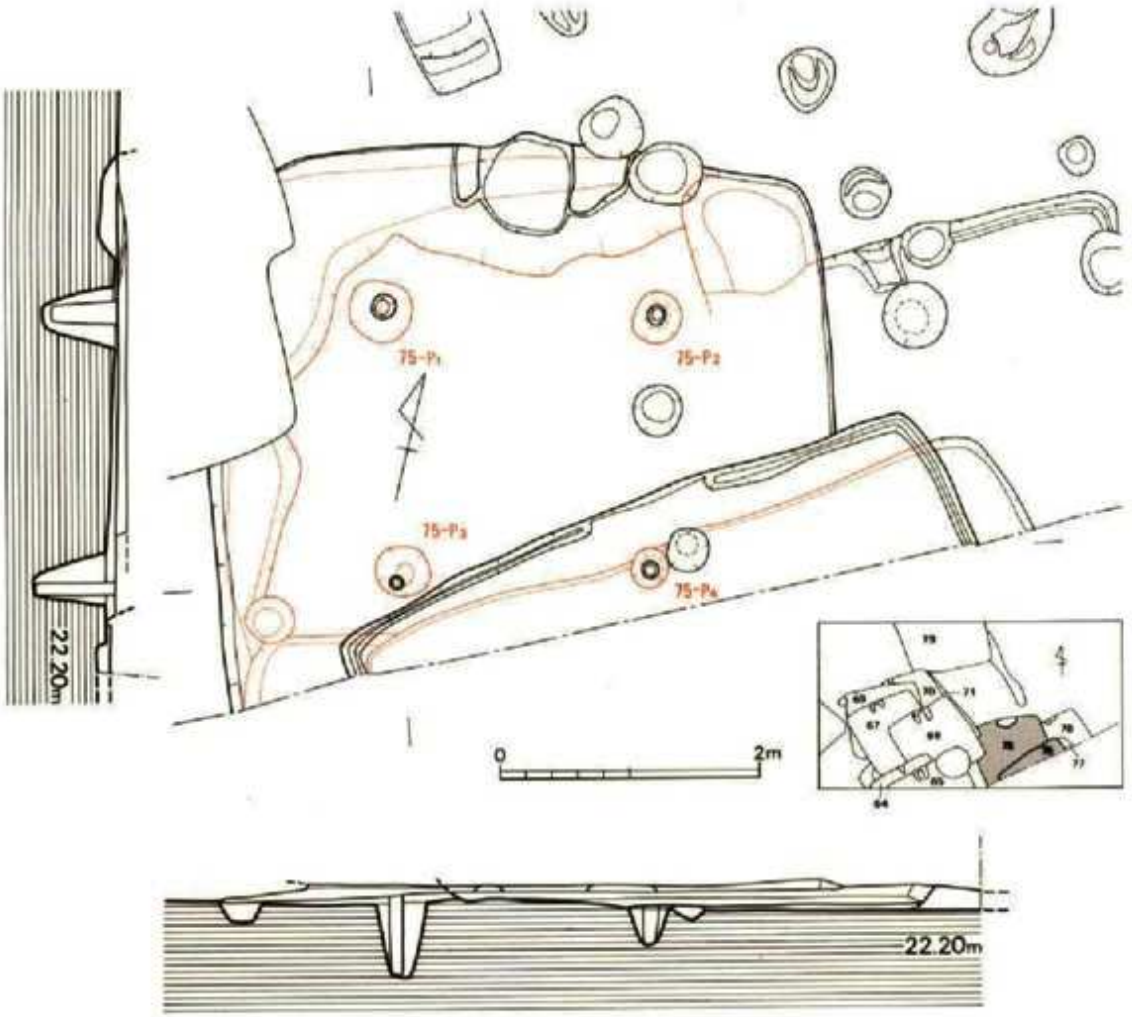
残存状態不良な住居跡にしては多く出土した。鉄製刀子が床面上より，手捏土器が床面直上より出土した。不明土製品で布目痕を有するものなどが床面下層より出土している。

須恵器（1）　坩の蓋と考えられ埋土中より出土した。

土師器（2～6）　3は土壙内より出土した坏であろう。他は床面上より出土した。4は脚付埦であろうし，2は精良な高坏である。（武田）

75号住居跡　（図版30，第137図）

68・71と76号住居跡に切られ，78号住居跡を切り調査区外に若干伸展する住居跡である。壁小溝は存せず，床面の硬化は一般的である。床面下層には明瞭な掘り込みが認められ，南西隅の落ち込みは土壙状を呈する。



第137図　75・76号住居跡実測図（1/60）

カマド　北壁中央部に付設されているが，後世の柱穴などで壊され残存不良である。支脚は存しなかった。火床面は65cmの隅円方形を呈するが両袖共に約半分程が残存していると推定される。

出土遺物　(第139図)

出土量は少なかったが坏類が比較的多い。

須恵器(1～4)　1が床面下層より，2が床面より出土し他は埋土中より出土した。4は高坏と思われる。

土師器(5～9)　6と8はカマド周辺より出土した。6は精良な椀であろうか。8は著しく二次火熱を受けているので支脚として用いられたかもしれない。5は柱穴内より出土した坏であろう。7は精良な鉢で埋土中より，9は床面下層より出土した。　(武田)

76号住居跡　(図版30，第137図)

75・77と78号住居跡を切っているが，大半以上は調査区外に伸展する。壁面は略垂直に立ち上り，壁小溝は存した。カマドは人為的に壊された様相を呈し，両袖及びその基底部すら判別出来ない程であった。粘土と焼土が広範囲に散布しており，一種のカマド祭祀行為とも考えられる。

出土遺物　(第139図)

僅かな出土量でその殆どが小片であった。

須恵器(1～3)　1は床面下層より出土した。2と3は埋土中より出土し，3は高坏の脚部であろう。

土師器(4～6)　小片ばかりであり，床面上より出土した。6は甑であろう。　(武田)

77号住居跡　(第138図)

76号住居跡に切られ調査区外に大半以上伸展する全く不明な住居跡である。壁面は略垂直に立ち上り，壁小溝も僅かではあるが検出した。カマドは削平されたと考えられ存しなかった。床面下層にはやや深い掘り込みが施されている。

出土遺物　(第139図)

土師器のみが少量出土した。

土師器(1～4)　1は精良な坏で埋土中より出土し，2～4は床面下層より出土した。

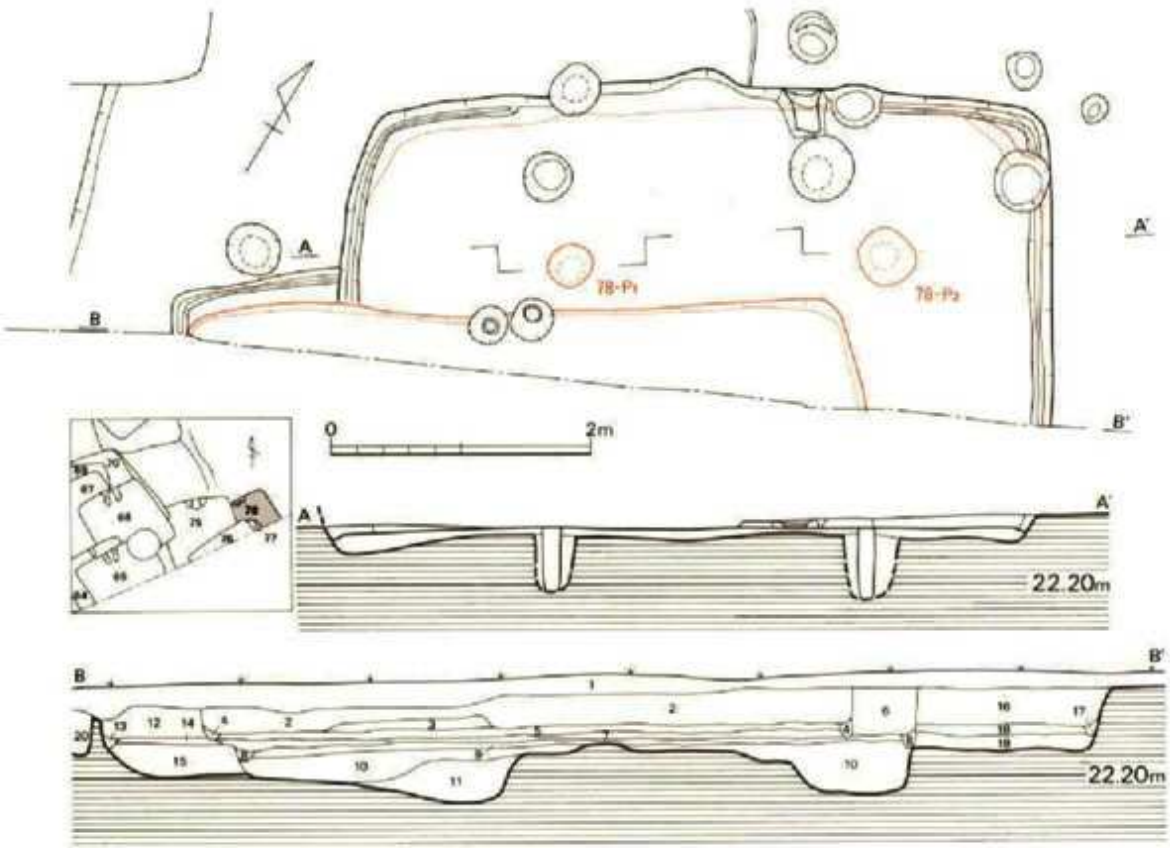
(武田)

78号住居跡　（第138図）

西北部を75～77号住居跡に切られ，約半分程が調査区外に伸展する。壁面はやや緩やかな立ち上りで，壁小溝はカマド周辺を除き巡っている。床面は一般的な硬化を示し，床面下層には明瞭な遺構は認められなかった。カマドは北壁中央に付設されていたが，後世の柱穴や75号住居跡に削平されて右袖の一部しか存しなかった。

出土遺物　（第139図）

出土量は少なかった。不明土製品が埋土中より出土している。

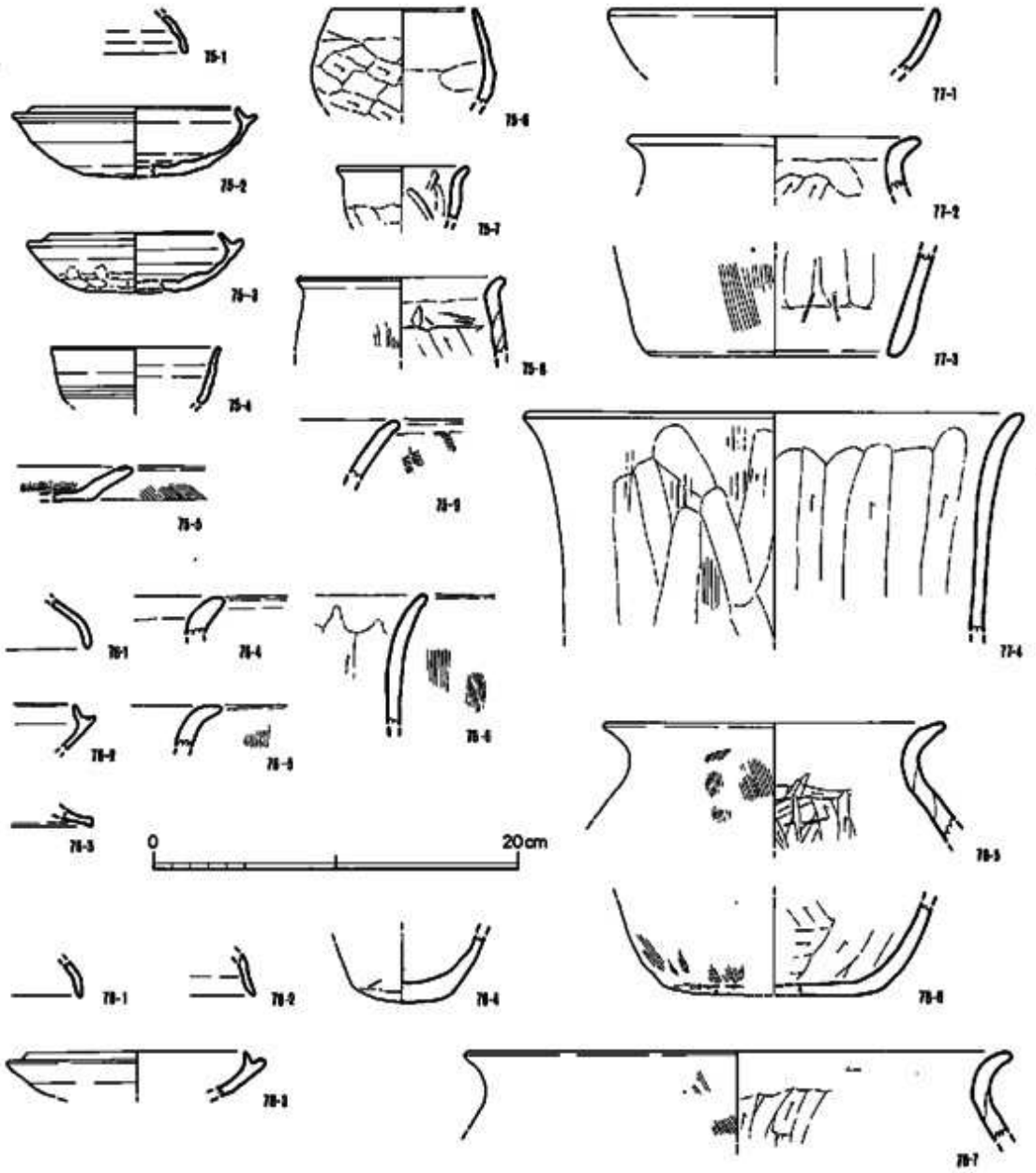


1．耕作土
2．茶色土・焼土少量混入黒褐色砂泥
3．焼土混入黄褐色粘土
4．暗茶灰色砂泥
5．黄褐色粘土・黒褐色砂泥混じり
6．2よりも茶色土多量に混入
7．茶色粘質土・黒褐色砂泥混じり
8．黒褐色砂泥
9．黒褐色砂泥やや多く混入黄褐色粘土
10．暗褐茶色砂泥
11．10と黄褐色粘土混じり
12．茶灰色土・黒褐色土混じり
13．暗褐色砂泥
14．灰色粘土・黒褐色砂泥混じり
15．12に少量黄褐色粘土混入
16．茶褐色土少量混入黒褐色砂泥
17．16よりもやや黒い
18．16と黄褐色粘土混じり
19．黒褐色土少量混入黄褐色粘土
20．暗茶褐色砂泥

第138図　77・78号住居跡実測図（1/60）

須恵器（1～3）　1は床面下層より，2と3は埋土中より出土した小片である。

土師器（4～7）　7が床面下層より出土し他は埋土中より出土した。4はやや粗製な鉢の底部であろう。　（武田）

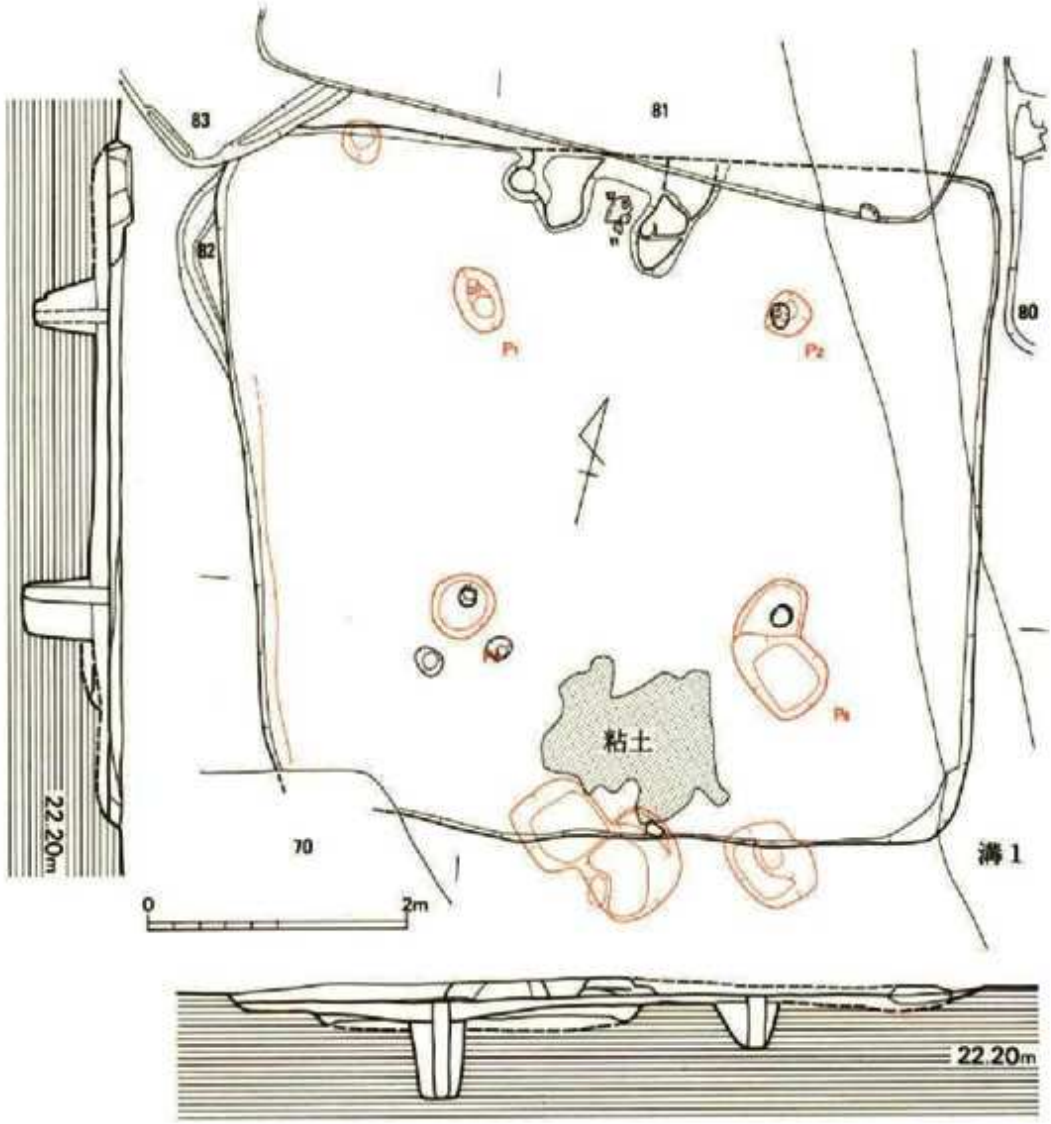


第139図　75～78号住居跡出土土器実測図（1/4）

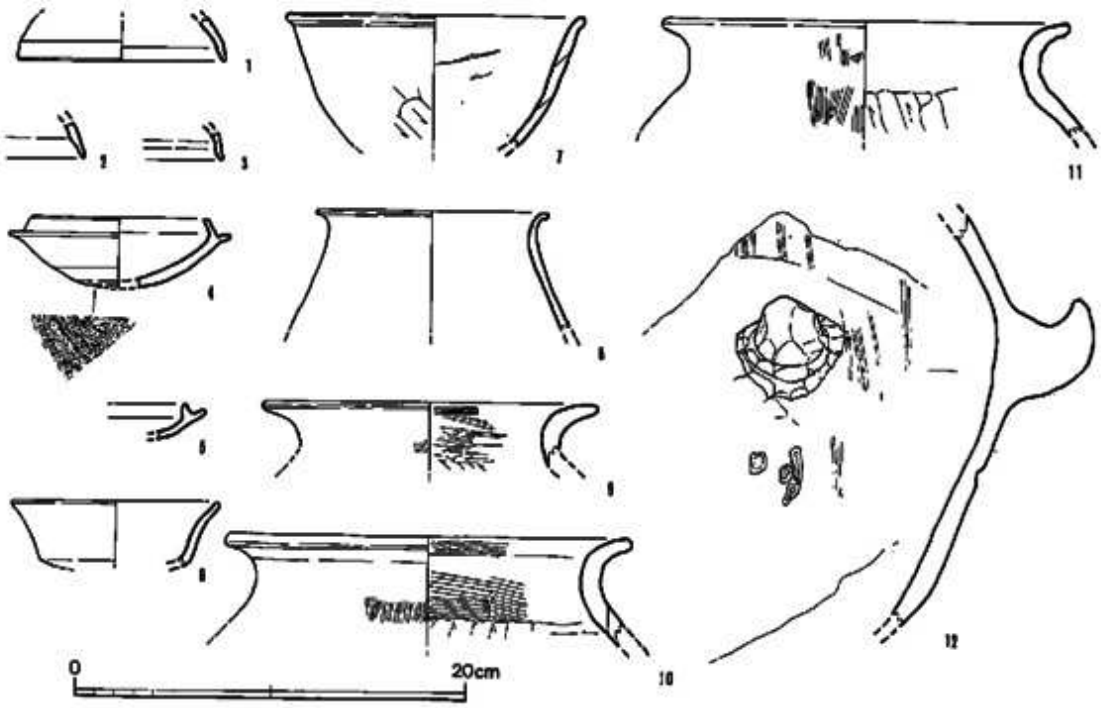
79号住居跡　（図版31，第140図）

調査区のほぼ中央に位置し，80・82号住居跡を切り70・81号住居跡に僅かに切られる。また，東壁側を溝1が南北に縦断している。プランは逆台形を呈し，貼床面にはP_1を除いた3本の主柱痕が残る。カマド対面には灰白色粘土が床面との間に黒色土を挟んで堆積していた。貼床を剝がしてはないが，床面下の構造は他の住居跡と同様であろう。

カマド　住居跡は逆台形プランを呈し，その最長辺（北壁）のほぼ中央に付設されている。住居の壁高が低い為遺存状態は良くない。支脚は検出しなかった。



第140図　79号住居跡実測図（1/60）



第141図　79号住居跡出土土器実測図　(1/4)

出土遺物　(第141図)

45個体分の土器片を検出し，そのうち須恵器が10個体分を占める。

須恵器（1～5）　小片の為反転復原図である。坏身4の口唇部は上端に面を有する。カマド内出土の坏蓋1を除いて他は埋土中から出土した。

土師器（6～12）　全て小片の為反転復原図である。6・8は精製土器である。6・11・12はカマド内，10は床面下層，7～9は埋土中からの出土である。　(児玉)

80号住居跡　(図版31・32，第142図)

調査区のほぼ中央に位置し，西壁を79・81号住居跡に，南東隅を4号土壙・43号建物に切られている。カマドは西壁中央部に付設されているが遺存状態は良くない。カマド対面の東壁よりやや北に偏して，住居内への"入り口"と考えられる遺構が存在する。この遺構は南北約0.8m，東西1m程の略長方形を呈し，深さは20cm程でこの底面と住居床面レベル差は僅かしかない。埋土は暗褐色系のもので粘土は存しない。この遺構に接続して住居内に灰白色粘土が検出され，粘土を使って入口を構築し，住居廃棄時に入口が倒壊したものであろうと推測される。また，カマド対面のこの粘土下には不整形の小形の土壙が存在する。踏み固められた貼床面に

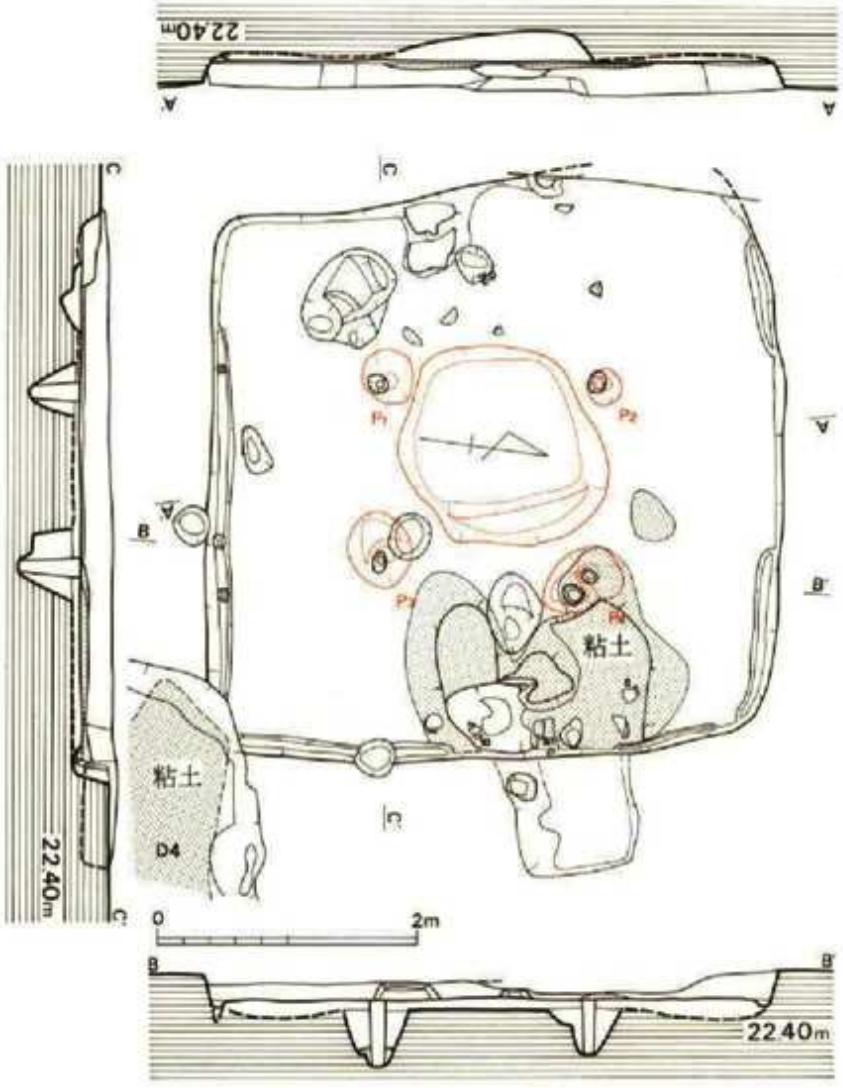
は4本の主柱痕が残っている。また，床面下のほぼ中央に中央土壙が存在する。貼床を完全にめくってはないが，周壁に沿って掘り込みが巡っているだろうと思われる。

カマド　先述のように，遺存状態が悪く，右袖の全部と左袖の前半部を欠失する。

出土遺物　（図版88，第143図）

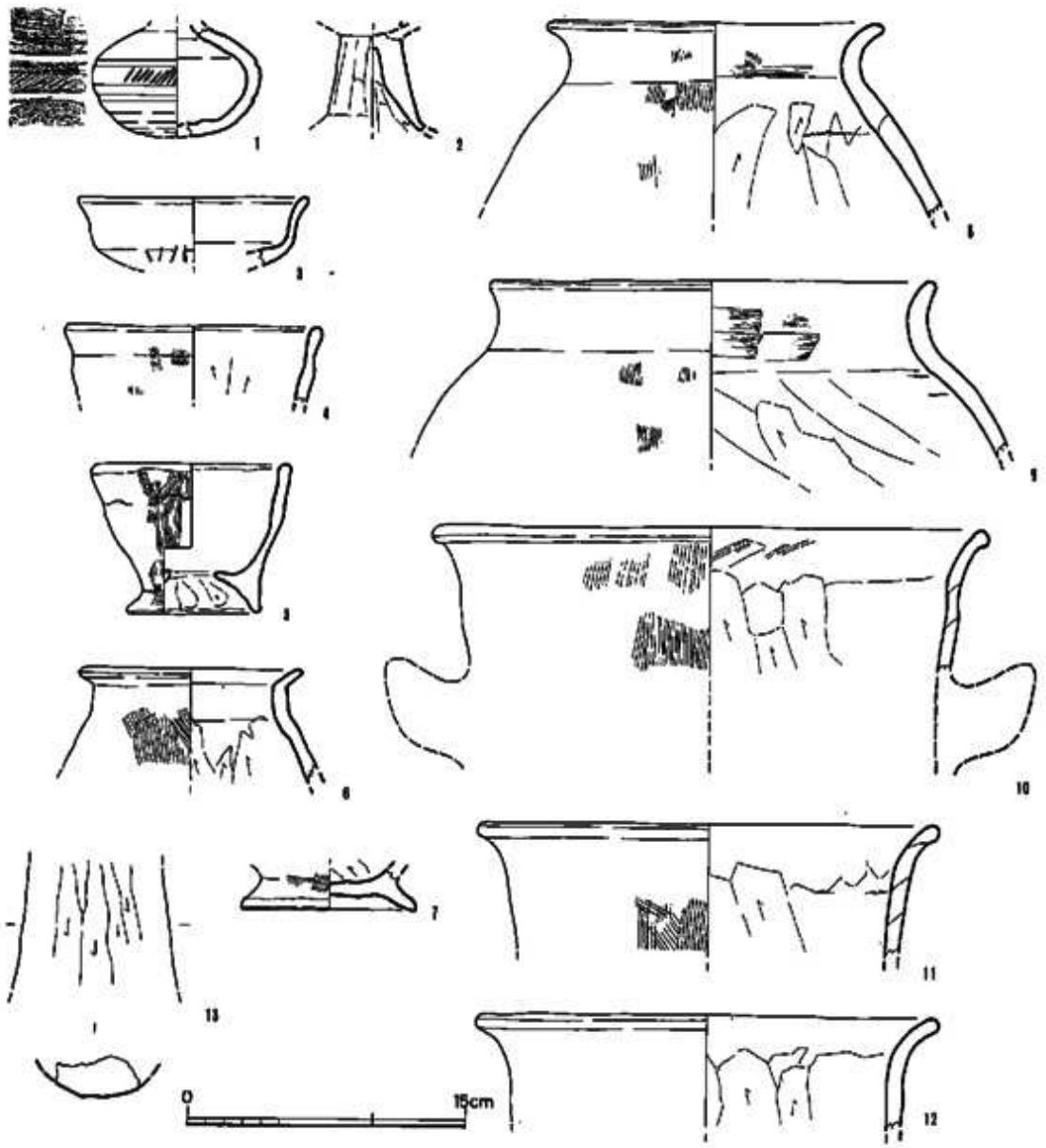
須恵器の2個体分，土師器34個体分の破片と砥石が1点出土している。カマド周辺にて桃かと思われる実が出土した。また，不明土製品も出土している。

須恵器（1）　埋土中からの出土で，反転復原図である。肩には灰をかぶっている。



第142図　80号住居跡実測図（1/60）

土師器（2～13）　4・6・12はカマド対面の土壙から，8～10はカマド対面の粘土とともに，11はカマド周辺から，他は埋土中からの出土である。13は小片ながら土製の円柱状支脚で，立野遺跡では出土例が少ない。2は精製土器である。（児玉）



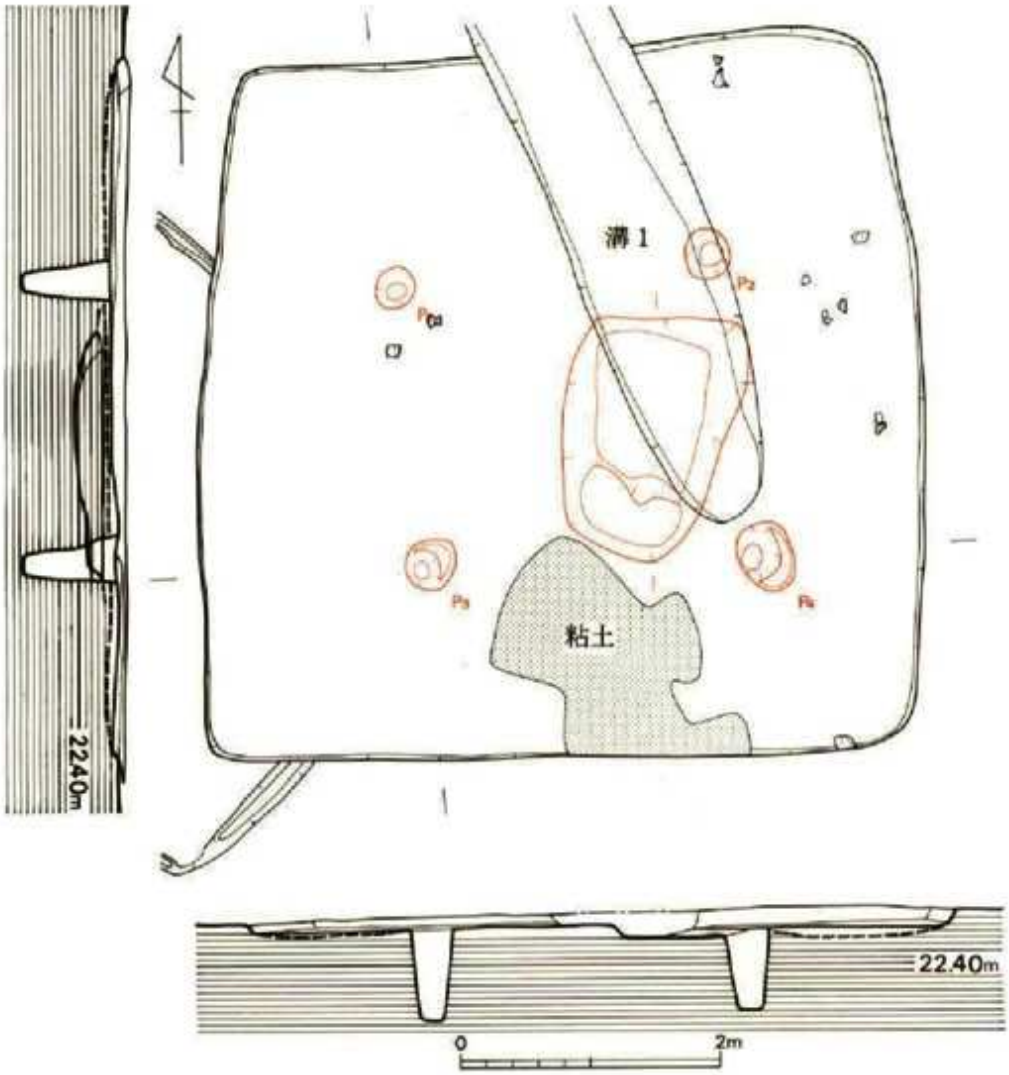
第143図　80号住居跡出土土器実測図（1/4）

81号住居跡　（図版31，第144図）

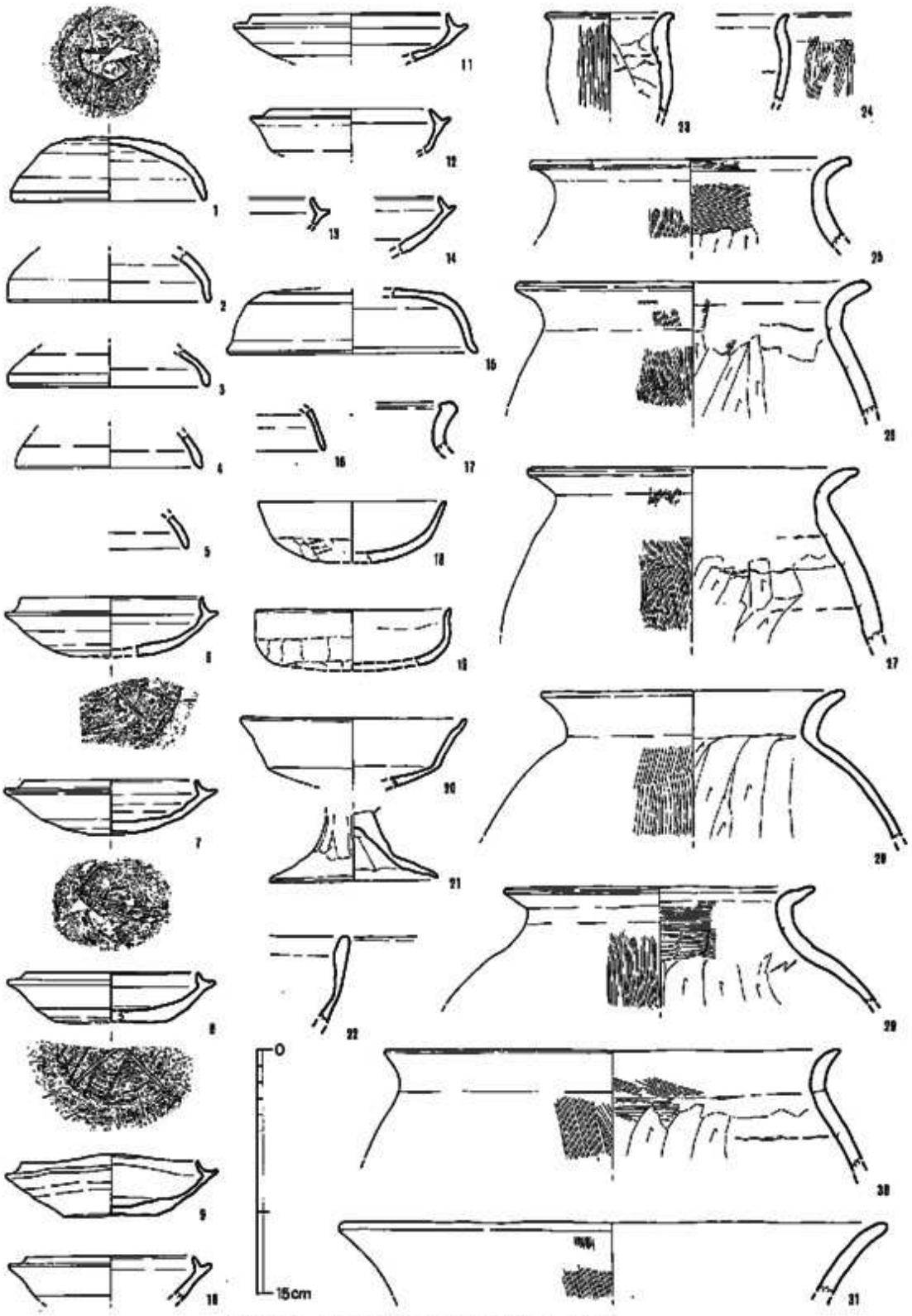
調査区のほぼ中央に位置し，79・80・82・83号住居跡を切り，東半部を溝1に切られる。略台形を呈し，最短辺の北壁にカマドが付設されていたが，溝1によって破壊されている。カマド対面に床との間に薄く黒色土を挟んで灰白色粘土を検出した。床面を完全に剝がしたわけではないが，やや東に偏して床面下の中央土壙を検出した。

出土遺物　（図版88，第145図）

108個分の土器片を検出し，そのうち須恵器は34個体である。須恵器甕の口縁部でP1234出土



第144図　81号住居跡実測図（1/60）



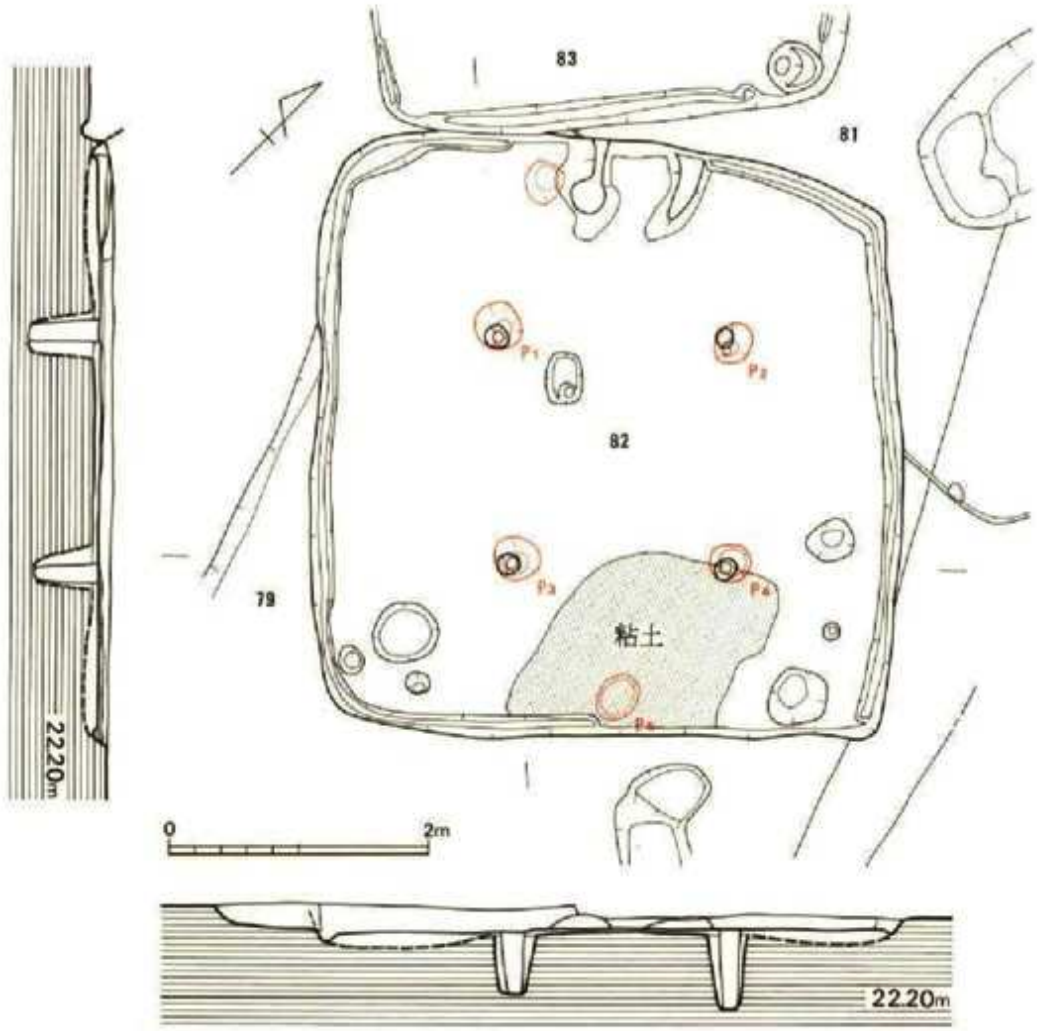
第145図　81号住居跡出土土器実測図（1/4）

品との同一個体資料がある（B－4参照）。他に砥石が1点出土している。

須恵器（1～17）　全て埋土中からの出土で，9を除いて他は反転復原図である。17は壺の口縁部小片である。

土師器（18～31）　18は床面，21は床面下層，他は埋土中からの出土である。18～21は精製土器で，22もそれに近い。23は二次火熱を受けている。　（児玉）

82号住居跡　（図版31，第146図）



第146図　82号住居跡実測図（1/60）

79号住居跡とほぼ重なり合った状態で切られ，79号住居跡の北西隅に僅かに顔を出している。が幸いに，79号住居跡の下層に床面と僅かな壁が遺存し，ほぼ方形のプランを確認出来た。床には4本の主柱痕が残り，北西壁中央にカマドを設置していた。カマド対面には床面との間に黒色土を挟んで黄灰色粘土を検出した。

カマド　北西壁ほぼ中央に設置される。79号住居跡に切られる為遺存状態は良くない。

出土遺物　（第148図）

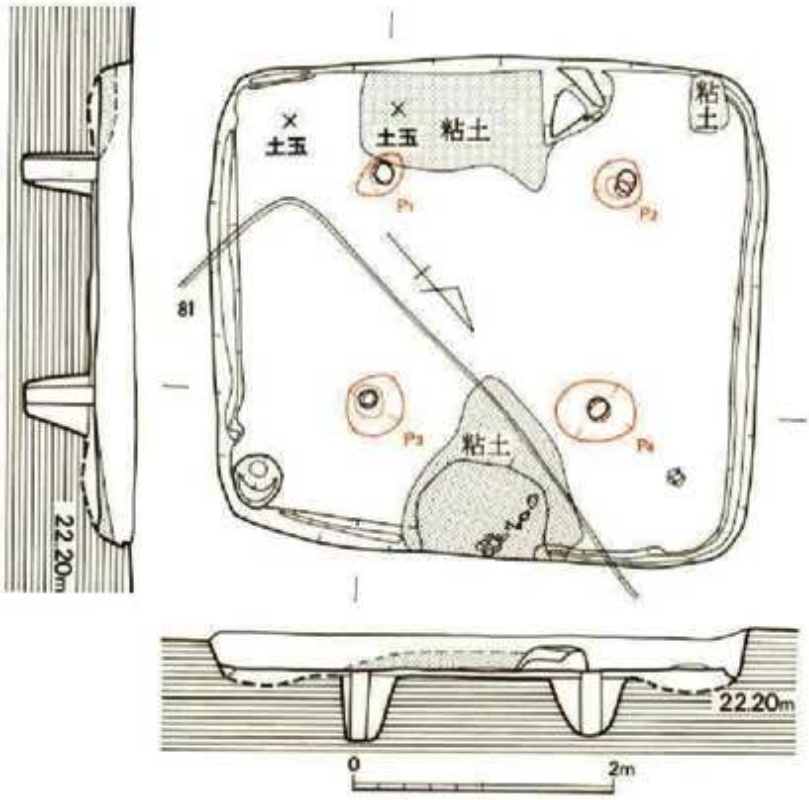
土師器ばかり11個体分の小片が出土している。

土師器（1～3）　1は床面出土，2は床面下層，3はP，埋土中からの出土である。

（児玉）

83号住居跡　（図版31，第147図）

調査区のほぼ中央に位置し，東側を81号住居跡に切られるが完全な破壊を免れ，床面は残っていた。踏み固められた貼床面には4本の主柱痕が残る。南西壁中央にカマドが付設され，そ



第147図　83号住居跡実測図（1/60）

の対面には床面との間に薄く黒色土を挟んで灰白色粘土が堆積している。貼床を剝がしてないが床面下の構造は他の住居と同様であろう。

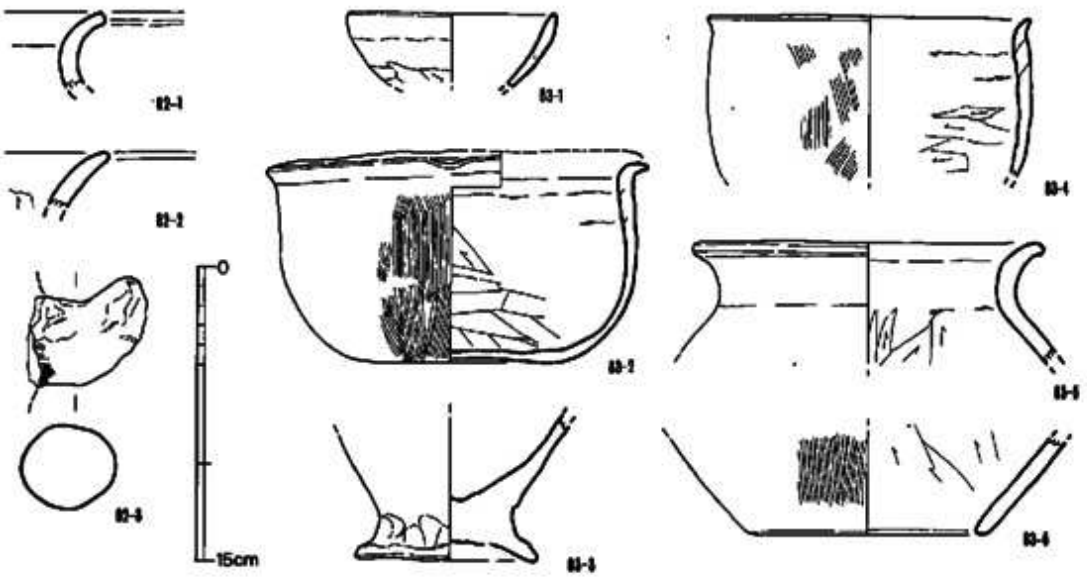
カマド　南西壁中央に粘土塊の状態で検出したが，詳細な調査は実施していない。なお，この粘土中より土製の玉３点が出土している。

出土遺物　（図版88，第148図）

土器21個体分の破片，土製玉３点，手捏土器２点がカマド左側と埋土中より，また不明土製品が埋土中から出土している。このうち，須恵器は１点である。

土師器（１～６）　２・４はカマド対面の粘土中で検出した。他は埋土中からの出土である。

（児玉）



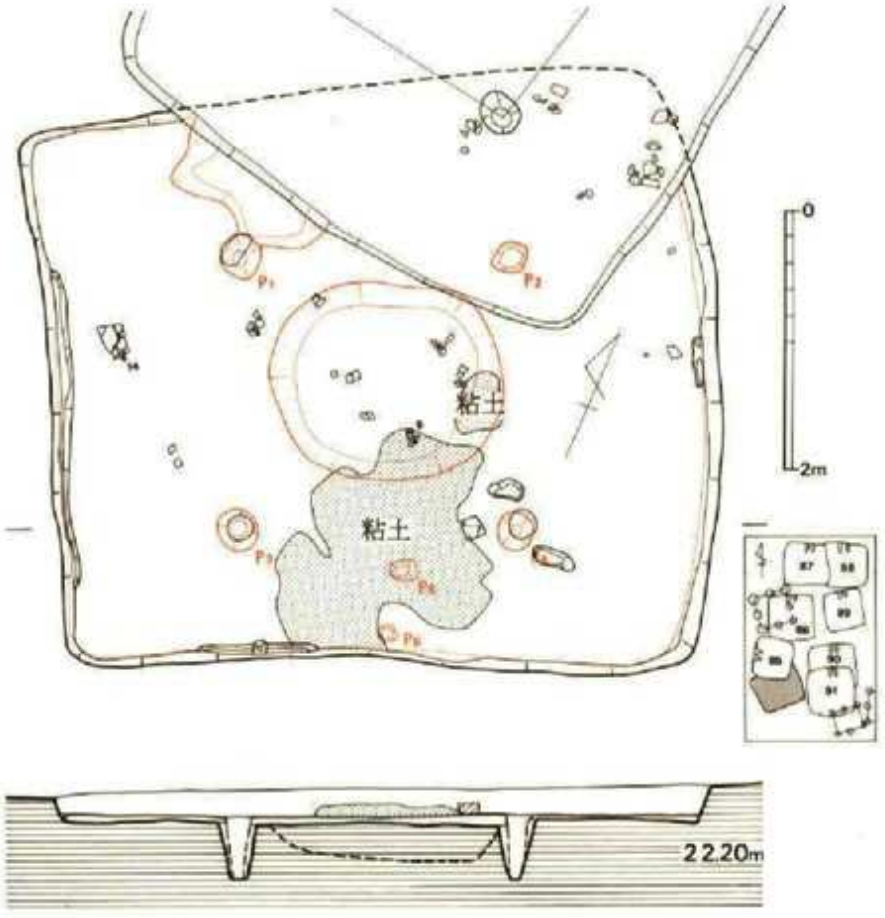
第148図　82・83号住居跡出土土器実測図　(1/4)

84号住居跡　（図版33・34，第149図）

85号住居跡に切られ，91号住居跡の東隣に存する。西辺に比して南辺が長く，東辺はやや張った形状なので一見横長の台形状となる。カマドは85号住居跡に切られた北辺にあったもので，その対面には粘土が拡がっていた。粘土と床面との間には黒色土の薄い層があった。壁小溝は残存する3辺に部分的に見られる。下層は中央土壙が主柱間エリアの真下にあったが，外周の掘り込みはなかった。粘土下層にてP_5・P_6を検出した。

出土遺物　（図版89，第150図）

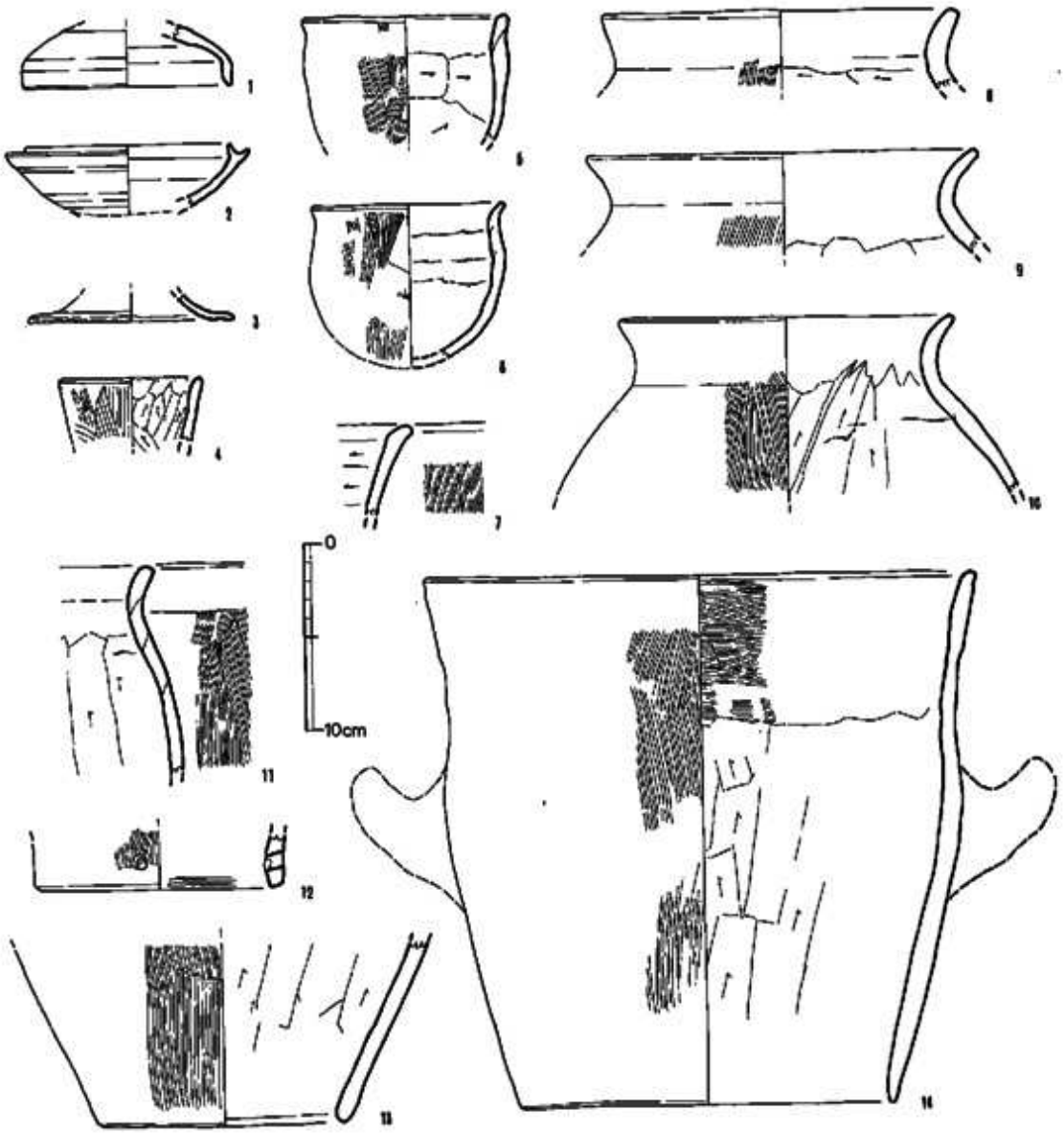
あまり多いとは言えないが，床面にも若干遺存していた。P_1・P_2の中間付近で床面より8cm程浮いて鉄鎌片が，ほぼ中央部で5cm程浮いて土玉が出土した。また，埋土中に不明土製品があった。



第149図　84号住居跡実測図（1/60）

須恵器（1・2） いずれも埋土中出土である。1・2とも焼成がややあまい。

土師器（3～14） 4は小型の鉢であろうが，粗質のつくりである。外面に粗痕をもつ。12は甕であろうが，やや小型にすぎるきらいがある。14はもう少し外傾するか。7・9・14が床面の出土で，14は P_1・P_3間の西側壁寄りに存した。 （伊崎）

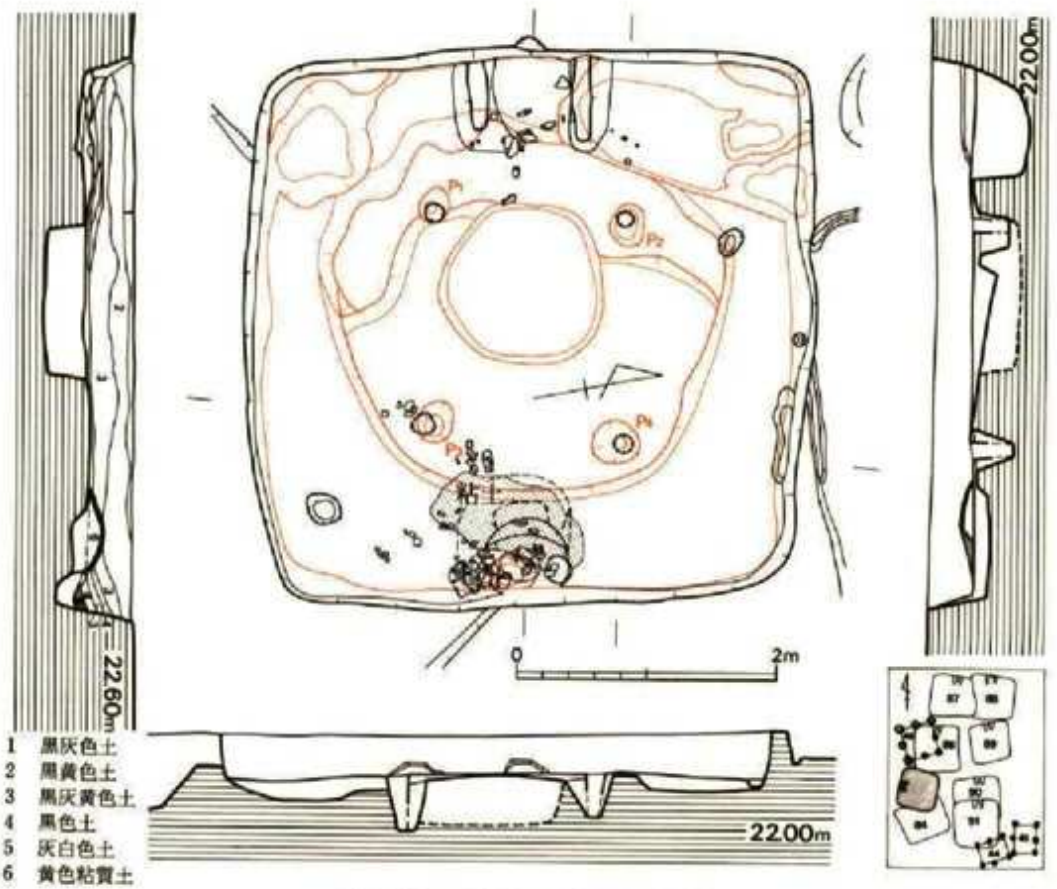


第150図 84号住居跡出土土器実測図（1/4）

85号住居跡　（図版33・34，第151図）

84・86号住居跡を切り，カマドを西側に向けて営まれたやや小ぶりの住居である。黒灰色・黒黄色の土がほぼ水平に堆積していた。主柱穴は内側に寄っていて，主柱間エリアは狭く，全面積の14.4%でしかない。カマドの上面とその対面に粘土の拡がりが見られた。カマド対面には土壙があり土器等が出土している。この住居の主軸はカマドとその対面土壙の中心を通っている。壁小溝は北辺に一部見られるのみである。下層の中央土壙はやや西に寄っている。

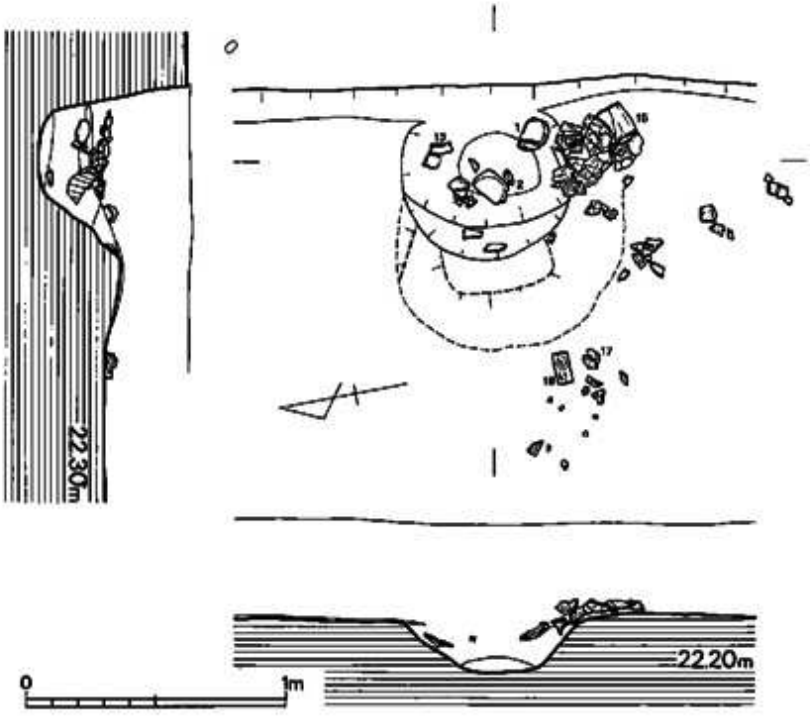
カマド対面土壙（図版40，第152図）　極めて特異な土壙と言ってよい。66×55cm程の楕円形プランで，カマド側の上端は周辺の床面より6cm程盛り上がっていた。これは周辺の床面と同じくガチガチに固くなっており，当初からこの様に高まりを持たせていたものとされる。この上面に灰白色粘土が存したが，それは壁からやや離れて土壙全体を覆ってはいない。むしろカマド寄りの高まりを被覆したかのようであった。下部には灰白色粘土が落ち込んでいて，その上



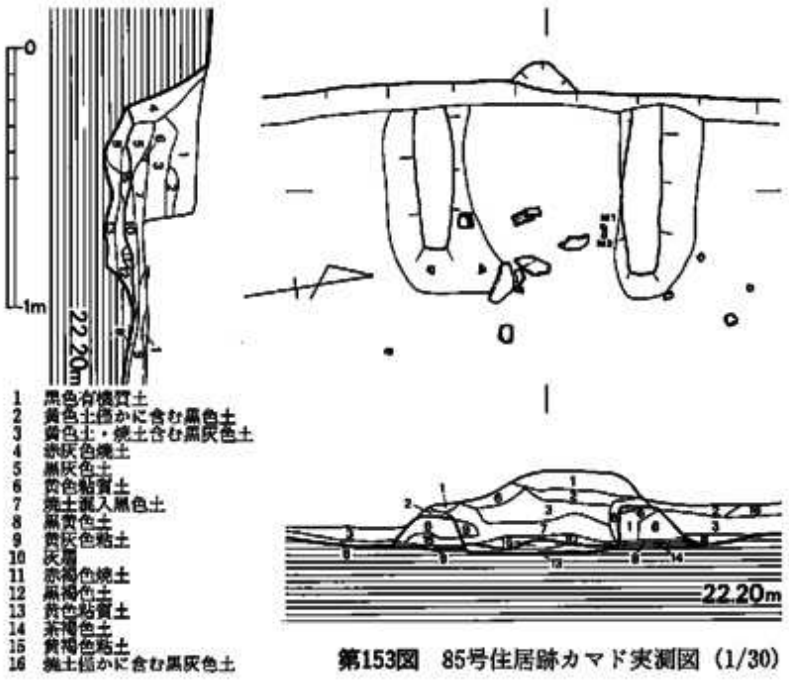
第151図　85号住居跡実測図（1/60）

に黒色土と黒灰黄色土が互層に堆積している。土壙内粘土より下には須恵器坏身1点(2)があったのみで，他は粘土より上に須恵器・土師器・自然石が南北から流れ込んだような状態で出土した。特に把手付甕(15)は床面から土壙内に流入しかけている。土壙周辺の床面に土師器片と支脚があった。

カマド(第153図)両袖が残り，焚口幅50cm，奥行75cmを測る。縦断土層図で見るに，断定は出来ないけれども煙出し孔の幅は15cm程かと思われる。焚口から火床にかけて土師器片若干が存したのみであった。支脚はすでに無かったが，カマド対面土壙の近くに出土した土製支脚がこのカマド内にあったものか否かははっきりしえない。内外に不明土製品6が存した。



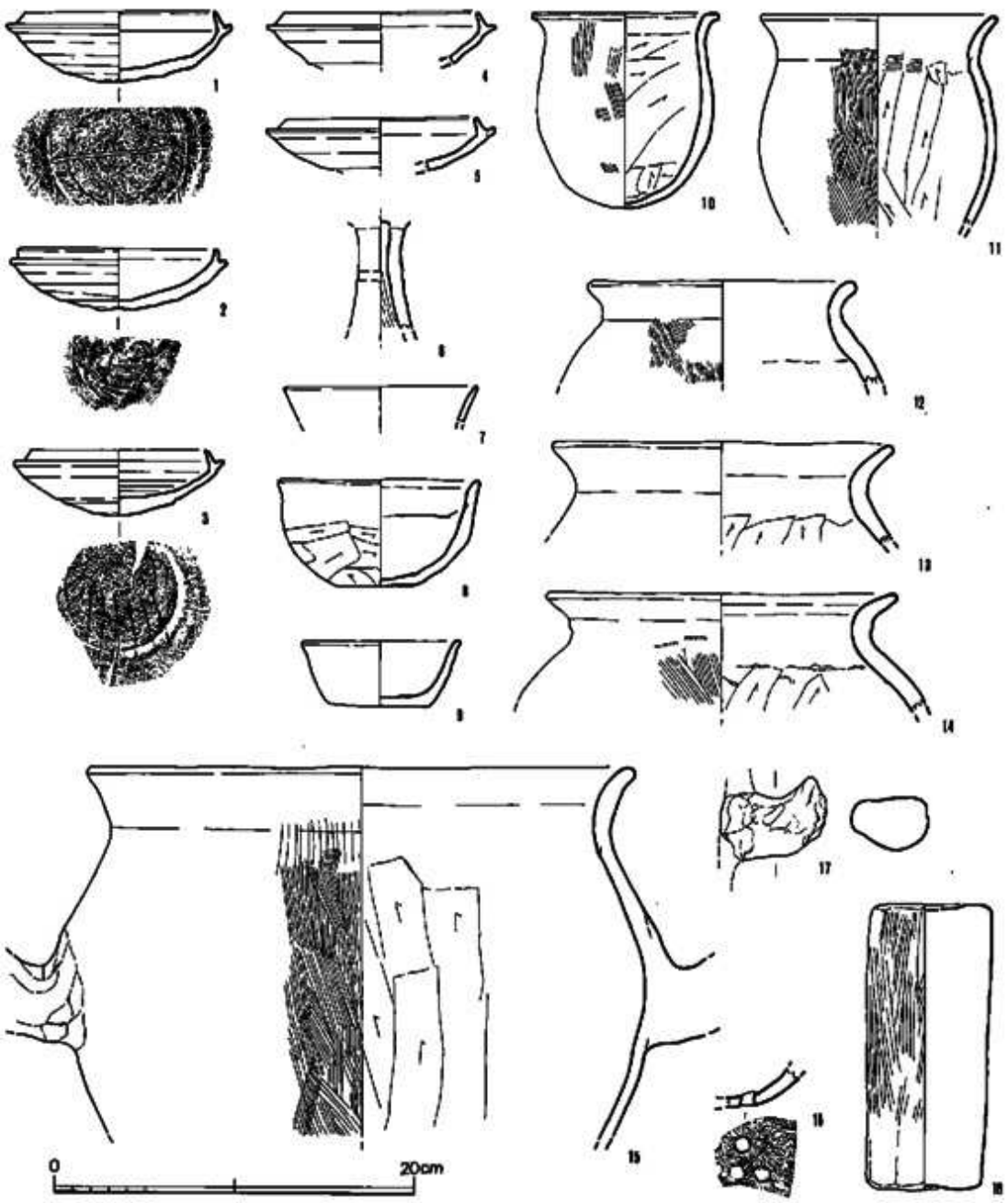
第152図　85号住居跡カマド対面土壙実測図 (1/30)



第153図　85号住居跡カマド実測図 (1/30)

出土遺物　（図版89，第154図）

床面遺存のものは前述カマドとその対面土壙周辺のみである。埋土最上層より紡錘車１点が出土し，他に不明土製品がある。埋土中の土器は多寡いずれとも言い難い。

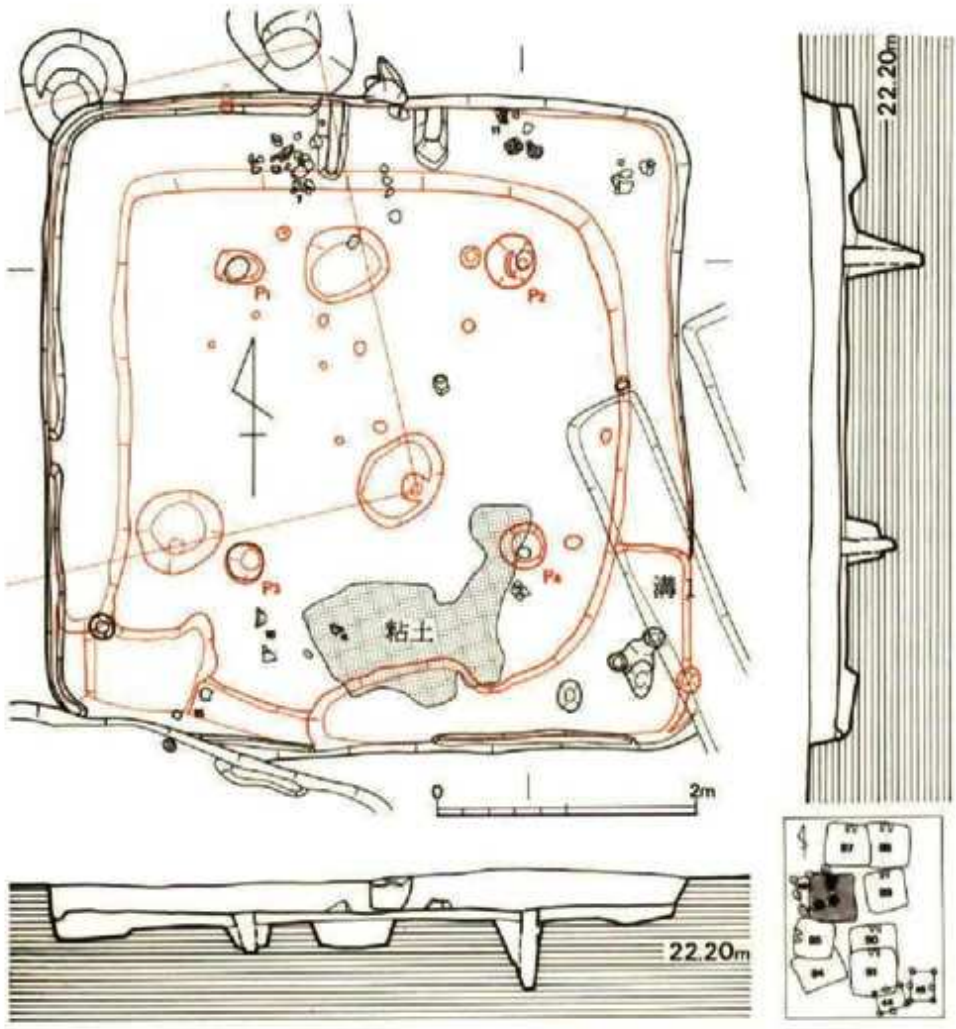


第154図　85号住居跡出土土器実測図（1/4）

須恵器（1～7）　1・2はカマド対面土壙内，他は埋土中に存した。6の高坏脚は細身でやや長めのものとなる。7は壺であろう。他に甕の破片が3点ある。

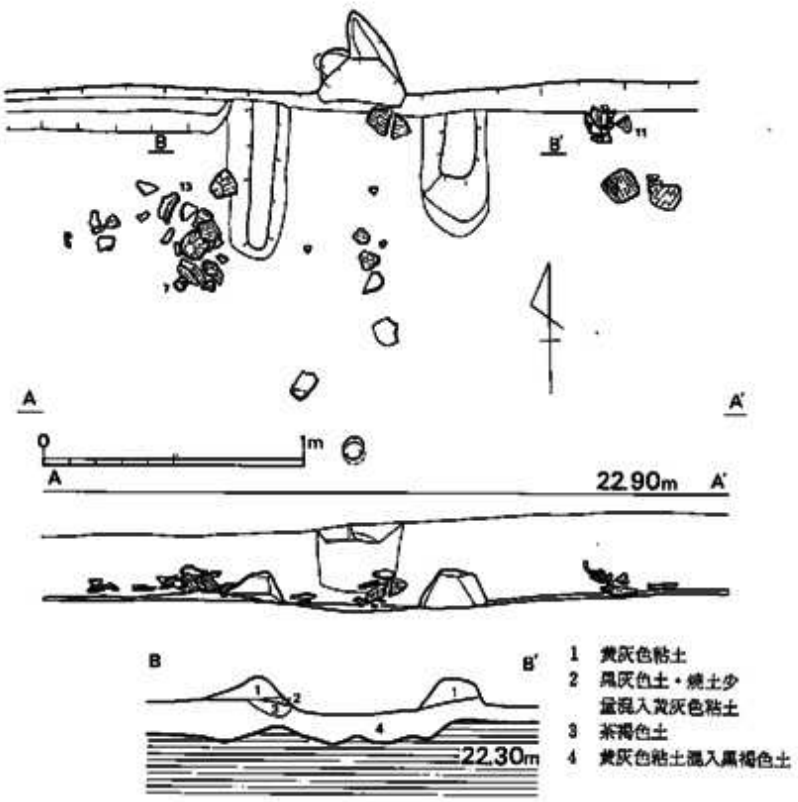
土師器（8～18）　8・9は一見精良品に見えるが粗製である。8の底部はケズリを施さない。11がカマド周辺，13・15・17・18がカマド対面土壙の周辺出土である。15は或は甑II類になるのかもしれない。18の支脚は高さ15.7cm，径6.4～6.8cmで上下面ともやや窪んだ形状となり，外面には工具痕の稜が見られる。（伊崎）

86号住居跡　（図版33・35，第155図）



第155図　86号住居跡実測図（1/60）

南西隅のごく一部を85号住居跡に，東側を近時の溝に切られている。また，46号掘立柱建物とも重複し，この住居の方が新しい。ほぼ正方形のプランで，カマド中心を通る主軸はほぼ真北方向に近い。カマド上面は粘土が崩れ，その対面には灰黄色粘土の広がりがあった。下層には壁周辺掘り込みはあるが，中央土壙はない。また，46号掘立柱建物のピットが現れた。



第156図　86号住居跡カマド実測図（1/30）

カマド（図版38，第156図）　黄灰色粘土を使った両袖が残存す。焚口幅・奥行とも55cm程である。壁外に溝状に突出している窪みは，煙出しの名残りであろう。左袖横の手前側に土師器高坏・甕等が，内部と右袖から40cm余り離れて土師器の破片が出土した。

出土遺物　（図版89・90，第157図）

カマド周辺以外にはカマド対面粘土の周辺で床面から土器少しが出土している。埋土中に土器はあまり多くないが，不明土製品と砥石1が存した。

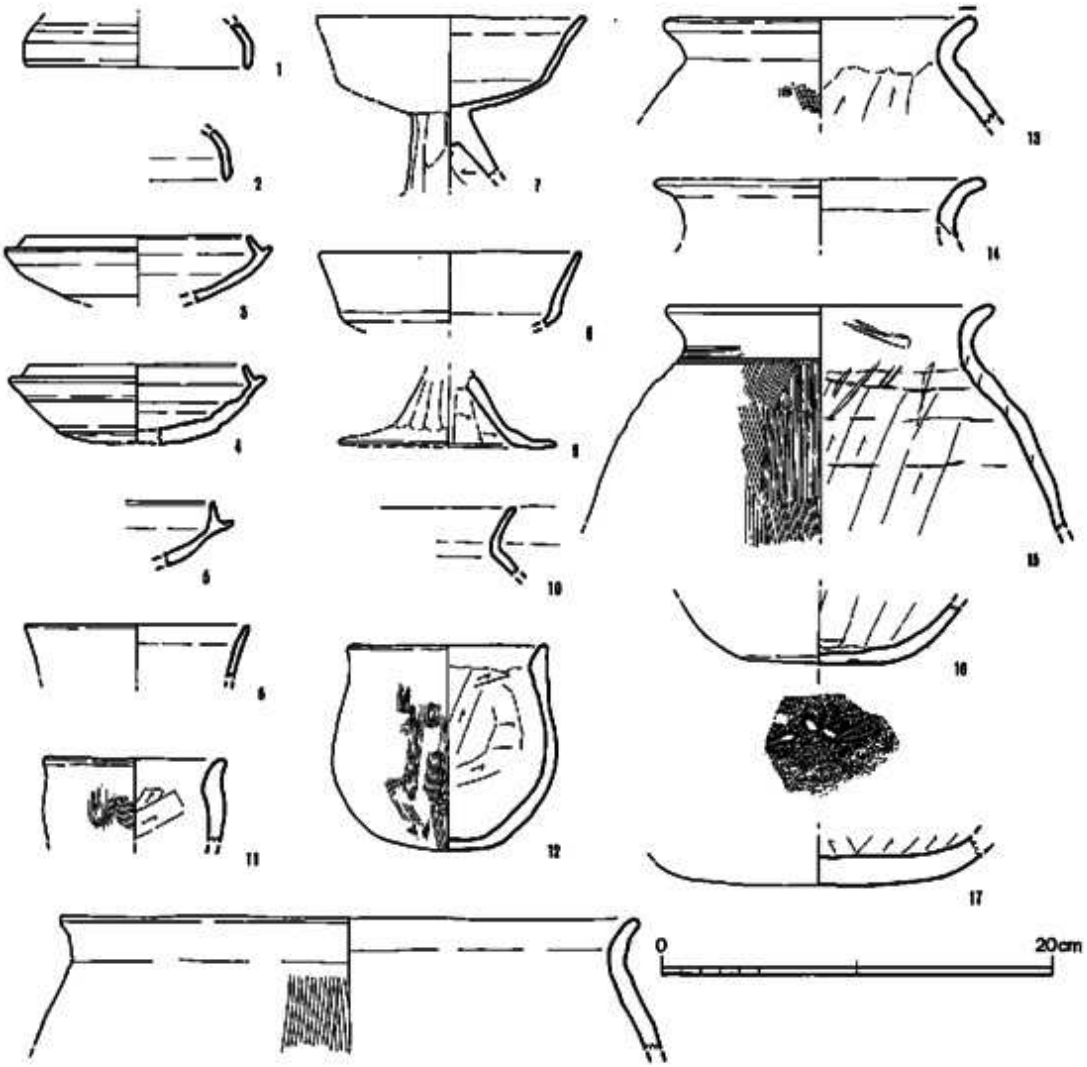
須恵器（1～6）　6は壺であろうか。4は床面の出土。

土師器（7～18）　7はカマド左袖横に転倒していた高坏である。10・11～13もカマド内外，14・18が床面の出土である。16は埋土中に存したが底部外面に籾痕3個が見られた。長径6.5～7.1cmで，うち2個には籾（のげ）の圧痕もあった。籾は完全に圧痕のあるものが長さ2.1cmである。

（伊崎）

87号住居跡　（図版33・35，第158図）

南西からのびてきた溝1が南東へ直角に向きを変えて折れ曲がる所にあり，この溝に切られている。東辺は88号住居跡を切る。黒褐色～黒灰褐色土を埋土としていた。東辺はかなりカマド寄りに傾いており，全体のプランは台形状となる。柱穴配置もそれに近い。カマド対面には黄色粘土が拡がっていた。下層の中央土壙は P_2・P_4間に寄っている。カマド対面に径20cm，深さ3～10cm程の浅い円形ピットがあり，中に角礫3個が存した。その中には他に遺物はない。これは今までのカマド対面土壙とは区別して考えたい。P_3・P_4間には後代の攪乱になる土壙があり，中に鉄器があった。



第157図　86号住居跡出土土器実測図（1/4）

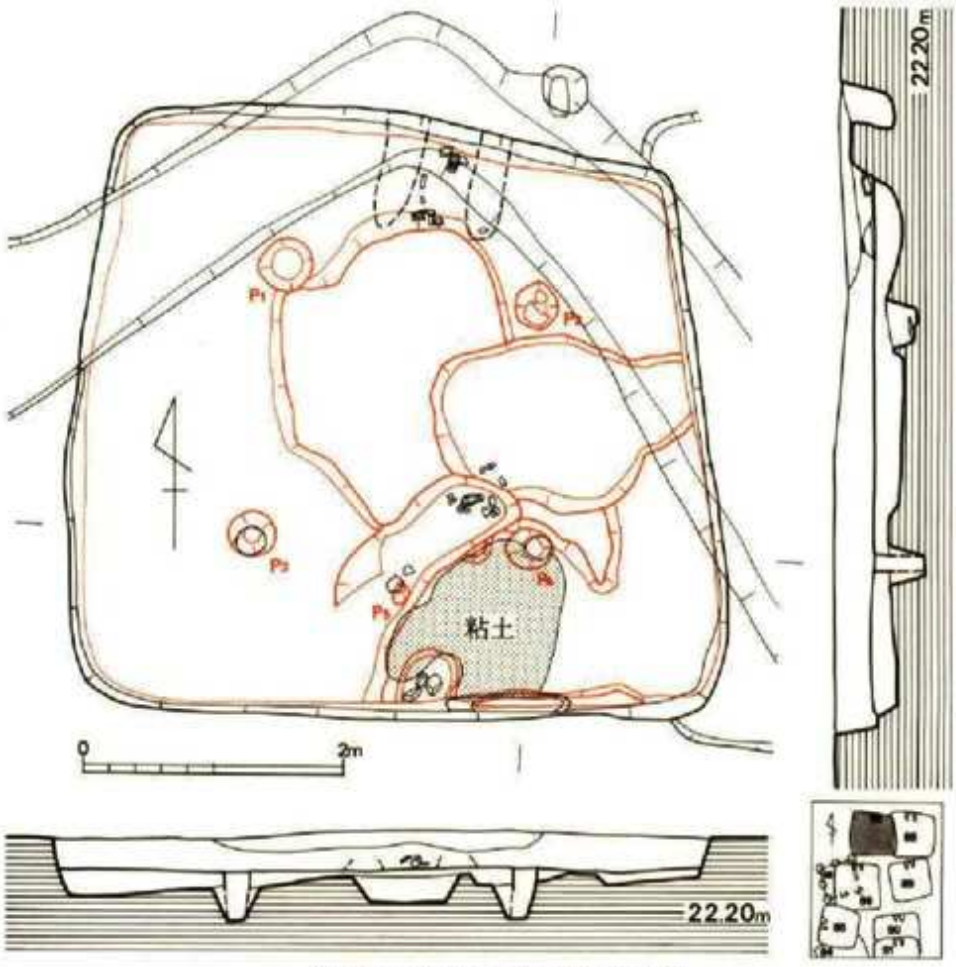
カマド（図版38，第159図）　溝１と別のピットに切られて両袖ともに殆ど残っていない状態であった。しかし，痕跡から復すれば焚口幅 55cm，奥行70cm程と思われる。火床中心より奥の方へ土製支脚が倒れて存し，焚口付近にも土師器片があった。

出土遺物　（図版90，第160・164図）

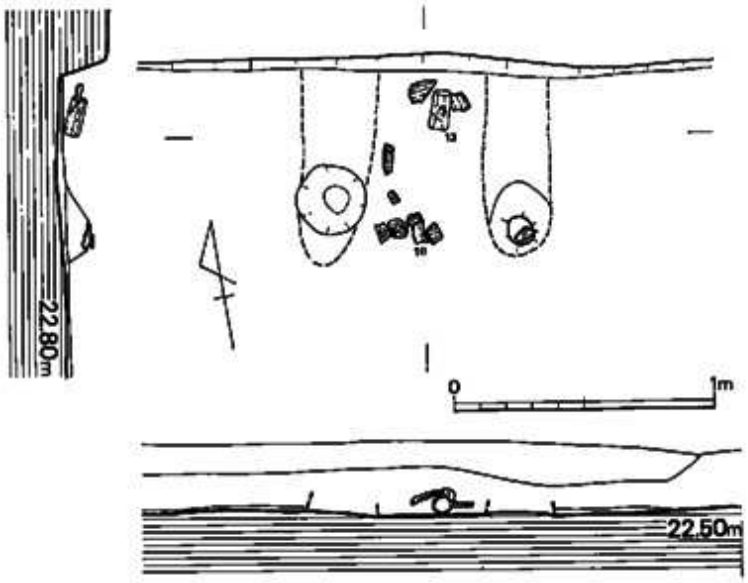
カマド内以外で床面に遺存した遺物はなかった。全体の遺物量はあまり多くない。埋土中に盤状土製品と不明土製品があった。

須恵器（１～３）　２は焼成あまく十分に発色していない。３は平瓶の口頸部であろう。

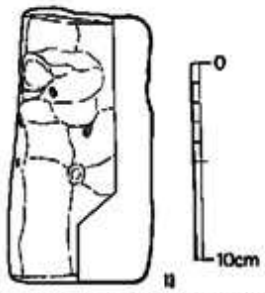
土師器（４～13）　４～６は精良品である。６は内外とも丹塗りを施す。７は極めて小さいが手捏ではない。９は底部に穿孔がある。５・12が床下層，10はカマド内の出土である。13の支脚は高さ14cm，径6.5～７cmで円柱ながら五角形状となる。外表面に粘痕が多く見られるのは意識的に付けているのかもしれない。上端部には煤が付着している。　（伊崎）



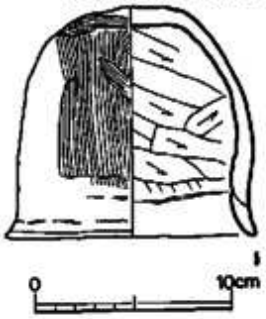
第158図　87号住居跡実測図（1/60）



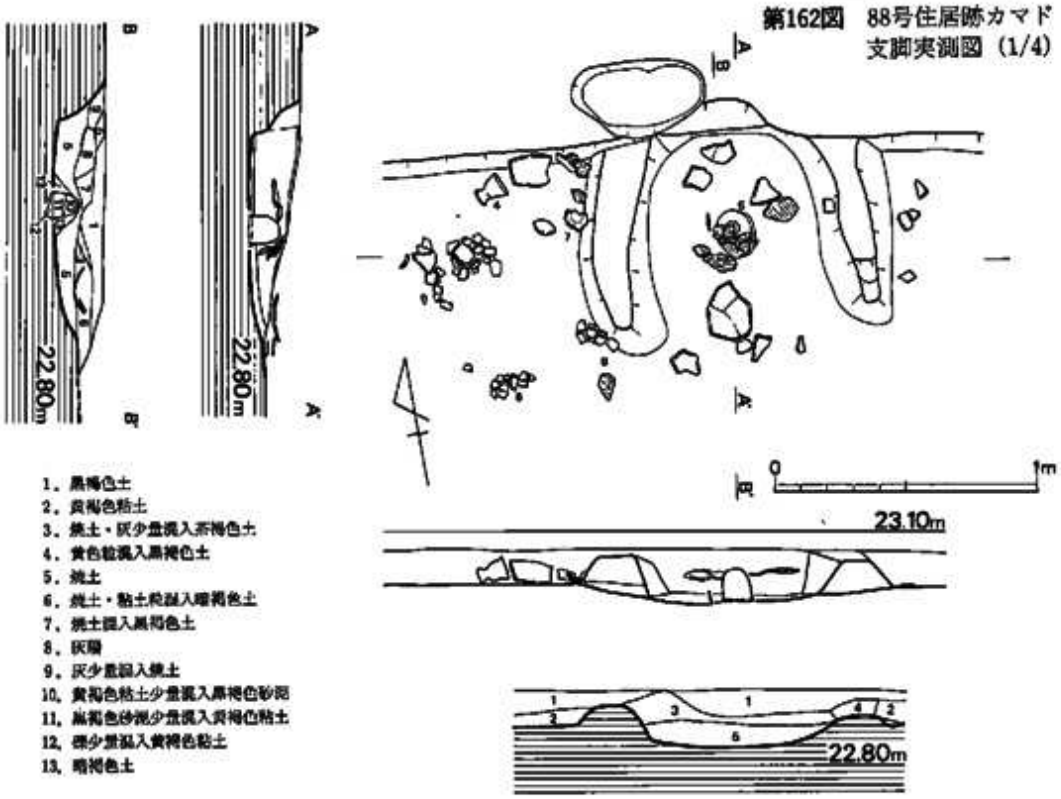
第159図　87号住居跡カマド実測図（1/30）



第160図　87号住居跡カマド
支脚実測図（1/4）



第162図　88号住居跡カマド
支脚実測図（1/4）



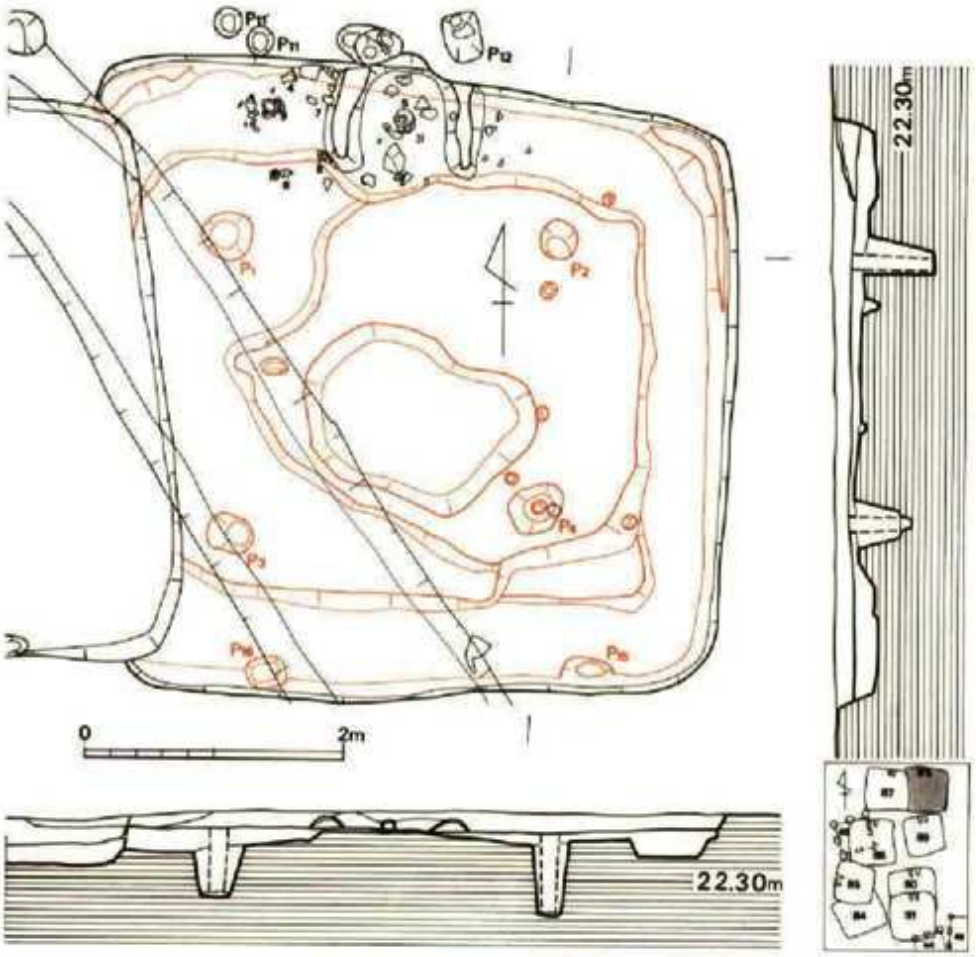
第161図　88号住居跡カマド実測図（1/30）

88号住居跡　（図版33・36，第163図）

溝1と87号住居跡に切られる。87号住居跡と同様の埋土で，プランも東辺が短い事などよく似ている。主柱間エリアは良く固められていた。下層は一般的パターンをよく示している。P$_3$・P$_4$の南側壁際に対応するようにピットがあるのは，何か意味があるのかわからない。

カマド（図版39，第161図）　両袖ともに基部は検出面の高さまで残り，支脚も完形にて完存していた。焚口幅65cm，奥行85cmを測る。内部は支脚に転用した甕が奥から35cm程の位置にあり，その上には甕か甑かの破片が折れ重なっていた。その周辺にも破片が散乱している。左袖外側には壁際にブランデーグラス形の脚付埦が転がっており，周辺に土師器片の散乱が見られる。右袖外側にも土師器片があるけれども少ない。

出土遺物　（図版90，第162・164図）



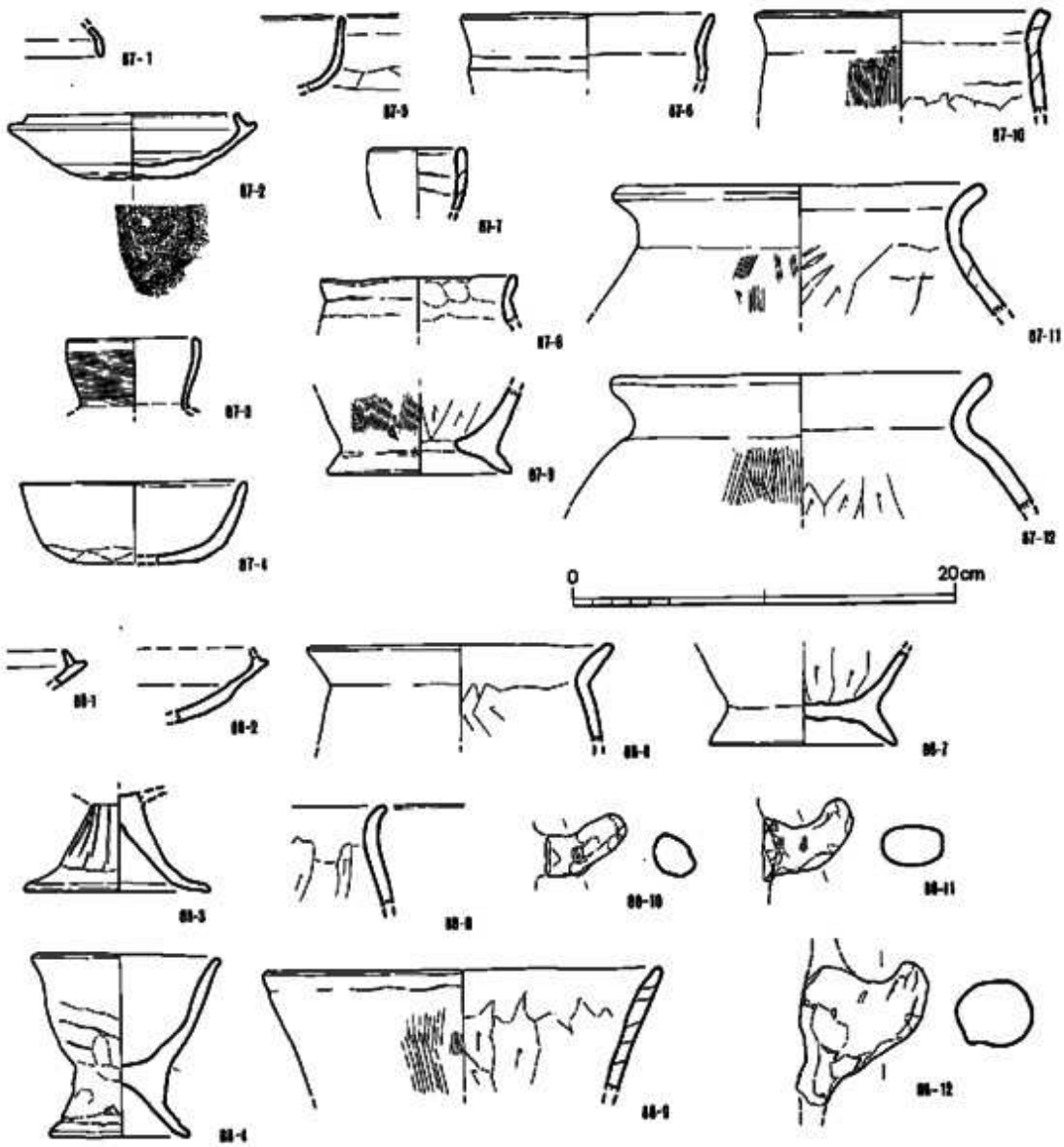
第163図　88号住居跡実測図（1/60）

カマド内外を除けば遺物量は少ない。中央付近床面から手捏土器が斜倒立で出土している。また，埋土中より不明土製品，黒曜石片，サヌカイト片が出土している。

須恵器（1・2）　1は焼成あまく灰白色を呈す。

土師器（3～12）　4は完形で胎土は粗い方に属する。4・6～8がカマド横から出土した。支脚転用の甕（5）は中型の中で最小の部類に入る。器高は11.7cm。二次火熱を受けている。

（伊崎）



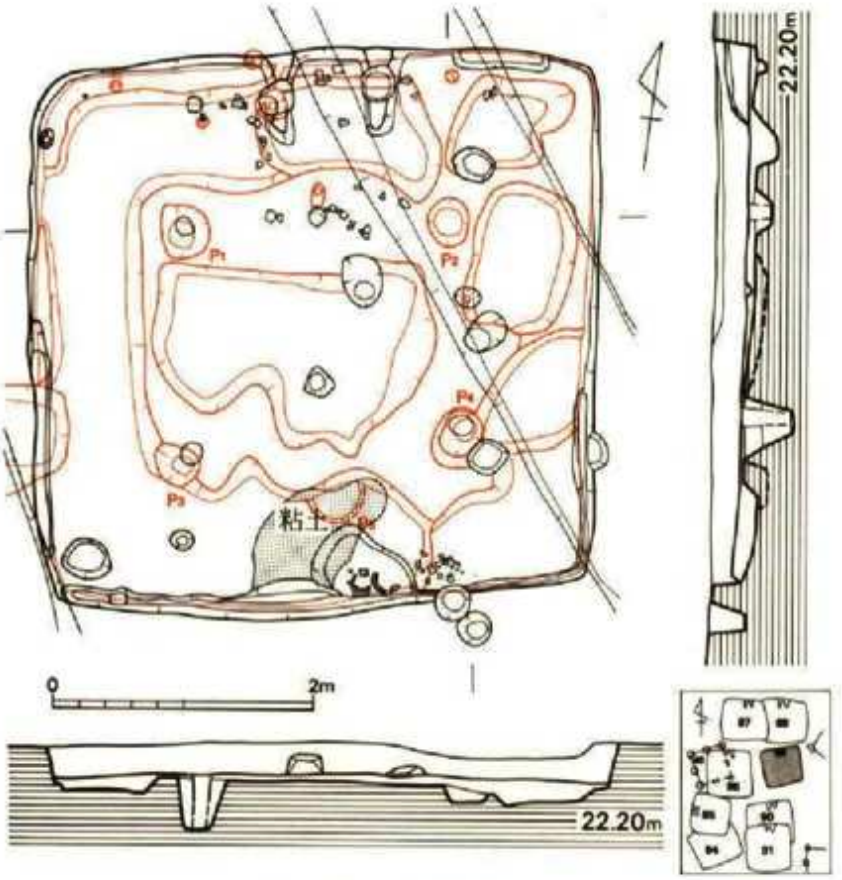
第164図　87・88号住居跡出土土器実測図（1/4）

89号住居跡　（図版33・36，第165図）

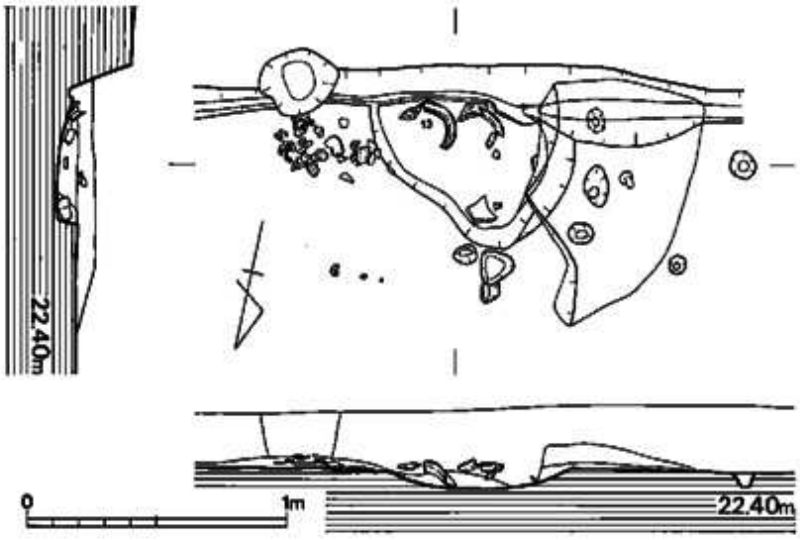
88・90号住居跡に挟まれた所に他と重複することなく単独で存するが，溝1と近時の溝に一部を切られている。この近隣では85号と同じく小さめの住居である。壁小溝は一部にしか存しない。カマド対面には黄色粘土と土壙があった。下層は東側が不規則であるが，それ以外は一般的パターンを示す。P_6も存した。なお，西壁南寄りの下層に15号土壙があった。

カマド対面土壙（図版40，第166図）　80×55cm程の不整楕円形で，深さは8cm位しかない。西側から土壙上面にかけて黄色粘土が存するが，この粘土は土壙全面を覆ってはいない。なお，床面直上で粘土との間に黒灰色土が帯状に入っている。土壙内には須恵器破片，土師器甕片，砥石1が存した。土壙外の東側床面に土師器片が散乱している。

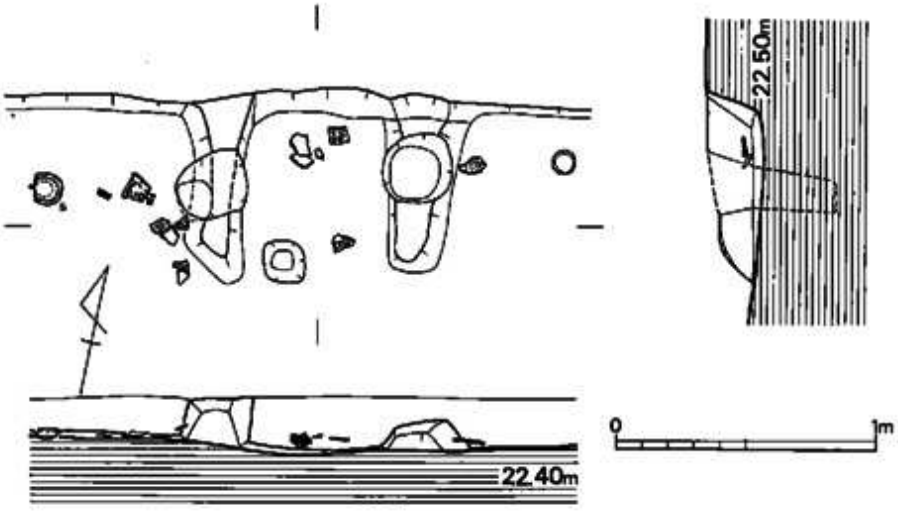
カマド（図版38，第167図）　右袖上面を溝1が走り，両袖とも中程をピットが切っている。焚口幅55cm，奥行65cmを測る。内外に土器片が見られたが，左袖より50cm程離れて須恵器坏身がすえ置かれた状態で出土している。



第165図　89号住居跡実測図（1/60）



第166図　89号住居跡
カマド対面土壙実測図
(1/30)



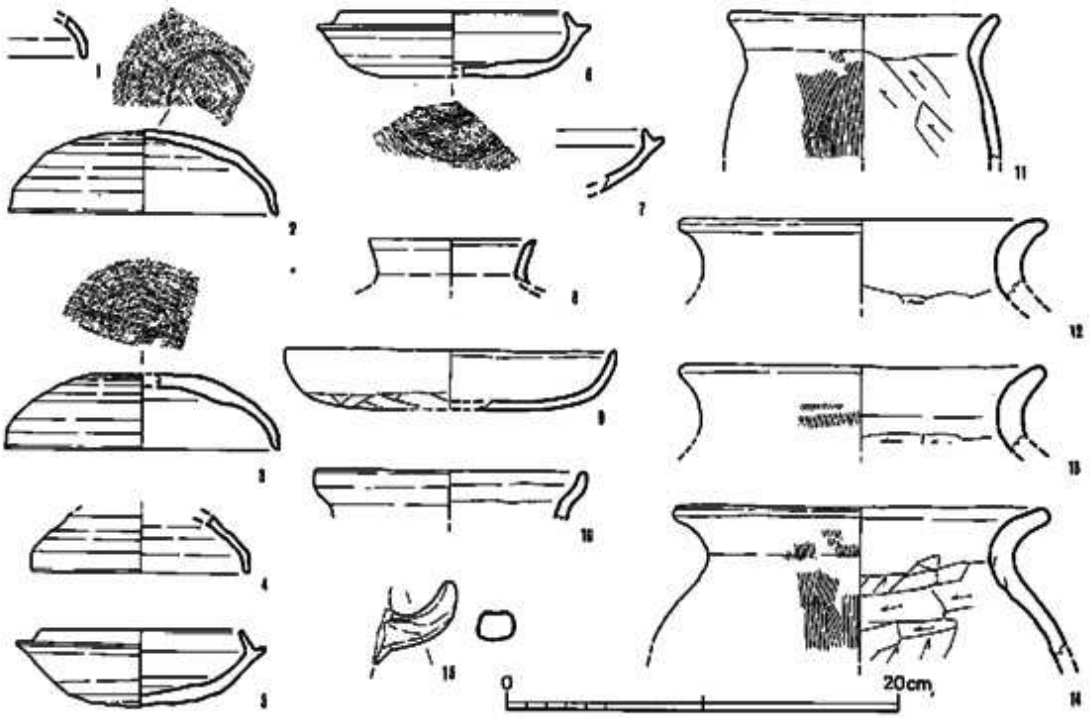
第167図　89号住居跡カマド実測図（1/30）

出土遺物　（図版90，第168図）

カマド周辺とその対面土壙内外を除いたら床面上での遺物はない。埋土中からもそれ程多くは出土しなかったが，カマド上面に土玉が１個あった。

須恵器（1～8）　8は坩になろう。5はカマド左側の出土である。埋土中出土の坏身が39号住居跡出土のものと接合している。

土師器（9～15）　9・15は精良土器である。10は口縁形態がやや特異である。11はカマド周辺，13はカマド対面土壙内出土である。　（伊崎）



第168図　89号住居跡出土土器実測図（1/4）

90号住居跡　（図版33・37，第169図）

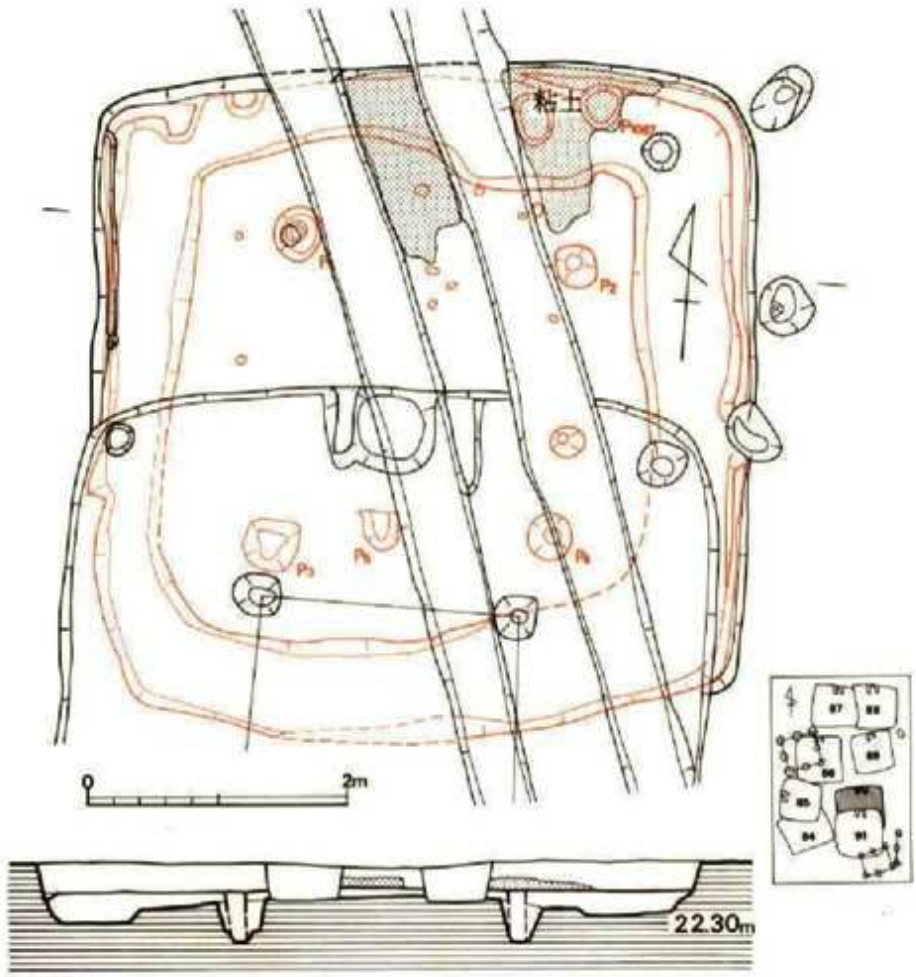
91号住居跡に切られ，近時の溝２条が斜めに縦断している。カマドはその粘土の一部が遺存するのみで，溝に切られていて原形をとどめない。床下層は周囲の掘り込みは整然と巡るが，中央土壙はない。

出土遺物　（第170図）

残存部が少ないので遺物も多くない。床面から手捏土器・同器台・鈴かと思える土製品が出土している。また，不明土製品がカマド周辺・床直上・埋土中から出土した。

須恵器（１）　埋土中の出土である。別に床直上出土の坏が45号住居跡埋土中出土のものと接合している。

土師器（２～６）　３・４はカマド周辺，２・５は床直上の出土である。　（伊崎）



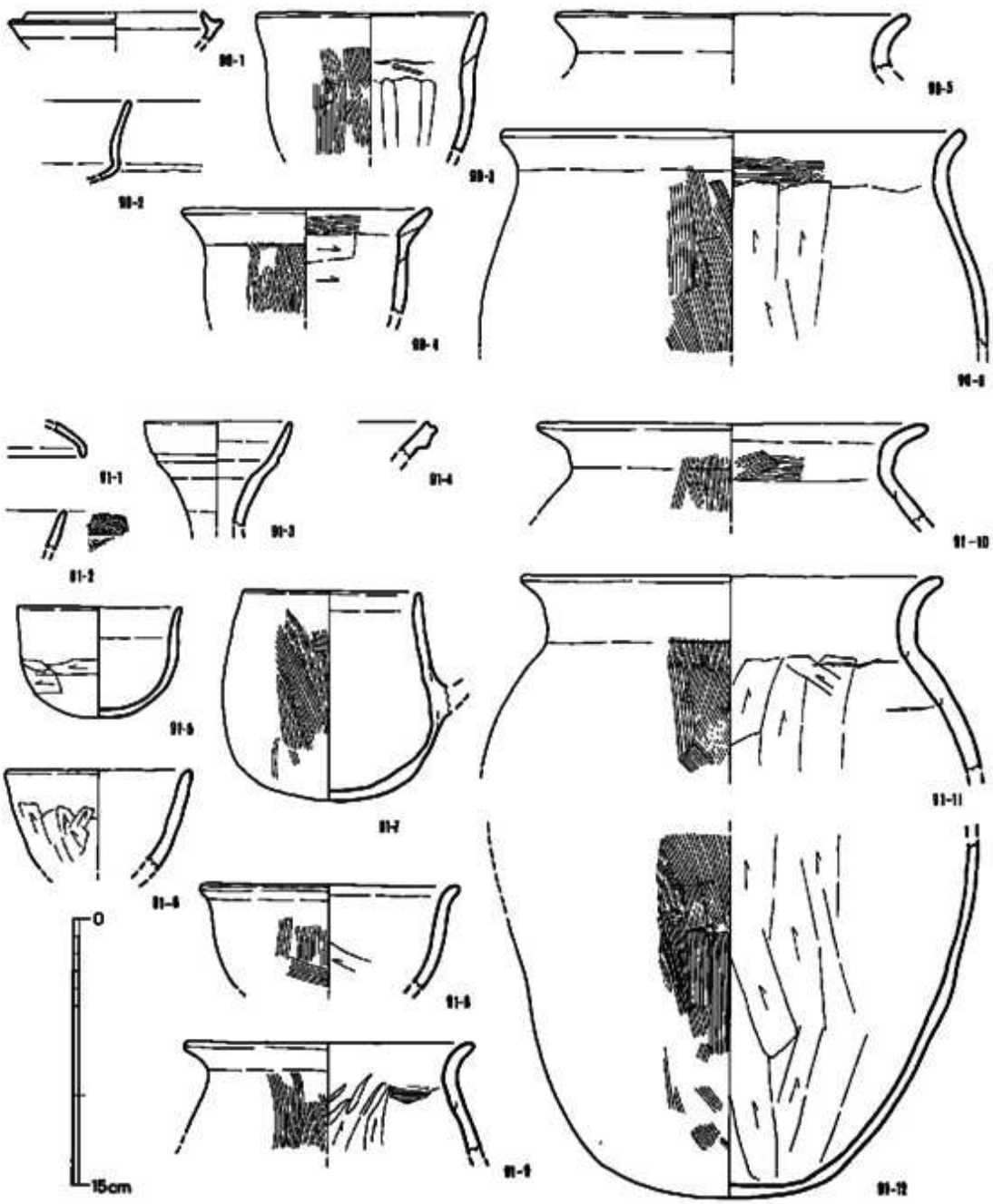
第169図　90号住居跡実測図（1/60）

91号住居跡　（図版33・37，第171図）

90号住居跡と方向をほぼ同じくして，それを切って営まれる。また，44号掘立柱建物をも切っている。90号住居跡と同様，カマド上面を２条の近時の溝の内の一本に切られていたが，部分的に残存していた。また，カマド対面に黄色粘土と土壙が存する。床下層は中央土壙もあって一般的形状を示す。なお，竪穴外でカマド対面土壙のすぐ外にＰ1234がある。須恵器大甕の破片が入っていたが，この住居との関連は判らない。

カマド対面土壙（図版40，第172図）　75×50cmの略円形に近い。床面から深さ32cmを測ったが，44号掘立柱建物の P_1 との重複があるので，最下部はそれのものらしい。土壙内に落ち込んだ

状態とその西側にてまとまって土器が出土した。土壙内に土師器の大型甕，須恵器破片，西側に土師器甕・盌があった。



第170図　90・91号住居跡出土土器実測図（1/4）

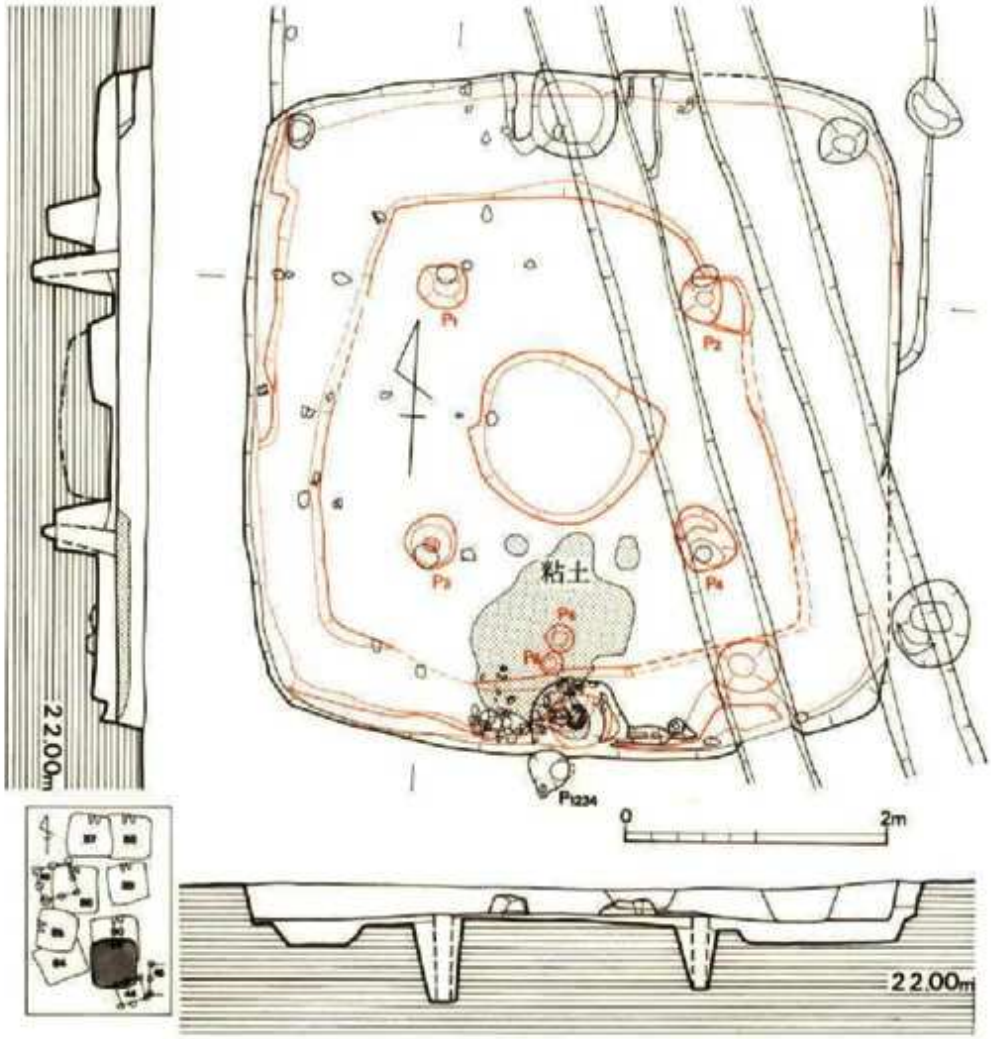
カマド(第173図)　前述の如く近時の溝に右袖一部と火床部分を切られているが，ほぼ全貌は判る。奥行は70cm程を測る。周辺に若干の土師器片を見るのみである。

出土遺物　(図版91，第170図)

床面にも若干の土器が存したが，全体に多くない。カマド前面西側の床面より5cm浮いて土玉が，埋土中より手捏土器，不明土製品が出土した。

須恵器(1～4)　2は甕の口縁部であろう。波状文はあまり纖細とは言えない。3の瞳口頸部はカマド対面土壙より出土した。別に，坏蓋が84号住居跡のものと接合している。

土師器(5～12)　5は薄手の極めて精良な土器である。6は粗製，7・9・11・12はカマド

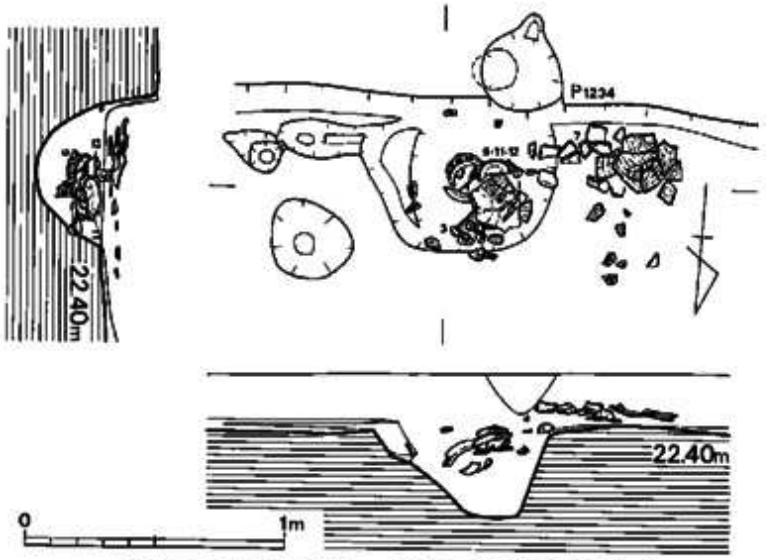


第171図　91号住居跡実測図(1/60)

対面土壙周辺より出土した。11・12は同一個体と思われるが接合はしなかった。

なお，この住居との関連性は不明であるが，カマド対面土壙の所の壁面を切って存するP1234には，須恵器大甕の破片が入っていた。深さ55cm程の最下部からやや浮いて石と，その上に須恵器片があり，更に少し間隔をおいて又石とその辺に須恵器片があった。このピットの意味するところは不明だが，出土した口縁の破片は81号住居跡出土品と接合はしないものの，同一個体と思われる。

(伊崎)

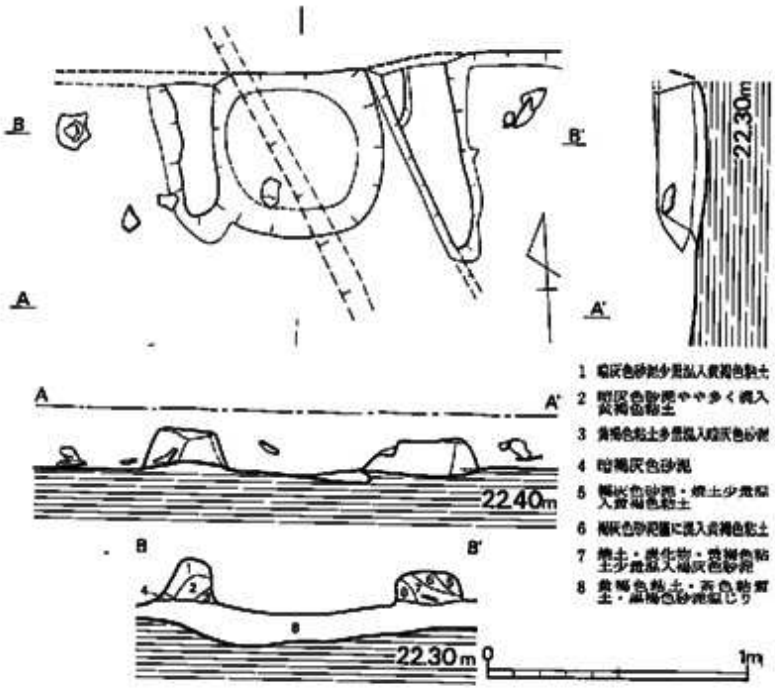


第172図　91号住居跡カマド対面土壙実測図（1/30）

92号住居跡

(第174図)

88号住居跡の北にあり，⅔は調査区外にかかる。南壁中央付近の粘土の存在からして，カマドは北辺にあったと推定出来る。カマド対面の粘土を切ってピットが掘られている。粘土の下と P_3・P_4 の中間から土器が出土した。下層は掘り込みは巡っていない。粘土下に P_5 がある。P_3・P_4 の掘り形は大きめである。



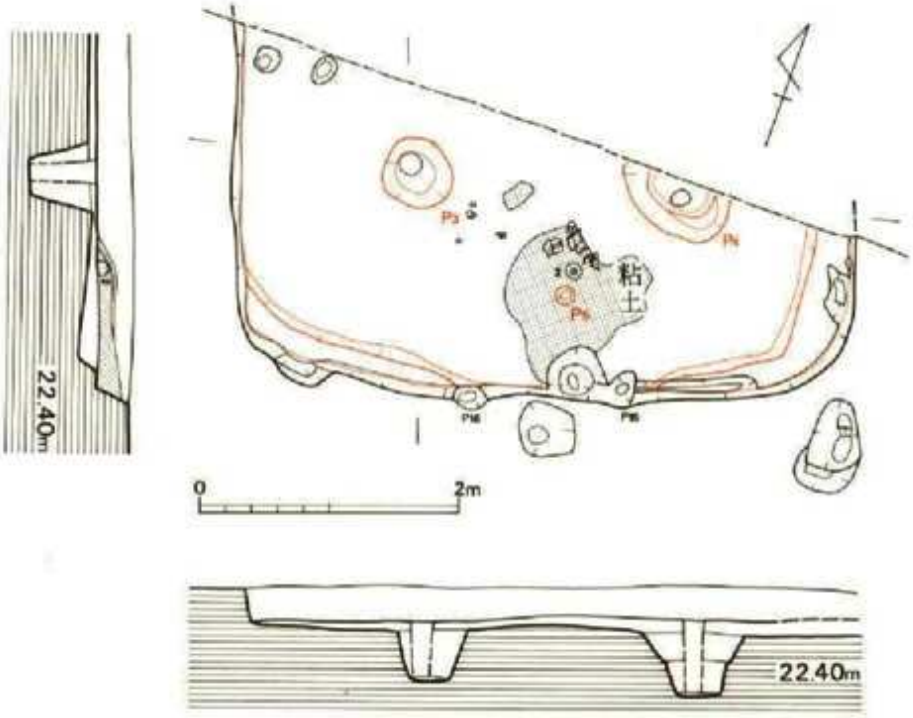
第173図　91号住居跡カマド実測図（1/30）

出土遺物　（図版91，第175図）

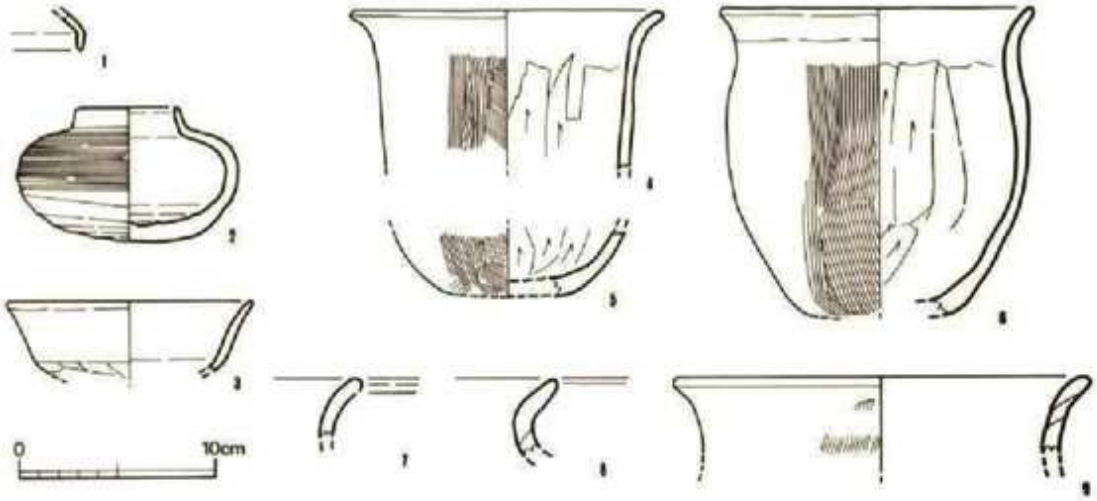
カマド対面粘土の下から出土した以外に遺物は少ない。埋土中に土玉１個があった。

須恵器（１・２）　２は床面出土の坩で正立に置かれていた。蓋付で焼成した痕が判る。

土師器（３～９）　３はカマド対面，４・７が床下層，他は埋土中の出土である。　（伊崎）



第174図　92号住居跡実測図（1/60）



第175図　92号住居跡出土土器実測図（1/4）

93号住居跡　（図版41，第176図）

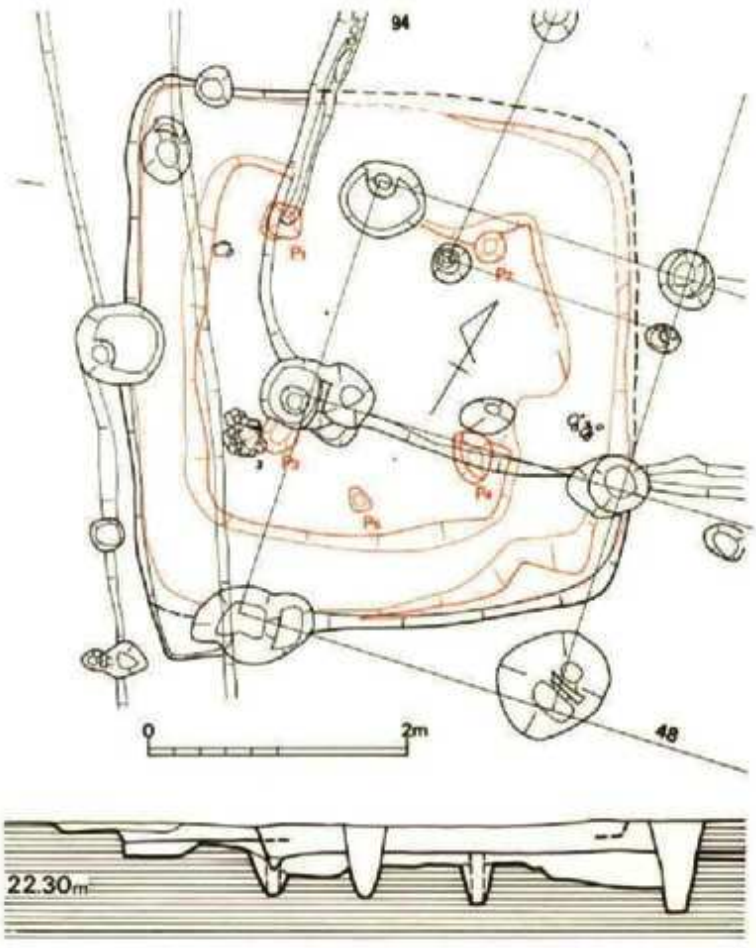
94号住居跡と溝1に切られ残存状態はあまりよくない。48号掘立柱建物もこの上に営まれていた。復原してみた東辺は西辺より短く，平面形は台形プランとなる。カマドは北辺にあったものとみてよかろう。

出土遺物　（図版91，第177図）

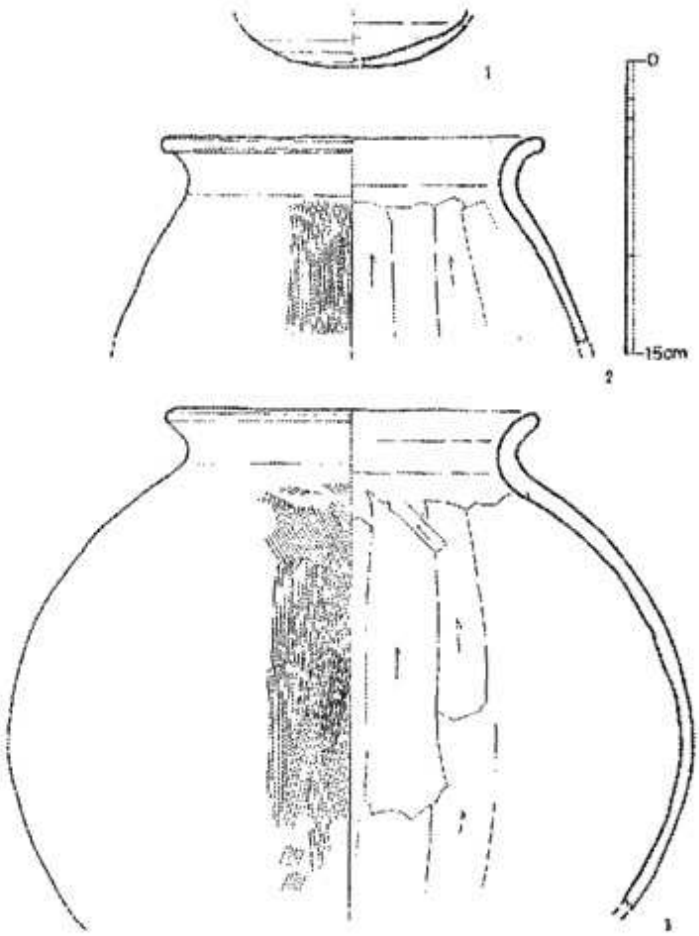
残存部の少ない事もあって遺物は少ない。床面では P_3のそばに土師器甕が存した。また，埋土中より不明土製品，黒曜石剝片が出土している。

須恵器（1）　埋土中の出土である。別に埋土中の坏身片が，48号掘立柱建物の P_8，P1033出土品と接合している。また，甕片1点も出土している。

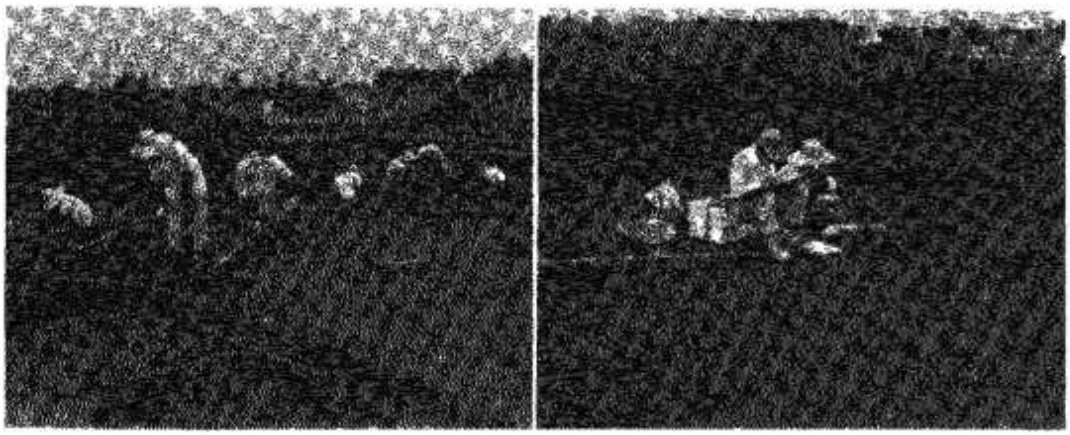
土師器（2・3）　3は床面出土で P_3のそばにあった。胴がかなり張って特異である。（伊崎）



第176図　93号住居跡実測図（1/60）



第177図　93号住居跡出土
土器実測図
(1/4)

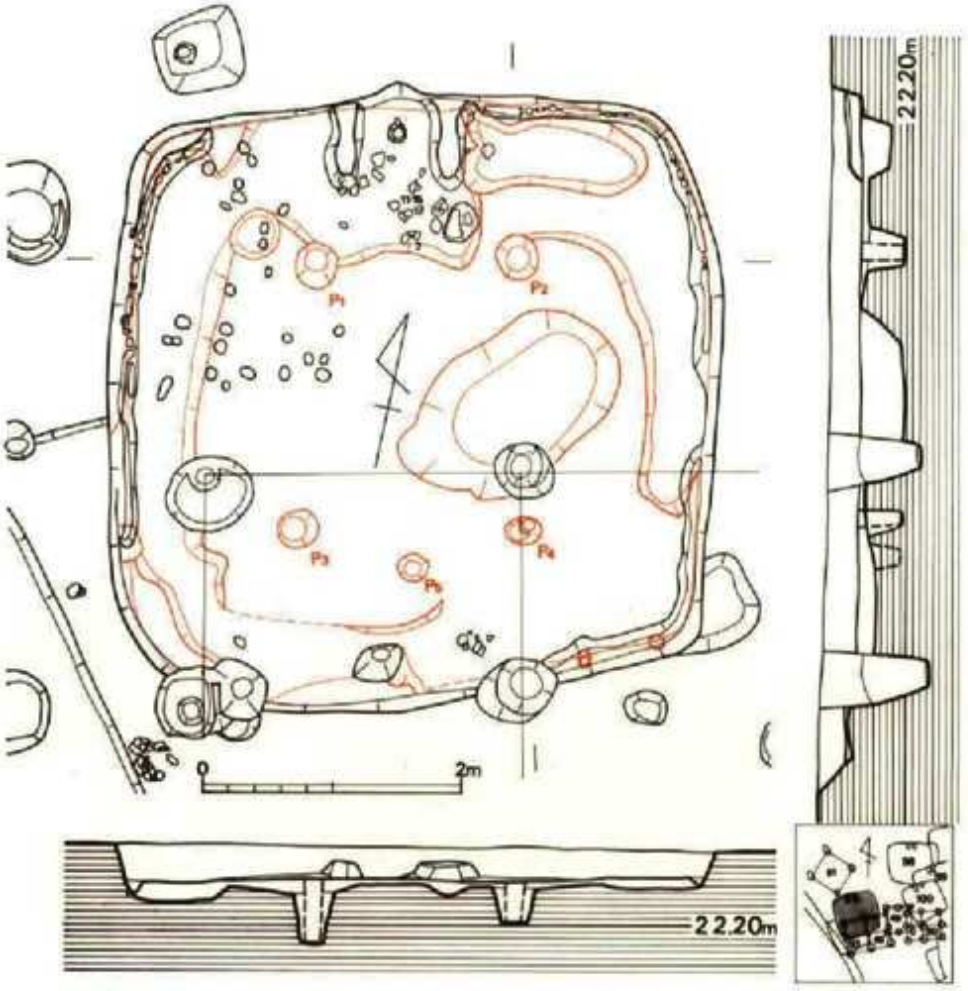


第178図　調査中スナップ③

94号住居跡　（図版41，第179図）

93号住居跡を切り，48号掘立柱建物に切られる。 P_1 はやや東に寄っている。カマド中央を通り， P_6 を横切るラインがこの住居の主軸となる。 P_1 の周辺に直径5～10cm程で深さが10cmに満たない小ピットが20数個検出された。この住居に伴っていた何らかの施設の痕と考えたのであったが，いささかの不安もある。壁小溝は北と西のコーナー部分にて小ピットが見られる。下層の中央土壙は東に寄る。

カマド　（図版41，第180図）　焚口幅60cm，奥行70cmを測る。奥から30cm弱の火床面に径13～15cmの小ピットがあり，焼土が入っていた。支脚の抜き跡と思われる。焚口前面に土師器片，右袖外側基部付近に手捏土器2個，周辺に不明土製品2が存した。なお，カマドの構築は黄色粘



第179図　94号住居跡実測図（1/60）

土を使ってなされているが，その土は地山と同一とみてよい。

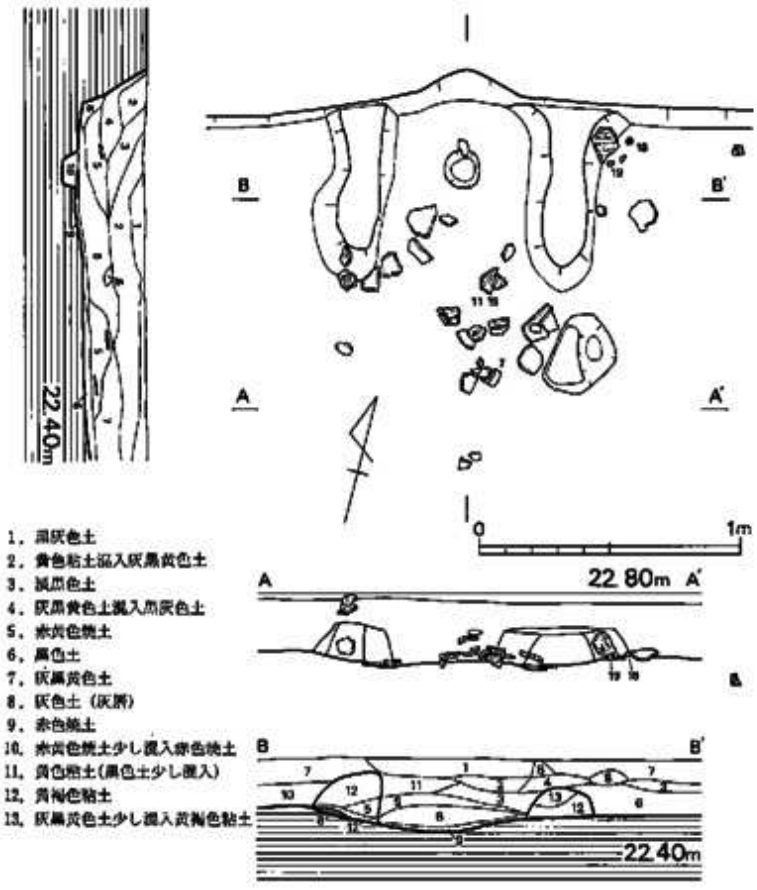
出土遺物

（図版91，第181図）

床面にも遺物少なく，全体量は多くない。埋土中にて把手状土製品1，不明土製品・手捏土器1，下層で安山岩の剥片1が出土した。カマド横に手捏土器が存したことは前記のとおりである。

須恵器（1～5）　4は坏蓋としてもよいが，やや小ぶりなので一応坩蓋にしておく。2はカマド周辺，4は下層出土。他に甕片2があった。

土師器（6～17）　6～8は極めて精良な土器である。9は粗製。16は頸部が直に立上っていて特徴的である。7・11・15がカマド近辺，10が床面の出土。　（伊崎）

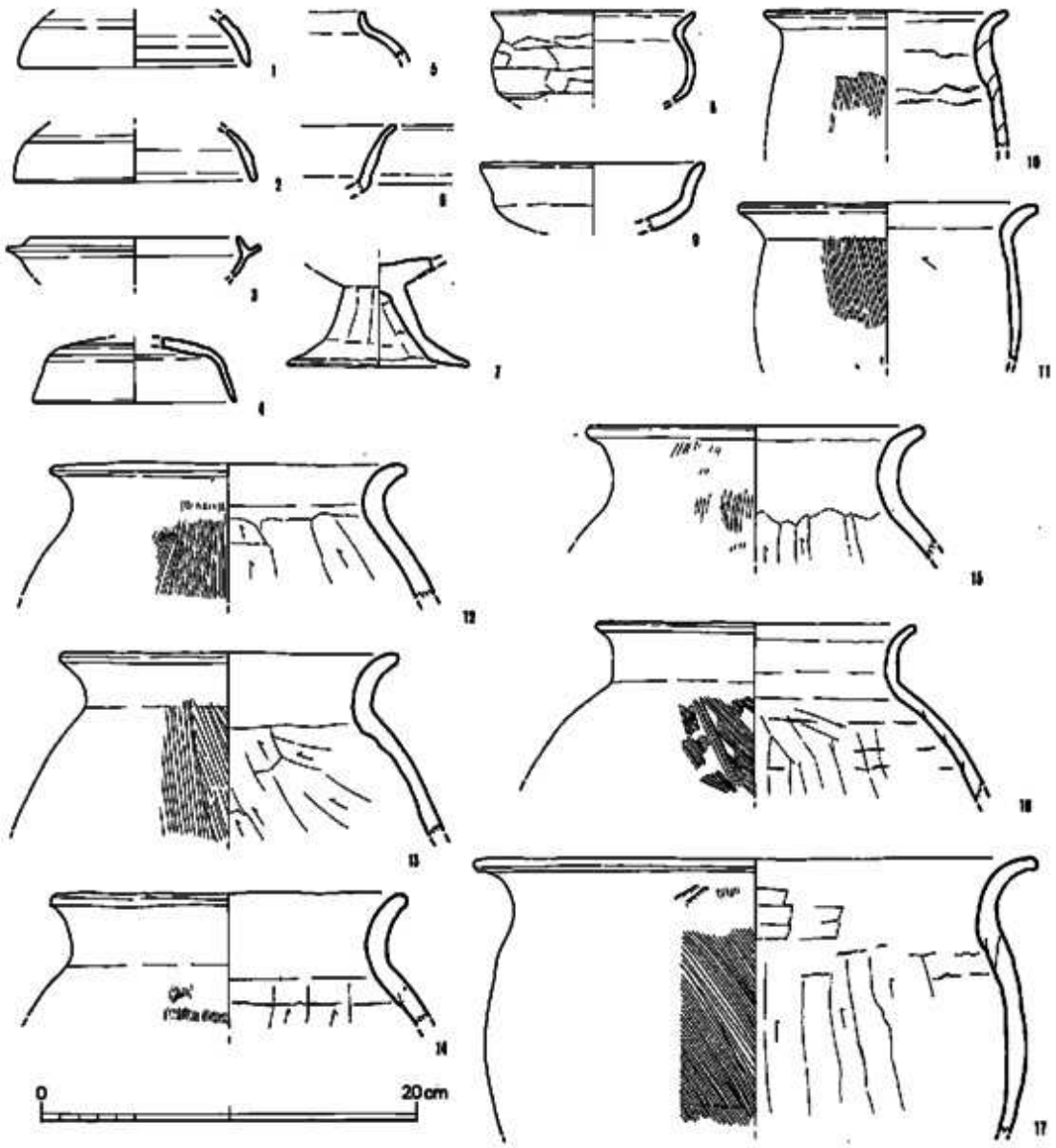


第180図　94号住居跡カマド実測図（1/30）

95号住居跡　（図版42・43，第182図）

96・101号住居跡を切り，97～99号住居跡に切られている。柱穴配置もカマドも全体に東寄りに見られる。下層では周囲の落ち込みは全周するが中央土壙はない。

カマド　（図版44，第183図）　左袖の2ケ所をピットに切られる。焚口幅35cm，奥行72cmで火床部がやや狭い。奥から35cmの所に土師器甕を転用した支脚が底部を欠くものの残存していた。それは，まず火床面上に黄色粘土で25cm程の範囲に，円錐台形状の台座とも言える部分をナデ



第181図　94号住居跡出土土器実測図（1/4）

にて面をとってこしらえ，その上に褐がすえ置かれたものである。内外から他に土師器片が出土している。なお，カマド本体は地山の粘土を使用している。

出土遺物　（図版91，第184・187図）

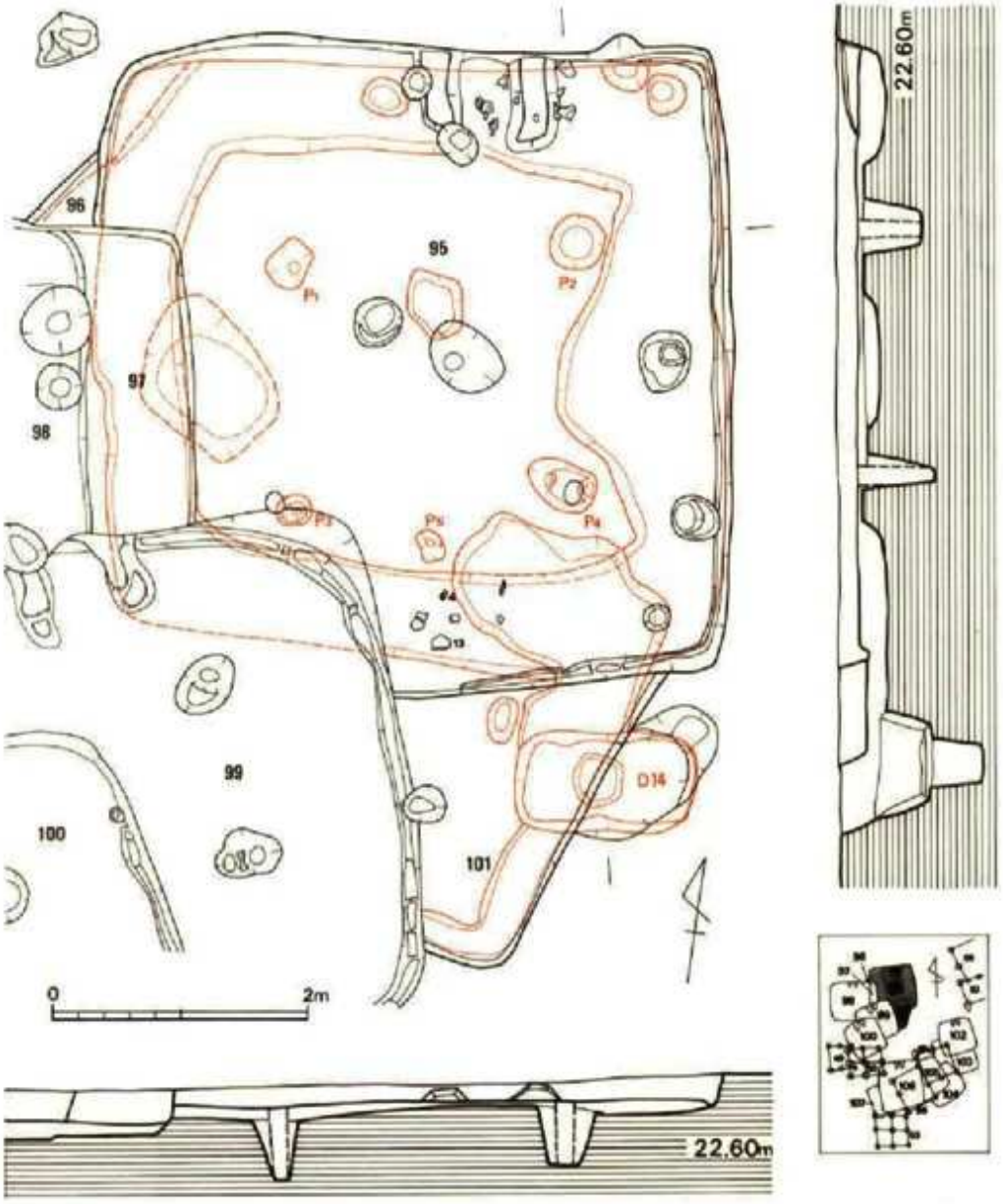
少ない。カマド対面付近の床面とカマド周辺に少々あったのみである。埋土中から土玉１と

不明土製品が出土した。

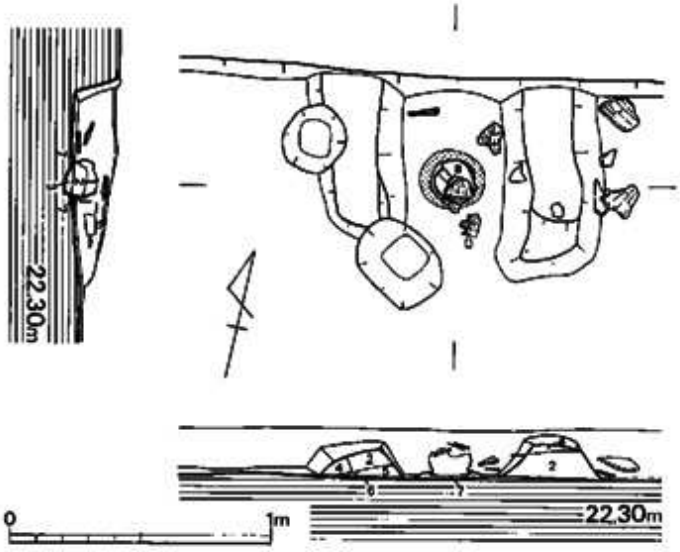
須恵器　（1～4）　4は床面の出土である。2の焼成はあまい。

土師器　（5～12）　5・6は精良品。7の脚台は当初からの穿孔がある。12の甕の肩の張りのない形態は特異である。6・11がカマド周辺，9が下層，12が床面の出土。8はカマド支脚である。

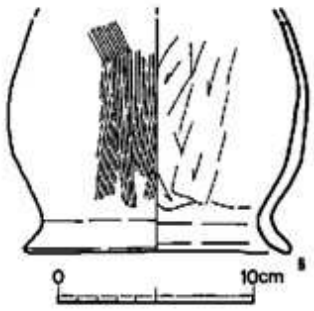
（伊崎）



第182図　95・96・101号住居跡実測図（1/60）



第183図　95号住居跡カマド実測図（1/30）

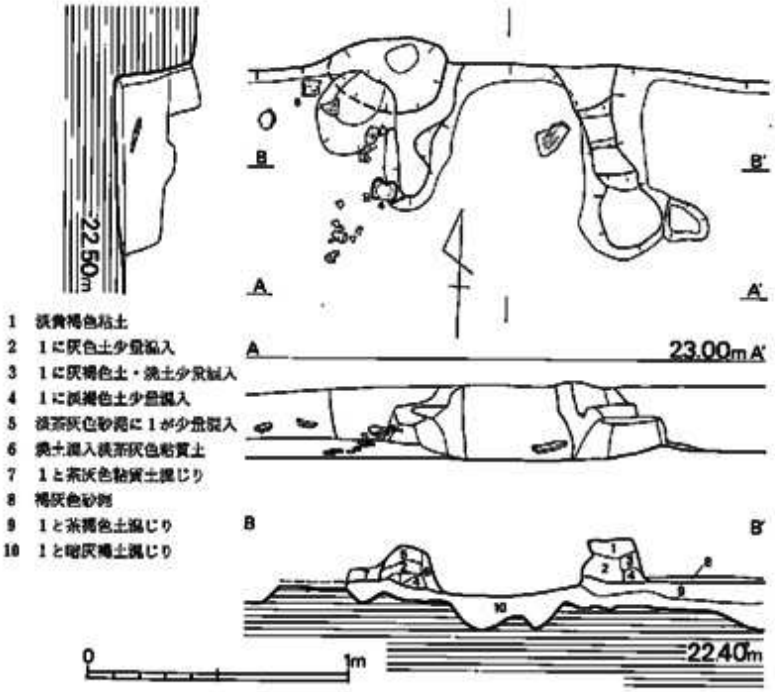


第184図　95号住居跡カマド
実測図（1/4）

1．灰色土混入黄褐色粘土
2．黄褐色粘土
3．黒褐色土混入黄褐色粘土
4．焼土混入黄褐色粘土
5．3に焼土少量混入
6．黒褐色土
7．2の焼土化

96号住居跡　（図版42・43，第182図）

95・97・98号住居跡に切られ，壁面80cmの長さを伺い知るのみである。そこの部分は床面まで15cm程しかなく，あまり深くない。殆ど全ての住居に於いて，上面にて確認出来なくとも下層の柱穴によっておおよその規模まで知り得たが，この住居は柱穴が不明である。住居自体が浅いので柱穴も浅くて，新しい住居によって痕跡なく削られてしまったものかとも考えられる。95号住居跡の P_1・P_2 間の西にある下層の土壙はこの住居に伴うものであ

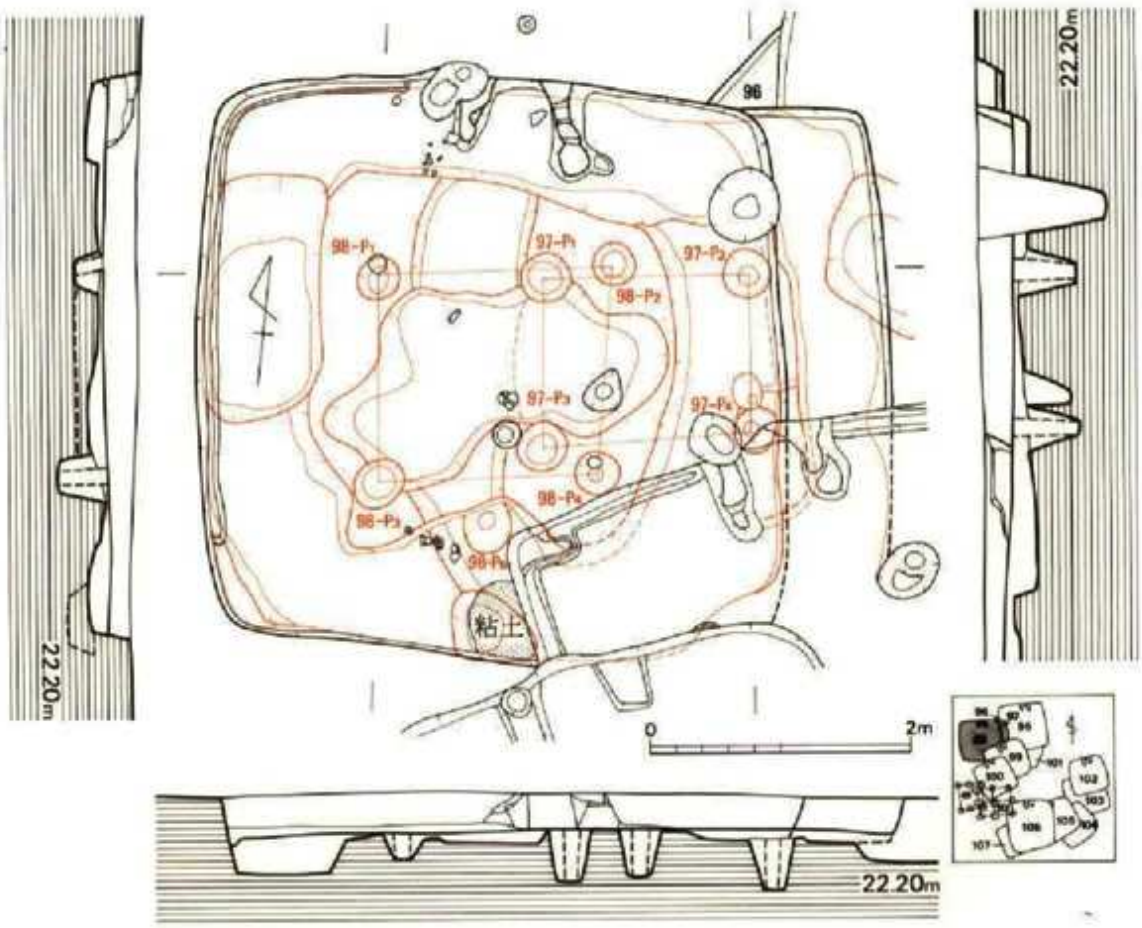


第185図　98号住居跡カマド実測図（1/30）

ろう。遺物は全くない。 (伊崎)

97号住居跡 (図版42・43, 第186図)

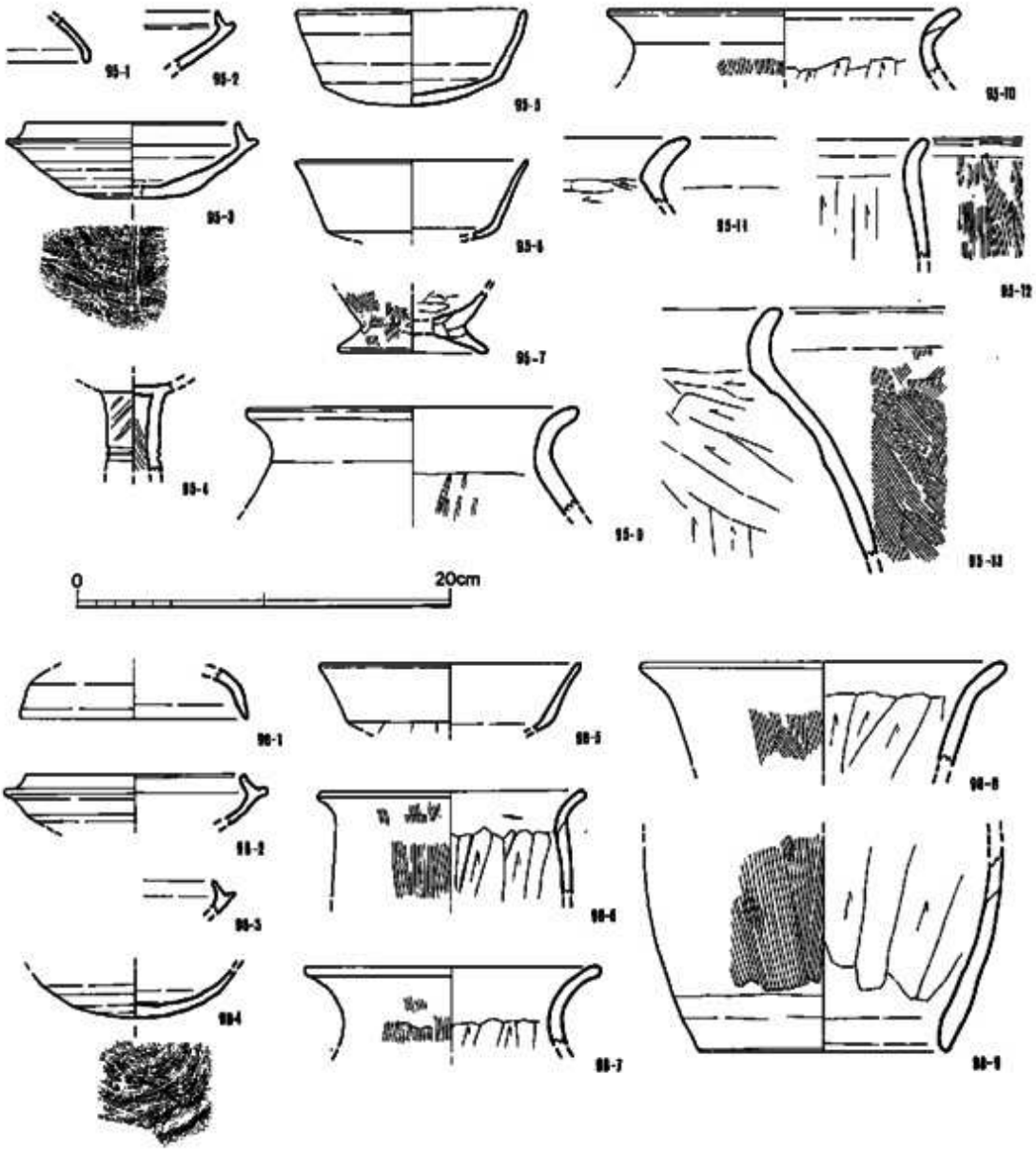
95・96号住居跡を切り，98・99号住居跡に切られている。発掘時の当初は98号住居跡との重複が判らなかった為，残存部はごく僅かながらも，そこから出土した土器(多分多くはないが，いくらかあったと思う) が98号住居跡のものと混入してしまった。しかし，下層から本来のあり方を復すると，規模は小さいものの主軸方向が98号住居跡と殆ど変わらないことより，この97号住居跡を廃してあまり時期を経ないうちに，98号住居跡へ建て変わったのではないかと考えている。 (伊崎)



第186図 97・98号住居跡実測図 (1/60)

98号住居跡　（図版42・43，第186図）

96・97号住居跡を切り，99号住居跡に切られる。カマド対面には下層で検出した土壙があり，その上を粘土が全面ではないが覆っている。土壙は50×65cm程で深さ20cm。また，下層の掘り込みが全周する中で，P_1の西は長方形土壙状に深さ30cmばかり一段深くなっている。中央土壙はかなり広く存する。



第187図　95・98号住居跡出土土器実測図（1/4）

カマド　(図版44，第185図)　左袖の基部がピットに切られている。焚口幅60cm，奥行65cmを測る。左袖外側に若干の土器片と不明土製品1が存したが殆ど床面より浮いている。

出土遺物　(第187図)

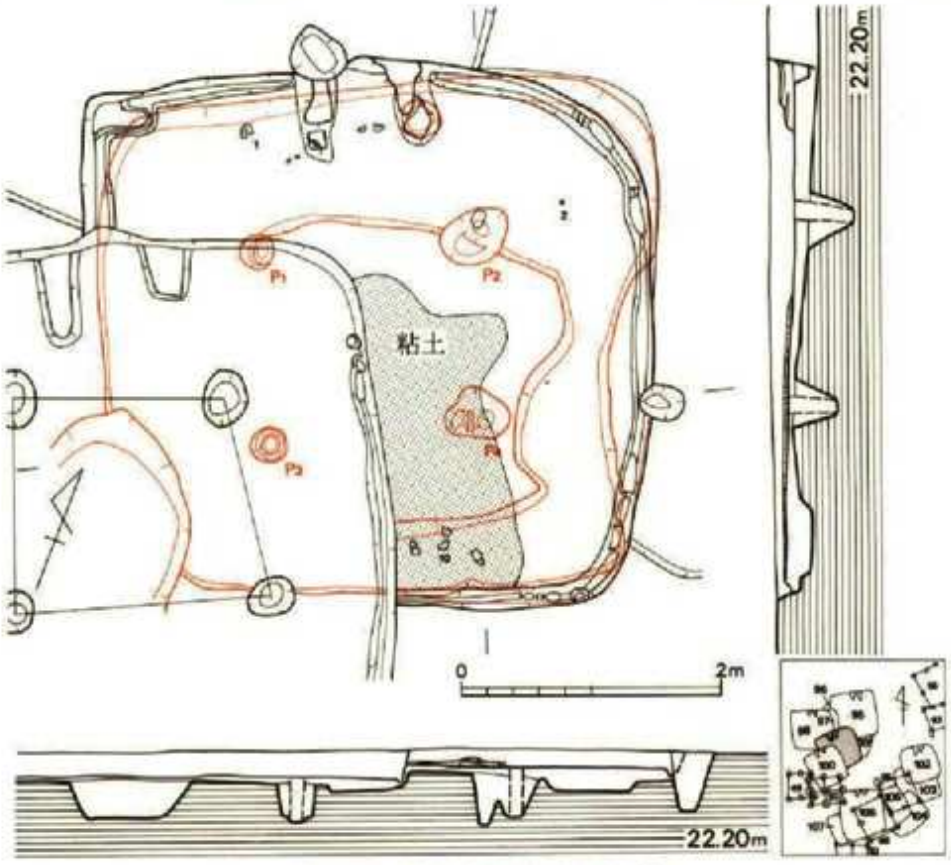
この住居も遺物は少ない。埋土中よりスラッグ2，床面より盤状土製品1，他に不明土製品が出土している。

須恵器　(1～4)　1・4はカマド左袖外側出土だが埋土中のものである。

土師器　(5～9)　5は精良品。8はカマド対面粘土付近の床面から出土した。　(伊崎)

99号住居跡　(図版42・43，第188図)

95・97・98・101号住居跡を切り，100号住居跡に切られている。北西コーナー付近の壁小溝のあり方や下層での壁際の段，柱穴を見ると，確言は出来ないが位置を少しずらして建て直しが行われているらしい。規模は新旧ともに殆ど同じとみてよい。カマド対面にはかなり広い範



第188図　99号住居跡実測図 (1/60)

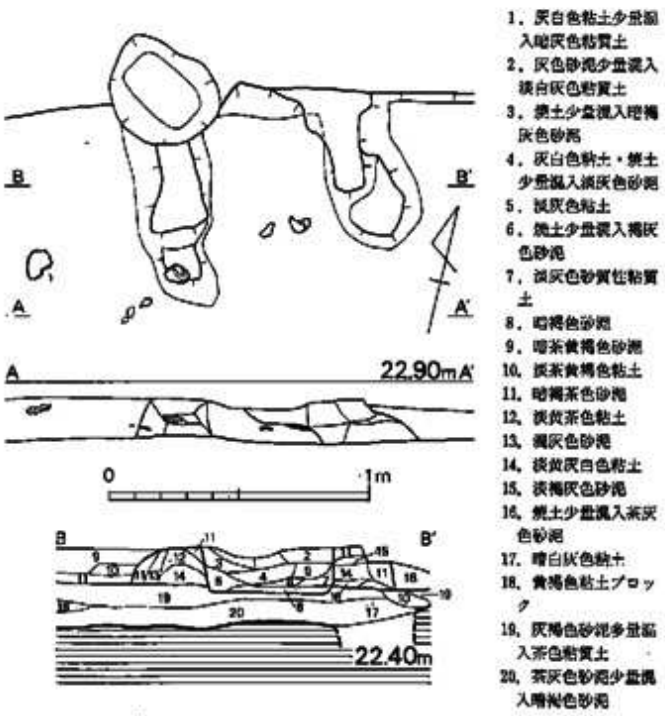
囲で黄色粘土が認められた。

カマド　(第189図)　左袖基部をピットに切られる。焚口幅50cm，奥行70cm程で，内外に土器片，不明土製品1を見るが皆床面から遊離している。

出土遺物　(図版92，第191図)

全体にあまり多くはない。北西コーナー付近の床面より2cm浮いて手捏土器が正立で，埋土中から剣形土製品1，不明土製品が出土している。

須恵器　(1～3)　1はカマド左で床面から10cm程浮いて出土した。2はP_2の東にて壁との中間あたりで，床面より5cm浮いて正立で出土した。



第189図　99号住居跡カマド実測図 (1/30)

土師器　(4～13)　4～6は精良品，10の口縁の屈折は著しい。11・14がカマド対面粘土下の床面より出土した。　(伊崎)

100号住居跡　(図版42・43，第190図)

99号住居跡・49号掘立柱建物を切り，50号掘立柱建物に切られている。この周辺でも小さめの住居である。主柱穴はP_4がやや東に寄っていた。また，P_3は50号掘立柱建物のP_2と重複する。カマド対面には粘土の拡がりがみられた。下層では中央土壙とカマド対面土壙とが連結した形状をなしている。

カマド　(図版44)　残存状態はあまり良くない。火床面と周辺から不明土製品が出土した。

出土遺物　(図版92，第191図)

カマド対面粘土の下より須恵器坩破片と不明土製品が，埋土中から不明土製品が出土した。

須恵器　(1)　床面出土の坩である。他に，埋土中出土の坏身1片が98号住居跡出土のものと，別の1片が108号住居跡付近出土の破片と接合した。また，甕の破片が3点ある。

土師器　（2～5）　4・5は床下層よりの出土である。　（伊崎）

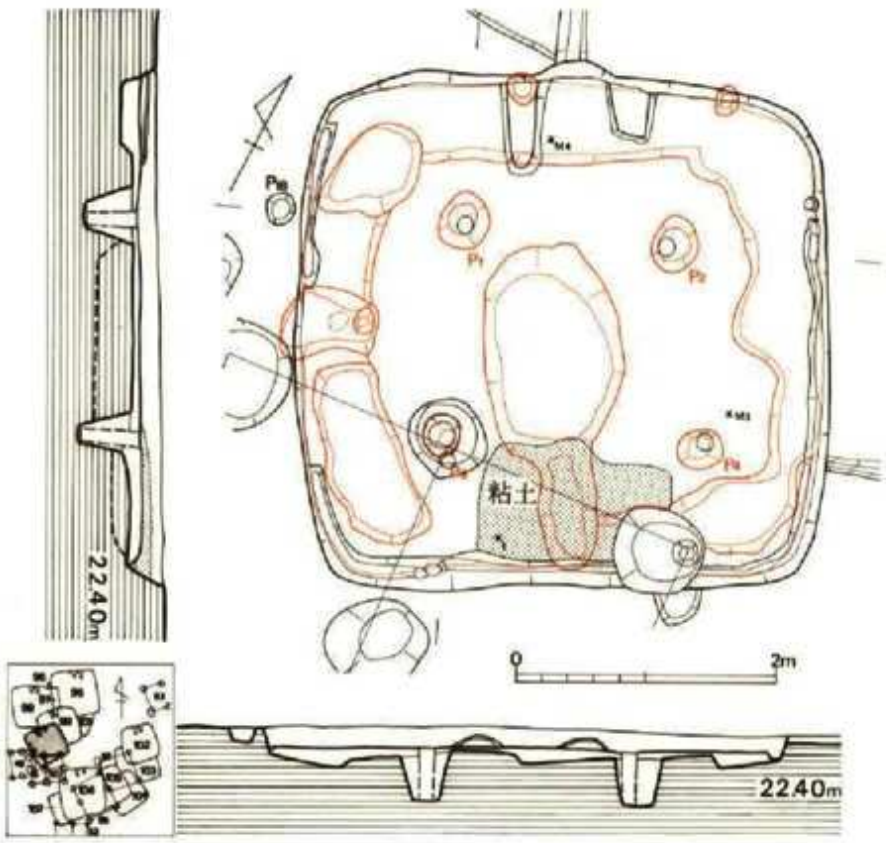
101号住居跡　（図版42・43、第182図）

95・99号住居跡に切られ残りが悪い。加えて，96号住居跡と同様にこれも柱穴が不明であったため本来の規模を復しきれない。ただ，95号住居跡との切合いからすれば東壁の延びが4mを越えることはなく，恐らく1辺3.5m～3.7m程の大きさであったろう。なお，東壁に半分かかって下層から14号土壙が検出された。

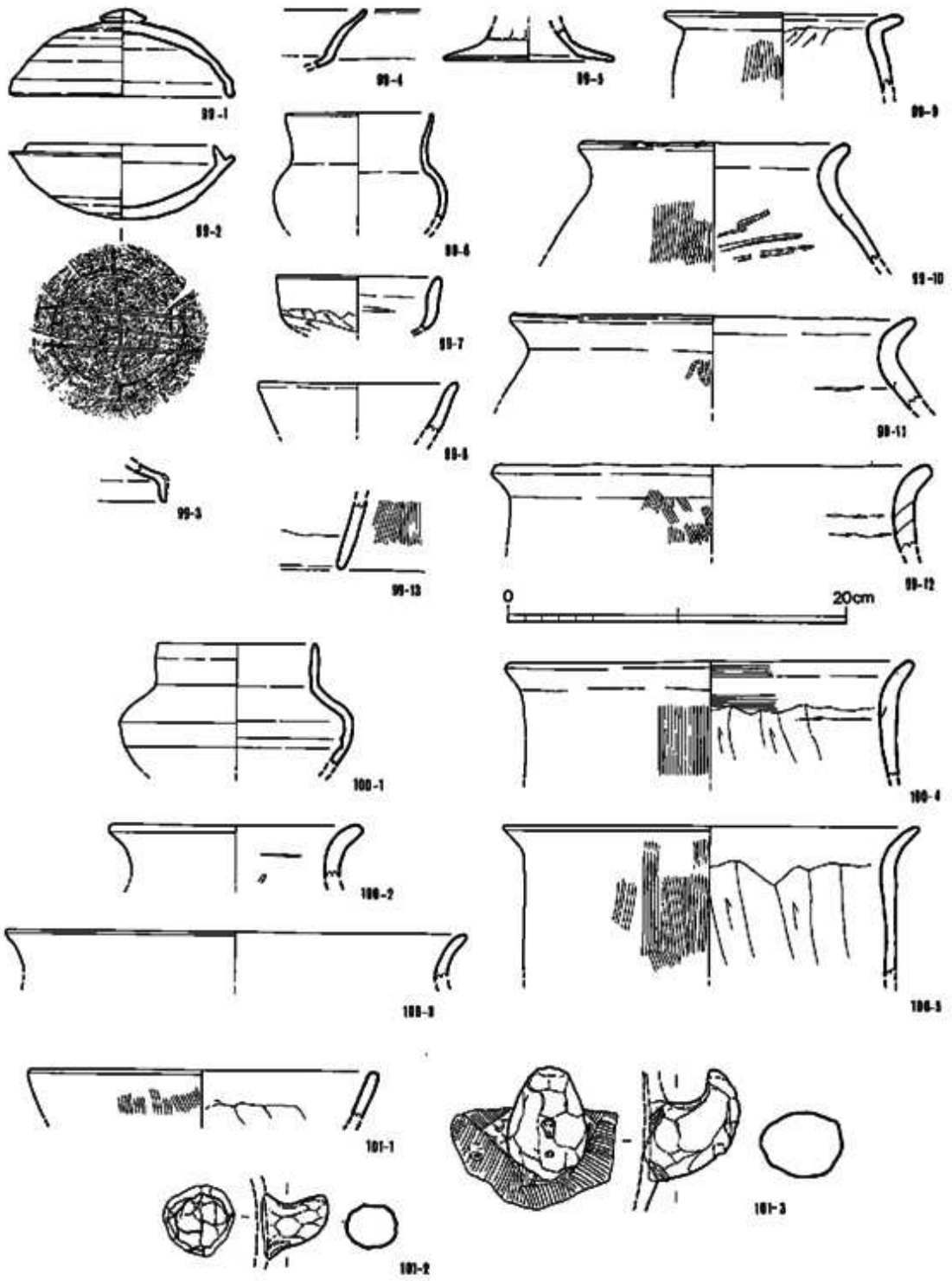
出土遺物　（第191図）

ごく僅かしかない。須恵器は坏身1点があり，95・98号住居跡出土品と接合している。埋土中に不明土製品があった。

土師器　（1～3）　1は鉢になるものか。3には孔が2個あり，2には1個もない。1・2が床下層，3が床面の出土。　（伊崎）



第190図　100号住居跡実測図（1/60）



第191図　99～101号住居跡出土土器実測図（1/4）

102号住居跡　（図版42・45・46，第192図）

103号住居跡を切って営まれる。ほぼ正方形プランで，カマドはやや東に寄っている。主柱間エリアよりやや外側までの床面がよく踏み固められていた。下層はほぼ典型的パターンを示している。

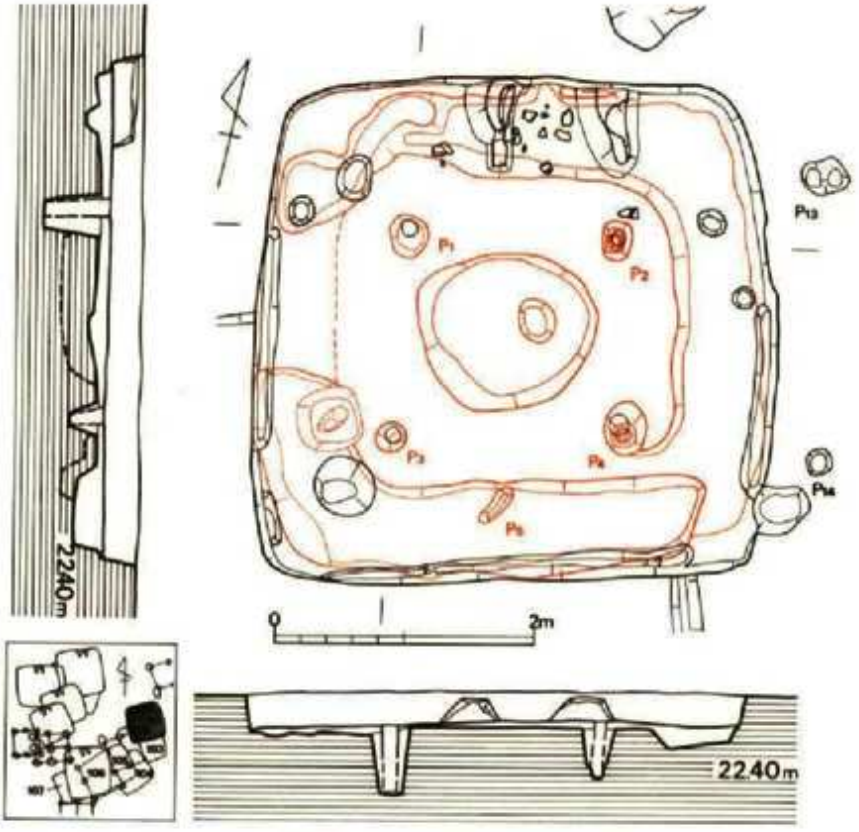
カマド　（図版46）　焚口幅70cm，奥行65cmを測る。本体は地山の黄色土を使って構築されている。内外に若干の土器片と手捏土器が存したのみである。

出土遺物　（第194図）

床面からの遺物はカマド周辺を除いて殆どない。カマド周辺より手捏土器・不明土製品が出土した。

須恵器　（1～3）　2はカマド周辺出土。3の坏身は口縁端によく面をとっている。

土師器　（4～9）　4は精良品。坏・高坏の孰れになるかは不明。5は甕でも特殊な小型品である。7がカマド周辺出土。　（伊崎）



第192図　102号住居跡実測図（1/60）

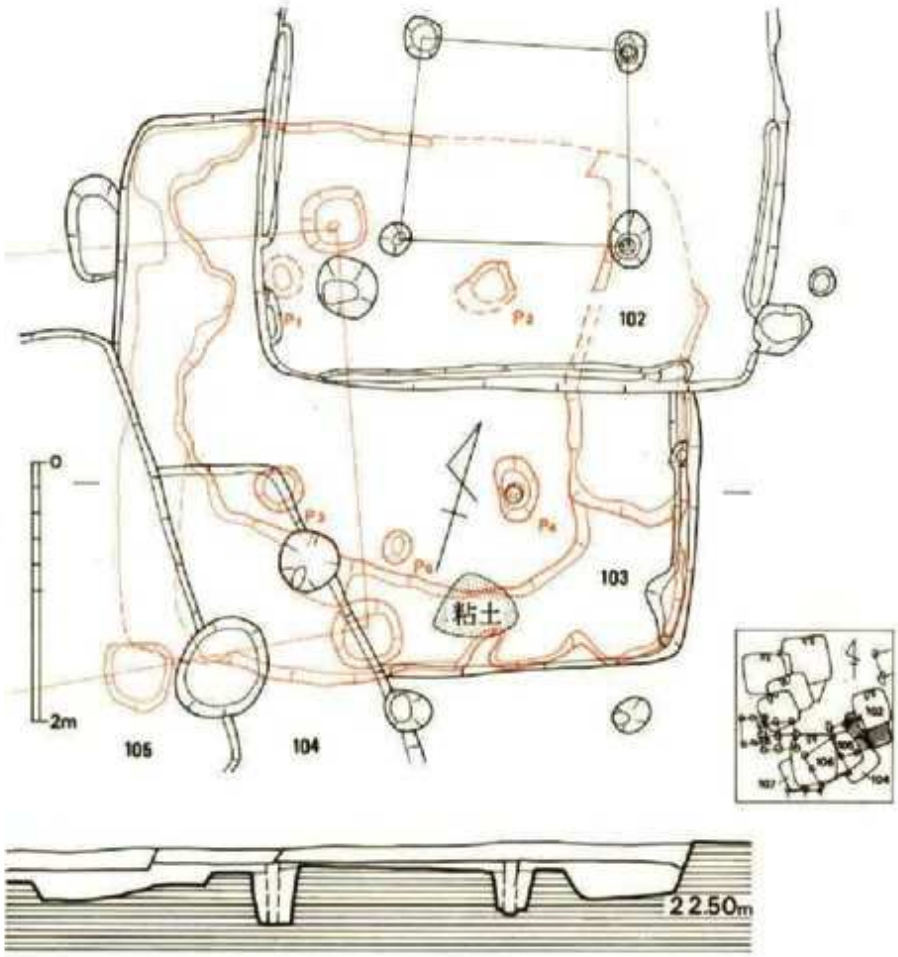
103号住居跡　（図版42・46，第193図）

102・104・105号住居跡に切られるが，各々の下層に現れた段等で本来の規模はおおよそ復原出来る。P_1・P_2はごく一部しか残存しなかったもののこの位置とみてよい。カマドは102号住居跡に切られた北辺に存したものであろう。その対面には僅かながら粘土が存した。

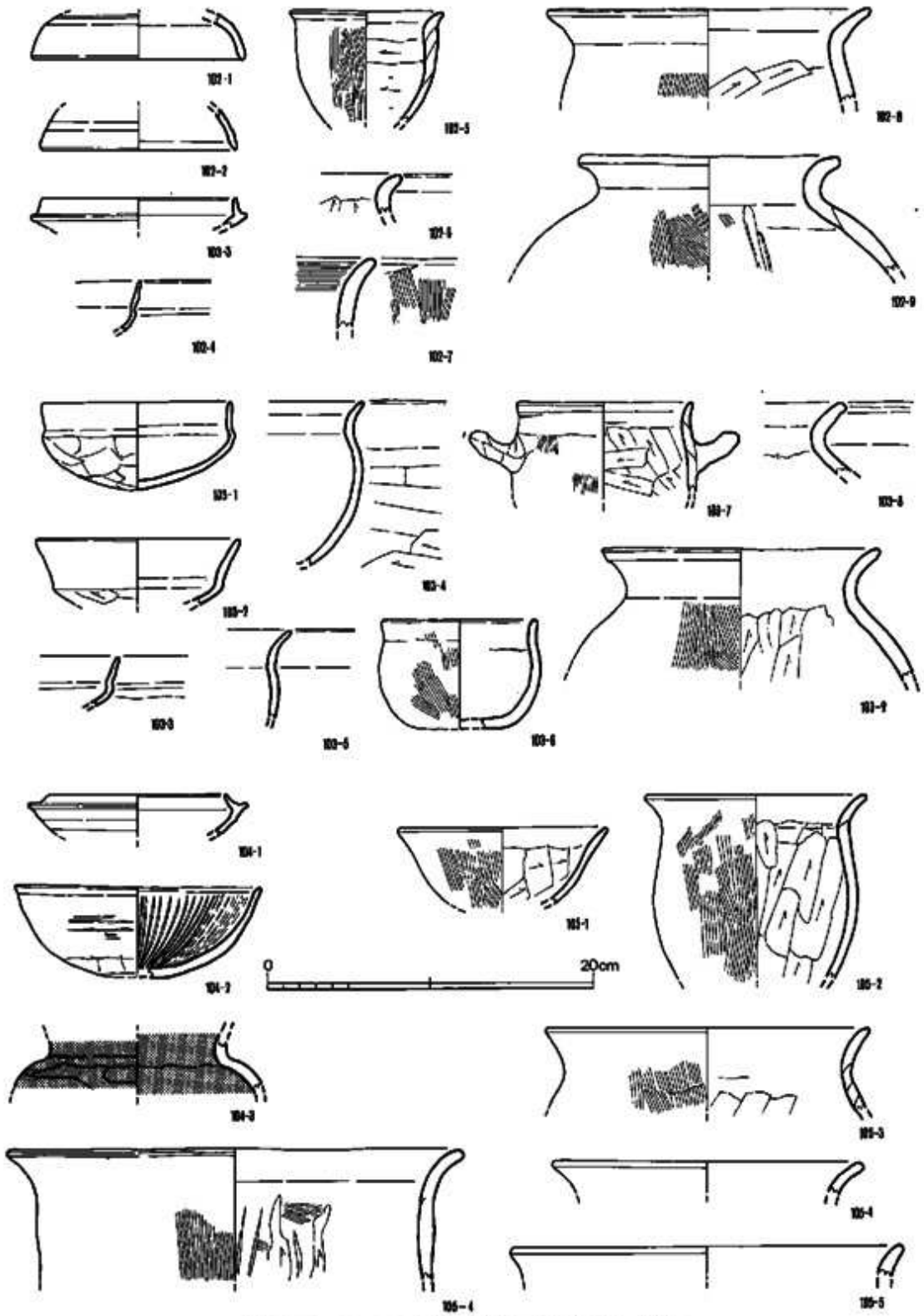
出土遺物　（図版92，第194図）

須恵器は坏片ともう1片があるのみで図示出来ない。全体にごく僅かしか出土していない。

土師器　（1～9）　1～5は精良品。4・5は鉢になるか。別に，内面黒漆塗りの壺の肩部が出土しているが，104号住居跡出土のものと同一個体と思われた。6は粗製の鉢。7は復原口径10.6cmの特殊な小型の甕であり，実用品とは言いかねる。5が床下層の出土。　（伊崎）



第193図　103号住居跡実測図（1/60）



第194図　102～105号住居跡出土土器実測図（1/4）

104号住居跡　（図版42・46，第195図）

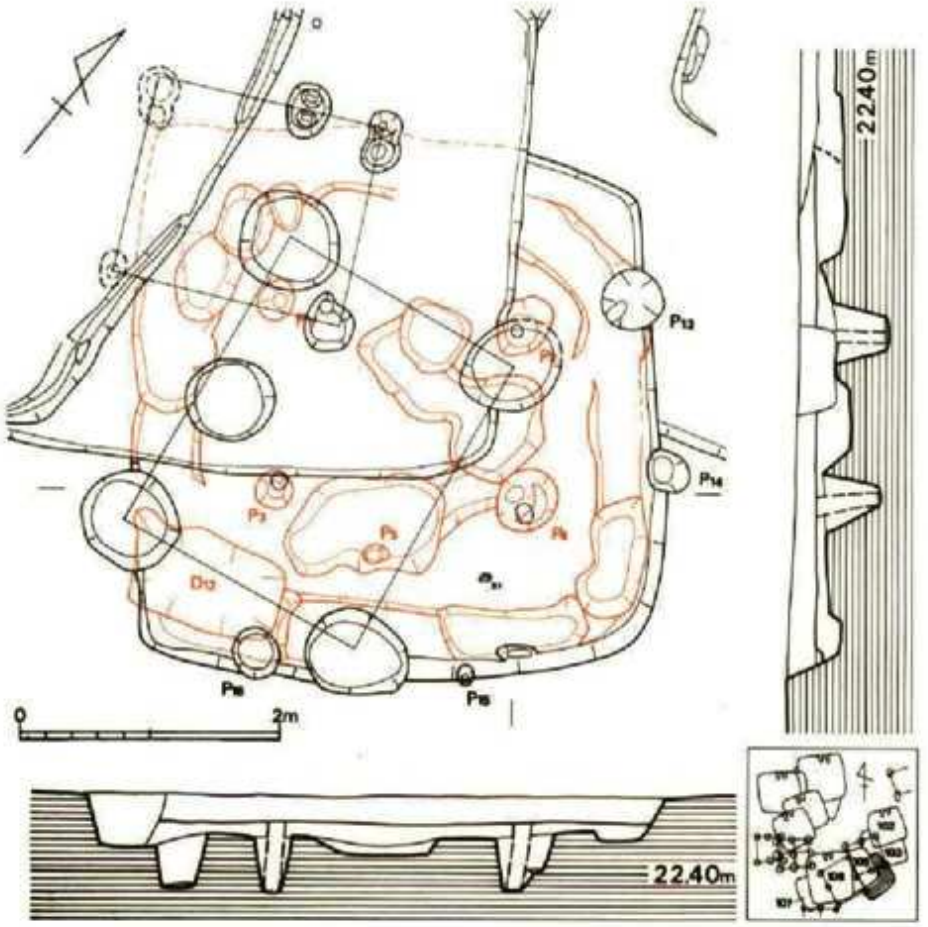
103号住居跡を切り105号住居跡に切られる，あまり大きくない住居である。柱配置はかなり横長プランとなる。カマドは北辺に存したものと思われる。54号掘立柱建物にも切られる。なお，下層には65・66号掘立柱建物のピット，13号土壙が存した。

出土遺物　（第194図）

少ない。P_4の南側床面より砥石1が出土した。

須恵器　（1）　坏身1が存するのみである。外面灰被りで焼成はよい。

土師器　（2～4）　2の椀は精良品で，内面に放射状，外面に横方向の暗文をもつ。3の壺も精良品で，内外とも黒漆を塗っている。2・3ともに特殊品といえる。2・4は床下層から出土した。　（伊崎）



第195図　104号住居跡実測図（1/60）

105号住居跡　（図版42・46，第196図）

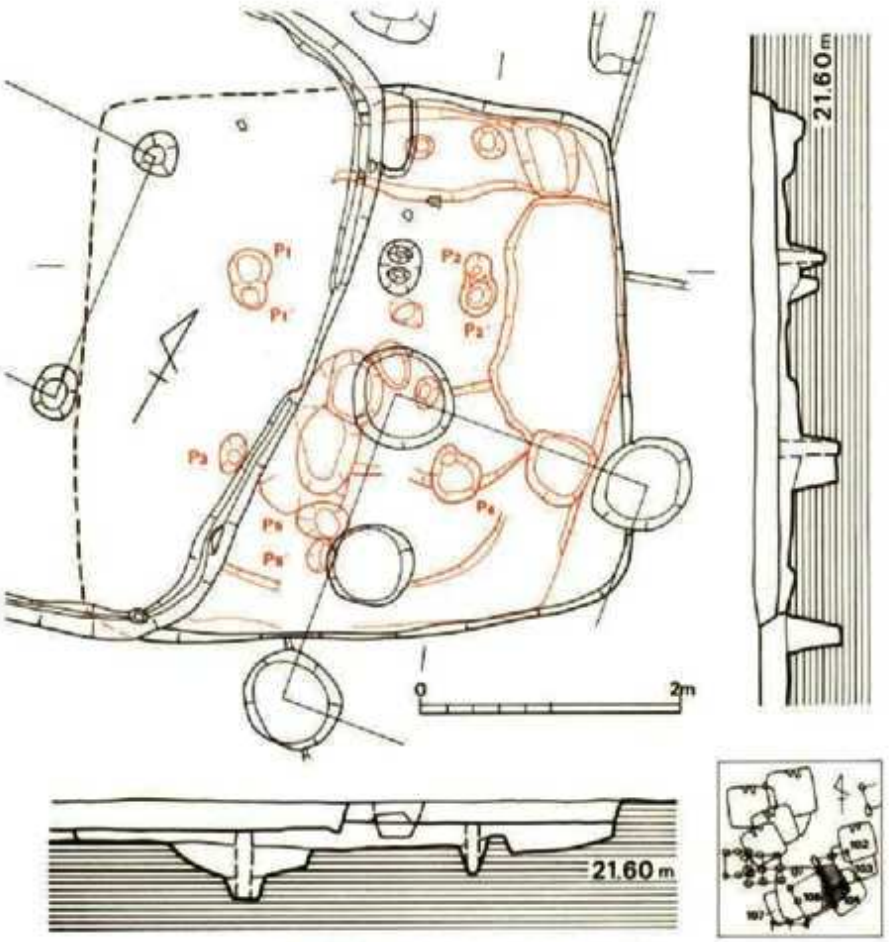
103・104号住居跡を切り，106号住居跡に切られる。カマドは右袖部分が60cm程残るのみで全容は不明である。検出時に明確に確認しえなかったが，下層にて検出しえた主柱穴は P_1・P_2 に於いて2連となり，P_3・P_4 間に見られるピットは普通は1個なのが，この場合 P_3・P_3' の2個を見るので，建てかえがあったものと考えられる。その場合，P_1'・P_2'・P_3・P_4・P_5' のピットをめぐるプランから，P_1・P_2・P_3・P_4・P_5 をめぐるプランへ，つまり南から北へ少し位置をずらしたものとされよう。主柱穴配置はやや横長プランとなる。

出土遺物　（第194図）

極めて少なく，須恵器は埋土中に坏・甕の破片があったのみである。他に埋土中に不明土製品があった。

土師器　（1～5）　1は鉢になろう。2～5の甕は皆細身である。2が床下層出土。

（伊崎）

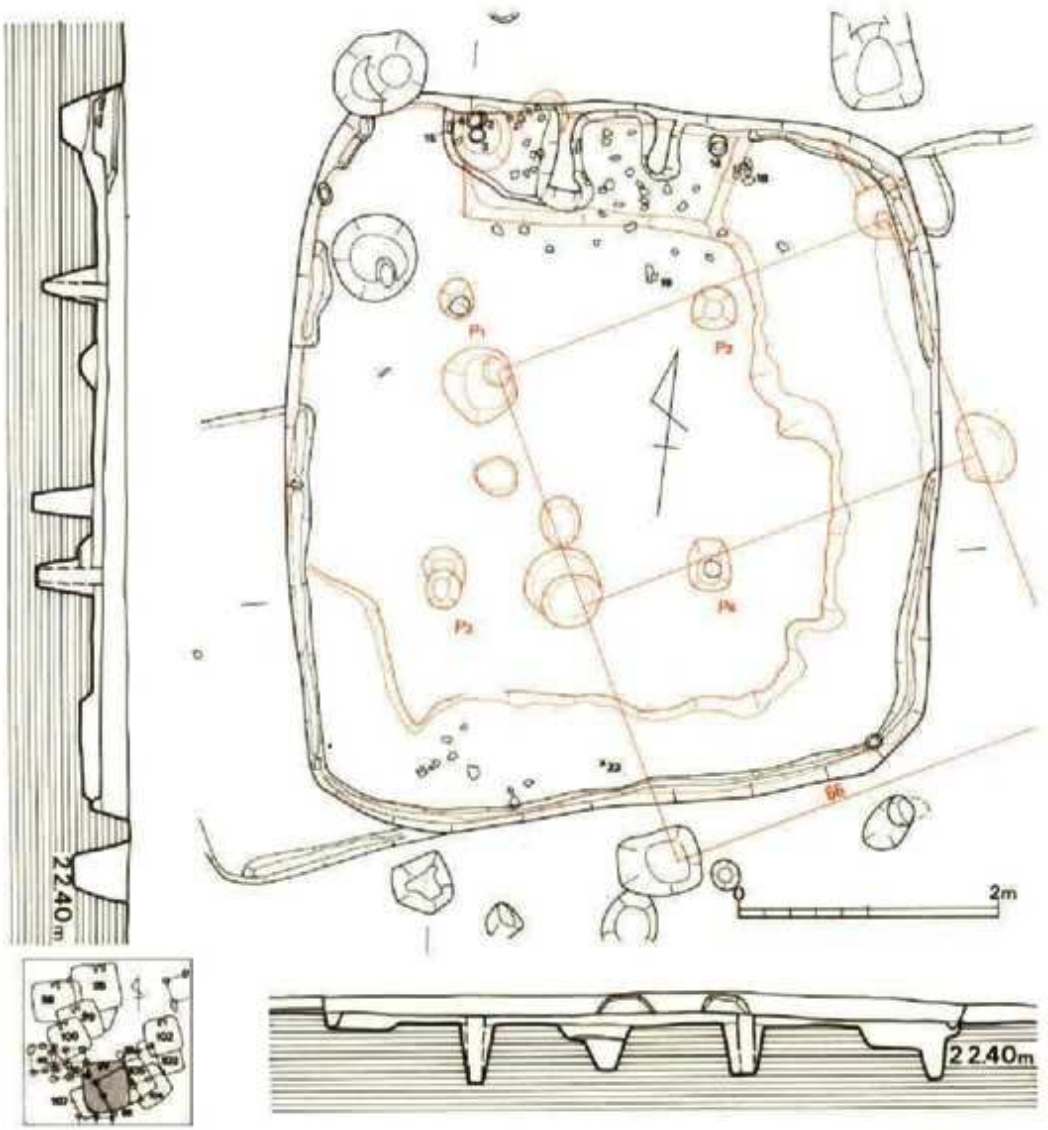


第196図　105号住居跡実測図（1/60）

106号住居跡　（図版42・45・46，第197図）

104・105・107号住居跡を切り，50号掘立柱建物に切られる。東辺に比して西辺が長く，台形状でやや縦長のプランとなる。下層に66号掘立柱建物のピットがある。

カマド　（図版47，第198図）　右袖が短くなっているが，焚口幅35cm，奥行75cm程に復される。支脚は既になかったが，内外から多くの遺物が出土した。左袖外側には浅い土壙状の落ち込み



第197図　106号住居跡実測図（1/60）

があり，その中に須恵器３個と土師器があった。須恵器は２個が坏蓋・身のセットで完形であり，他の１個は坏蓋の半欠品である。これらの直下に径45～50cm，深さ20cmのピットが存した。左袖前面には土師器細片が床面にこびりついた如き状態で出土した。火床面から焚口にかけては土玉・不明土製品が床面からやや浮いて出土している。右袖外側には30cm離れて径20cm，深さ10cm程の小ピットがあり，その中に土師器甕が口縁を上にして存した。そのすぐ横の床面に土玉１個があった。

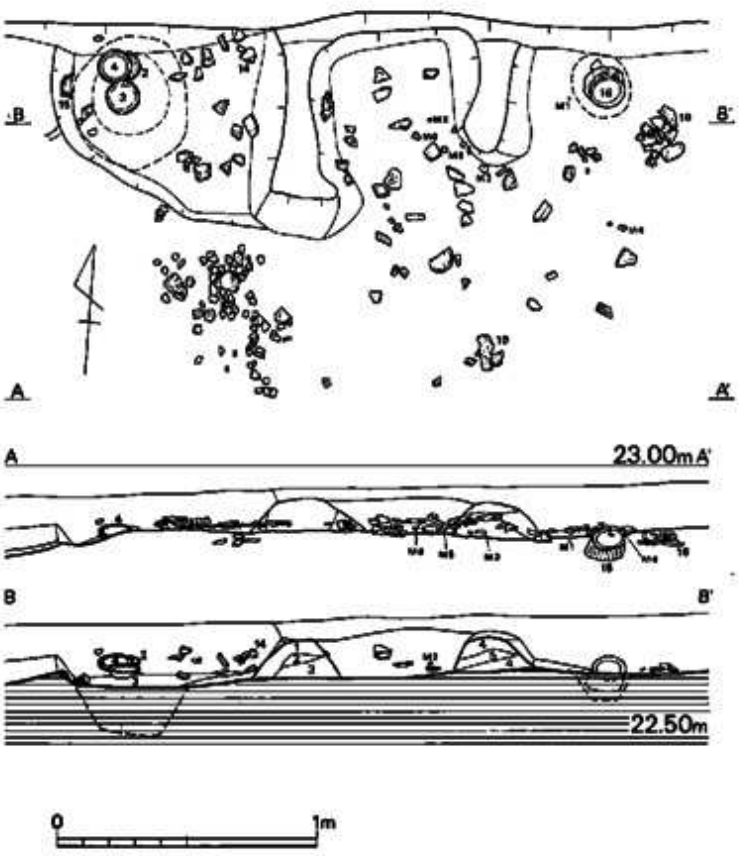
出土遺物　（図版92，第200図）

この近辺では多めの出土量である。ことにカマド周辺が多かった。埋土中に鉄鏃片２，スラッグ１，手捏土器３，不明土製品３が，カマド対面の床面直下に手捏土器１，そしてカマド内外に土玉２があった。

須恵器　（１～９）　２～４がカマド左袖外側出土である。３・４は完形。４は口縁端部を殆ど全周にわたって打欠いている。他に甕の破片も数点ある。

土師器　（10～20）　11は椀になるものか。12も椀になろう。13は特に小型の甕である。20は数少ない甑Ⅱ類のひとつである。13～16，18・19がカマド内外から出土した。

（伊崎）



第198図　106号住居跡カマド実測図（1/30）

107号住居跡　（図版42・45，第199図）

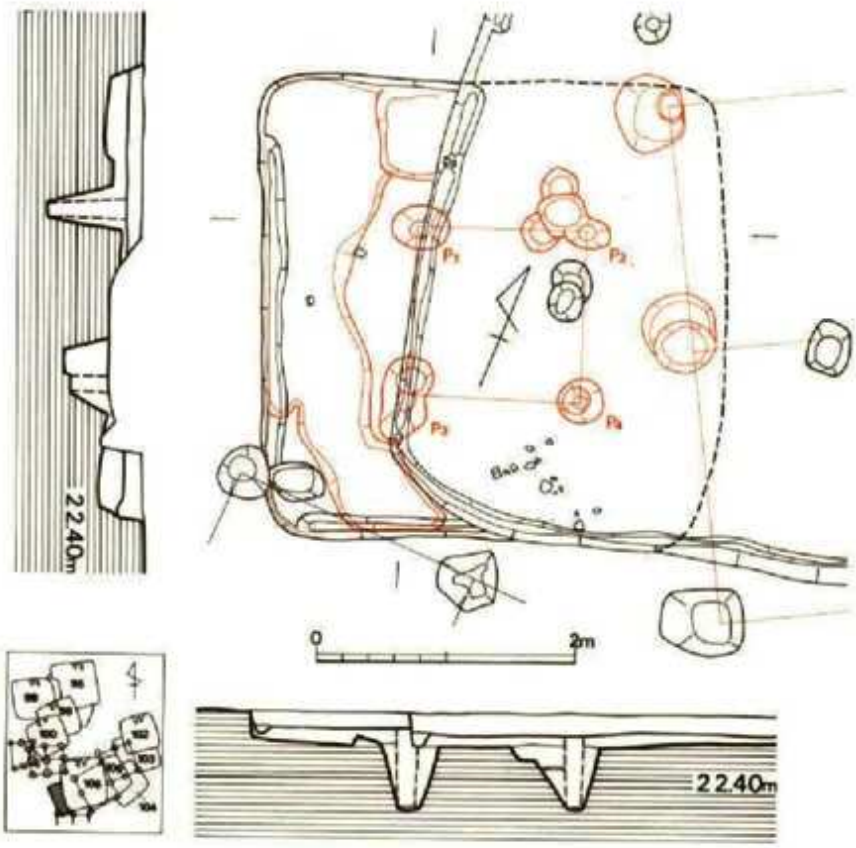
106号住居跡に約⅔を切られた小型の住居跡である。53号掘立柱建物にも一部切られている。カマドは北辺に存していたものだろう。下層にて検出した主柱穴は P_2 ・ P_3 の所が重複しているので，建て直しがあったものかもしれない。主柱間エリアはかなり狭い。

出土遺物　（第200図）

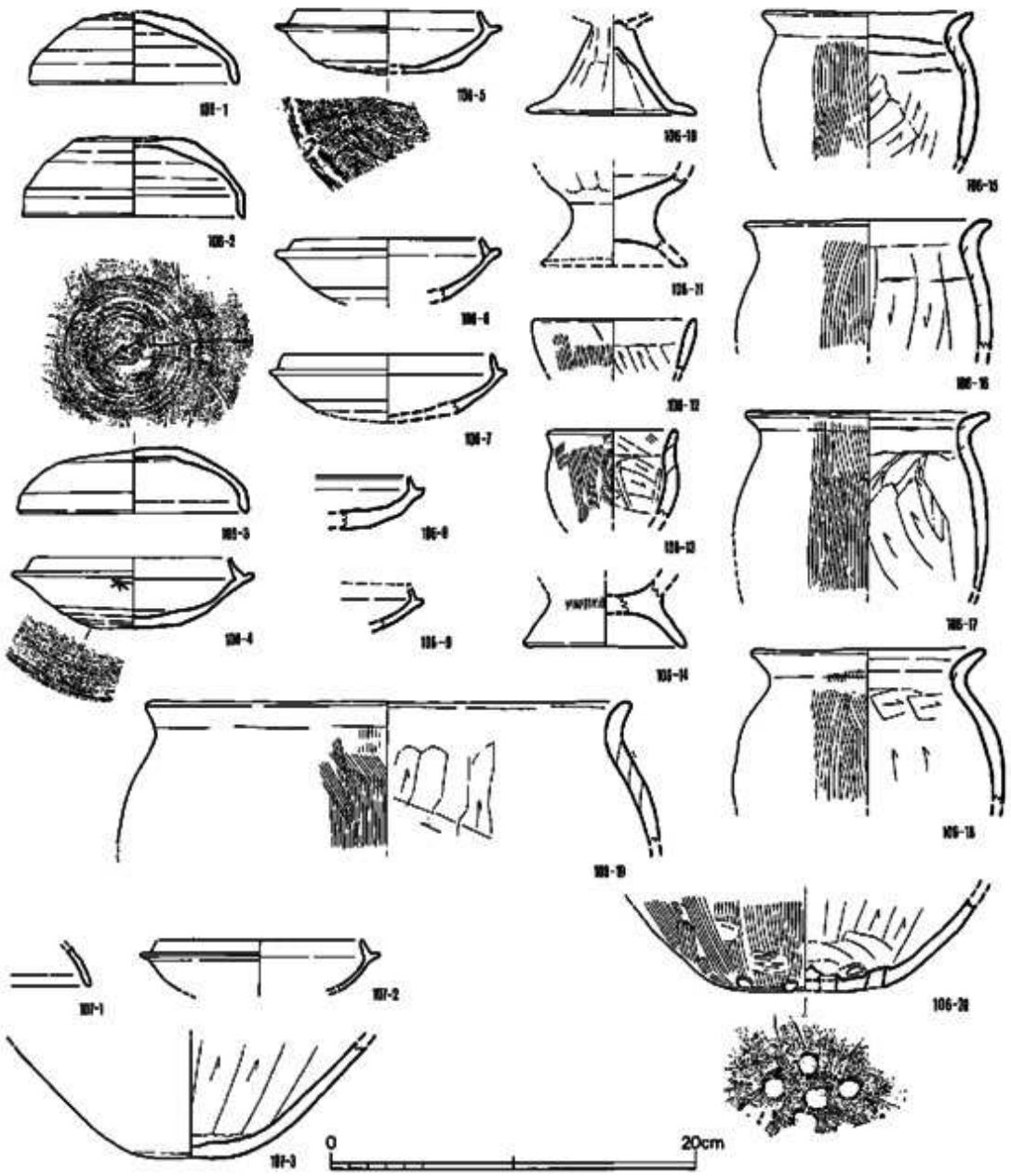
ごく少量しかない。埋土中に不明土製品1がある。

須恵器　（1・2）　ともに焼成良好である。2はスマートな器形になりそうである。

土師器　（3）　二次火熱を受けるとともに，外面に煤が付着している。　（伊崎）



第199図　107号住居跡実測図（1/60）



第200図　106・107号住居跡出土土器実測図（1/4）

108号住居跡　（図版48，第201図）

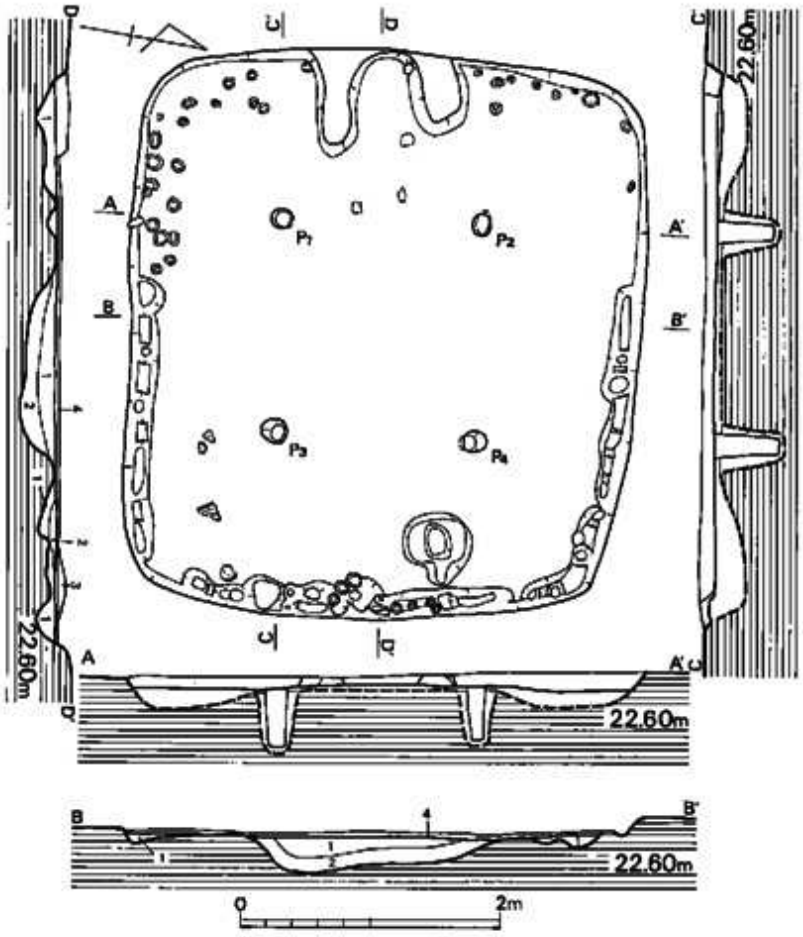
53号掘立柱建物のすぐ東に，切合い関係を持たずに単独に存在する。やや丸味を帯びた方形プランを呈する。よく踏み固められた貼床面には4本の主柱痕が残る。平面的には確認していないが，貼床面下には中央土壙，掘り込みが存在する。また，壁小溝部分には径5～10cm程の小ピットが不規則に並ぶ。

カマド　（第202図）　西壁のほぼ中央に付設される。住居の壁高が10cm前後と浅く，カマドの遺存状態も良好ではない。支脚は検出していない。

出土遺物　（図版93，第203図）

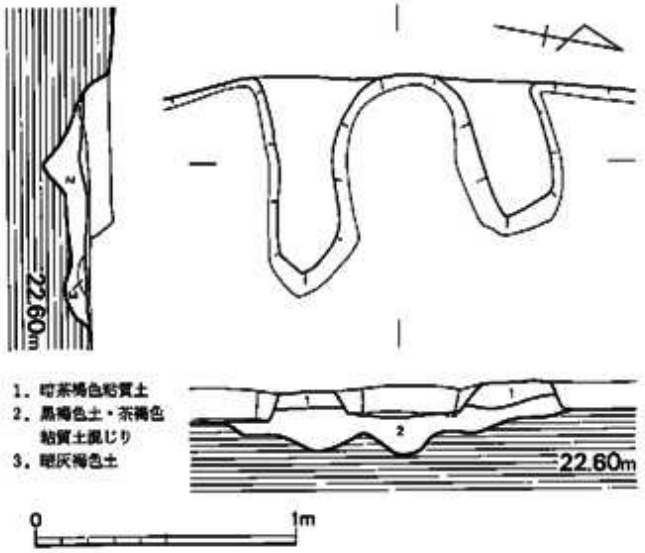
須恵器7個体分，土師器36個体分の破片と不明土製品が出土している。

須恵器　（1～6）　全て埋土中からの出土である。互いに接合しないが，67・68号住居跡から6と同一個体の破片が出土している。

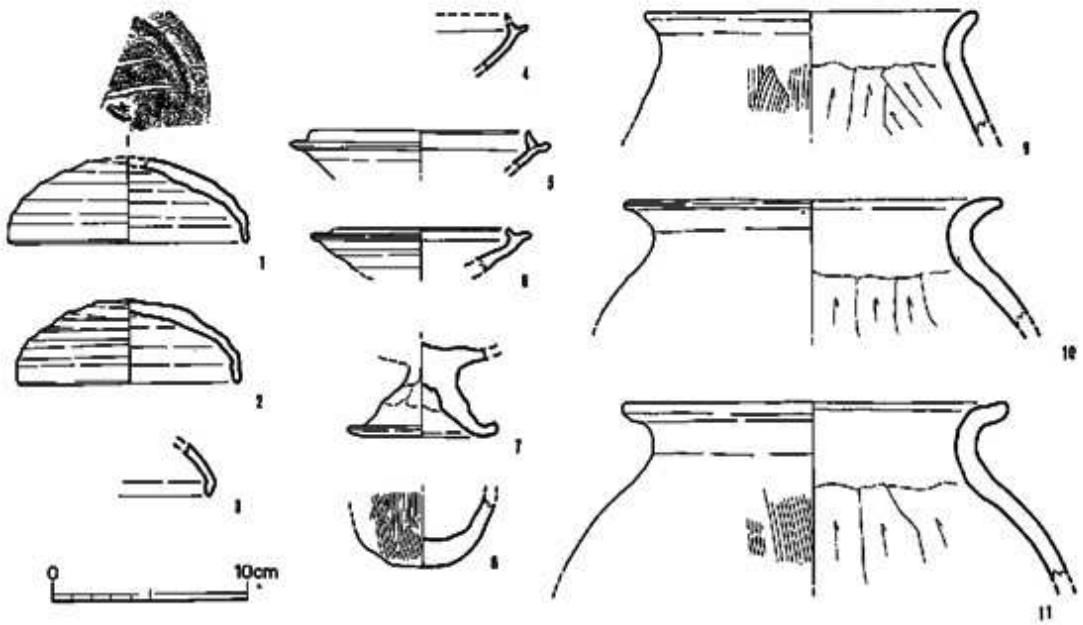


第201図　108号住居跡実測図（1/60）

土師器　(7～11)　10は本住居跡外の包含層から，他は埋土中からの出土である。8だけは精製された胎土の土器である。(児玉)



第202図　108号住居跡カマド実測図 (1/30)



第203図　108号住居跡出土土器実測図 (1/4)

109号住居跡　(図版48，第204図)

過半が調査区外にのび，110号住居跡を切っている。壁高は10cm前後で遺存状態は悪い。床面は踏み固められ，P_2 の主柱痕が明瞭に残る。

カマド　北西側の壁に付設されている。遺存状態は良くない。

出土遺物　（第207図）

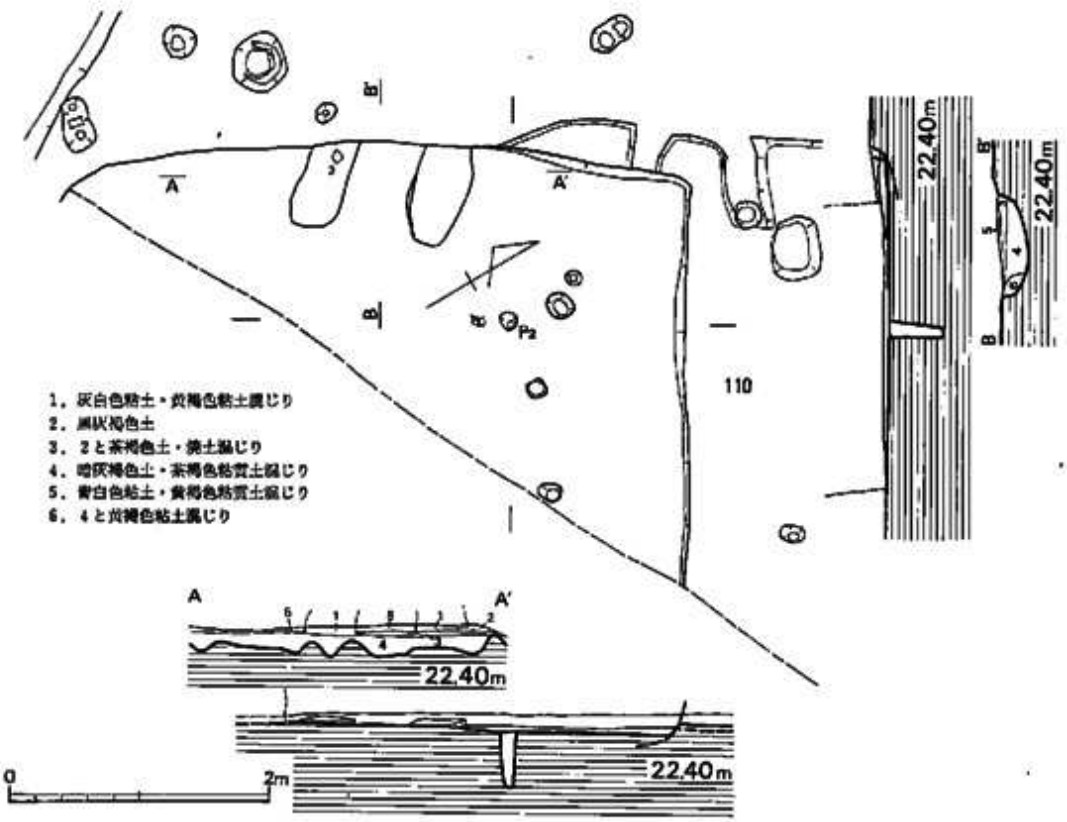
20点の土器と不明土製品が出土している。その殆どは埋土中出土である。

須恵器　（1・2）　全出土土器の1割を占める。全て埋土中からの出土である。

土師器　（3・4）　甕の破片資料でカマド内からの出土である。　（児玉）

110号住居跡　（図版48，第205図）

109・111号住居跡に切られ，一部が調査区外にのびる。壁高も5㎝程しかなく，遺存状態はよくない。床面は踏み固められており，109号住居跡に切られながらも4本の主柱痕がよく残っている。床をはずした調査は出来なかったので壁沿いの掘り込みは不明だが，東北壁に偏して中央土壙を検出している。



第204図　109号住居跡実測図（1/60）

カマド　(第206図)　壁高は低く，また左袖を109号住居跡に切られている為，残りは悪く支脚も遺存しない。

出土遺物

(図版93，第207図)

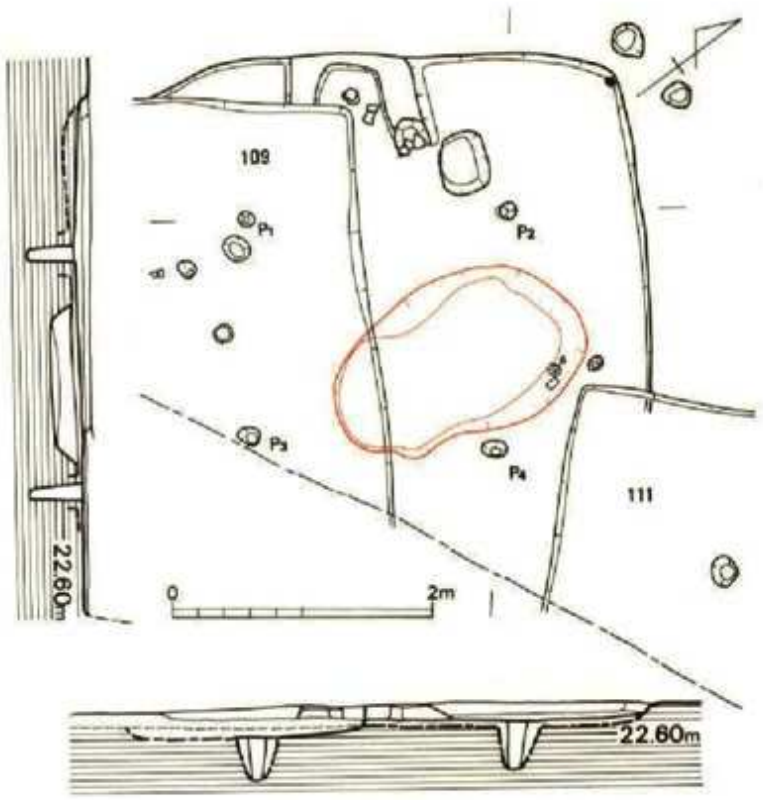
住居跡の遺存状態が悪い為，出土遺物は少ない。が，カマド右袖外側より土製の模造鏡が1点と別に不明土製品が出土している。

須恵器　(1～4)

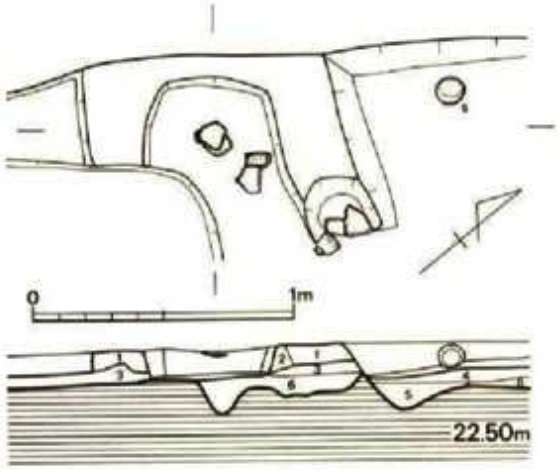
2は床面下層埋土より，他は埋土中からの出土である。いずれも小片で4は反転図である。

土師器　(5～7)

5はカマド右袖横，6は床面から，7は埋土中からの出土である。5は図の状態で略完形で，6は反転図である。両者とも精製土器である。　(児玉)

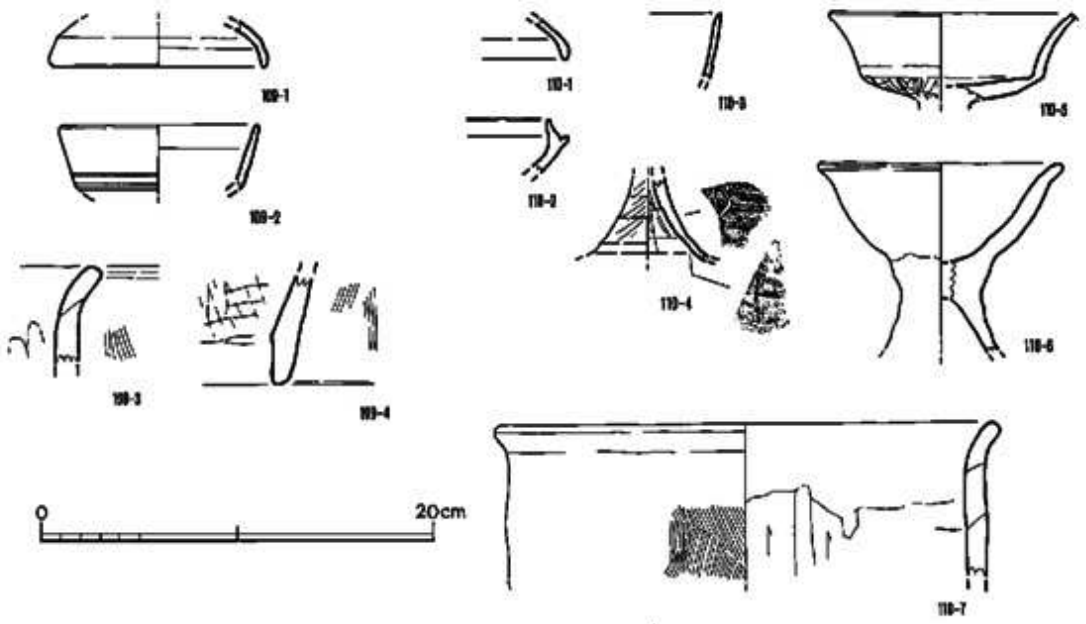


第205図　110号住居跡実測図 (1/60)



1．茶褐色粘質土
2．1に焼土混入
3．灰褐色土
4．1と3の混じり
5．焼土・暗灰褐色土混じり
6．黒褐色土・茶色粘質土混じり

第206図　110号住居跡カマド実測図 (1/30)



第207図　109・110号住居跡出土土器実測図（1/4）

111号住居跡　（図版48・49，第208図）

南半分は調査区域外にのび，110・112・133号住居跡を切り，113号住居跡に切られる。床面は踏み固められ，主柱痕を検出した。壁高は10cm前後で遺存状態は良くない。

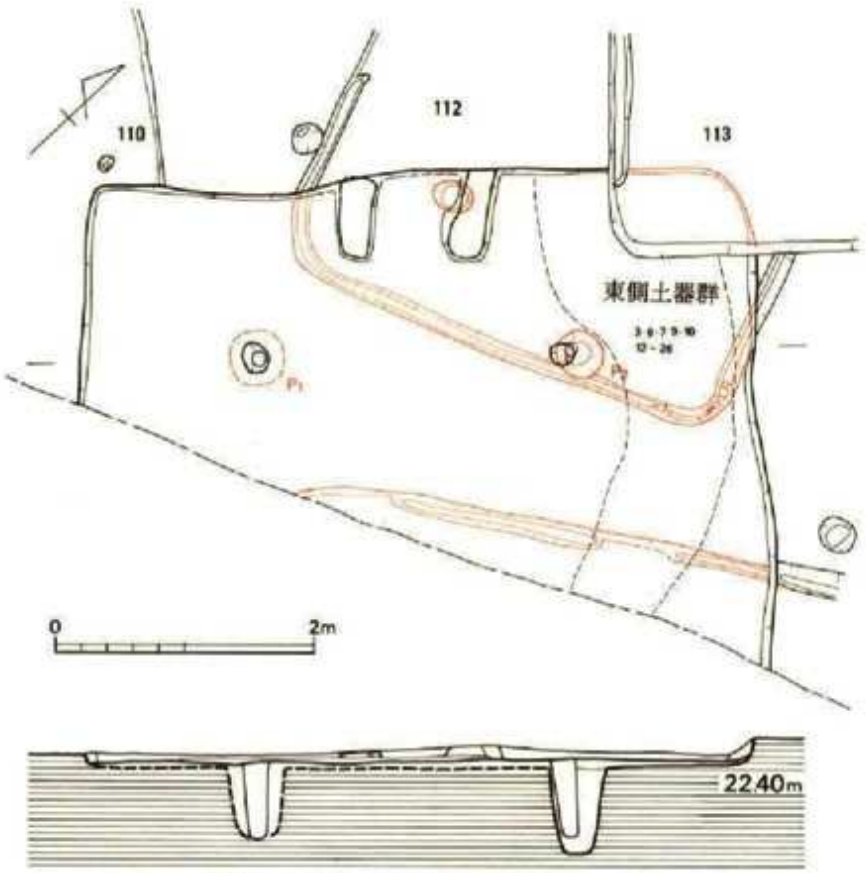
カマド　（図版49，第209図）　北西壁のほぼ中央に設置されている。上面が削平され，袖は高さ5cm前後しか遺存しないが，カマドのほぼ中央に，壁から約35cm離れた部分で，甕を倒立させた支脚が原位置を保って遺存していた。この甕は破片を接合してほぼ完形となり，体部は煤が付着し，口縁部は一部剝落している。また，カマド内及び東側から多量の土器が出土した。

出土遺物　（図版93・94，第210～212図）

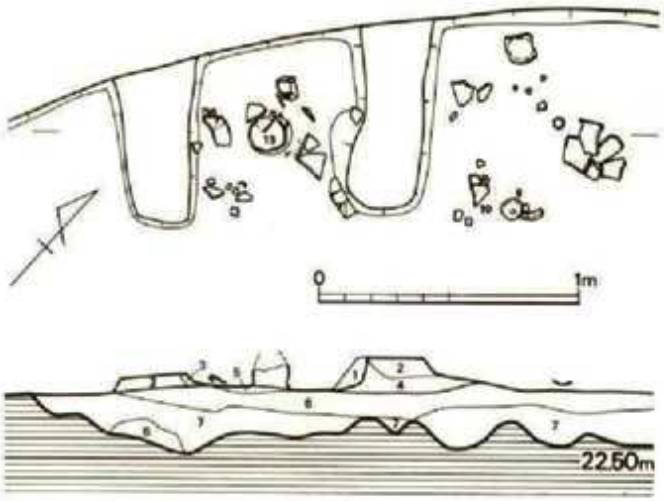
70個体分程の土器が出土し，埋土からの出土品が過半を占めるが，カマド周辺から良好な状態で20個体程の土器が出土した。他に手捏の器台，鉄器，不明土製品が名1点出土している。

須恵器　（1～5）　出土土器全体の14%を占める。2はカマド内，3はカマド東側の床面上から出土したが，他は埋土内からの出土である。

土師器　（6～28）　19・28は出土位置を特定出来ないが，他はカマド内及びカマド東側の土器群からの出土品である。6～11は精製土器である。　（児玉）



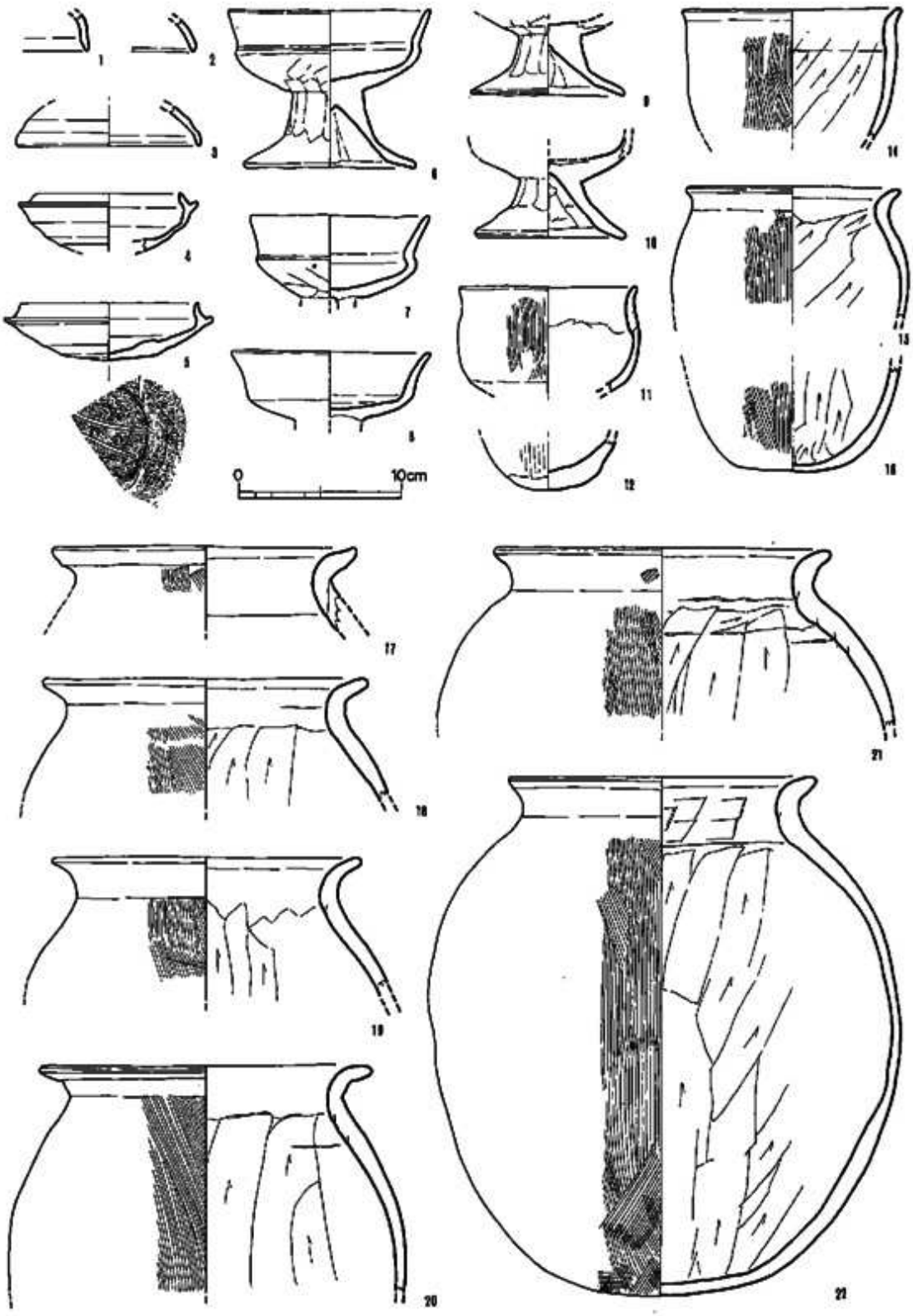
第208図　111号住居跡実測図（1/60）



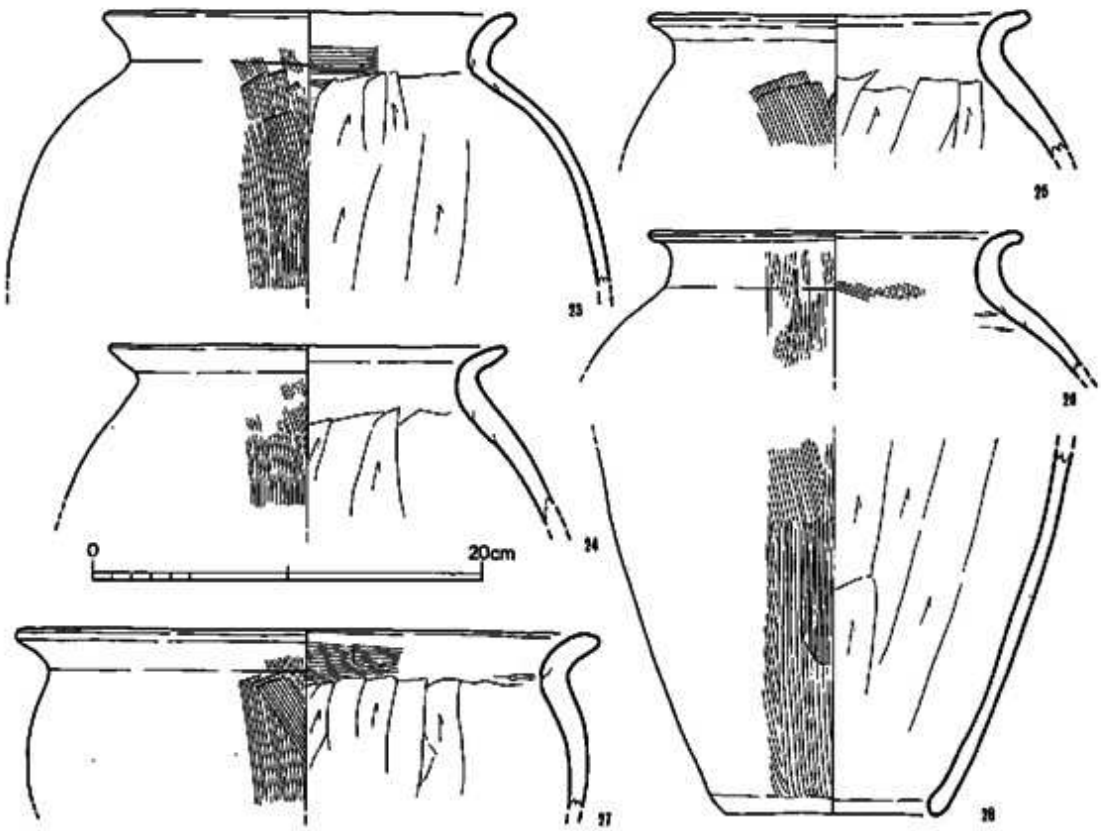
第209図　111号住居跡カマド実測図（1/30）

1．焼土
2．灰白色粘土混入黄褐色粘土
3．焼土混入茶褐色粘質土
4．灰白色粘土混入茶褐色粘質土
5．黄褐色粘土（一部焼土化）
6．黒褐色土・茶褐色粘質土混じり
7．6に黄褐色粘土混じり

第210図　111号住居跡カマド支脚実測図（1/4）



第211図　111号住居跡出土土器実測図①（1/4）



第212図　111号住居跡出土土器実測図②（1/4）

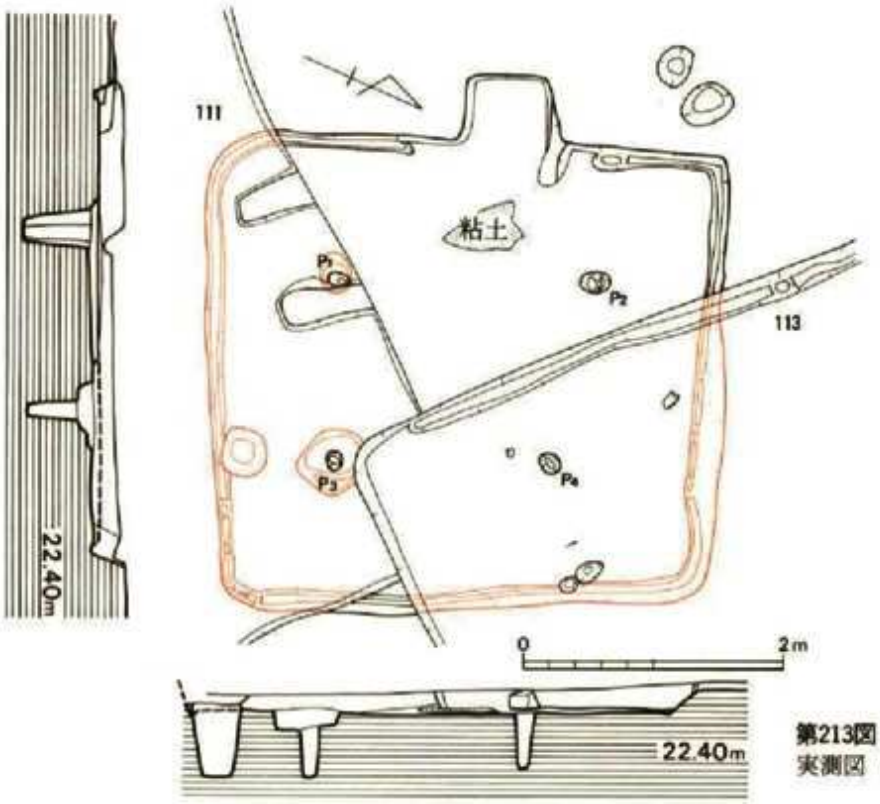
112号住居跡　（図版48，第213図）

調査区中央の南側に存在し，111・113号住居跡にその過半を切られる。南北に幅広の略方形プランを呈し，カマド部分を除いて壁小溝が巡る。踏み固められた貼床面に4本の主柱痕を検出した。一般的には2本の主柱を結んだ線とそれに対応する壁（例えば P_1 － P_2 を結んだラインと西壁）はほぼ平行関係にあるが，P_4 が南に偏っており，北壁との関係は平行にならない。床をはずしてないので床面下の状況は不明であるが，他の住居跡のそれと同様であろう。

カマド　西壁の中央よりやや北に偏した所にカマドを設置する。幅60cm，長さ50cmの掘り方が壁から突出し，左袖は不明だが右袖が掘り方から前面に30cm程のびる。

出土遺物　（第215図）

須恵器2個体分，土師器17個体分の破片，土製模造鏡1点が埋土中より出土している。



第213図　112号住居跡実測図（1/60）

須恵器　（1）　埋土中からの出土で，小片の反転復原図である。蓋として図示したが，高坏の可能性がある。

土師器　（2～4）　4はカマド内，外は埋土中から出土した。いずれも小片である。

（児玉）

113号住居跡　（図版50，第214図）

111・112号住居跡を切り，平面プランは菱形に近い方形を呈する。踏み固められた貼床面で，P_1・P_2・P_4より主柱痕を検出した。本遺跡の住居跡では一般的にカマドの対面に崩落した状態の粘土が存在するが，本住居跡の場合はそうではなく，カマドに向かって右壁（南東壁）側に存在する。この粘土は一般的には壁に接して床面上に崩落した状態で流れ込んでいるが，本住居跡の場合，右壁から離れて存在する。本遺跡の住居廃棄時に於けるこの粘土の一般的な在り方と，先述した80号住居跡の〝入口〟と想定した遺構との関係から，立野遺跡ではカマドの対面に粘土等を使用して住居内への〝入口〟を作ったであろうと想定する。本住居の場合は必ずしもその可能性を否定するわけではないが，粘土の出土状態が他の住居跡と異なり，〝入口〟

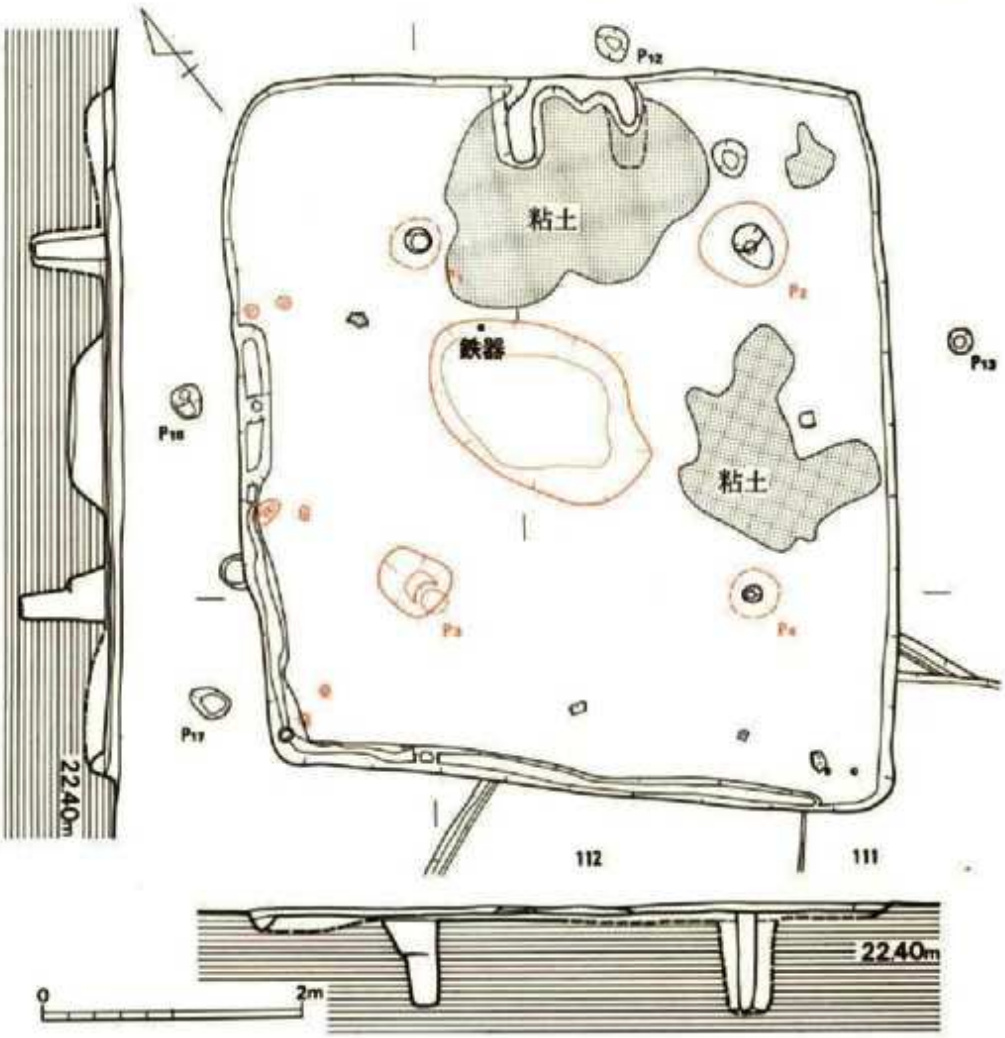
の想定位置はやはりカマドの対面であろうと思う。貼床下のほぼ中央に中央土壙が存在し，貼床をめくって全掘はしていないが，周壁に沿って掘り込みが巡ると思われる。

次に，住居の各壁の外側に，壁から20～40cm離れて径20cm前後，深さ10～20cmのピットが存在する（P_{12}～P_{18}）。これらは住居の平面プランに対して，ある程度の規則性を持って位置しているようである。

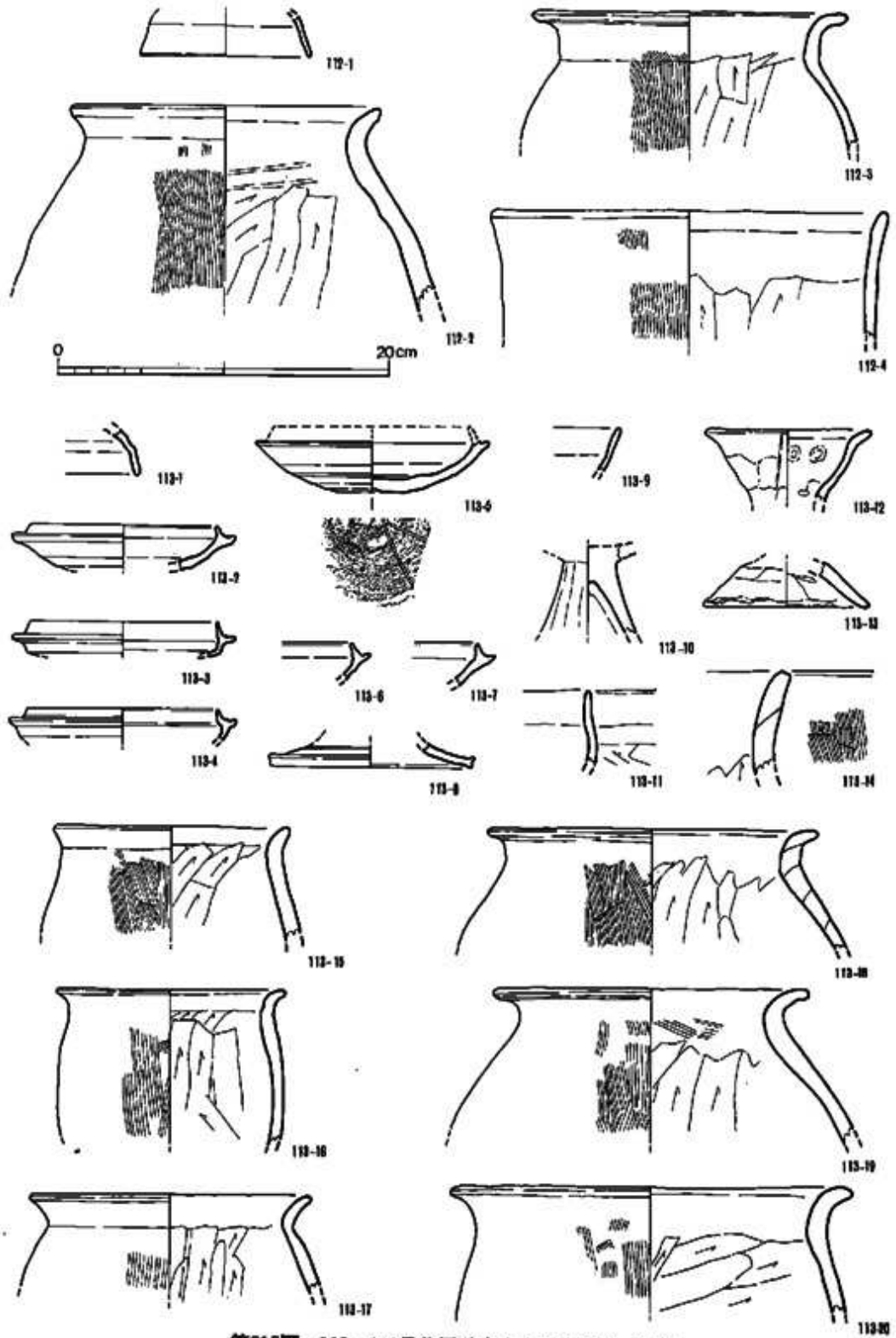
カマド　北東壁ほぼ中央に付設され，検出時には全面が粘土におおわれていた。

出土遺物　（第215図）

須恵器13個体分，土師器46個体分の破片と不明土製品，また床面下の中央土壙から鉄鏃が1



第214図　113号住居跡実測図（1/60）



第215図　112・113号住居跡出土土器実測図（1/4）

点出土した。

須恵器　（1～8）　全て埋土中からの出土で，小破片の為反転復原図である。

土師器　（9～20）　11・13・15はカマド内から，他は埋土中からの出土である。12・13・15・16は，或は支脚として使われたと思われる。10・11は精製土器である。　（児玉）

114号住居跡　（図版50，第216図）

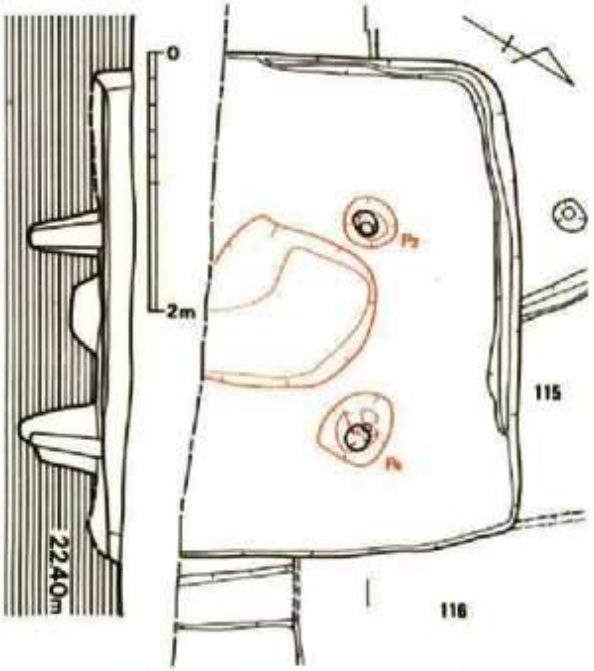
調査区東半部の南辺に位置し，南半が調査区外にのび，115・116号住居跡を切る。貼床面にP_2・P_4の主柱痕を検出した。壁小溝は途中で途切れる。壁小溝はカマドの袖付近で途切れるのが普通で，また，本遺跡のカマドは大半が北或は西側に設置されており，それらの状況を勘案して，カマドは南西壁に設置されたと推測する。

出土遺物　（図版95，第220図）

出土土器は少なく，須恵器1個体分，土師器7個体分の破片を検出したにすぎない。

須恵器　（1）　埋土中から出土した，小片の反転復原図である。

土師器　（2～4）　2・3は埋土中，4は床面下層からの出土品である。3は支脚として使われたと思われる小型甕の底部である。　（児玉）



第216図　114号住居跡実測図（1/60）

第217図　調査中スナップ④

115号住居跡　（図版50，第218図）

南を114号，東を116号住居跡に切られる。柱配置よりみてほぼ正方形の平面プランを呈すると思われる。P_2 を除いて主柱痕が検出された。壁小溝は断続的に存在する。

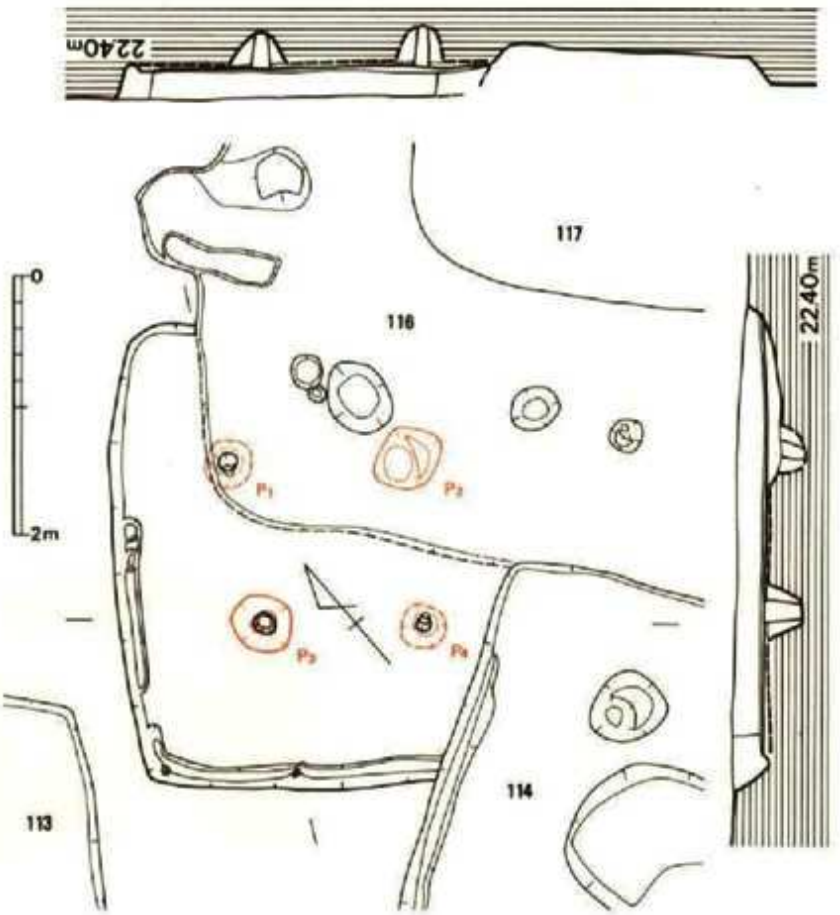
カマドは壁小溝の巡り方からみて，北東壁に設置されていたものと推測される。

出土遺物　（第220図）

須恵器７個体分，土師器10個体分の破片が出土している。

須恵器　（１・２）　埋土中からの出土で，小片の為反転復原図である。

土師器　（３～６）　５は床面下層から，他は埋土中からの出土である。全て反転復原図で，３・４は精製土器である。　（児玉）



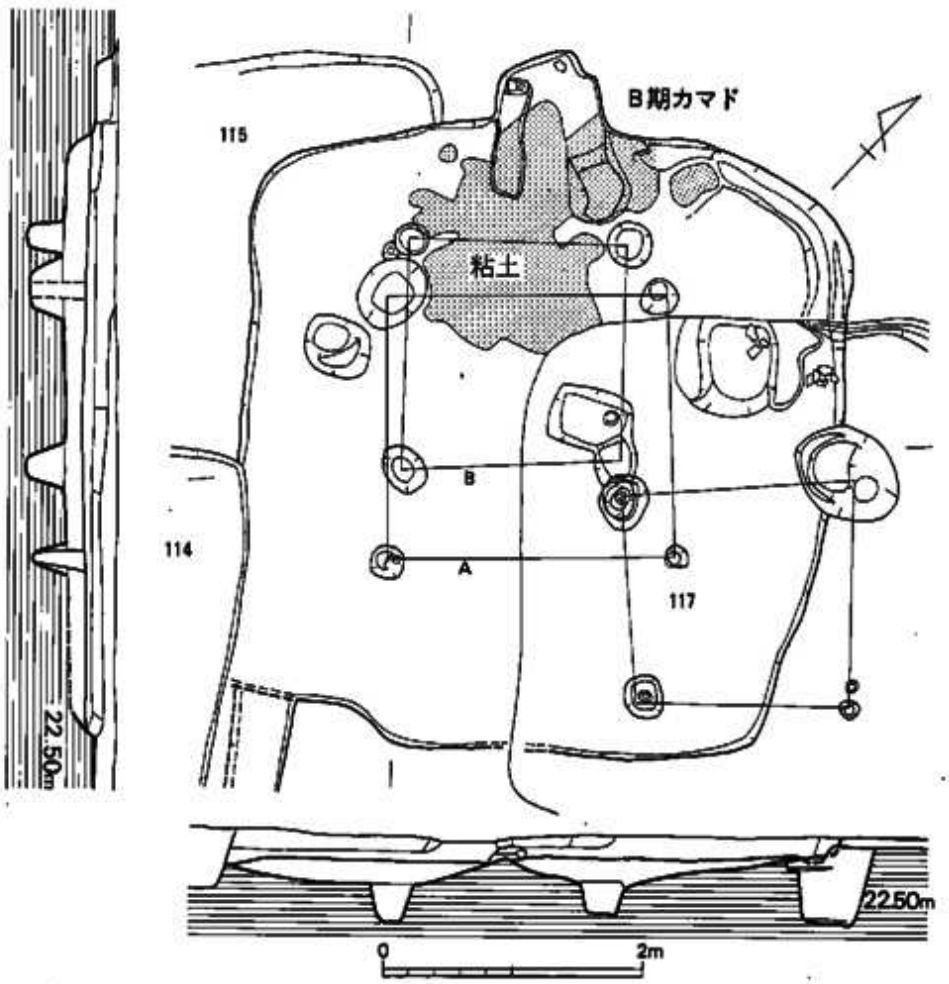
第218図　115号住居跡実測図（1/60）

116号住居跡　（図版50，第219図）

1軒の住居として調査を開始したが，床面で2軒分の主柱穴を検出し，2軒がほぼ重複し，やや北東側に移動して建て替えているのではないかと推測する。よって，古期の住居を116A，建て替えた住居を116B号住居跡とする（以下，A期，B期と略述する）。ただ，住居の平面プランは略方形を呈するという以外，正確な規模は不明である。

A期の住居は貼床が遺存し，P_1を除いて3本の主柱痕が残っていた。周壁についての詳細は不明である。また，カマドは北西壁に設置されていたが，B期の住居によって完全に破壊されていた。

B期は，主柱痕を検出出来なかった。A期の主柱穴配置と比して小型化し，正方形に近くなっ



第219図　116号住居跡実測図（1/60）

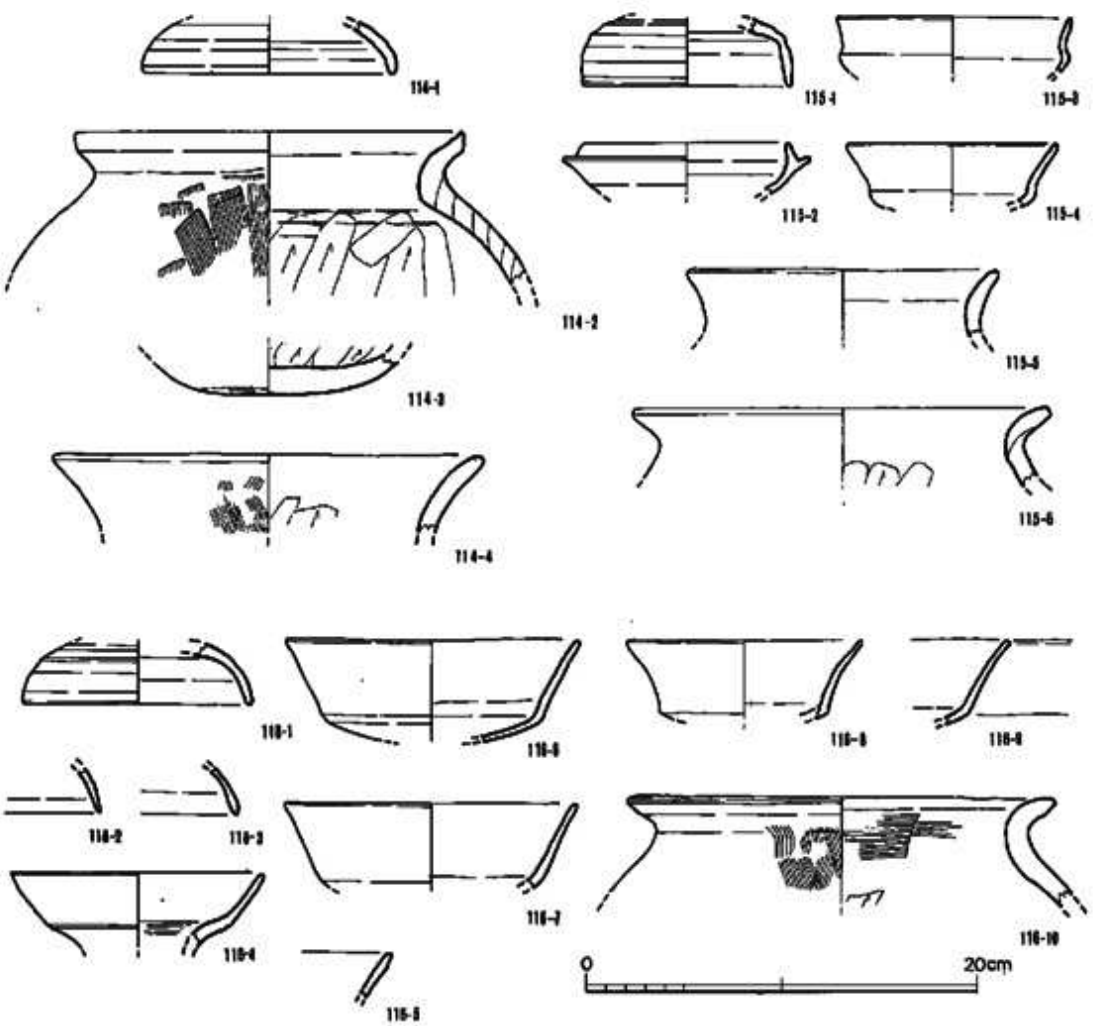
ている。カマドは北西壁に設置され，住居外に突出する。

出土遺物　（図版95，第220図）

上記の理由で，出土遺物をA・B両期に分離出来ない。須恵器8個体分，土師器23個体分の破片と不明土製品が出土し，他に新しいものと思われる鉄器が2点出土している。

須恵器　（1～5）　全て埋土中からの出土で，小破片の為反転復原図である。

土師器　（6～10）　9・10はカマド周辺出土だが，他は埋土中からの出土である。6～9は精製土器である。　（児玉）



第220図　114～116号住居跡出土土器実測図（1/4）

117号住居跡　（図版50，第221図）

116・134号住居跡を切り，プランは方形に近い不整形を呈する。切合いのない部分は壁小溝が走るが，他の部分では確認しきれなかった。貼床面で4本の主柱痕を検出した。カマド対面の粘土は検出していない。

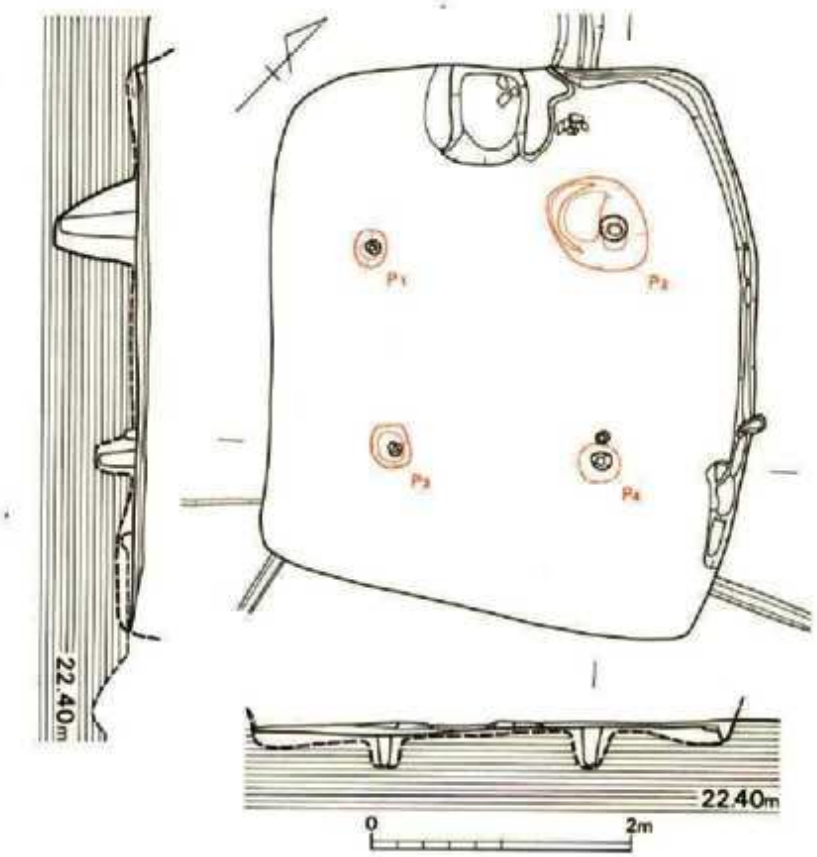
カマド　北西壁（短壁）の中央よりやや南に偏して設置される。壁高が浅く遺存状態はよくないが，平面的には両袖がよく残っている。

出土遺物　（図版95，第222図）

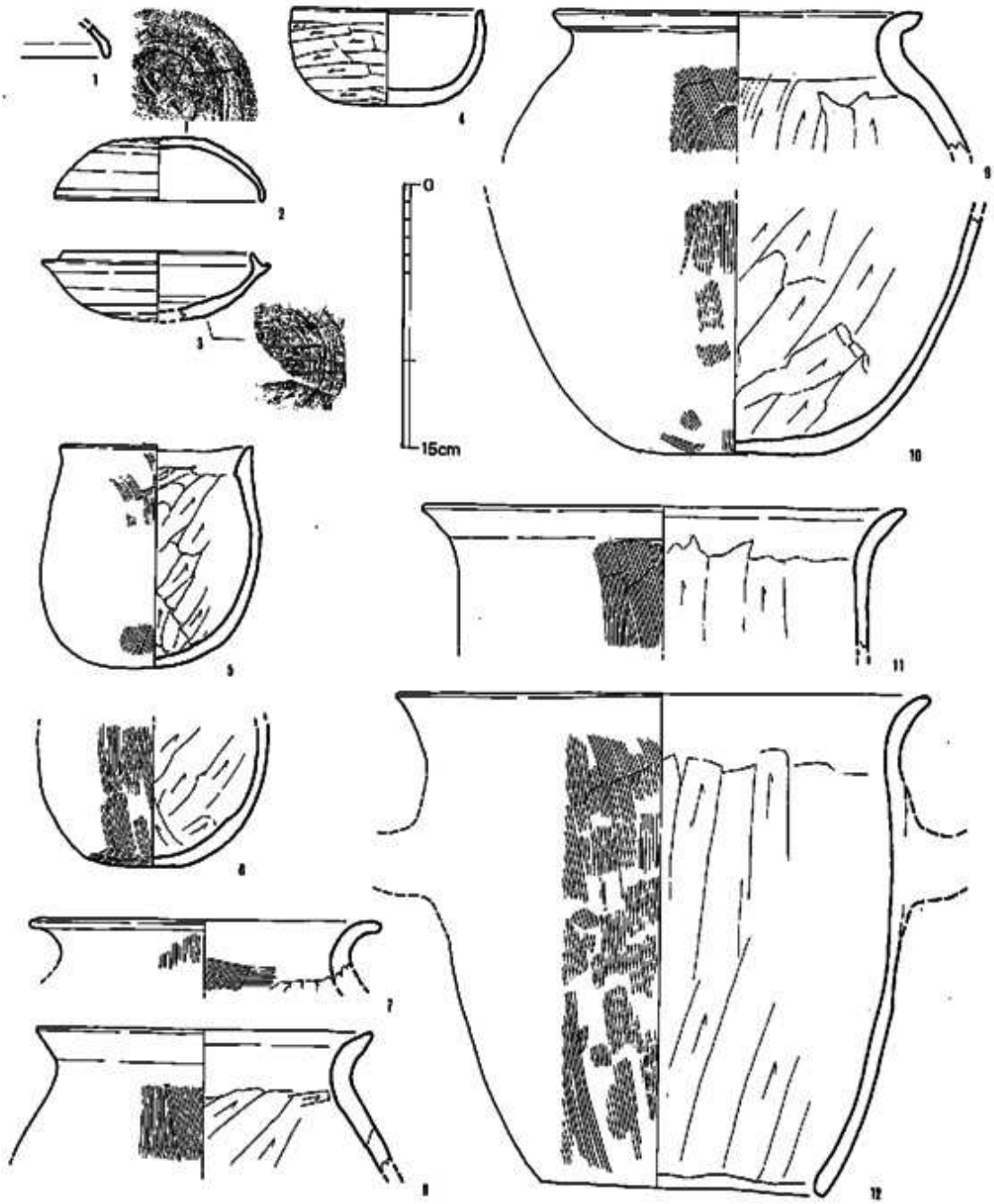
須恵器6個体分，土師器32個体分の破片が出土している。

須恵器　（1～3）　埋土中からの出土品である。2だけは完形品で，他は小片である。

土師器　（4～12）　12はカマド右床面から，8・9・11は床面下層から，他は埋土中からの出土である。5・6は支脚と推測される。　（児玉）



第221図　117号住居跡実測図（1/60）



第222図　117号住居跡出土土器実測図（1/4）

118号住居跡　（図版51，第223図）

調査区の東半部に単独に存在し，東壁を56号建物に切られる。貼床面に4本の主柱穴を検出し，カマドの対面には灰白色粘土が崩落した状態で出土した。床面下は，西に偏して中央土壙が存在し，掘り込みは一巡せず東壁側は途切れる。

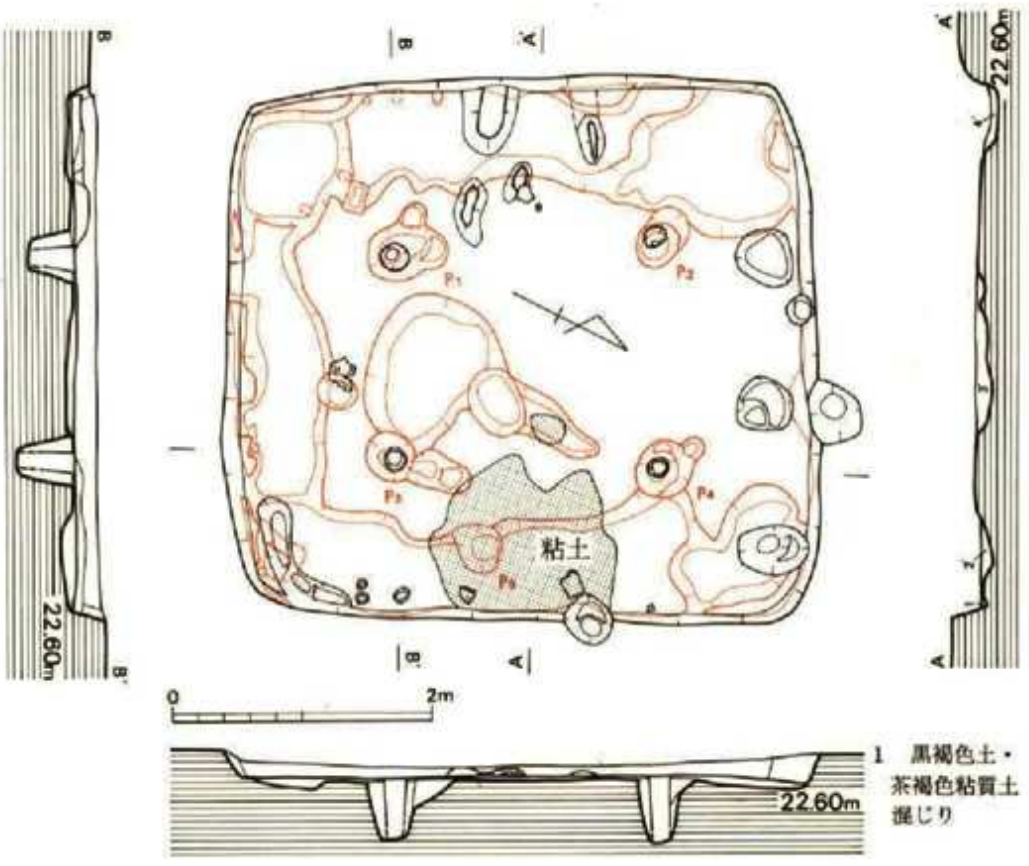
カマド　南西壁ほぼ中央に設置されている。遺存状態は悪く，支脚も遺存しない。

出土遺物　（図版95，第224図）

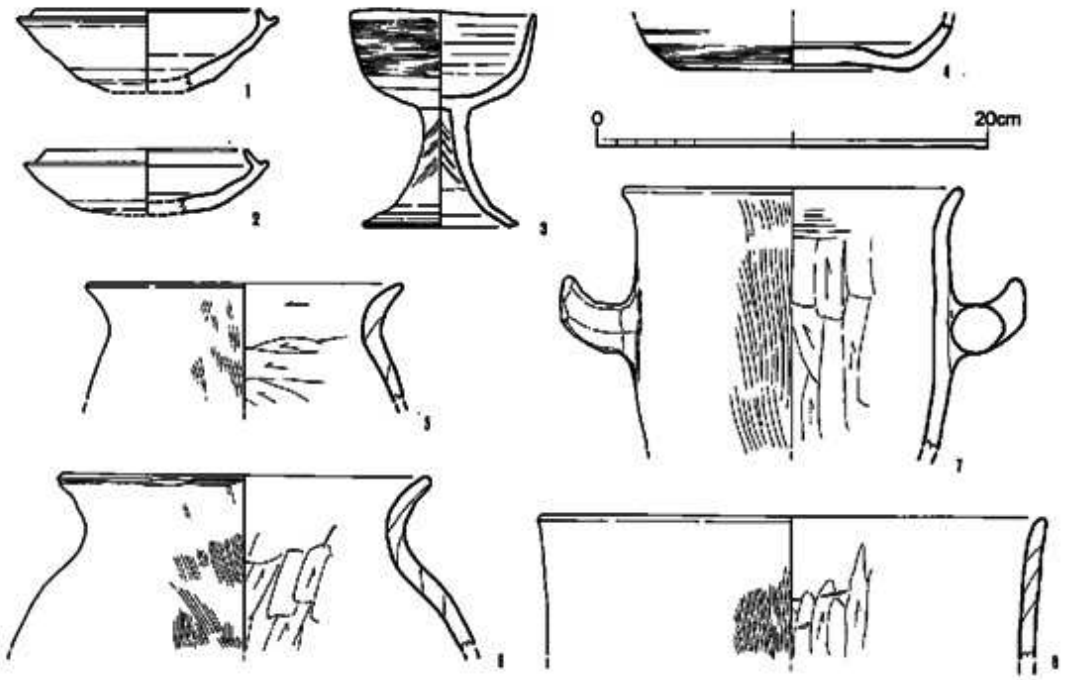
須恵器6個体分，土師器18個体分の破片，そして不明土製品がカマド周辺にて1点出土している。

須恵器　（1～4）　すべて埋土中からの出土品で，3以外は反転復原図である。

土師器　（5～8）　8はカマド周辺から，他は埋土中から出土した。小片の為反転復原図である。



第223図　118号住居跡実測図（1/60）



第224図　118号住居跡出土土器実測図　(1/4)

119A・B号住居跡　(図版51，第225図)

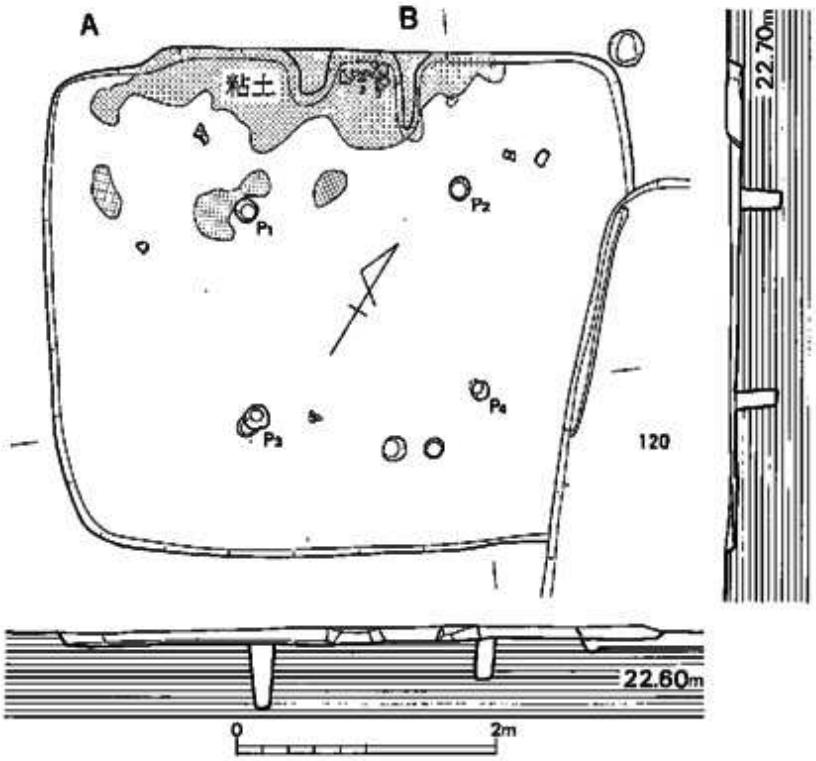
調査区の東半部に位置し，東壁側を120号住居跡に切られている。カマドの付設された北西壁は，北西隅から0.8m程の所で屈折しており，2軒の住居が重複している可能性が高く，西から東へ平行移動している。先行する住居をA，新しい方をBとする。AはBの床面を剝がして調査をしていないので詳細は不明だが，カマドは北西壁に設置されていただろう。BはAとともに当初は1軒の住居跡として掘ったので，南西壁は遺存しない。貼床面には4本の主柱痕が残る。カマド対面には粘土は遺存しない。

カマド　(図版52)　北西壁のほぼ中央に設置され，内部より土師器甕片が出土している。

出土遺物　(第227図)

須恵器は出土せず，土師器ばかり10個体分の破片が出土している。

土師器　(1～3)　2はカマド内から，他は埋土中から出土した。1は精製品である。3点とも反転復原図で3は蓋と考えた。　(児玉)



第225図　119号住居跡実測図（1/60）

120号住居跡　（図版52，第226図）

調査区東半部に位置し，119号住居跡を切り，北東隅を121・122号住居跡に切られる。貼床面には4本の主柱痕が残り，壁際には断続的に壁小溝を検出した。カマド対面には粘土は検出していない。が，この対面壁の外側に P_{15}・$_{16}$が存在し，これらは P_1・P_3 と P_2・P_4 のほぼ延長上にある。床面を剝いでないので下層の構造は不詳だが，基本的に他のものと変わらないだろう。

カマド　（図版52）　北壁のほぼ中央に設置されている。遺存状態はよくない。支脚も出土しなかった。

出土遺物　（図版95，第227図）

須恵器5個体分，土師器29個体分の土器片と，カマド南側より鉄器が1点出土した。しかしこの鉄器は出土レベルが遺構検出面と同じであり，かつ形状としても近時の産物になるものと

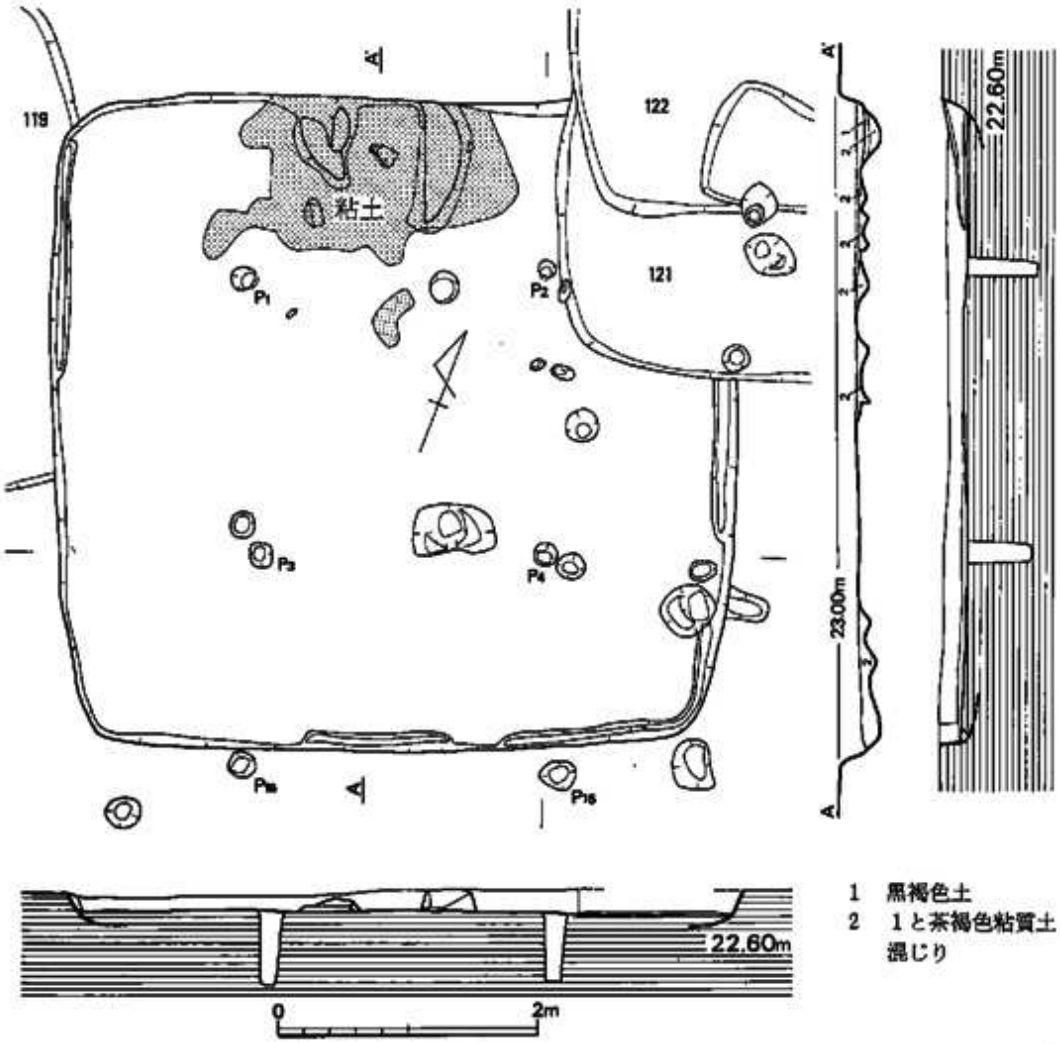
思われる。

須恵器　（1）　埋土中から出土した小片で，反転復原図である。

土師器　（2～4）　埋土中から出土した破片資料で，4は支脚に使われたと思われる小型甕である。2は精製土器である。　（児玉）

121号住居跡　（図版53，第228図）

120号住居跡を切り，北側¾程を122号住居跡に切られる。貼床面には4本の主柱痕が残り，



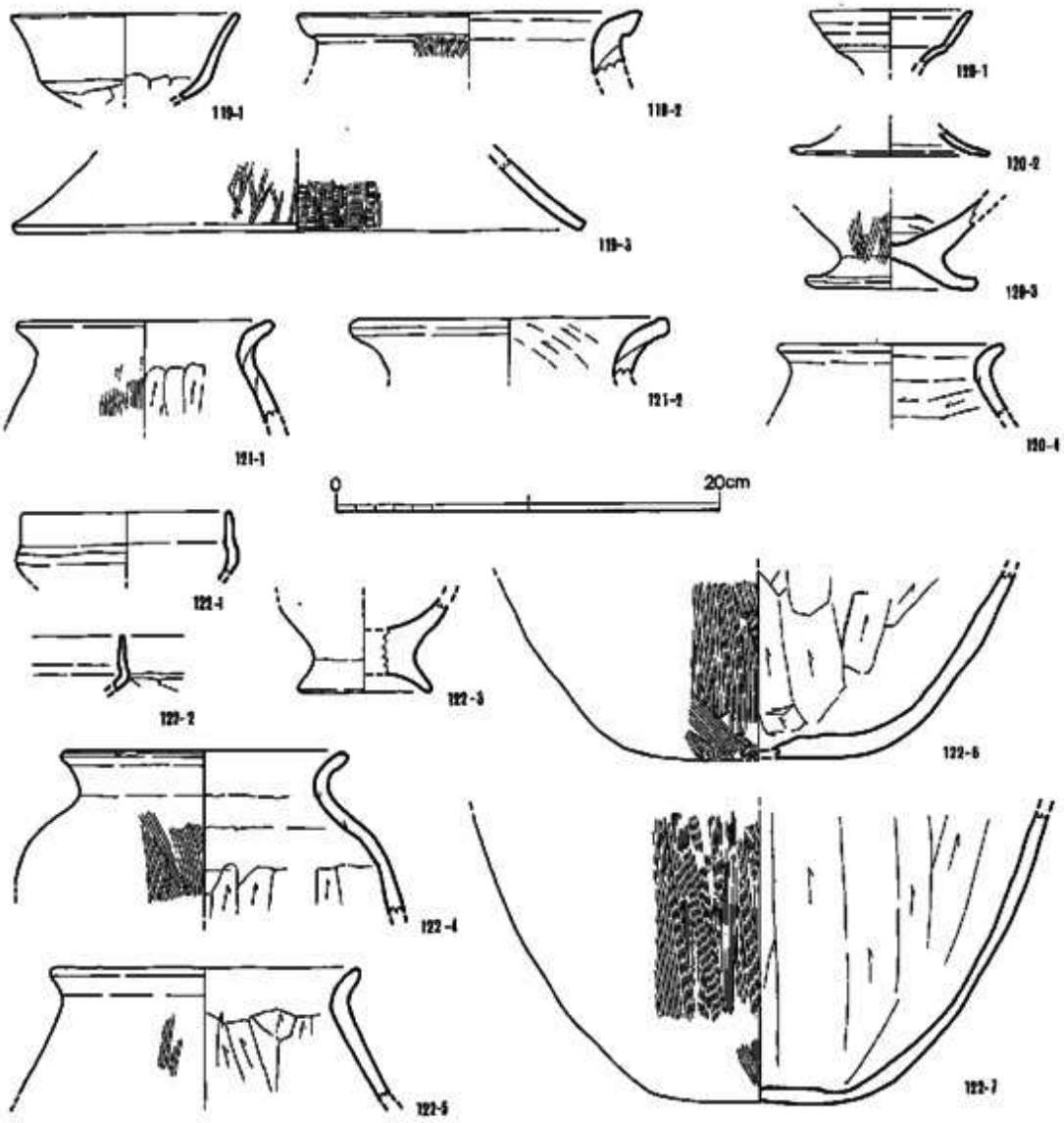
第226図　120号住居跡実測図（1/60）

南壁側に多量の粘土を検出した。南壁側に粘土を検出したので，カマドは恐らく北壁に設置されていたのであろう。

出土遺物　(第227図)

土師器2個体分の破片が出土している。

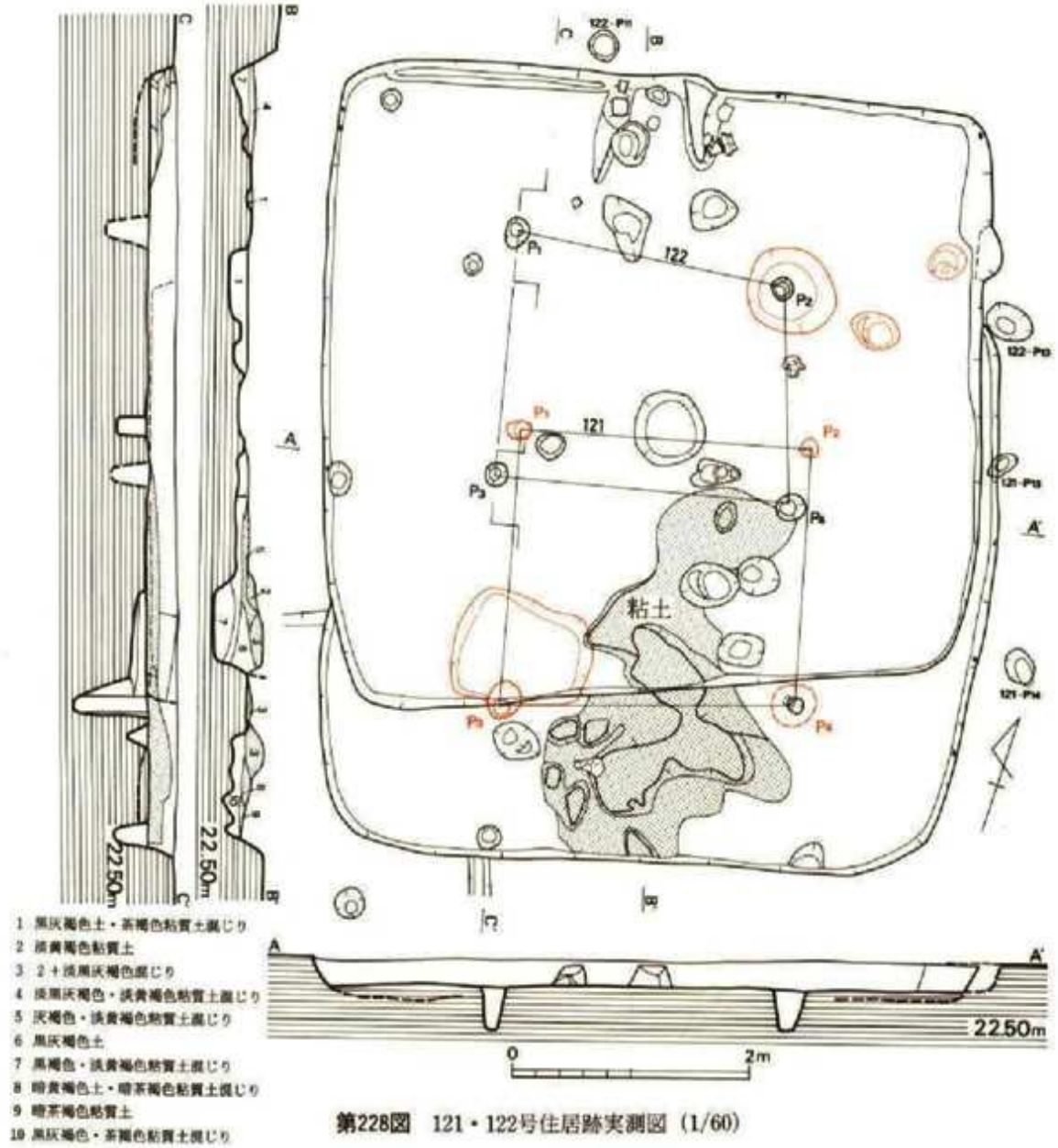
土師器　(1・2)　粘土中や埋土中からの出土である。1はカマド支脚に使われていた可能性がある。　(児玉)



第227図　119～122号住居跡出土土器実測図 (1/4)

122号住居跡　（図版53，第228図）

121号住居跡の北側辺を切って，北側に平行移動するような形で検出した。西壁に比して東壁が短く，やや台形気味で，貼床面で検出した主柱穴の配置状況も不整方形を呈する。カマドの西側に壁小溝を検出したが，他の壁では検出していない。カマド対面に粘土を多量に検出した。



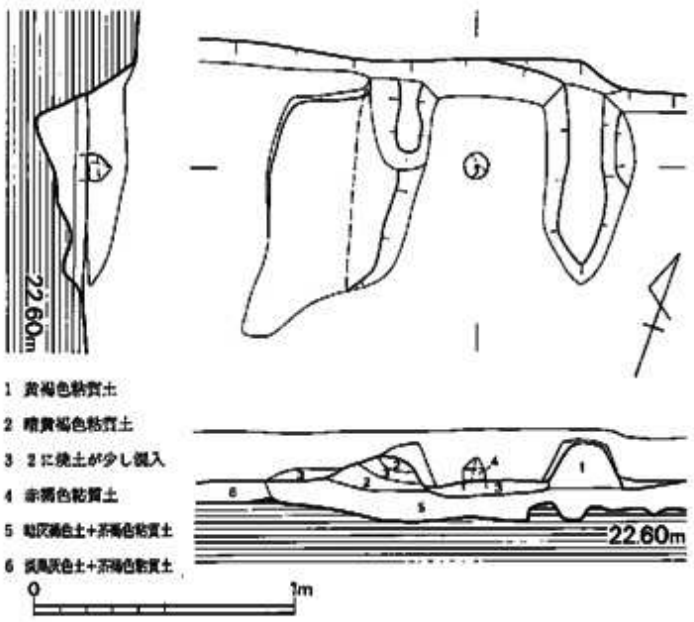
第228図　121・122号住居跡実測図（1/60）

カマド （第229図） 北壁のほぼ中央に設置される。左袖の外側に P_{11} を検出した。支脚は検出してない。

出土遺物
（図版96，第227図）

須恵器1個体分，土師器30個体分の破片を検出した。須恵器の出土比率がきわめて低い。

土師器 （1～7） 埋土中からの出土である。1・2は精製土器である。 （児玉）



第229図 122号住居跡カマド実測図（1/30）

123号住居跡 （図版53，第230図）

124号住居跡が北東側に建て替えを行ったような形で切られ，西・南壁がL字形に残るのみである。弥生期の73・74号掘立柱建物を切っている。南壁のやや西側に粘土があった。124号住居跡の下層で4本の主柱痕を確認した。床面を剝がしていないので下層の構造はわからない。本集落のカマドは西壁か北壁に設置されているのが殆どであり，この住居についても，粘土の遺存場所等からすれば恐らく北壁にあったものと思われる。

出土遺物 （第232図）

土師器が4個体分出土しただけである。

土師器 （1） 埋土中からの出土で，小片のため反転復原図である。支脚に使われていた甕の小片であろう。 （児玉）

124号住居跡 （図版53，第230図）

123号住居跡の大半を切り，北東へ平行移動して建て替えたような在り方を示す。貼床面には4本の主柱痕が残り，東・南壁には壁小溝がある。また，東壁には杭を打ち込んだか，と推測される小ピットが見られる。

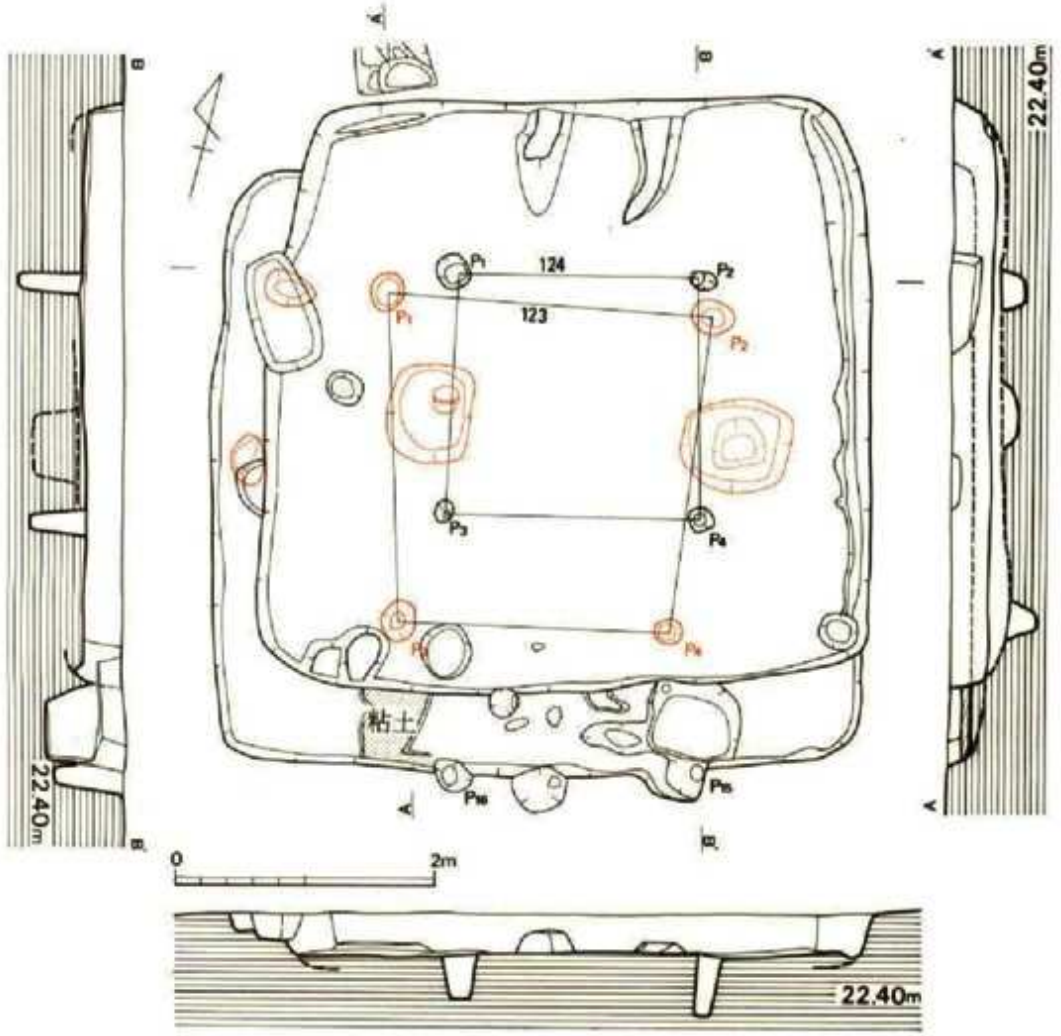
カマド　(図版53，第231図)　北壁のほぼ中央に設置されている。支脚は検出されず，土器も出土していない。

出土遺物　(第232図)

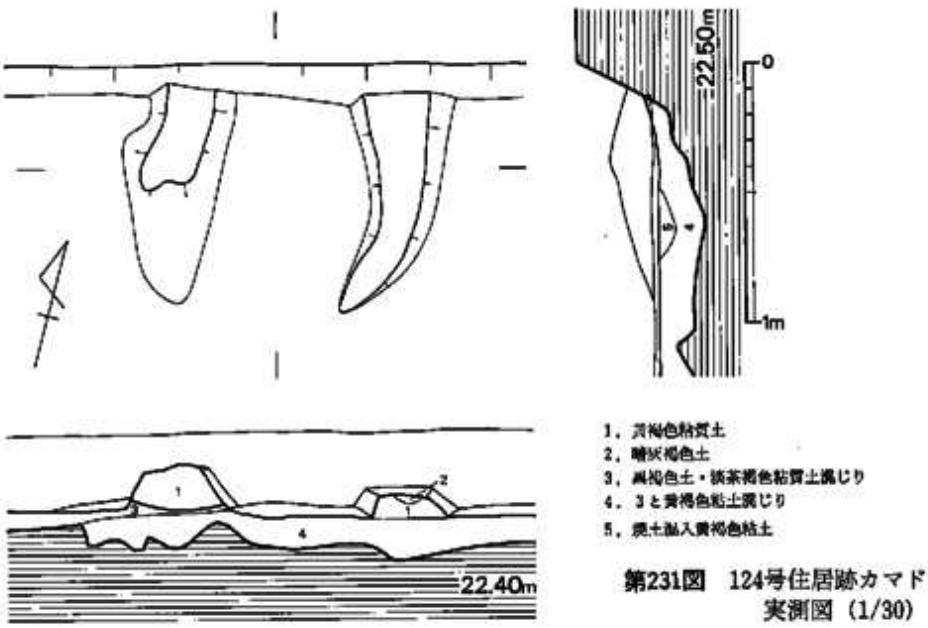
須恵器３個体分，土師器11個体分の土器片が出土している。その多くは埋土中からの出土である。他に，鉄器片１と砥石２が埋土中から出土している。

須恵器　(１・２)　埋土中からの出土で，極小片である。

土師器　(３～５)　４はカマド周辺から出土したが，他は埋土中からの出土で，反転復原図である。４は小片で不明だが，３は支脚に使われた甕であろう。　(児玉)



第230図　123・124号住居跡実測図 (1/60)



第231図　124号住居跡カマド実測図（1/30）

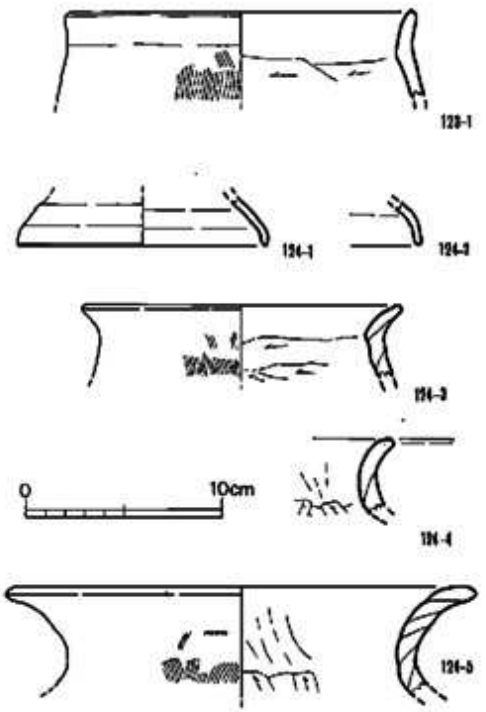
125号住居跡　（図版54，第233図）

調査区の東端近くに22号掘立柱建物と重複して存在する。やや不整形ながら方形を呈し，断続的ながら壁小溝が存在する。カマド対面の粘土や床面下の土壙等は存在しなかった。また，主柱痕も検出していない。床面下は中央に不整形の土壙があり，掘り込みはカマドの左右の壁に沿って存在し，カマド側の壁ではカマド周辺までは掘り込みが及ばない。また，カマド対面の壁際にも掘り込みは認められなかった。

カマド　北西壁中央付近に設置されているが，遺存状態は良くなく袖部も残らない。

出土遺物　（図版96，第234図）

須恵器2個体分，土師器41個体分の土器片が出土している。他に手捏土器（床下層），盤



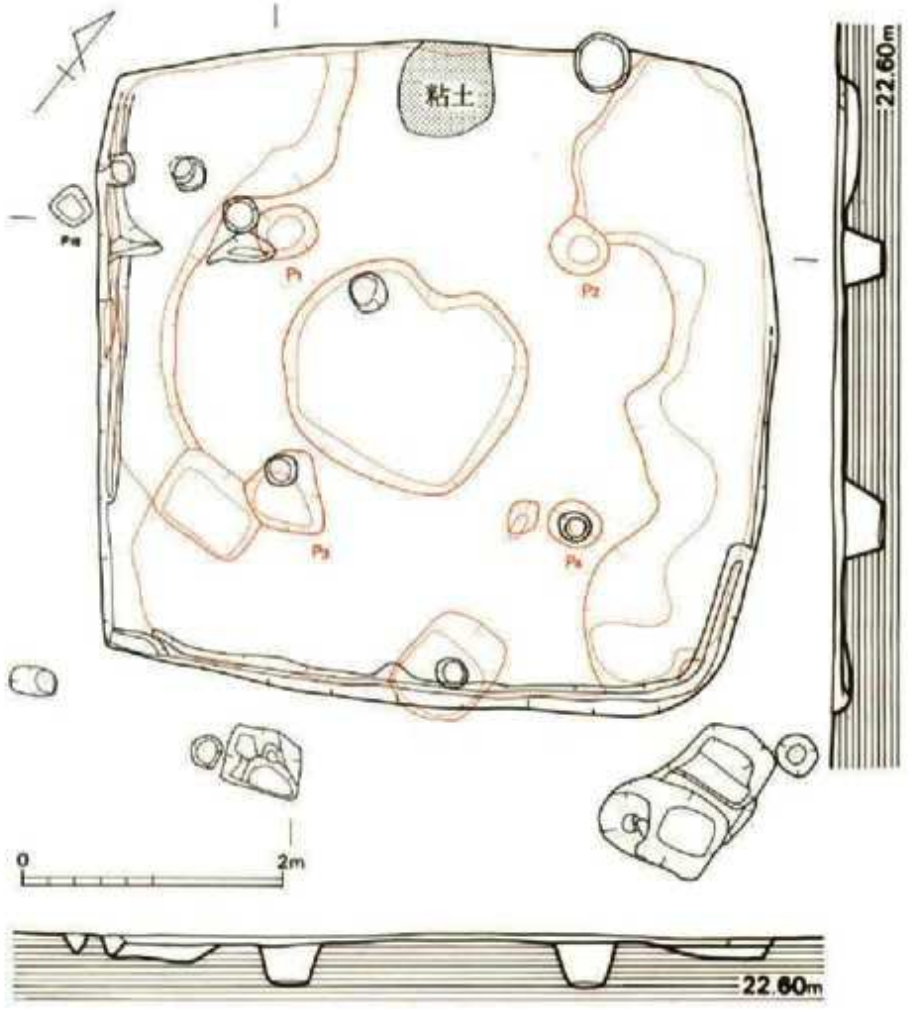
第232図　123・124号住居跡出土土器実測図（1/4）

状土製品(埋土中)，不明土製品が出土している。

土師器　(1～17)　甕14は貼床下層から，他は埋土中からの出土品で，1～3は精製土器である。9・10は支脚に使用されたものであろう。11は注口土器の可能性がある。　(児玉)

126号住居跡　(図版54，第235図)

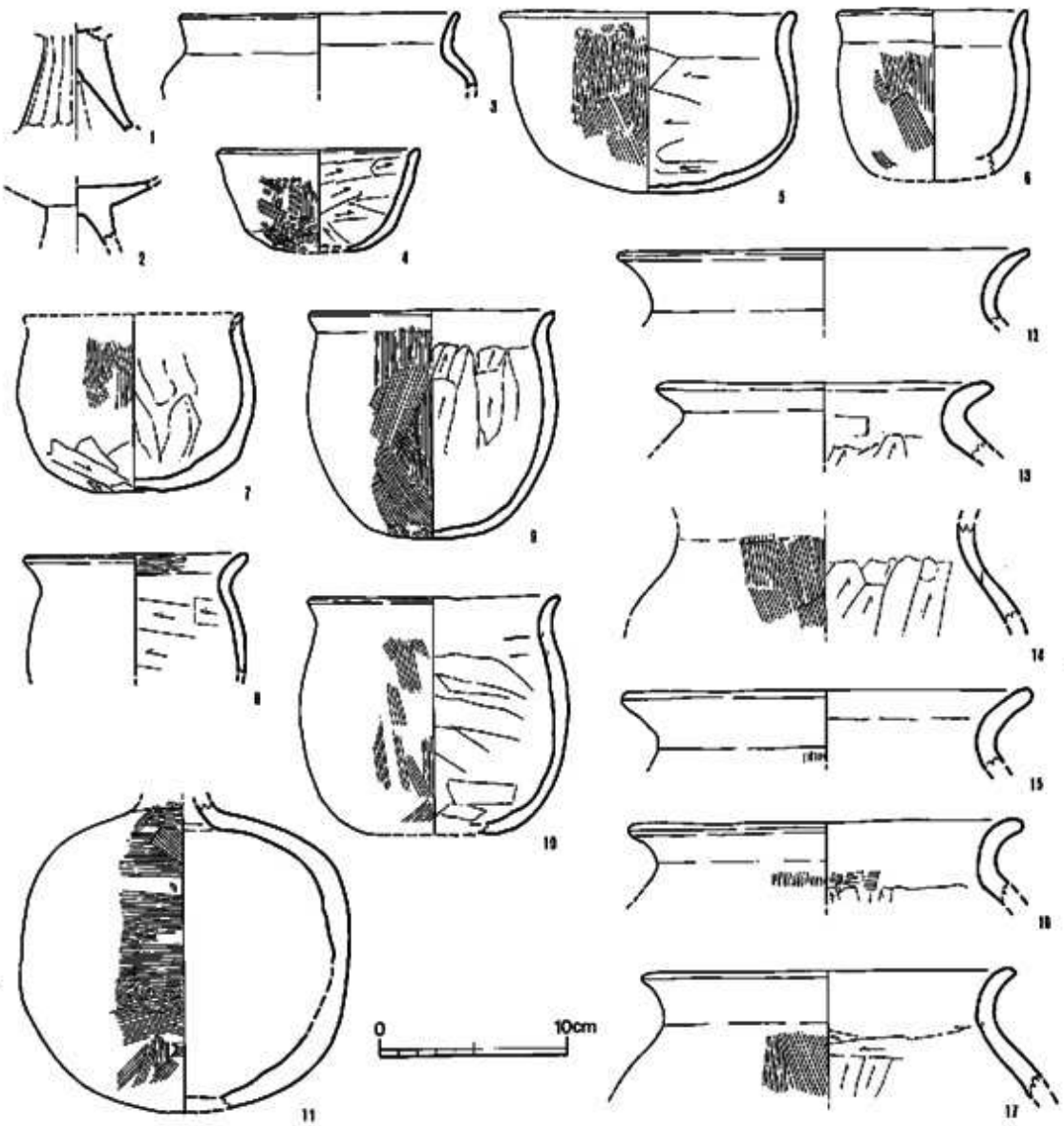
やや東西に広い方形を呈する。北・東壁際の一部に壁小溝があり，床面で3個の主柱痕を検出した。また，カマドの対面で粘土を検出した。床面下は4本の主柱穴の内に不整形の中央土壙を，4本の主柱穴の外側に掘り込みを検出した。住居の四隅には，掘り込みを掘削した折に



第233図　125号住居跡実測図 (1/60)

掘り残されて僅かな段部を残している。また，住居外で，南壁側に２個，東壁側に１個の小ピットを主柱穴の延長線上に検出した。

カマド　（第237図）　北壁の中央よりやや東寄りに設置され，上端で幅80cm，奥行50cm程の北壁から張り出した形態のものである。中央よりやや奥まった所に小形甕形土器を倒立させて支脚として設置している。支脚をセットする際に，まず淡黄色粘土を甕の口径に合わせて厚さ３cm，径12cm程に盛り，その上に甕を倒立させてセットし，口縁部周辺に粘土を張り付けて補強



第234図　125号住居跡出土土器実測図（1/4）

している。なお，支脚の甕には把手がついている。

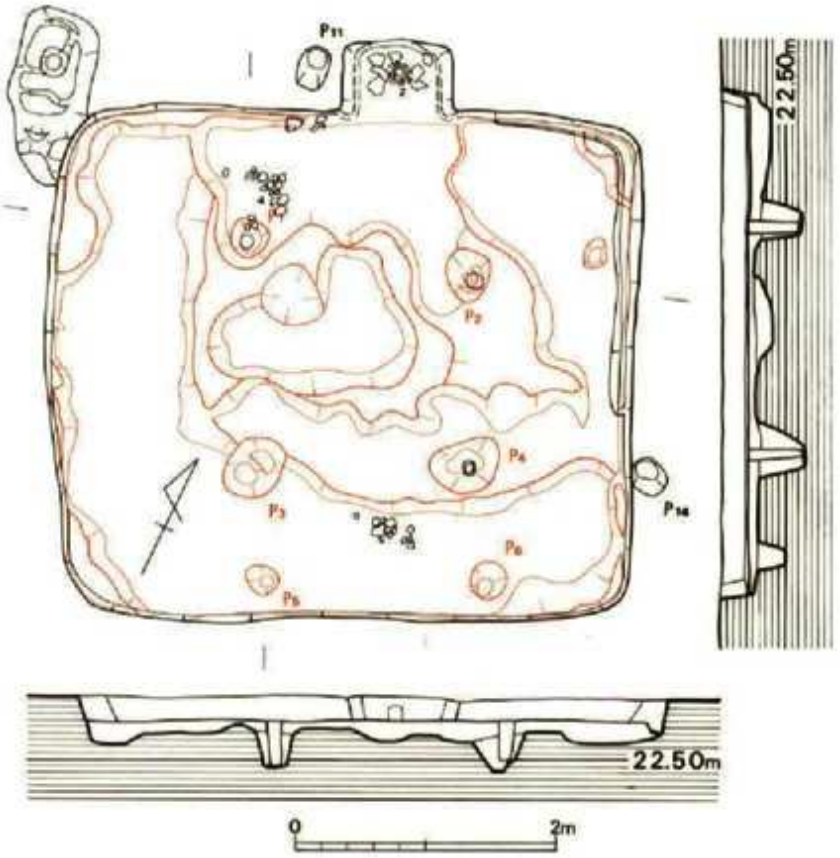
出土遺物　（第236・239図）

須恵器２個体分，土師器14個体分の破片が出土している。

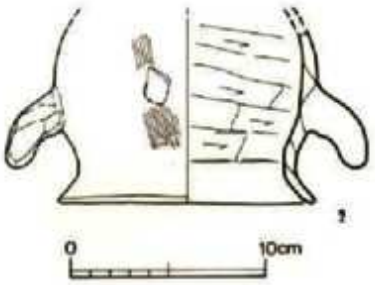
土師器　（１～５）　１は埋土中から出土した精製土器で，３はカマド内，４は P_1 の床面，５はカマド西の北壁際床面上で出土した。　（児玉）

127号住居跡　（図版54，第238図）

125号住居跡の北に存在し，大半がＢ地区との間の農道下に延びる。よって床面には P_3 の主柱痕，南壁際に粘土を検出したに留まる。貼床下は掘り込みがあり，南壁中央で途切れ，西壁

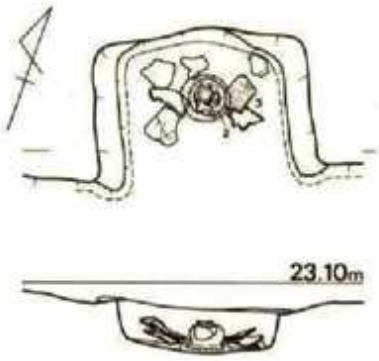


第235図　126号住居跡実測図（1/60）



1 焼土少し含む灰色粘質土
2 黒褐色砂質
3 淡黄褐色粘土(一部焼土化)
4 灰白色粘土少量混入灰色粘質土
5 淡黄灰色粘土 (焼土化)
6 灰色砂質・焼土少量混入淡黄灰色粘土
7 灰褐色砂質
8 灰色砂質を含む淡黄色粘土
9 灰色粘土少し含む明黄灰色粘土
10 焼土層
11 灰 層
12 淡褐灰色砂質少量混入灰色粘質土
13 灰褐色砂質混入茶色粘質土
14 黄灰色粘土混入灰色粘質土
15 黒色土

第236図 126号住居跡カマド支脚実測図 (1/4)



第237図 126号住居跡カマド実測図 (1/30)

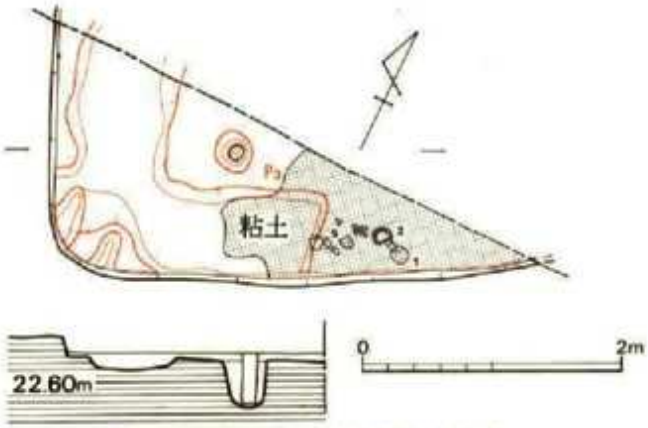
際では掘り残して段部が残る。粘土の出土位置から，カマドは北壁側に設置されたものと推定される。

出土遺物 (図版96，第239図)

粘土下部から土器がまとまって出土している。須恵器2個体，土師器7個体分である。

須恵器 (1・2) 1・2は略完形品で，南壁の粘土下から出土し，本住居に伴う。

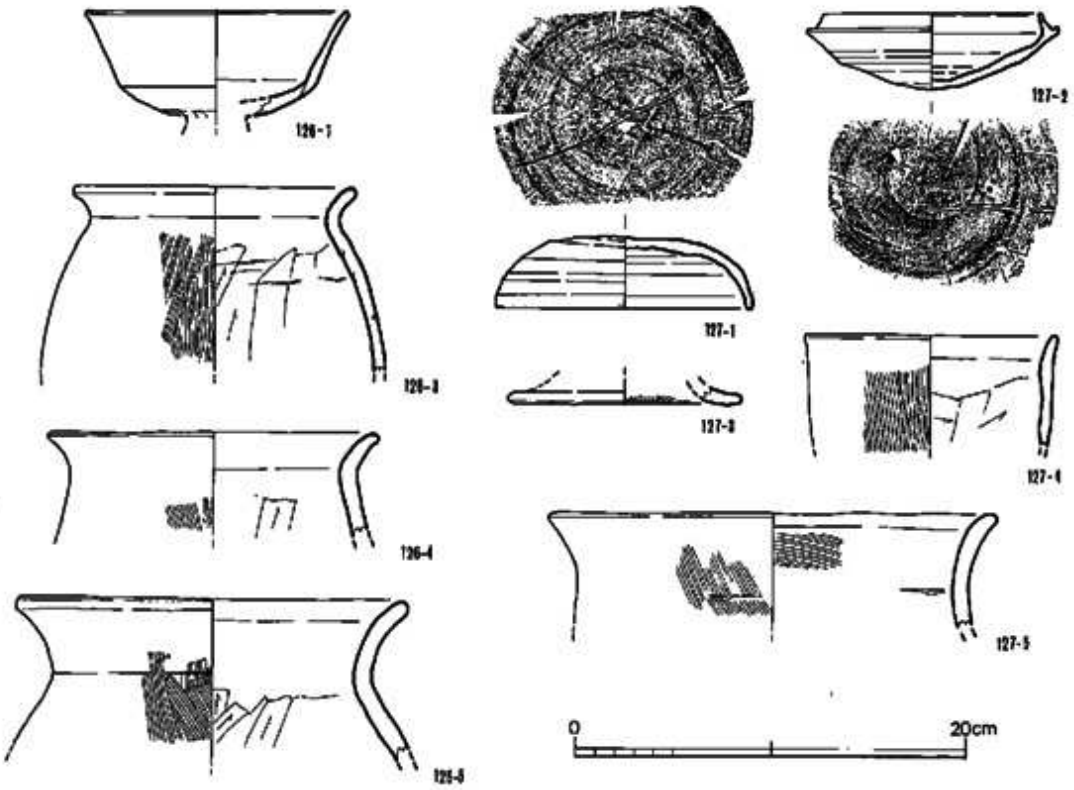
土師器 (3～5) 3・4は埋土中から，5は南壁の粘土の下から出土した。 (児玉)



第238図 127号住居跡実測図 (1/60)

128号住居跡 (図版54，第240図)

129号住居跡に北東部を切られ，東側の一部は調査区外にのびる。当初，一軒の住居と考えて調査したが，主柱穴が2軒分検出され (A・B)，Aが先行し，Bが後続して営まれている。2軒の住居は殆ど重複して営まれたと思われ，柱位置も接近している。床面下は掘り込みはあるが，中央土壙・カマド対面の土壙は存しない。



第239図　126・127号住居跡出土土器実測図（1/4）

カマド　Bに伴うカマドが北壁中央に設置されるが，129号住居跡から東半部を切られる。

出土遺物　（第242図）

土師器36個体分の破片が出土している。また，カマド周辺より棒状土製品が出土している。

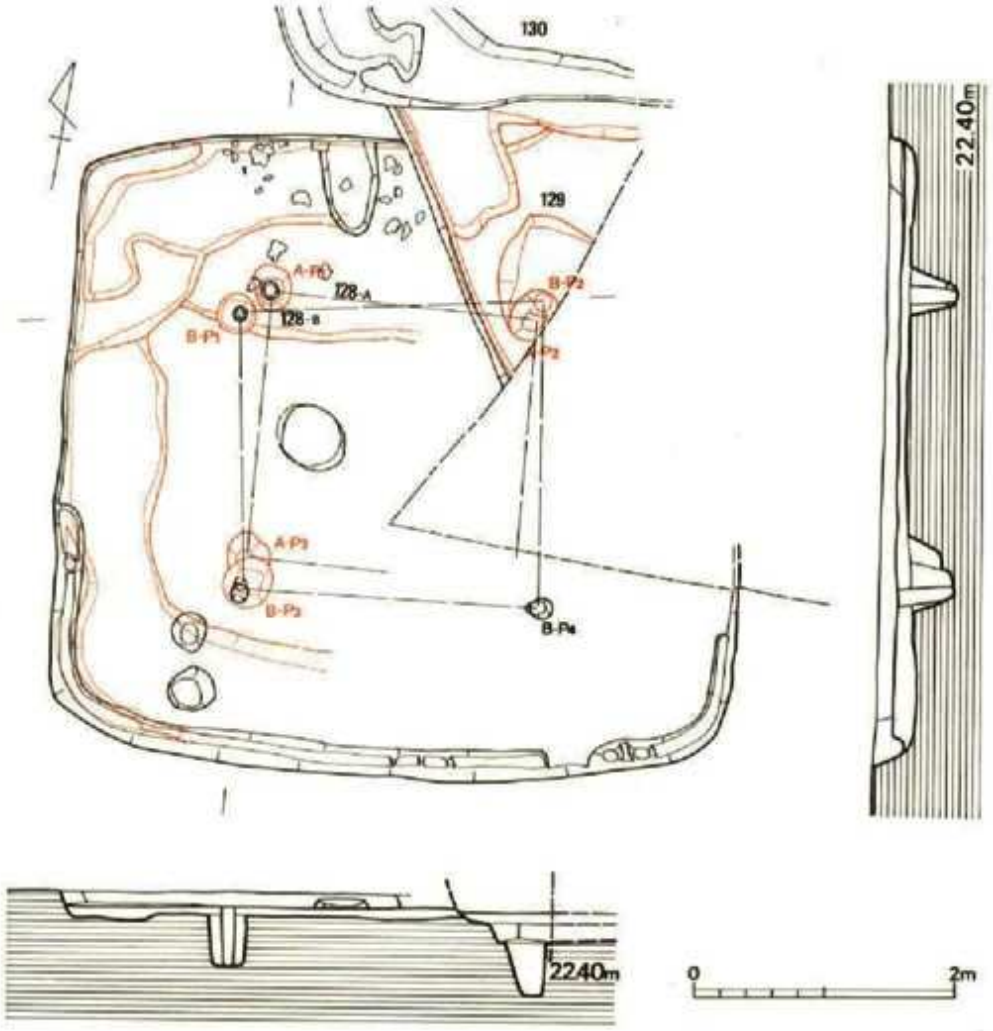
土師器　（1～3）　カマド内及び周辺から，破片ではあるが土器が出土している。図示出来るのは3個体だが，1はカマド左，3は床面，2は埋土中からの出土である。　（児玉）

129号住居跡　（図版54，第240図）

128号住居跡を切り，130号住居跡に切られ，その大半は調査区外にのびる。

出土遺物　（第242図）

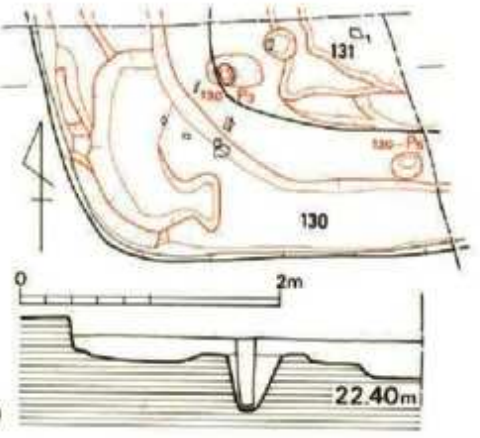
土師器4個体分の破片が出土している。



第240図　128・129号住居跡実測図（1/60）

土師器　（1～3）　ごく小片の資料で，1・2は床下層，3は埋土中からの出土である。

（児玉）



第241図　130・131号住居跡実測図（1/60）

130号住居跡　（第241図）

129号住居跡を切り，131号住居跡に切られ調査区外に大半がのびる。P_3 に相当する主柱痕を床面で検出し，床下層は掘り込みと主柱穴を検出した。カマドは北側に設置されたものか。

出土遺物　（第242図）

土師器片が10個体分出土している。

土師器　（1～3）　破片資料ばかりで，1・2は床下層，3は埋土中から出土した。

（児玉）

131号住居跡　（第241図）

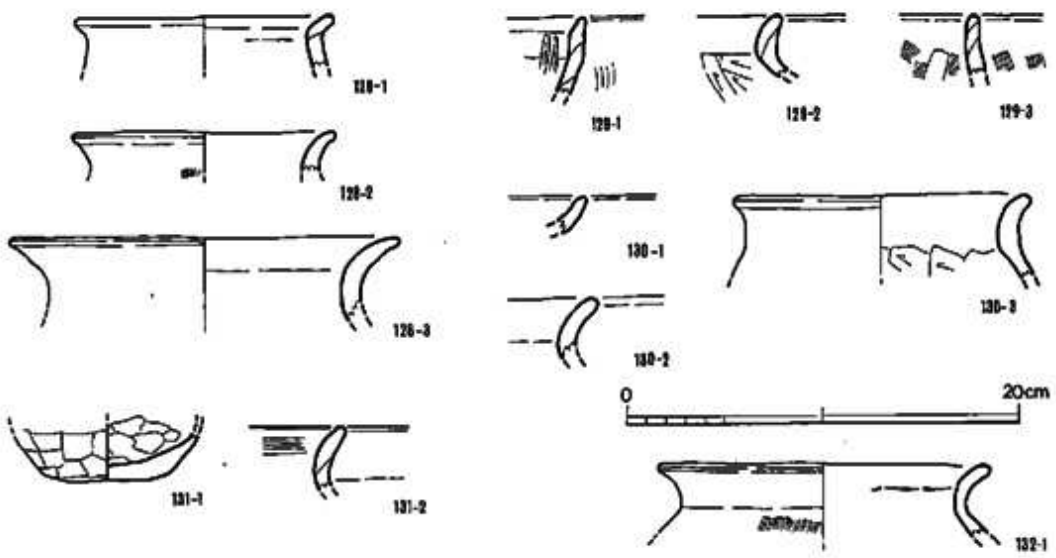
130号住居跡を切って，その殆どが調査区外にのびる為詳細は不明である。埋土中よりスラッグが2点出土している。（児玉）

132号住居跡　（付図4）

61号掘立柱建物北西側で検出し，農道下にその大半がのびる。不注意により図化していない。

出土遺物　（第242図）

土師器　（1）　1は埋土中から出土した破片資料で，他に図化しうるものはない。（児玉）



第242図　128号～132号住居跡出土土器実測図（1/4）

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―８―

昭和61年6月30日

発行　福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印刷　株式会社　チューエツ九州工場

福岡市博多区東比恵2丁目9番1号